Kurokawa, Mamichi
Kokushi sōsho

國史叢書

土佐物語 一

黑川真道編

國史研究會藏版

時に間斷なく、往・今・來は一線の上に繫れり。夫れ現在は過去の生む所にして、未來を試き得るもの、現在に其の基脚を置けばなり。顧ふに世の人、多く現在を重んじて過去を輕んず。過去を輕んずるものにして、現在の眞想を窺知し得るものなく、現在の眞想を窺知し得ざるものにして、安ぞ未來に想到するの餘裕を存せんや。言ふ迄もなく我國の現在は、數千年に亘れる過去の產物なり。皇室の尊嚴・國民の性情、將又文物發達の徑路・治亂盛衰の顚末等、仔細に之を觀察すれば、現在の由つて來る所以を明かにし、隨つて未來の赴趨する所を察するに難からざるなり。

抑過去を觀察するには、根本史料に據らざるべからずして、一篇の成書に據るを非なりとす。蓋人各見る所あり、自家の見地は、是れ他人の見地にあらず。一篇の成書に賴りて過去を知らんとするは、卽ち自家の見地を沒却して、他人の見地に傾倒するものなり。讀史餘論・日本外史は、各其の著者の心に映り眼に現れたる日本歷史にして、之を以て眞箇の日本歷史と稱し得べからず。自ら眞箇の日本歷史を知らんと欲せば、根本史料たる當時の記錄に由りて研鑽討究せられざるべからざるなり。是惟に日本の過去を正當に知り得るのみにあらず、研究の興味、亦實に津々たるものあらん。本叢書は眞に我國を了解せんと力むる特志者に、根本史料を提供せんと欲して刊行す。

蓋世には現在にのみ齷齪して、過去を觀察する興味と餘裕とを有せざるもの多しと雖、又孜々として往を彰にし今を知り來を考ふるの士尠しとなさず。此の書、或は少數篤學の士に容れらるゝも、多數俗庸の人に迎へられざるは固より期する所なり。さばれ需要の多少を論ぜず、必ず全部の刊行を大成すべし。敢て爰に之を聲明す。

國史研究會主幹

例言

一、原本二十卷なるも、頁數の都合に因り、本編には十五卷迄を採收して之を第一卷とし、十六卷以下は第二卷として分冊收載する事となせり。

一、名稱、引用文字等にして特長と認むべきものは、原本の儘に保存して、改竄する事なかりしと雖、讀誦の平易ならんを期せるが爲、假名を補うて語格を正したるもの尠なからざりき。

一、地名人名等にして原本假名書きのもの少なからざりしが、此等は出來得る限り他書を參校し、又は原本中彼此對照して正確疑なしと信ずるものに限り、漢字を補塡したり。然れども其能はざりしものは、極めて稀に假名の儘としたるもあり。

一、魯魚の誤に因るもの又は字體不明にして讐校の途なかりしものは、時に口を塡し又〔何字缺ク〕とせるもの二三これあり。

一、地名人名等稀に振假名を施したるは、唯讀惡からんことを慮りたるものに止まれり。

解題

土佐物語　二十卷（本卷は前編として十五卷迄を收め十六卷以下は之を後編に收む）

本書は、應仁の大亂以後、將軍の命令行はれず、英雄四方に割據し、隨つて御膝元なる京都すら衰微を極め、朝臣にしては、攝家清花を始め落魄し、身の置き所なきに至り、武家にしては、大名小名といへども、一朝戰敗るゝや、領地城廓何れも他の有に歸し、一族直に流浪するに至れり。されば是等の人々、或は緣を求め因を尋ねて、邊土遠國に漂泊す。中にも一條太閤兼良公は、奈良に身を潛め、幽閉閑疎の住居をなし、子敎房公は、土佐國なる長宗我部文兼に迎へられて、遂に同國に移り、長宗我部氏の冊く所となれり。これを土佐の一條家といふ。

此の物語は、彼の敎房公文明十年土佐國へ移住ありしより筆を起し、長宗我部文兼・元門・雄親・兼序・國親・元親・盛親の代々の事蹟と、其時代に於ける同國内の大小

の合戰等を記し、終には彼の關ヶ原の役に、盛親が石田三成に組せしを以て、德川家康、盛親の所領を沒收し、慶長五年これを山内一豐に與へ、玆に山内氏の入部となり、盛親は京都に漂泊し、法體して遊夢と號せしが、猶本領を復せんことを希ひ、時機を窺ひたりしに、關東・大坂との戰爭起り、慶長十九年豐臣秀賴の招きに應じ、大坂に籠城して一方の將となる。然るに翌元和元年五月六日、矢尾に於て大敗し、遂に捕虜となり、同月十五日四條河原に於て殺され、長宗我部氏玆に亡滅し、入部せし山內氏の繁榮を頌し、筆を止めたり。されば本書は、文明十年一條殿下向より、元和元年長宗我部氏亡滅に至るまで、土佐國に於ける凡百卅八年間の史蹟を記したるものなり。此の外追加として、長宗我部先祖の事異說、土佐國守護の事幷傳記、長宗我部家臣諸家へ被㆑抱候有增、長宗我部家古き物語共、知行千貫の辨、室戶堀湊の記、朝倉宮再興記、土佐國廿一社の記等を附錄とせり。本書作者詳ならず。但「長宗我部盛衰記」一名「土佐土產」卷一敍文に云「偶土佐古城傳承記を得たり。何人の作と言ふ事を知らず。其始終節月の詳なる事、大に諸記

の類にあらず。大概難波戰記の說と符合す。蓋往日識者有て是を顯する。土佐物語は全く此の書を以て潤飾增修するのみ云々」と見えたり。然らば「土佐物語」は、「土佐古城傳承記」を、何人か潤飾增修したるものなること知られたり。たゞ惜むらくは、「土佐古城傳承記」といひ本書といひ、共に作者の傳はらざるは頗る遺憾とする所なり。併し乍ら「長宗我部盛衰記」は、安永三年大神眞潮の序文を掲げ、中田氏の著述なる事を明記しあれば、「長宗我部盛衰記」著述の時は、既に本書は世に流布せし書なること明なり。猶又本書追加の文によりて考ふれば、土佐國朝倉宮再興記は、明曆四年林春齋の文を掲げ、室戶湊の記は、寬文元年山崎闇齋の文を掲げ、土佐國廿一社の記は、寶永二年大神重遠の著述を掲げ、また奥書には、享保五年庚子十二月下浣於土州高智山書寫畢と記載せるを見れば、寶永二年以後、享保五年以前の著述なることは推定せらるゝなり。猶識者の高敎を俟つことゝせむ。

本書は全本と抄錄本とあり。共に世に流布せり。「土佐國群書類從」には抄錄本

を採收せり。本編は全本を採收す。然れども寫本を以て世に流布せれば、魯魚の誤なしとも限らず。且類本至て尠なければ、反覆丁寧讀み得る限りは熟考を重ね、漸く斯く迄には成し遂げたり。讀者之を諒せよ。

大正三年五月

黑川眞道識

目次

土佐物語　一

巻第十二

巻第十三

目次終

土佐物語卷第一

一條殿土佐國下向の事

人皇百四代後土御門院の御宇、足利將軍源義政の時の管領細川右京大夫勝元といふ士所、山名右衞門佐持豐入道宗全と不和の儀起り、應仁元年より、兩家忽確執を結び、其黨日に起り月に會ひ、遂に京師東西に別れ、金鼓旌旗の動搖晝夜を分かず、年を歷て止まざりしかば、鳳闕の衰弊、公家の窮困此時に極り、攝家淸花を始として、九陌の廣居、一身を置き難く、或は緣を求め因を尋ねて、邊土遠國に漂泊し給ふ中にも、一條太閤兼良公は、奈良の舊都に御身を埋め、幽閑閑疎の御住居あり。御嫡子前殿下敎房公は引別れ、攝州兵庫の浦に逆旅し給ふ。爰に土佐國長宗我部兵部丞秦文兼、此由を傳聞きて、御迎の船をぞ參らせける。文明十年戊戌、彼浦より御船に召され、

一條教房土佐に下る

土州甲浦に着御ましく、夫より文兼が居城岡豊に移り給ひければ、一の郭を點して御座所に定め、重く册き奉る。此所に兩年を送り給ふ。其隣里はいふに及ばず、國中の領主參向して、悅緖を述べ、或は使者を進めて崇敬の誠を盡し、往來殊に繁かりければ、いつしか岡豊は、繁華の地とぞなりにける。然るに土佐國は、往昔康曆の頃、細川武藏守賴之を、すべき所表なりと、人申しける。四國の探題に補せられてより、代々彼子孫の下知に隨ひ、餘風猶新なりしに、五代の孫右京大夫勝元、文明五年卒去の後、四州悉く亂れて、一隍一壘を構へ、黨を結ぶもの其數多し。土佐國に宗徒の將は、安藝・香宗我部・山田・本山・長宗我部・吉良・片岡・太平・津野等なり。文兼諸將に謁し、或は檄書を飛して、誇していふ。一條殿御父子御下向の事、我國の面目、且安全の基なり。殊に隣國隙を窺ふ折なれば、彼御家門を國守と仰ぎ、拜趨の禮を事とせば、國中其化を戴きて、諸士の鬪諍忽に止まり、隣國より干戈の怖なかるべし。中に就きて思ふに、豫州の堺には、猛勇の將なきに因りて、動もすれば境內を犯す。然れば幡多郡中村は、西郡の府にして、伊豫に隣れり。彼

一條殿の居城を中村の御所と崇む

中村の古城を點して、御家門を移し奉りなば、豫州よりの患もなかるべしといひければ、何れも此議に同じ、文明十一年己亥、中村の古城を結構に築きて、敎房・房家移り給ひ、國中の諸士、國司と仰ぎ奉り、中村の御所とぞ申しける。去程に封國の政務、日に新に月に盛にして、近國よりの妨なく、君民民庶の間、各萬歲を唱へ、郊野に抃て喜びけり。抑文兼は、何故に斯程まで一條殿を崇敬するぞと、其謂を尋ね見るに、文兼が父備前守元親、先年上京の時、聊便の事有ㇾ之、敎房公の御祖父經嗣公の御館へ立入りしに、元親素より田舍に住みて、萬無骨なりければ、經嗣公偸に御家人に仰せて、起居・詞遣・衣食等の法式を指南せさせられ、厚く扶助し給ひける。されば元親常にいひけるは、一條殿の御厚恩は、七生迄も忘るべからず。我子孫、報謝の志を存すべし。若是を背かば、永く弓矢の冥加盡きぬべしと、言置きし故とぞ聞えし。此備前守元親は、後の宮內少輔元親には、七代の祖なり。一條敎房公と申すは、かけまくも忝き天の兒屋根の御末、從一位關白左大臣經嗣公の御孫、從一位准三后左大將攝政關白太政大臣兼良公の御子、御母は中納言宣俊卿の御女なり。牛車、兵杖、隨

土佐一條の始終

身、左大將、左大臣、氏長者、從一位、關白を歷給ふ。文明元年辛卯、南都に屏居し給ひ、同　年戊戌、土州長岡郡岡豐に御下向、同十一年己亥、幡多郡中村に移住し給ひ、同十二年庚子十月五日、中村の城に於て薨じ給ひ、妙華寺殿と號す。其御子房家卿、文明六年甲午京都に於て御誕生、同十戊戌年、御父敎房公に隨つて土州に御下向、時に五歲なり。五位、四位、少將、兼土佐守、中將、參議、三位、權大納言を歷給ひ、天文八年己亥の十一月十三日に薨ず。享年六十六。藤林寺殿と號す。其御子房冬卿、御母は參議資冬卿の御女なり。明應七年戊午、中村に於て御出生、權中納言、二位、左大將、天文十年辛丑十一月、春秋四十四歲にして御逝去、後國明院殿と號す。其御子房基朝臣、御母は式部卿邦高親王の御女、大永二年壬午、中村に於て御誕生、從五位下、兼阿波守、右中將、從三位、天文十八年己酉四月十二日逝去、二十八歲、光壽寺殿と號す。其御子兼定卿、後に康政と改めらる。天文十二癸卯年、中村に生れ給ひ、四位、少將、中將、參議、權中納言、從三位を歷給ふ。然るに康政、不義非法の行跡に因つて、家臣背きて隨はず。天正元癸酉年九月十六日、薙髮して自得宗性と號し、國政を長男內

政に譲りて隱居し給ふ。時に三十一歲なり。同じき二年甲戌二月、家臣催して、康政入道を豐後國に送りしかば、遂に臼杵に行きて、大友義鎭入道宗麟を賴まる。康政は宗麟の壻なれば、懇に扶助せらるゝ所に、舊臣入江左近、是を弑す。內政朝臣は、中村に於て生れ給ふ。御母は豫州宇津宮某が女なり。左中將、從三位。長岡郡大津城に移りて、大津の御所といふ。天正八年波川玄蕃に語らはれ、隱謀を企て、終に露顯して、長宗我部宮內少輔元親、豫州に追出す。程なく逝去。天叟院守有と謚す。房家・房冬・房基・康政・內政、是を土佐一條と申すなり。內政の御子息政親、右衞門佐と號す。大津に於て產る。御母は長宗我部元親の女なり。長岡郡久禮田に住して、久禮田の御所と稱すれども、一條家の數には入らざるなり。慶長五年の冬、長宗我部歿落に因りて、翌年の春、政親は上京ありしと承る。是れ土佐一條家、始終の物語なり。

長宗我部の事

長宗我部氏略系

彼の長宗我部兵部丞文兼が先祖を委しく尋ぬれば、秦の始皇帝四世の孫功滿王、仲哀天皇八年に來朝、其男融通王又弓月王とも號す。應神天皇十四年に來朝、其男眞德王、仁德天皇の御宇に姓を賜はり、波多といふ。今の秦の字の訓なり。眞德王九代の孫、秦の川勝に至る。用明天皇二年七月、厩戸の王子、守屋の大連を討罰の時、川勝大きに軍功あり。川勝二十五世の孫秦の能俊、土佐國長岡郡にて三千貫を領し、宗我部村岡豐山に城を築きて入城して、氏を宗我部と改む。然るに同國香美郡にも、宗我部といふ所ありて、領主をも宗我部某と號しければ、其疑ありとて、長岡郡にあるを長宗我部と稱し、香美郡にあるを香宗我部とぞ申しける。

長宗我部と香宗我部

この岡豐と申すは、往古の名にあらず。此城を築きて、長岡の府なれば國府といへり。然るに府の字を、豐饒の豐に書代へたるは、此山の西の尾に、豐岡上天神社御坐す故に、豐の字を申請けて、米穀豐饒萬民快樂を祝せられたり。於加布とは假名訓なり。抑豐岡上天神と申し奉るは、古老傳へて、天照太神にて御坐すといへり。神樂歌に、天爾坐豐岡姫。梁塵抄に、豐岡姫は天照太神也と云々。上天の二字は、天にましますの意と

土佐國二十一社

かや。此御社は、延喜式神名帳に載する所の、土佐國二十一社の其一座なり。二十一社と申すは、安藝郡三座室津神社・多氣神社、坂本神社、香美郡四座天忍穗別神社・小松神社・深淵神社・大川上美良布神社、長岡郡五座豐岡上天神社・朝峯神社・殖田神社・小野神社・石土神社、土佐郡五座都佐座神社・葛木男神社・葛木咩神社・郡頭神社・朝倉神社、吾川郡一座天石門別安國玉主天神社、幡多郡三座伊豆多神社・高知坐神社・賀茂神社、所謂二十一社是なり。斯くて岡豐の北の山上に、山城國鳩の峯八幡宮を勸請して、數の堂社石淸水を移し、神主社人社僧を置き、毎年祭奠放生會を行はる。宗我部村を改めて八幡村と號し、城下に大河あり、石淸水の末なればとて、石淸川（いはし）とぞ申しける。其擁護にやよりけん、能俊子孫繁昌して、俊宗・忠俊・重氏・氏幸・滿幸・兼光・重俊・重高・重家・信能・兼能・兼綱・能重・元親・今兵部丞文兼まで十六代、岡豐に在城して、門葉見顧の者、其數を知らず。

本山傳記幷岡豐城攻の事

去程に一條敎房公、文明十一年中村に移らせ給ひ、國中の上下國司と仰ぎ奉り、拜趨の禮をぞなしにける。家臣には土居・安並・羽生・爲松(たゝまつ)とて四人相並び、仁義を宗とし智勇を先として、成敗正しかりければ、國日に隨つて治り、民月を逐ひて豐なり。斯る所に、翌十二年の秋の頃より、敎房公聊御不豫の事ありと聞えけるが、同十月五日、忽に薨逝し給ひける。妙華寺殿と謚す。哀れなりし事共なり。扨あるべきにあらざれば、御子房家卿、纔七歲にならせ給ふを國司に立て、四人の臣下、先代の法を守りて沙汰しけるが、我等不肖の身にて、若君に代り奉り、政道を執行ふ事、其憚なきにあらず。理世安民の器に當れる人を選擧して、御代官に定め、國政を司らしめ、御幼稚の若君を輔佐し奉るべしとて、大小の領主を選ぶに、長宗我部文兼其の器用なりと、群議一同に定まりしかば、卽文兼を御代官に備へて仰ぎける、忠貞こそは優しけれ。斯くて文兼、國の成敗を司りて諸事沙汰の途轍正しく、外相內德、實にも人のいふに違はざりしかば、氏族も是を重んじ、外樣も彼命を背かず、家益繁榮を得て、其子元門・其子雄親(をちか)（實は元門が弟なり）・其子將監兼序(かねつぐ)に至つては、威勢甚盛にして、人肩を返す

本山茂宗の威振ふ

事其多かりけり。其頃長岡郡本山といふ所に、八木左近大夫源茂宗といふ人あり。是は清和源氏吉良庶流と言傳ふ。茂宗祖父を、八木伊典といふ。其生國は知らず、假名實名も又詳ならず。何の頃にかありけん、彼本山に來りて居住す。其子養明、今茂宗まで三代、本姓を改めて本山と號す。伊典・養明は本山を領して、僅に住居しけるが、茂宗其器傑出して、偏に興立の志ありければ、近邊の郷民に、金銀衣食を與へて是を懷け、諸士に賄を厚くして親みをなし、遂に人數を催して、土佐・吾川兩郡に發向して、隨はざるをば攻亡し、降を乞ふをば、免して幕下になし、兩郡悉く打靡け、猛威を振ふ事甚し。然るに長宗我部將監兼序盛勢あるを見て、常に憤りけるが、或時一族從類を呼集めていひけるは、長宗我部將監驕奢甚しく、諸士に對して無禮の體是非に及ばず。潛に是を察するに、彼が曾祖父兵部允文兼、一條殿を當國へ招請したる其報謝に、一條殿懇情を盡し給ふに因るなり。文兼初めて招請したると雖、中村へ移し、國司と稱する事は、文兼が一力の及ぶ所にあらず。我亡父を始め、國中の諸將一同しての事なり。たとひ彼一力の功なりとも、兼序武士の法を存せば、強に

本山茂宗長宗我部兼序と戰ふ

誇るべき事にもあらず。よし何にもせよ、彼は僅に三千貫の領主、我は兩郡の大將なり。然るに毎度奇怪の行跡を、空知らずして暮らす事こそ無念なれ。然れども國の騷動、民の歎きを顧みて、欝胸を抑へ過す所に、驕奢日々に長じ無禮月々に增し、傍若無人の行跡、堪忍は都て恥辱なり。急に踏潰すべしと思ふはいかにと申されければ、何れも御理至極なり。彼が爲體、我々迄も遠恨に候。急ぎ思召立ち給へとぞ申しける。茂宗喜び羽檄を飛して、香美郡楠目の城主山田治部少輔、高岡郡蓮池の城主太平山城守、吾川郡弘岡の城主吉良駿河守を語らふに、皆一言に及ばず組したり。其勢合して三千餘騎、永正六年五月初、岡豊の城へ馳向ふ。兼序は素より、武勇才幹衆に越え、大敵を見ては欺き、小敵を侮らず、寡を以て衆に勝ち、柔を以て堅を挫く事、孫呉が妙術を得たる大將なり。此由を聞きながら敵に寄せられんは、武門の瑕瑾なりとて、手勢僅に五百餘騎、中島に出張し、石淸川を後に當てゝ陣を取る。是は味方淺瀬を越え、敵を深みへおびき入れ、討取らんとの方便(てだて)なり。さる程に寄手の勢三手に別れて、鬨の聲を咄と上げ、互に矢一つ二つ射違ふ程こそあれ、敵味方入

亂れ、討つ討たれつ組づ組まれつ、火を散らしてぞ戰ひける。兼序、時分はよしと馬引返し給へば、城兵崩れ、淺瀨に廻りて引取りけり。寄手是を見て、川は淺きぞと心得て、城へ入れじと眞一文字に追懸け、深き淵に飛込み、大勢浮きつ沈みつ流れける。淺しと思ひし事なれば、後勢是に途を失ひ、一度に渡さんともせず、川は深きぞ、留れ留れと呼ばはれども、大勢備を亂して追懸けしかば、耳にも更に聞入れず、我先にと進みて、淵に飛入り、前後不覺に騷ぐ所を、城兵淺瀨を渡して突いて懸れば、大勢の騷ぎ立ちたる事なれば、返して戰はんともせず、我先にと逃る。兼序、長追なせそと、人數を收め、城中へぞ引取りける。本山は初度の軍を仕損じ、安からず思ひける。兼序は、討取る所の首數二百卅五、されども寄手大勢なれば、城外を十重廿重に取卷き、晝夜廿餘日揉みにける。城兵も、爰を破られじと防げども、寄手は倍する大軍、新手を替へて戰ふ。城兵猛しと雖、替勢もなく、身金鐵ならねば、五百餘騎大半討死して、殘少なになり、其上俄の籠城なれば、兵糧盡き人馬飢に臨み、外に援兵の救なく、敵軍甬道を絕ちたれば、糧を入るべき樣なし。斯くては此城、一日も持悚へん樣

なし。翌けなば、討死すべきにぞ極めける。兼序二人の子あり、一は千翁丸、永正元年に産れ、今年六歲。次は女子、三歲になり給ふ。近藤某とて、幼少より膝本にて召使はれ、漸く成長、智信兼備し、禮厚く言寡き者なれば、二百貫の地を與へ、千翁丸に附置かれけるを呼出し、此間の戰に、味方聊勝に乘ると雖、士卒過半討たれ、兵糧も盡き果てぬ。憑み甲斐なき籠城して、徒に餓死せんより、明けなば死を快くせんと、思ひ極めたるなり。よしや骸を軍門に曝すとも、名を後代に揚ぐるこそ、武士の本意なれ。汝は譜代相傳の者といひ、年來千翁丸を守立てしといひ、其身甲斐々々しき者なれば、千翁丸を抱き、いかにもして重圍を出で、一條殿へ參り、兼序武運盡きて、此度討死仕候最後に申置き、此子を君へ參らせ候と申せ。何の仔細もなく、御憐愍あるべきなり。是ぞ我爲め第一の忠勤なりと、繰返し宣へば、近藤畏りて、此年月恩澤に俗し、今迄は一身の安善を、御家の存亡に任せ候ひつれ。命を惜むべきに候はず。今既に御運盡きさせ給ひて、一筋に討死と思召極められ候上は、御最後の御供をこそ、願ひ奉り候へ共、生を全うして命を待つは、遠くして難く、死を輕んじて節

を守るは、近くして易しと申す事の候へば、斯く取巻きたる圍を出で、若君を一條殿へ參らせ、守立て奉らん事は、遠くして難き事に候へ共、此仰を蒙る上は、隨分命を全うして、若君を養育し奉り、再び御家を起し、素懷を遂げさせ奉る、計を廻らすべく候と、義を金石に比して、信を面に顯し、涙をはら〳〵と流しければ、兼序大きに悅び給ひ、賴もしき詞の末、今は思置く事なしとて、千翁丸を呼出し、汝幼少なりとも、父が言を能く聞け。夫頭伽鳥は、卵の內より、聲衆鳥に勝るといふ。勇健に成長して、廢れたる家を興し、讎敵を亡し、會稽の恥を雪ぎ、我亡魂の鬱憤を散ぜよと庭訓を殘し、近藤に渡しければ、近藤千翁公を抱き、其用意をなしける。扨又北の方を賺し參らせ、三歲の姬に、乳母一人郎等二人相添へ、大忍の庄池の某は、乳母が內緣なれば、彼を賴み、北の山傳ひに落し、其外古老譜代の者共の、妻子下僕に至る迄、偸に忍び出しける。

長宗我部兼序自害の事

其後兼序、士共に向ひ宣ひけるは、旁が勇氣、豫て知るとはいひながら、此度の働、兎角詞に述べられず。一騎當千と云つべし。縱ひ一方を打破り、落ちん事は易かるべけれども、倩事を案ずるに、我死すべき期に迫れり。其仔細は、東に山田あり、香宗我部と一味なり。北に本山あり、奥の山分、其外土佐・吾川兩郡は、南の果迄も本山が領分なり。西に吉良・太平あり、彼等は津野・波川・片岡と與したり。されば四方皆敵にして、我一人、籠中の鳥の如し。若爰を落ちたりと聞かば、草を分け捜すべし。雑人の手に懸り、汚名を殘さんも口惜し。潔く討死すべし。扨も旁、此際迄附纒ひ、死を倶にせんと思ふ志、中々いふに詞なし。但千翁丸を殘置く間、一人なり共活殘り、千翁を守立て得させよ。最後の供には增さらんと宣へば、何れも道理に服し、兎角言出づる人もなき所に、中島某進み出で、御諚尤至極に候。各若き輩は、斗擻行脚に身を寄せても、隨分に活殘り、若殿の御用に立ち給へ。但某を始め誰々は、皆六十に餘り候へば、若殿を見備へ奉る月日なし。是にて大殿の御供仕るべし。若き旁は急ぎ給へと、夫々に名をさして、老人十一人郎等下部五十三人殘りければ、若き輩、此

上は否むべきにあらずとて、親子兄弟別々に落ちて行く。兼序、今は心に懸る事もなし。明けなば、大勢攻め來るべし。終夜最後の酒盛せんとて、大盃三度傾け、中島にさし給ふ。中島謹んで押戴き、君臣は、三世の緣と申傳へて候。況や斯樣に御最後の御供仕る上は、未來迄も斯の如く、御近習仕らん事疑なしと、三盃ほして兼序にさし上げ、夫より次第に飮交す。中島申しけるは、旁此中に、誰か一人活殘らん。一所に討死して、同じ道に生れん。此悅に一さし舞はん、はやさせ給へと、兼序に小鼓を參らせ、野田太鼓、桑名笛を仕り、兼序のきりをぞ囃しける。岡豐の城は、山高く聳えたれば、笛鼓の音空に響きて、敵の陣にぞ聞えける。寄手の者共、こはいかに、味方は多く討たれつ。何の樂に、通夜諷ふらん不敵さよ。惡さも惡し、いざ夜攻に押寄すべしといひければ、いや〳〵是は樂にはあるべからず。味方悉く討死し、其上僅の籠城なれば、兵糧も盡きぬべし。最後の酒盛と覺えたり。天晴名ある大將程ありけるよと、考する人も多かりけり。去程に東雲漸く棚引きて、寄手太鼓を打ち鐘を鳴らし、九折なる山路を、曳々聲を上げて攻上る。兼序は、六十餘人を前後に備

へ、蓦地に暗に突いて出づる。寄手は、元來城兵を小勢と見濟しければ、何故にか些も休らふべき。我先に討たんと、喚いて駈向ふ。城兵は、今日を限りと思ひ極めし事なれば、一足も後へは退かず、前後に當りて打破る。本山が士大將本山勘解由左衞門、深手負うて引退くを、城兵是非なく追懸け討取りけり。池田左衞門は、兼序を目にかけ、寄せ合せんと進み討つ所を、兼序の郎等、馬の諸膝薙ぎて、落つる所を討ちにけり。此外目の前に切らるゝ者五十餘人、手負ふ者は其數を知らず。寄手終に追立てられ、開き靡きて引退く。城兵龍虎の勢をなせども、皆討死して、十三騎にぞなりにける。兼序、暫しは敵も寄せ來まじ。少しなりとも休息して、最後の軍快くせんと、態と敵を引入れん爲に、大門を押開き、靜まり返つて居たりけり。本山は、城中既に勢力極りぬと見澄しければ、諸軍に下知して、一同に鬨を作つて攻上り、廣庭に亂入る。中島是を見て、腰の刀を拔き、廣庭に飛出づれば、殘る人々遲れじと、十二人一所に打て出で、捲り立てゝぞ切つたりけれ。寄手の大勢怺へ兼ね、門より外へ引いて行く。兼序立歸り見給へば、主從三騎になる。今は是迄と鎧脫捨て、腹掻

切つて臥し給へば、二人の郎等も、刺違へてぞ死にゝける。長宗我部十九代も、粟飯の炊く程、哀樂轉變の世の野風こそ果敢なけれ。

千翁丸中村に行く附岡豐に歸る事

斯くて兼序の北の方は、乳母郎等に介錯せられ、岡豐の城を落出で給ふ。痛はしや將監殿、明けなば大勢寄せ來り、さこそ隙なくましまさんと、我身の憂に取添へて、涙を袖に包み兼ね、大忍の庄池の某が許に至り給へば、池は情ある者にて、よきに饗應し奉る。北の方には、只ならぬ御身にて、早月頃過ぎけるが、物うき月日を重ね、終に爰にて御產あり、男子出生し給ひけり。後に長宗我部國康といひしは、此若子の御事なり。去程に近藤某は、十死の內に一生を得て、岡豐の國を忍び出で、商人の姿に樣を變へ、千翁丸をば籠に入れて背に負ひ、幡多中村へと急ぎける。土佐・吾川・高岡は、弓手も妻手も敵なれば、暫も身を隱すべき陰もなく、虎尾薄氷を踏む恐れ肝を冷し、漸々として中村に至り、一條殿の御館に着き、千翁丸を下し置き、家老土居

の某に對面して、是は長宗我部將監が士にて候と、ありし次第を具に述べて、慇懃に賴まれける。土居熟聞きて、急ぎ台聽に達すべしとて、頓て御前に罷出で、事の由を申上げければ、房家卿聞召し、大きに驚き給ひ、誠に不便の事なりとて、急ぎ兩人を召寄せられ、淚を流して仰せけるは、先考敎房公、京都の亂を避けて、攝州兵庫に漂泊し給ひしを、兵部丞文兼が招請して、當國に御下向あり、安座し給ふ耳ならず、勅許にあらずして國司と仰がれ給ひ、今に至つて國中の諸士に册かるゝ事、併文兼が厚恩なり。我豈其報謝せざるべきや。當家僅二代の內に、彼は十四代に及ぶ事、悲歎するに餘あり。但千翁丸が恙なきこそ大慶なれ。我れ隨分養育して、成長せば、亡父が讎をも報ぜさせ、本領安堵相違あるまじ。此度近藤が忠貞、古の程嬰にも越えたり。思へば兼序は、能く人を知るの明ありて、汝が如き忠臣を扶助す。汝又義を守りて、幼主を世に立てんとの心底、誠に主從一致なりと、甚感賞し給へば、近藤謹んで承り、誠に難有御諚に候。身不肖に候へ共、譜代の列に交り、兼序の大恩を蒙りし身の、此度主の先途をも見果て申さず、おめ〳〵と立退き候事、全く本意にあら

ず候へども、主命辭するに詞なく、甲斐なき命を存へ、御所に參上仕候。返す〳〵も千翁丸に御憐を願ひ奉り候と、謹んで申上ぐれば、房家卿、心安く存ずべしとて、千翁丸をば御側に置かせられ、深く劬り給ひけり。其後兼序菩提の爲に、覺譽常通と謚して、樣々の追善をなし給ふ。難有かりける例なり。去程に一條の大納言房家卿、御慰の爲に境地を選び、高樓を立てられ、常に是にて、遠近海山の景、四季の色を御覽じて、歌を詠じ詩を賦し給ふ。既に其年も暮れて、翌る春過ぎ夏の頃、彼樓閣に登らせ給ひ、近士を召され、御酒宴酣にして御機嫌甚し。千翁丸御膝近く在しけるに、輿に乘じて御戲に、いかに千翁丸、此欄の上より庭中に飛下りなば、父が名跡を取返し得さすべしと仰せければ、御詞の下より、あつといひて、つる〳〵と走り寄り、一丈餘り高き樓閣の欄より、庭中へ飛下り、莞爾と笑つてぞ立つたりける。大納言殿、掌を抵つて大きに驚き感じ給ひ、彼は今年七歲なり。流石名ある武士の子程ありけるよ。幼稚の身として、恐るべき所を怖れず、名字の爲に身を顧みざるこそ、天晴行末賴もしとぞ宣ひける。斯くて年往き月來りて、千翁丸既に十三歲にぞなりにけ

る。先年房家卿樓閣にての御戲言、稚心に嬉しく思ひ、忘れもやらず、時々本領安堵の事をぞ歎きける。房家卿誠に不便に思召し、若此事相違せば、第一詞僞ならん。第二には、彼成長の後、深く我を恨むべし。彼といひ是といひ、措置くべきにあらずとて、吉良・太平・山田・本山に、樣々御扱ありければ、辭する所やなかりけん、永正十三年、長宗我部本領三千貫を、千翁丸にぞ返し與へける。千翁丸大きに悅び、急ぎ岡豐に立歸り、昔の跡を修補して住しければ、方々へ分散せし譜代の諸士、此彼より馳集り、涸魚の水を得、春雷震つて蟄蟲出づるが如く、再び家運を開きけり。敵の末、根を掘りて葉を枯らせとこそいふに、本山等が、千翁丸を思ひ侮つて、本領を返す事、千里の野に虎を放つに同じとぞ、心ある人は申しける。

戸波城軍の事

一條殿は、幡多一郡を領し給ひしが、永正十四年に、高岡郡悉く采錄となりける事の根元を尋ぬれば、其頃津野刑部少輔在原元實とて、高岡郡津野の主あり。津野山よ

津野氏略系

り須崎・野見浦迄悉く領して、葉山と須崎に城郭を構へ、五千貫の主なり。其先祖を尋ね聞けば、平城天皇の御子阿保親王の曾孫、從五位下越中守在原經高、延喜十年庚午、故ありて伊豫國浮穴郡川上の庄山の内に下向、同十三年癸酉三月、土佐國高岡郡津野の庄床鍋村に來りて住す。同十八年、深山を伐開き里となして、檮原と號す。檮の木多きに依つてなり。暫く爰に住す。同十九年勅命に依つて上京、同年津野庄に於て、祿食一千町を賜ふ。依レ之氏を改めて津野と號す。經高五代の孫彌次郎高行、津野の庄一圓に領す。高行より今刑部少輔元實迄は、十代とぞ聞えし。其家の臣下には、古見(こみ)・長深山・向井・隱田・小野・中村・梅原・久松・市川・味元(みもと)・下元(しももと)・本井・高橋・今橋・吉岡・谷川とて、譜代相傳の士相並び、德を戴き恩を蒙る者、境内に滿ちて、家の繁昌いふ計なし。爰に福井玄蕃頭とて、同郡戸波(へは)の郷岩戸村井場(ゐのはさ)の城主あり。其身小身といへ共、常に剛にして、人の下手に附かん事を思はず。津野領須崎と戸波は、相並びて堺を交へし事なれ共、常に津野と不知なり。津野は大身なれば、福井を幕下にせんとす。福井は、何條津野が分際にて、我を直下にするこそ安からねとて、都て

津野元實福井玄蕃を討つ

津野領に入りて、鹿狩鷹狩をして、油斷もあらば、須崎の城を切取らんとの氣色なり。津野、初の程は、知らぬ由にて過しけるが、油斷大敵措くべきにあらずとて、津野の一族十餘輩、徒士雜兵二十餘騎、井場の城に押寄せたり。玄蕃手勢二百餘人打つて出で、大きに勇を振ひけり。され共勢徵なれば、叶ひ難くや思ひけん、久禮の城主佐竹掃部頭へ使を遣し、加勢をぞ乞ひける。佐竹急ぎ中村へ立越え、一條殿へ此由を申上げければ、さらば加勢せよとて、雜兵二千餘人、戸波の鄕へ差向けらる。津野是を聞くより、かゝる小城に、目を經るやうやある。力攻にせよやとて、眞先に進みて、曳々聲を出して攻懸る。城中にも、爰を專途と防ぎけり。斯る所に中村勢、鬨を作りて押寄せたり。津野勢、すは後詰のあるはといふ程こそあれ、我先にとぞ崩れける。城兵是を見て、門を開いて打つて出で、前後より引包み、火水になれとぞ揉んだりける。津野勢、前後の敵に揉立てられ、散々になりて逃げけるが、かまちの沼とて大なる沼あり。寄手是をば知らず、我先にと駈込み〳〵、底の藻屑となりにける。大將元實是を見て、南無三寶、こはしなしたり、今は遁れぬ所なりと、馬駈据ゑ

津野元實戰死

大音上げ、行先は沼なるぞ、泥水に溺れ死して、名を汚さんより、一人なりとも敵を討つて、潔く討死せよ。士は名こそ惜しけれ、返し合せよと呼はりければ、踏止り踏止り、返し合せて戰ひける。元實鞍笠に立上り、津野刑部少輔元實なり。我と思はん旁は、元實が首取つて高名に備へよと、大勢の中へ駈入りて、蜘手十文字、八方亂して切つたりける。手元に進む兵十七八騎切つて落し、殘る者共追散らし、勢ひ懸けて控へたり。津野が一族從士共、大勢に隔てられ、此彼に討合ひしが、又一所に集り、其身を見れば、深手薄手の嫌なく、五ヶ所三ヶ所疵を蒙らぬはなかりけり。迚も遁れぬ期に迫りぬと、津野豐後守・同藏人・同但馬守・同出羽守・同越前守・同新左衞門・同新右衞門・同又四郎・仲平備後・市川石見・闕和泉・船戸左衞門・江村右近・山內次郎兵衞・古見河內・佐川越中・中村兵衞左衞門・吉村左衞門三郎・南部山城・水野彌平左衞門・西村伊豆・隱田新六・野見大助、是等を始として、一族從士五十三人、雜兵都合三百八十餘人、永正十四年丁丑四月十三日、一所に討死して、名を後代に止めけるこそ哀れなれ。元實行年三十六、元亨院勇公と諡し、須崎の鄕に一字の伽藍を建立して、

元亨院と號し、彼菩提をぞ弔ひける。元實の一子孫次郎國泰、此時僅二歲なりしを、仲平兵庫元忠養育して、葉山の城をぞ守りける。

津野降參附獵師物語の事

爰に一條殿の士に、安並彌惣・出間九郎兵衞といふものあり。數度戰功を顯し、今度戸波の合戰にも、高名したる者共なり。津野の一族皆亡びたるを見て、彼領分は、一條殿の采錄とや思ひけん、須崎の浦里順見して、戸波へ立越えんと、吾井の鄉に至る所に、何として聞き出しけん、仲平兵庫・市川三郎右衞門・高橋鍵右衞門・永山平次兵衞、大勢を引具し、旅人の體に出立ち、後より靜に追懸けたり。安並・出間は思ひも寄らず、後を見れば、大名と覺しき旅人來るを見て、是は何方より、何方へ行く旅人やらんと、道の側の石に腰をかけ、休み居たる所に、若侍一人走り來りて、誰人にて御渡り候や。是は豫州より、當郡へ所用ありて參る者にて候が、見申せば御歷々、御慰の體に見え申候。乘打尾籠に候間、御斷の爲、使を以て申上候と、慇懃に述べければ、

兩人、御念入りたる御使、早速御通り候へと、何心なく行列を見物して居たる所を、是はといふ聲を合圖にて、一度に啀と取卷き、手取り足取り主從殘らず押へて、繩をぞ懸けにける。兩人大に肝を消し、こは何事ぞと問ひければ、兵庫聞きて、汝知らずや、津野が一族仲平兵庫元忠なり。一條殿の首を切ると思ひ、汝等が生首拔きて本望を達せんと、さゞめかいてぞ歸りける。兩人、えゝ口惜や、たばかられぬ。よしや尸は土に埋むとも、一念の惡鬼となりて、此欝憤を散ずべしと、躍り上り狂へども其甲斐なし。終に葉山にて、誅せられけるこそ無慙なれ。大納言殿此由聞召し、扨も無念の事共かな。急ぎ津野を攻め、仲平が首取つて、兩人に手向くべしと、佐竹掃部・福井玄蕃を先として、都合其勢三千八百餘騎、葉山の城へ押寄せたり。津野には期したる事なれば、一門從士馳集り、鄕民共を駈催し、逆茂木石弓用意して、靜まり返つて待懸けたり。何れも山家に住馴れて、鹿猿を取る獵師なれば、山坂をも、平地の如く駈廻り、鐵炮の上手、下針（さげはり）をも外さぬ程の者共、千五百人籠りければ、寄手の大勢山川一面に押來るを、狙ひ澄して打つ程に、あだ矢は一つもなかりけり。寄手若

干討たれ、引退けば又入替り攻懸る。城は聞ゆる名城なり。籠る所の兵は、究竟の者共なれば、輙く落つべきとは見えざりけり。若し日を經るならば、豫州より加勢來るべし。急に攻めよといふ儘に、入替り〳〵夜晝の堺なく、廿五日ぞ攻めにける。城中には、替る勢もなし。其身鐵石にあらざれば、上下疲れ果て、次第に兵糧玉薬も乏しく、防ぐべき勢も弱りければ、城を明けて、大方山へ取籠りけるを、寄手追懸け四方より攻めければ、遁る所やなかりけん、津野が一人當千と憑みたる宗徒の士十二人、並居けるが、士の死すべき所にて死せざれば、恥を見ると言傳へたり。軍も思ふ程はしつ、今は力盡きぬれば、冥途黄泉迄伴ふべしといひも敢ず、同時に腹をぞ切つたりける。爰に仲平兵庫元忠は、いかにもして降を乞ひ、孫次郎を助け、世にあらすべし。若叶はざらんに於ては、其時こそ限りなれと、一途に心を取定め、鎧甲を脱ぎ、太刀刀を帶せず、下人をも具せず只一人、佐竹掃部が陣に駈入りて申しけるは、此度の軍は、元忠、出間・安並を生捕り、雜言仕りたる御咎に候へば、唯元忠が首を召され、孫次郎を御寛宥の御慈悲を仰ぎ奉候。此旨御披露憑入候と、頓首してぞ居た

りける。掃部熟と彼形粧を見、其演說を聞きて淚を流し、忠といひ義といひ、感歎するに詞なし。此上は我又身に代へても申許し、安堵せさせ奉らん。御心安かれと、一獻を進めてぞ返しける。此由御申上げければ、房家卿、安並・出間が供養に、津野從類を攻干すべしと思へども、畢竟彼等が働、私の宿意にあらず。主君忠節の爲なれば、我れ强に憤るべきにあらず。此度兵庫降參の體、忠臣なり義士なり。誠に武士の手本なり。宥免せずんばあるべからずとて、津野が本領相違なく、孫次郎にぞ給はりける。此勢に高岡郡攻めらるべしと聞えければ、太平・佐川・波川・片岡・能津等敵し難く、皆降參をしたりける。扨こそ高岡郡、悉く一條殿の御領になりにける。其頃高岡に一人の獵師あり。狙ひ狩に出で、彼方此方と窺ふ所、大きなる熊一つ、子熊二つ連れて出で、大石を引上げければ、子熊下に入りて、蟹蚯蚓やうの物を取喰ふ。獵師是を見て、矢頃少し延びたれば、如何にと思案する所に、大きなる猪鹿、近々と出來る。木陰より鐵炮を以て狙ひ澄し、眞只中を打ちければ、猪鹿驚き、大きに猛つて駈廻る。熊は鐵炮の音に驚き、持ちたる石を落したり。其儘石を引上げ見れば、子熊

は鮓の如くなりて死にけり。親熊大きに歎きけるが、猪鹿を見て、偖は此者の爲事とや思ひけん、飛んで懸る。猪鹿も亦、我を打ちたるは此者とや思ひけん、互に負けじと爭ひしが、共に疲れて死にけり。獵師、熊猪鹿を拾ひ取りてぞ歸りける。友達來りて、扨々能き仕合かな。御所と同じ幸なりといひければ、何とした事ぞと問ふに、されば津野殿は、戶波殿を亡さんとて、却て其身打負け給ふ。さらば戶波殿、津野を領し給ふと思へば、脇より御所取らせられ、夫が事になりて、高岡悉く御所の御領になる。其如く其方も、熊と猪爭ひて、脇より利德を得給ふは、誠に御所と同じ幸にあらずやといひてぞ笑ひける。兎犬俱斃、鷸蚌相持、田漁老父坐而利レ之とは、斯樣の事をや申すべき。御所とは、一條殿の御事なり。

本山緣組附吉田周孝が事

長宗我部千翁丸は、一條殿の口入にて本領に歸り、岡豐に在城して漸く成長し、永正十五年戊寅の春、十五歲にて元服して、卽信濃守國親とぞ名乘りける。國親常に申

されしは、父の讐には、倶に天を戴かずといふに、敵藩牆の内にありて、肩を並べ膝を合せぬ計にて、年を送る事こそ口惜けれ。されども吉良・太平・山田・本山、素より親昵の上に、太平は津野・片岡と組し、吉良・本山は山田・香宗我部と一家の親をなす。多勢の上に、一味同心の者多し。我は獨夫に等し。尤一條殿の取持にて、本領には歸れども、本山等が、我に心を許すまじければ、行末都て覺束なし。何とぞ一人なり共、父の敵を討たばやと、明暮肺肝を碎きけれども、其甲斐なく年月を送りける。爰に吉田の領主吉田備中守周孝とて、智謀勇猛の士あり。其先祖を尋ぬれば、大職冠鎌足の末裔、鎮守府將軍秀郷公六代の孫、三河國の住人守部主馬首助、淸本姓を改めて首藤と號す。其男枝頭助道、其子親淸、皆首藤といへり。親淸が男義通、相模國鎌倉郡山内の庄を領して、山内と申しき。是より子孫、或は首藤と稱し、又山内とも號しける。義通より四代の孫、瀧口三郎俊氏・同四郎俊宗兄弟、同國山内吉田を領して、吉田とも申しけり。然るに俊氏・俊宗は、平家の方人たるに依つて、平氏滅亡の後、流牢の身となり、尾張國に蟄居す。其子孫足利將軍尊氏に屬して軍功多く、土佐國長

長宗我部國親、吉田周孝と結ぶ

岡郡にて、十四村をぞ領したる。其内に吉田の邑は、我專名の地なればとて、卽其所に居城を構へ、數代相續き、今周孝迄は十二代とぞ聞えし。昔は家榮え威勢强く、國に又肩を雙ぶる者もなかりしが、數代の間親族に押領せられ、又は敵に狹められ、家漸く衰へ、今は居城吉田の近邊のみを領して、昔を忍び時節を待ちてぞ暮らしける。吉田と岡豐は、其間僅に一里計なれば、國親、吉田を語らはん爲、常に音信をぞなしにける。猶も親くなる事を、立てんとや思ひけん、媒を求め、國親が妹を、周孝にぞ嫁せしめける。されば互に兄弟の思ひをなし、厚く親みをなしければ、國親、父の敵を討ち、會稽の恥を雪がん事をぞ談じける。周孝其志を感じて、明暮軍評定の外は、他事なしとぞ聞えし。周孝いひけるは、古人の詞に、天の時は地の利に加かず、地の利は人の和に加かずといへり。大事を思ひ立つものは、人を懷くるを先とす。人を懷くるは、慈悲を先とすとて、田畠の高免を避け、課役を許し、法度を緩くし、鰥寡孤獨の便なきには、住家を定め衣食を與へ、偏に子を憐れむ如くなりければ、如來の再誕とぞ仰ぎける。されば近郷の民百姓はいふに及ばず、諸士招かざるに隨ひ付く事、草

の風に靡くが如し。勢漸く盛なれば、秦家を興立せん事、此人なくてはと、いはぬ者こそなかりけれ。一條殿此由聞召し、家臣を召して仰せけるは、長宗我部將監兼序は、吉良・太平・山田・本山が爲に亡され、國親孤にてありしを、房家が口入を以て、本領に返しぬ。信濃守幼稚の時の志を思へば、親の敵を餘所に見て暮らす者にあらず。されど共無力にして、年月を送るなるべし。然るに吉田備中守と諸事談じて、近邊の諸士鄕民を語らひ寄ると聞く、備中守は隱なき智謀勇氣の者なり。彼と共に、終に旗を立てん事疑なし。然れば弓矢の騷ぎとなりて、國亂れ民苦しみ、治るべからず。何卒彼等和順せしめ、國家安養になさばやと思ふなり。其方便といつぱ、先づ本山は、國親が敵の隨一なれば、國親が娘を、本山左近大夫茂宗が嫡子、式部少輔茂辰に緣を組み、父子の親をなさしめば、互に和順すべし。吉良・太平・山田との和談は、猶安かるべし。然らば國治長久なるべし。但讐敵の事なれば、國親心得難く思ふべけれ共、我媒せば、よも違背はすべからず。此事いかゞあるべきと仰せければ、諸臣皆、誠に餘義なき御諚に候。是に越えたる事候べからずと、一同にぞ申しける。さあらば岡豐

へ通達せよとて、爲松左馬助を使者として、委細に仰遣はさる。岡豊に至りて國親に對面し、事の由を述べにける。國親心得ず思へ共、誠に有難き御志、御請は追つて申上ぐべし。先づ御休息あるべしと酒肴を調へ、様々に饗應し、偸に周孝を呼びて、斯様々々の次第なり、いかゞ計ふべきやと宣へば、備中守、是は天の與ふる所なり。年來の御本望遂げらるべき瑞相なり。我れ思ふ仔細あり、急ぎ御同心の御返答あるべしと申しければ、國親悦び、爲松に近付き、同心の御返事をぞし給ひける。爲松も面目施し、急ぎ幡多へ立歸り、此由申上げければ、大納言殿御悦喜甚しく、卽本山へも仰せ達せられ、茂宗は、信濃守の威勢漸々に募るを聞き、行末いかゞあるべきと、安き心もなき折節なれば、渡りに船と悅び、頓て同意して、婚姻の儀をぞ定めける。爰に尾立の城主中内記は、秦氏にて、長宗我部が氏族なり。初は中島と名乘りしが、何れの頃よりか島を略して、中を氏とす。祖父下野守、本山に屬してより、無二の忠義を盡しけり。内記此度の緣組を聞きて、急ぎ本山へ立越え諫めけるは、斯る事と承候。是禍を招るゝ所とこそ存じ候へ。其故は、御當家は、長宗我部が爲には、怨讐の

張本にて候へば、縦ひ御縁を結ばれ候共、爭か遺恨を忘れ候べき。古より、父子兄弟の合戰珍しからず。況や一族に於てをや。察するに御當家は、國中一の大家と申し、殊更味方の歴々多く候へば、怨を報ぜん事を存ずと雖叶はず。又其身の行末も覺束なく、一條殿へ頼り所緣となり、御當家を見賺さん爲の方便なり。其上國親と內緣を結ばれて候はゞ、味方に狐疑生じ、諸方の合戰破れ候べし。然れば自然の時、援兵の便候はず。彼といひ是といひ、岡豐は腹心の病なり。急ぎ御約諾を變ぜられ、此度緣邊の悅にて、上下油斷すべし。此時急に押寄せ、討取り給ふべしと詞を盡し諫めけれども、一度約をなしたる上は、再び變改するは本意にあらずと、茂宗許容し給はざりければ、內記深く歎き、病と稱し、出仕を止めて居たりけるが、後に思合はする事にぞなりにける。其頃又香宗我部出羽守秀義といふ人あり。香美郡香宗の城主なり。備中守、本山に約諾しける國親の娘を、出羽守に嫁せしめんとぞ言送りける。秀義悅び許諾して、婚禮の用意をなし、吉日良辰を選び、既に日數を算ふる所に、又引替へて本山へぞ嫁せしめける。秀義此由を聞き大きに怒りて、我れ國親に欺か

長宗我部國親の威振ふ

るゝ事こそ無念なれ。所詮國親を打果し、此欝憤を晴らさんと、馬物具と犇きける。此由岡豊へ聞えければ、備中守急ぎ剃髪染衣の姿となり、香宗へ立越え、是れ全く國親が所爲にあらず、周孝が荒卒の致す所なり。罪を謝せん爲に男を止め、法體黒衣になり、首を延べ推參致候と、人を以て申入れければ、秀義此方へ呼び、對面せんと吉田を請じ入れて、饗應禮謝してぞ返しける。是より吉田は、實名を法名とし、備中入道周孝とぞ申しける。出羽守、此上は國親に恨なし。本山は年來親しき中なれども、我面目を失ふ上は、音信通路は是迄なりと大きに怒り、遂に香宗我部・本山合體の好を變じ、いつしか胡越の隔をぞなしにける。夫より雜説區々にて、吉良・太平・山田・本山、無二の同心皆破れ、己れ〳〵が城を守りて、互に威をぞ爭ひける。周孝是を聞きて、年來待つ所の時節到來なり。今は諸方援兵の恐れなし。急ぎ御旗を立て給ふべしと勇めければ、國親悅び思立ち給ふ。其後程なく、國中の諸士を隨へ給ひにけり。其功偏に、此の謀より出でければ、誠に秦家の良雄なりと、國親重く饗應し給ひければ、家中の尊崇斜ならず、次第に一族繁昌し、嫡子次郎左衞門尉重貞・二男孫

次郎周重・周孝が舍弟備後守重俊、大備後と稱す。其子伊賀介重康・其弟江村備後守親家、是を小備後と號す。父子兄弟其外一族、皆庄園數ヶ所給はりけり。彼吉田・江村を、大備後・小備後と申すは、其頃江村備後守親政とて、長岡郡江村の領主あり。彼は長宗我部の元祖、秦の能俊が三男宗貞、江村の庄司に養はれ、子孫連續して、今親政迄は、十八代とぞ聞えし。親政女子有㆑之男子なし。吉田備後守が二男を養ひ、娘を妻せ家を繼がしめ、己は薙髮隱居して名をも讓り、江村備後守親家とぞ名乘りける。父子同名なればとて、吉田をば大備後、江村をば小備後とぞ申しける。

土佐物語卷第一終

土佐物語卷第二

山田治部少輔放肆の事

山田元義放恣

爰に山田治部少輔大中臣元義といふ人あり。香美郡山田郷二千貫の領主、楠目に在城す。數十代此所を領しければ、門葉恩顧の者共、領内に充滿す。其家臣には、賀茂の城主西内常陸、元は細川氏なり。談議所の城主山田監物、其外奥宮・傍士・川久保・加藤・北村・江本とて、仁義勇智の輩是を守護す。元義榮耀の餘りに、猿樂を集め能を好む事甚し。凡善となく惡となく、上に倣ふ下なれば、家中の諸士亂舞遊興に長じ、月に醉ひ花に狂し、武の道漸く廢りけり。監物常陸是を歎き、元義を諫めけるは、治世に亂を忘れずと申すは、先哲の戒なり。況亂世をや。近年互に隙を窺ふ折とい ひ、長宗我部國親の父兼序は、本山殿の爲に亡されて候。其時御當家も、吉良殿・太

平殿と同意にて、御加勢の事に候へば、國親、怨敵と思はれぬ事は候べからず。然れ共彼三家幷香宗我部殿・津野殿等と、玉を貫きたる如く、隔なき御親みに候へば、援兵の便候故に、國親手指す事なく打過ぎられ候ひぬ。然るに不慮の事にて、諸方の合體破れ候へば、國親いかなる所存も測り難し、御油斷あるべきに候はず。猿樂を召放され、武義の御勤候へかしと、時々諫言をなしけれども、良藥口に苦く、金言耳に逆ふ習、元義曾て聞きも入れず。今何事か眼に見えて、斯る事をいふらん。國親が、讐敵の張本本山とさへ和順して、父子の親みをなす。何に依つて其事を捨て丶、枝葉に懸り、近きを除きて遠きに寄らんや。用もなき賢人顏はむづかしとて、兩人出仕の時は、元義虛病を構へて對面なし。驕侈日に長じ、遊興止む時なかりしは、偏に家運の末とはいひながら、うたてかりし事共なり。されば同氣相求め、同聲相應ずる習、讒諂面諛の佞人傍に徘徊し、都て常陸・監物を、惡樣に讒言しける程に、兩人此體を見て大きに歎き、此上は力なし。當家滅亡遠きにあらずと、世を味氣なく思ひ取り、出仕を止めて、蟄居してぞ居たりけり。長宗我部信濃守此由を聞き、家臣を集

めて宣ひけるは、父の讐と倶に、日月の光りを戴く事、武士の本意にあらずといへども、第一には、一條殿の媒介なり。第二には、彼等は多勢の上に味方多し。我は小身にして、而も猛夫なれば、時節を待つて暮らす所に、周孝の謀にて、諸方の合體破れぬれば、今は援兵の恐なし。されば山田治部少輔は、寇讎の張本ならずといへども、本山・吉良・太平と、一味同心の人なれば、先づ山田を討つべしと思ふなり。幸彼は近里にありて、逸遊を事とし、武備怠なり。先づ是を討つて其勢に乘つて、近郷に勢を出すべしと宣ひければ、吉田大備後進み出で、仰の趣、御理に候。去ながら山田の家臣西内常陸と申す者、勇氣ありて智慧深く、禮譲厚くして人を懐け、軍士を使ふ事手足の如し。彼が候はん程は、山田を亡さん事難かるべう候。先づ謀りて常陸を討取り、其後山田に御馬を向けらるべし。但常陸を討つ方便は、重俊謀り候べしと申しければ、國親信服し給ひ、宜しく計らへとぞ許されける。

山田合戰の事

山田の士に、加藤飛驒といふ者あり。元義の近習に仕へて、身を委ねければ、主君の覺も厚かりしに、不慮の失ありて勘當を得、西内常陸に預けられて、賀茂の城にぞ居たりける。飛驒が家僕寄る方なく、野田の片邊に忍び居たるを、吉田大備後尋出し、不便を加へ、衣食を與へて扶助しけり。大備後彼者を呼出し、飛驒は近日誅せらるべき由其聞えあり。我常に飛驒に親しければ、知らするなり。汝賀茂へ行き、飛驒に告知らせて、何とぞ常陸を討つて此方へ來られよ。本領はいふに及ばず、加恩を申與ふべし。此旨偸に言聞かせよと申しければ、彼者涙を流し、手を合せ悦び、頓て賀茂へ立越え、加藤に斯くと告げければ、飛驒打うなづき、さらぬ體にて居たりけり。其夜しも雨降りければ、常陸若士を呼集め、碁を打つて居ける所を、飛驒給仕に事寄せ立寄り、一太刀に討つて燈を消しければ、士共大きに驚き、遁すまじとはいひながら、暗さは暗し、互に飛驒よと心得、打合ひ切合はするもあり。彼方此方へ逃ぐるもあり。上を下へと返しつゝ、前後不覺に騷ぎける。其隙に飛驒は難なく立退き、佐古村を經て、野田の城に立越えければ、岡豊に參じ、爾々の由を告げたりける。國親

長宗我部國親山田元義を攻む

大きに悦びて、時既に至りぬと、五百餘騎を引率して、天文十二年の秋、山田へぞ押寄せける。一手は吉田大備後・同次郎左衛門・江村小備後・幸名丹後・中島大和を先として二百餘騎、坂折山の北の方に打向ひ、國親は三百餘騎を隨へ、國分寺の前を、東へぞ向はれける。山田には思ひも寄らず、例の猿樂を召し、能を催しければ、見物の男女、擧る事斜ならず。元義自ら江口の役にて、曲舞も既に半に及びけるに、元來名を得し堪能なれば、見物の上下、耳を澄し目を驚かし、感に堪へ餘念なき所に、百姓遽しく進み走り來りて、岡豐より、軍勢押寄せ候ぞ。急ぎ出合ひ給へと、聲々に呼ばはれば、樂屋芝居に充滿したる者共肝を消し、是はと一度に立騷ぎ、我先に逃出でんと爭ひて、押しつ押されつ犇く程に、老人女童、押倒されたる者に轉び懸り、彌が上に重なり、足腰を踏折られ、或は己が拔きたる太刀刀に、突貫きて喚き叫ぶ。元義は、女面に鬘かけながら走り廻り、前後不覺に見えしかば、家中の上下、周章騷ぐ事限りなし。流石武士の印にて、鎧は着ても甲を着ず、弓は持てども箭を知らず、鎗よ太刀よと犇けども、軍しつべきとは見えざりけり。治部少輔は漸々に甲冑を帶し、馬に助

け乘せられ、門外に出でられけれども、軍の下知もなく、只呆れたる風情なり。斯る所に向より、百騎計左右に備へ、旗一流押立てさせ、馬を閑に歩ませ來る武者あり。見れば山田監物なり。本陣近く馭寄せ、大音にて、抑是は當今に仕へ奉る臣下なりと、押返し三返謳ひ、馬より飛下り長刀杖に突き、四方をきつと見渡し、大腰拔の猿樂士は何所にあるぞ。今の用に立つべからず。敵より先に踏殺せ。日頃某申せしは是なり。思ひ知り給ふかと、大の眼を瞋し、治部少輔を睨みければ、元義兎角の詞なく、俯目になりておはしける。監物駈廻りて、軍の手分をしたりけり。元義は、奥宮傍士を先手として、國親に馳向ふ。治部少輔の伯父山田丹波守幷加藤・北村・江本は、吉田・江村・中島に向ひ、互に鬨の聲を上げ、足輕の鐵炮軍を始むる程こそあれ、兩方互に入亂れ、鎬を削り鍔を割り、切先より火を出し、千日一時と戰ひける。元義は鬨の聲に驚き色を變へ、先手の軍には目もかけず、はや落支度のみして、旗打絞り、遙に遠見してぞ居たりける。國親此旗色を見て、先手の軍を餘所になし、元義の旗本へ、眞一文字に打つて懸る。大將臆したる事なれば、士卒いかに進むべき。戰は

んともせず、十方に散亂す。山田の先手是に氣を失ひ、しどろになりて見えければ、爰を揉めや者共と、吉田・江村・中島、駈出で〳〵下知すれば、なじかは少も猶豫すべき。一度に咄と突懸る。山田勢遂に打負けて、上村の前山を經て、楠目を指して引退く。此時より此所を陣山と申すなり。戰死の者を、其所に葬りける。今四塚といふは是なり。其日は暮れて翌日、山田監物、今日を最後とや思ひけん、黑糸縅の鎧を着、三枚甲の緒を𩑛頭に結び、其端を切つて捨て、手勢百五十騎を隨へ、大手より五六町南、西伏原の大塚に屯す。寄手には江村小備後先陣として駈向ひ、一矢射違ふ程こそあれ。曳々聲を上げ、攻太鼓を打ち、黑煙を立てゝ相戰ふ。終に兩將端なく渡合ふ。監物是を見て、それなるは小備後か、問ふは監物かといふより早く下立ち、監物、長刀打振りて切つて懸れば、小備後は太刀を以て、人交もせず切合ひけり。暫く勝負見えざれば、いざ組まん、心得たりと、太刀長刀をからりと捨て、押雙べて組む。互に聞ゆる大力、曳々と踏む力足に、大地も搖ぐ計なり。小備後、終に監物を討取りけり。元義是を見て、駒引返し逃げられければ、諸勢一度に崩れけり。加藤・川

山田元義降伏

元義死去

久保・奥宮・傍士・北村・江本等、いつの爲に命を惜まん。引くな引かじと詞を交し、勝誇りたる勢に割りて入り、西東北南捲り立て、切つて落し突落し、八方亂して戰ひけるが、大將の行方覺束なしとて、城中へ引いてぞ入りにける。寄手透間なく攻入りしかば、大手をも打破られ、三の丸の坂下に、暫し支へて戰ひしかども、其所をも固め得ず、北の出丸に引籠りけるが、搦手より廻る勢に破られ、元義僅の勢にて、山傳ひに韮生を指して落ちられける。韮生四十餘村の者共、數代の領主なりければ、厚恩忘れ難く、深く隱して勞りけれ共、國親の威風に恐れ、後難をも憚る者もありと聞えしかば、元義、南岡左衞門太夫に所緣の由緒ありければ、南岡に便り降を乞はる。治部少輔は惰弱にして、恐るゝに足らぬ人なればとて命を扶け、韮生の窪にぞ置き給ふ。後に亂心狂氣して、程なく死去せられけり。山田に萬松山豫言寺にいふ寺あり。元義先祖の菩提寺なりければ、此寺にぞ葬りける。此時大谷左馬介が大谷の城も殁落す。此大谷と申すは、山田同氏の親族なり。父は神谷出雲守大中臣道直とて、吾川郡神谷に居住せしが、大永の頃、香美郡佐古の鄕六ヶ村を領し、大谷に移住して、

大谷を姓とす。左馬介、山田の餘黨なりしかば、遁るべきやうなく、固く守りて防ぎしかども、多勢に無勢叶はず。終に攻落され、其子隼人諸共に、彼方此方漂泊して、當國安藝の領主安藝備後守、又は幡多一條家を憑みけるに、彼兩家も程なく亡びて、立寄る陰なく、伊豫・播磨・紀の國を經廻り、又土佐へ立歸り、安藝・奈半利の片邊に住みけるとぞ聞えし。

常通寺造立の事

信濃守國親は、山田治部少輔を打亡し、年來の宿望を遂げ、降人を扶け、寺領社領先規の如く宛行ひ、鄕人共本の如く還住せしかば、諸士招かざるに隨ひ、攻めざるに靡きて、威勢日を逐うて盛なり。國親宣ひけるは、父兼序、本山が爲に討たれ給ひし時、我れ僅六歲なりしを、近藤が忠節にて、萬死を出で一生に會ひ、一條殿の恩惠を得、本領に歸り、再び家を興すといへども、父の讐と、親友の如くにして年月を送る事、先祖の名を穢し、我が生前の面を汚し、人口防ぐに所なし。然りといへ共、無力なれ

常通寺建立

ば心に任せず。短慮は却て不覺なりと悟り、張公藝が、百餘書きたる忍の字を、晝夜胸臆に積み重ね、今年天運循環して、怨敵の張本ならずといへども、治部少輔を退治して、亡魂の欝憤を少し晴させ候事、生前の大慶、何事か是に如かん。然れば尊靈菩提の爲、一字の伽藍を建立して、追善をなさばやと思ふなり。幸賢法山悉地院安祥寺は、御菩提所なれば、此寺を再興すべし。是は昔聖武天皇の御願行基の開基なり。其後代々、帝王の勅願所たり。延喜式主税式に、安祥寺寶塔料五千束と云々。然りといへ共、澆季濁世に及んで、勅願の沙汰もなければ、私の造替も憚りなしとて、天文十三年の春より、遠近の大工小工を集め、斧鉞を廻し繩墨を正し、佛殿・法堂・庫裏・僧堂・山門・惣門・鐘樓・浴室・輪藏・數多の寮舍・廻廊迄、不日の經營事成りて、金銀を鏤め、善盡し美盡しければ、七寶の淨土、眼の前に移り、覺譽常通の菩提寺なれば、安祥寺を改めて常通寺と號す。院號山號は本の如し。同十五年の夏、成風の功終りて、眘惠法印を住持とす。是常通寺の元祖なり。斯くて數多の僧侶、日夜の讀經怠慢なければ、常通尊靈、九品上乘の臺に至り給ふらんと、有難くぞ覺えける。さるに依つて

此所を、常通寺島と名付けたり。其後子息宮内少輔元親、居城を土佐郡大高坂に移され給ひたる時、常通寺をも、同郡石立村岩戸に移して、造立ありしが、其後浦戶へ城を移されたる時、又此寺をも引取らるべきに極りける所に、其頃より太閤秀吉公、朝鮮御征伐に極りて、國々も鬧しく、御平均の後は、程なく元親卒去ありて、上下歎きけるに、又子息盛親、不慮の逆徒に組し、領國を召放されければ、其沙汰もなくなりし所に、山内對馬守一豐、當國を給はりて、大高坂山を居城に定め給ひ、彼寺を、小高坂村へ移されて、國土安穩、米穀豐饒、萬民快樂の祈願所に定めらる。夫れよりして岩戶をば、常通寺と申すなり。

岡豐城中楠折る附八幡御詫宣の事

天文十三年二月五日の夜子の刻計に、不思議の事こそ候ひけれ。岡豐の城中に大きなる楠あり。周一丈餘にして、長十餘丈に及べり。綠の梢四方に蔓り、幾春秋をか歷たりけん、類もなき大木なり。風も吹かぬに、中より折れて倒れける。其音天地

に響き、太山も崩れ、坤軸も摧けぬるかと、上下男女肝魂を消す。國親人をして見せしめ給へば、爾々とぞ申しける。是直事にあらず。天いかなる凶瑞をか示すらんとて、其頃天文卜筮に名を得たる池澤某を召して、考へさせらるゝに、池澤謹んで申上げけるは、蓍策を取るに及び候はず。是れ御當家興隆の奇瑞なり。其故は、今文字に就きて判斷するに、楠は、木に南と書き候。木は東なり。然れば東南の方亡ぶべき瑞相にて候。時今春の半にして、最東南强盛の折なるに、兩方倒るゝ事、天の與へ給ふ時至れり。秋節來り、殺伐の氣を得て、西北より是を討ち給はゞ、敵は木の葉の如く散り失せ候べしと申しければ、國親大に御感ありて、當座に恩賞を給はる。其後國親宣ひけるは、池澤が占を考ふるに、全く私意憶見の及ぶ所にあらず。偏に八幡大菩薩の當家興復を示し給ふ御告と覺ゆるなり。吉日良辰を選び、八幡宮にて臨時の祭禮をなし、神慮をすゞしめ奉るべし。其用意すべしとありければ、家臣承りて、社司神主に申付、其支度をぞなしにける。斯くて其日になりければ、國親社參し給ひ、岡豐の貴賤老若男女、社頭庭上に群集せり。八人の八乙女、五人の神樂男、袖を

返し幣を捧げ、神樂を奏し、神慮をすゞしめ奉る。斯る所に庭上に、年十二三計なる童ありしが、飛ぶともなく走るともなく、社壇の階に駈上り、我は是れ正八幡大菩薩なり。我を此地に勸請して、上下渇仰の運をなす事、悦びに堪へたり。我れ亦守らずんばあるべからず。就中國親、父祖の敵を討ちて、彼欝憤を散ぜん事を思ひ、日夜己を忘れて、寢食を安くせぬ志、誠に不便の至りなり。然れども前生の果を放れず、時至らずして年月を過しぬ。今既に家を興すべき時節到來なり。されば此度楠の奇瑞を顯し、池澤をしていはしむる所に、國親早く其理を察し、臨時の祭をなして、我を勇むる事、尤神慮に叶へり。急ぎ南方より初めて、四方へ馬を出すべし。我れ前後に附添へて、力を加ふべし。見よ〳〵信濃守が向ふ所、隨はずといふ所なく、攻むる所、傾けずといふ事あるべからず。行末猶守るべし。憑もしく思ふべしと、四方を見廻し、神は上らせ給ふと覺えて、彼童子も庭上に飛下り、倒れて寢入りたるが如くして、暫くありて起上り、何心なくぞ見えたりける。諸人大きに驚き、皆々頭を傾け、禮拜をぞなしにける。國親餘りの有難さに、感涙を止め兼ね、又悅の神樂を奏し

奉り、田畠數個所寄進し給ひけり。岡豐の上下、勇み悦ぶ事限りなし。此事隱れあらざれば、四方の諸士百姓に至る迄、大きに恐れ戰くとぞ聞えし。

大津城落去の事

長岡郡大津の城主天竺孫十郞は、其先祖知れず。一說に天竺は城地の名なり。元松族なりといへども、其身は無位無官にて、一生終りけるといふ。又一說には、大津天竺の城主細川肥前守、其男幼名は孫十郞、後には左衞門太夫と號すといへども、國俗は、只後迄も、孫十郞といひしとかや。又或說に、細川天竺禪門、暫く此所に在城ありければ、時の人天竺殿と申しき。それより國俗誤つて、此城主を、代々天竺殿と唱へ來るともいふ。其是非を知らず。此禪門は、細川氏の嫡家なり。貞治三年正月廿七日、豫州湯月山にて、河野六郞通堯が爲に、討たれ給ひし人なり。今孫十郞迄は、七代といひ傳ふ。大津と岡豐は、僅に一里に足らぬ程なれ共、兩方常に不和にして、絕えて音問をなさず。若事もあらば、彼を亡し我有にせんと、互に虎狼の心を狹み、

時節を待つてぞ居たりける。凡そ上に從ふ下なれば、大津岡豐の士はいふに及ばず、鄕民百姓に至る迄、互に婚姻を結ばず、音信を通ぜず。若し道にて行逢ふ時は、目を怒らかし口を歪め、臂を張り睨み合ひてぞ過行きける。斯る所に岡豐八幡の御神宣、上下男女語り傳ふる程に、遍く隱れなかりければ、國中の諸士緣を求め便に附きて、詞を卑くし禮を厚くして、岡豐へ近寄り親まん事を望みける。中にも大津は隣里といひ、而も岡豐の南方なれば、鄕民共は大に恐れ、住家を捨てゝ立去る者もありしとかや。國親此由聞き給ひ、さらば神詫に任せ、先づ南方大津を討たるべきにぞ定まりける。此大津の城と申すは、二十町計東に、的り池とて、五十間四方の泉あり。涌出づる事、沸湯の如し。其流れ滔々として、城の東北の麓を、東より西に流れ、深き事計りなし。切岸高く、屛風を立てたるが如し。西は岩崎とて、前は漫々たる入海なり。鹽屋崎・津の崎・岩崎とて、三の崎の其一なり。湖の滿干、風の順逆に依つて、入海ながら、船の往來自由ならず。漁獵を業とする船人も、胸を冷し肝を消す事多し。昔日紀の貫之、當國の任果てゝ歸京の時、國人追來りて、「をしと思ふ人や止るとあ

長宗我部國親大津城を攻む

しかものうち群れてこそ我は來にけれ」と詠みし、鹿兒の崎まで十七八町、西南山傳ひに續きたれども、前も後も海なれば、西北の里よりは、船ならでは行交ふ道なし。扨また城の東南は、山重りて道細く、人馬の駈引自由ならず、東北のみ平地にて、吉原・篠原・鑑の野迄續きたり。追手には、おめての橋とて、北南大橋を架けたり。此橋を引く時は、船なくては越ゆべからず。誠に堅固の城地なり。曾我・井上・横山・依光・宮地・坂本などいふ究竟の士、常に武藝を好み、軍法に調練したる者共、敵寄すると聞きて少しも騷がず、人數を賦り手分をして待懸けたり。孫十郎は、宮地・依光を隨へ、百五十騎、東の山に陣取りたり。曾我・井上・坂本は、北の廣地に打出で、三百五十騎、段々に備へたり。さる程に國親は、久武肥後・吉田大備後・中島大和を先として、八百餘騎にて押寄せ、互に旗を進め、攻鼓を打つて、鬨の聲三度上げ、鐵炮を打ち、弓を射違ふ程こそあれ、扷連れて入亂れ、追つ捲つ戰ひけるが、多勢に無勢叶はず、天笠が憑み切つたる長崎・井上を始として、究竟の兵、或は討たれ深手負ひ、殘り少なになりて、城の内へぞ引取りける。城兵共橋を引かんと、川端に出でて舁く所を、大

勢攻寄せ、鐵炮を打懸くれば、皆城中へ逃入りけり。寄手續いて橋を越え、大手の門を破らんと、喚き叫んで攻めたりける。孫十郎、今は偏に討死と思ひ定め、一子兵部少輔に向つて、汝は曾我伊豆を召連れ、急ぎ落行き、京都に上り、一族親友を賴み、大軍を催すべし。我は讃岐へ立越え、親族を語らひ、會稽の恥を雪ぐべし。早疾く急げとありければ、辭する所なくして、兵部少輔は鎧を脱捨て、微服して主從一人、南の山傳ひ、片山指してぞ落ちられける。是を限りの憂き別れ、思ひやられて哀なり。夜須浦にて、商人船に便船乞ひて、海路恙もなかりければ、程なく京着ありしとかや。斯くて寄手は、追手の門を打破り、大勢亂れ入りければ、何を期すべき命ぞと、主從一所になりて、四方八面に切つて廻れば、寄手怺へず、門より外へさつと引く。城兵僅三十五騎にぞなりにける。孫十郎申されけるは、旁日來の好を忘れず、此際まで附纏ひ、死を共にせんとの志、中々いふに詞なし。我一所に討死して、旁の志を死後に報ずべし。構へて自害する事なかれ。多年の本望今日にあり。一騎にても敵を討つを以て、勇士の本意とす。我れ信濃守と組みて、勝負を決せばやと宣へば、何れも、

長宗我部國親大津城を陷る

こは有難き御諚に候。此年月御恩澤を蒙り、妻子を扶持し、身の安樂を極め候事、今生一世の内には、爭でか報じ奉るべき。冥途黄泉迄も御供仕り、二世の忠勤候てこそ、少しは報謝致候べけれ。天晴國親を射て、閻魔の廳の土產に仕るべしと、聞くも潔く、其形粧見るも涼しくぞ覺えける。斯る所に、寄手四方より亂れ入りて、城中に充滿(みちく)けれ共、元來命を塵芥に比し、名を金玉に傚はんと、思ひ設けし事なれば、中々騷ぐ氣色なく、鳴を閑めて息繼ぎ居たり。寄手是を見て、押取り卷きて討取らんと、一度に咄と駈寄するを、卅五人の兵、會釋もなく眞中に駈入りて、切れども突けども事ともせず、手負死人を乘越えて、面も振らず戰ひけり。寄手大勢討取りて、引退けば、又入替りて攻懸る。城兵、今は只七騎にぞなりにける。それも皆、疵を蒙らぬはなかりけり。孫十郎は、いかにもして國親に近付かんと、駈廻らるゝ所を、寄手大將と見澄しければ、爰に遮り彼所に横切り、我討取らんと進み懸るを、駈破つては打通り、打通りては駈入り、千變萬化して、主從一所にて、枕を雙べ討死して、骸を山溪の叢にぞ殘しける。天竺の城主七代にして、亡びぬるこそうたてけれ。國親宣ひけるは、

敵ながら潔き擧動かな。流石名ある武士の死骸、捨置くべきにあらずとて、城の東に小山のありけるに、彼遺骸を葬り、岩崎の寺にて、大將を始め戰死の輩を、弔ひ給ひけるこそ有難けれ。

坂折山合戰附工文遲參の事

長岡郡介良の庄の地頭をば、横山九郎兵衛とぞ申しける。もと平氏にして、武藏の北黨横山の氏族なりしが、故ありて出家して、當國最御崎寺の住侶なるが、剃髮以前に一子あり。其子孫、遂に介良の庄の城主となると言傳ふ。介良と大津は相並びて、其間僅に五十町に過ぎざれば、國親大津發向、曇りなく聞えける。家臣、横山を諫めけるは、國親山田を退治有之、勢漸く盛なる所に、八幡の御神詫あらたなれば、益機を得て、南方大津へ出勢と承り候。當城も岡豐の南方なれば、大津落着候はゞ、當地へ發向あるは必定なり。彼方は多勢、此方は少勢、殊に神力擁護し鋒先に、爭でか當り給ふべき。所詮此方より降を乞はせ給ひて、然るべしとぞ申しける。横山聞きて

打笑ひ、岡豊の神詫の事、女童を誑す方便なり。取上げて評するに足らず。又軍は、將の謀と、時の運に寄る事なれば、勢の多少によらず、國親武勇なりといへども、何程の事のあるべき。又多勢といふとも、我工文將監と由緒ありて、親しく豫て申合せし仔細あり。下田は近邊にありて親しければ、彼是勢を合せば、岡豊の人數に、さのみ甲乙あるべからず。汝等がいふ如く、大津若し落去せば、介良・下田へ出勢あるは必定なり。下田・工文を語らひ、大津に加勢して、國親が後卷して、引包み討取るべし。油斷すべきにあらずとて、書簡を書きて、工文が方へぞ遣しける。斯くて其身は、取る物も取敢へず、下田へ立越え、所存の通りを談じければ、下田打うなづき、元來望む所なり。先んずる時は人を制す。片時も早く急ぐべしと、兩勢合せて三百五十騎、片山の東へ打出づる所に、大津は早や落去しぬと聞えければ、後卷の手立も相違したり。此勢計にては、あの大軍に向はん事いかゞあらんと、軍兵共固唾を呑みて、勇む氣色はなかりければ、横山申しけるは、凡戰場に臨む者、出づるを最後と思ひ定むる事勿論なり。敵大勢なればとて、是程首途したる軍に、敵の旗をも見ずして、

引返さんも無念なり。岡豐勢勝軍して、歸る所へ行向ひ、たばかり寄せて討取るべし。其方便といへば、旗を卷きて擔がせ、急ぎ行くならば、加勢か降參かと油斷すべし。近付き信濃守と見ば、一文字に駈入り、組んで勝負を決すべしとて、旗を卷きて擔がせ、揃みに揉みてぞ急ぎける。案の如く岡豐勢、大津の軍に打勝ちて、勢ひ懸つて歸りしが、此有様を見て、是は下田・片山・池・十市の者共、降參の爲め來ると見えたり。いさかひ果てゝの捧ちぎり木、何の用に立つべきぞと、一度に咄と大笑ひし、篠原にて、其間三十間計になりて、旗をさつと差上げ、横山九郎兵衞・下田駿河守と名乘りて、驀眞に打つて懸る。岡豐勢、こはたばかられぬと騷ぐ所を、縱樣横樣十文字に破りければ、岡豐勢若干討たれて、蜘の子を散らすが如く、東西へ分れ、南北へ亂れて逃げにける。下田・横山は、暫時の軍に打勝ちて、坂折山に打上り、勝鬨をぞ上げにける。されども國親は、未だ大津に居給ひければ、下田、いざ此勢に大津へ押寄せ、國親を討取るべしといひければ、横山申しけるは、工文も追付け來るべし。一所に馳向ふべし。周章て急ぐべからずと、大樣に控へて居たりける。斯くて打洩らされ

たる岡豐勢、追々大津へ逃歸り、此由を申しければ、國親大きに驚き給ひ、それ餘すなと、久武・中內・桑名等を先として、坂折山に押寄せたり。勝誇りたる下田・横山、なじかは少も擬議すべき。一度に咄と突懸る。岡豐勢立足もなく、四方へさつとぞ散りにける。下田・横山、透さず國親の旗本へ、眞一文字に駈込み、火花を散らして戰うたり。幸名・久武返し來り、中に包みて攻めければ、下田・横山、心は猛く勇めども、前後の敵に揉立てられ、殘り少なに討なされ、南を指して引退くを、岡豐勢遁すまじと追懸くる。國親下知して、長追なせそと、直に岡豐へ歸陣あり。爰に工文將監は、約議の如く、德善を立ちて急ぐ所に、物部川の水深く、諸軍渡り兼ねて、彼方此方とする程に、相圖の時刻押移り、坂折山に來てみれ共、敵一人もなし。唯今軍ありと見えて、手負死人は數を知らず、算を亂して、血は涿漉の川をなせり。工文、扨は遲なはりぬ。横山が心底の恥かしさよ。一軍してこそ申披かめ。但敵は大勢、此方は無勢、殊に敵地の事なれば、只潔く討死せんと、馬より下りて、軍配團を腰にさし、大長刀を取つて眞先に進み、坂折山の西の方に、旗押立てさせ、鬨の聲三度上げ、敵遲しと待懸

けたり。岡豊へは廿町計隔てたれば、城兵是を見て、扨も〳〵、世には命知らずのあるものかな。愚人、夏の虫、飛んで火に入るとは是なるべし。此大勢の中へ、あの僅なる勢にて、來る事の不敵さよ。我討取らんと爭ひける。信濃守聞き給ひ、いや〳〵輙く討取らるべき敵にあらず。彼樣子を考ふるに、下田・横山と、一味同心の人と見えたり。障る事ありて遲參して、先度の戰に合はぬ事を恥ぢて、一軍と望むものなり。あの小勢にて、敵城近く來りて、戰を好む程のものなれば、十死一生と思ひ定めたるなり。小勢なればとて侮り惡し。殊に此人は、隱れなき勇者なり。たとひ大勢を以て打勝つとも、味方に手負死人多かるべし。所詮一人も出合ふべからず。日の暮るゝを待つべし。然らば彼、いかなる方便にやと不審すべし。日の暮るゝに及びて、扨は夜討の支度なり。敵は多勢にて、所案內者なり。味方は小勢にして、不知案內なり。夜討に逢ひては、以の外の不覺を取るべし。敵城近く日を暮らしたるを譽にして、引返さん事疑なし。戰はずして勝つを、良將とするぞと宣ひける。案の如く將監は、敵城近く來りて、待てども敵一人も出合はず。扨は我れ小勢なれば、何程

の事のあるべきと思ひ侮りて、捨置くが無念なりとはいひながら、流石城へ寄する事も叶はず。兎角する程に、日既に夕陽に及びければ、扨は夜討の爲に、日を暮らすと覺えたり。案內知らぬ敵地にて、大軍を引請けては、却て不覺を取るべし。敵城近く入りて日を暮らしたれば、一面目なきにあらず。さらば引取るべしとて、閑々と德善を指して引返しける。將監が勇氣、信濃守が思慮、智あるも智なきも諸共に、感ぜぬはなかりけり。

下田城落去附一宮神職降參の事

斯くて岡豐には、近日介良を攻めらるべきと聞えければ、横山が家臣共、兎角國親に敵對は叶ひ候べからず。只此方より降を乞はせ給ひ然るべしと、理を盡し諫めければ、横山實にもと思ひ、人質を出し降參して、幕下にぞ屬しける。下田聞きて大きに怒り、彼程の不覺人と知らずして、年來親みけるこそ悔しけれ。某に於ては、城を枕にして討死すべし。皮籠童が下手には、得附くまじとぞ申しける。是は其先永正の

頃、岡豐の城歿落の時、國親未だ千翁丸といひて六歳なりしを、近藤某、皮籠に入れ、幡多中村に落行きし故、斯くいひけるとぞ聞えし。國親此由聞き給ひ、憎い下田が雜言かな。さらば攻めよとて、久武肥後・福留隼人を大將として、其勢八百餘騎、旣に岡豐を打立つ所に、老尼一人、隼人の前に來りて、畏つて申しけるは、是は下田の百姓の妻にて候。夫は死して、常陸と申す一子を持ちて、杖柱とも憑み候所に、去年の秋、年貢所納遲滯したる科に、是非なく殺されて候。明日をも知らぬ老の身の、寄る方なき儘に、所緣の者に扶けられ、今日迄存命候。此度下田へ御旗向けられ候はゞ、自ら城中へ手引致し、御手をも碎かれず、城を燒崩させ、下田殿に思ひ知らせ、一子が供養に備へ、老尼が恨を晴し度候と申しも敢ず、聲をあげてぞ泣きにける。隼人も涙を流し、卽國親へ、此の由申しければ、信濃守大きに悅び給ひ、究竟の若者三人、老尼に添へてぞ遣しける。城中に火の手上らば、攻入れとて、軍兵二百五十騎、福留隼人を大將にて、片山・衣笠の山陰に、十人廿人五人七人忍ばせ、相圖の煙を待ちにける。斯くて老尼は、三人の男を下人に仕立て、一人には、袋に衣裳を入れて持たせ、

二人には、雜掌と思しき物を擔がせたり。是れ火打附竹其外兵具を入れたりけり。下女一人召連れ、下田の城蛸魚の森へ參りける。番の者に近付き、衣笠の何がしが母にて候が、御臺所へ御目見の爲に、參り候といひければ、仔細あらじとて、慇懃にして通しける。元來案内は知つたり。直に木陰に立寄り支度して、其儘火をぞかけにける。折節西風烈しくて、塀門矢倉に燃付きて、黑煙天を燒きて上る。城中には、敵の所爲とは思ひも寄らず、手過と心得て、火を防げ、財寶を出せと、上を下へと返しける。三人の男、彼處爰に走り、鬨の聲を揚げしかば、隱れ居たる軍兵共、火の手を見て、貝を吹き太鼓を打ち、鬨を作つて押寄せたり。城兵是に驚きて、敵を防がんとすれば、猛火盛に覆ひ來る。すべき方便もなければ、我先にとぞ落行きける。大將駿河守は、數度の高名隱れなき、勇猛の士なれば、煙の中を遁れ出で、大勢群りたる寄手の中へ、少しも猶豫する氣色なく、一文字に打つて入り、七八騎切つて落し、十四五人に手を負はせ、殘る奴原追散らし、岩に腰かけ、息繼ぎ居たる所に、誰とは知らず大の男、大太刀を差翳し、走り懸つて打つを、駿河守飛違ひ、右の脇に挾みし

長宗我部國親下田城を陷る

め、殺さんとする所に、流矢來つて胸板に立つ。口惜き事かな。今は是迄なり。最後の供せよとて、火の中へ飛入り、倶に燒けてぞ死したりける。駿河が弟七郎右衛門は、寄手の大勢を追靡け、兄の行方を知らざれば、一先づ落ちて見ばやと思ひ、山傳に西の方へ落行く所に、寄手の勢是を見て、遁すまじと追懸けたり。城より廿町計西の方、おき岩とて大岩あり。七郎右衛門其蔭に隱れて、追手の勢を待懸けたり。寄手是を見て、あの岩の陰へ隱れたるぞ。餘すなとて、岩の廻を十重廿重に取卷きたり。七郎右衛門、岩の上に駈上り、是迄來つるを、逃げたると思ふかや。兄の生死知れざれば、行方を尋ね來りたり。手並の程を見すべしと、尋常の人の二三十人しても動かし難き大石を、輕々と提げ、眞先に進んだる男を、開いて打ちければ、落花の如く打散らす。引懸け〳〵二三十、續打ちにぞ打つたりける。寄手の勢、楯の板を微塵に打碎るゝのみならず、少しも石に當る者、尻居に打居ゑられければ、軍兵共肝を消し、一度に崩れて逃げにけり。石や木の根にけし飛んで倒れければ、人馬彌が上に落重り、或は己が鑓長刀に貫かれ、死するもの其數を知らず。是より後は、近付

きて討留めんといふ者一人もなし。只遠攻にせよやとて、弓鐵炮を放し懸くれば、七郎右衛門に當る事、雨よりも猶繁かりければ、七郎右衛門、今は是迄なりと突立ちて、腰の刀を抜き、自ら首を掻落し、立竦んでぞ亡せにける。其頃何者かしたりけん、

いでもせで燒崩したる蛸魚の森いかなべの〔字句足ラズ本ノマヽ〕料理なるらん

爰に石谷民部少輔とて、布師田金山の城主あり。源氏細川の末流なり。一宮高鴨大明神の神職に備はり、三千石をぞ領しける。岡豊と其間、僅に一里計なれば、國親の言行、日々に曇なく聞えけり。其武勇といひ、八幡の御託宣といひ、敵し難く思ふ所に、近日に至りて、大津・下田を攻傾け、諸將靡き随ふと聞えければ、所詮此方より、先達つて降參せんには如かじとて、同宮神主永吉飛驒守を始め、七十五人の神職を進めて、一同に、國親の幕下にぞ屬しける。土佐郡の内、是初めて手に入りければ、高鴨大明神の擁護の驗なりと、悦ぶ事限なし。其後はいかなる故にかありけん、民部少輔所領二千餘石を減らし、千石の地を領して、高鴨の社境内に居宅を移し、入道して執行宗とぞ申しける。惣じて此宮に、執行・神主・社僧・一和尚・國實・社人とて、十

五人ありて、年中に七十五祭を執行ふとかや。民部少輔が弟工文將監は、坂折山の軍場より、德善に引退き、猶も岡豐を窺ふ所に、下田は討たれ横山は降參し、舍弟石谷民部少輔も、國親の幕下に屬すと聞えければ、一身の功立て難くや思ひけん、頓て降を乞ひ、在岡豐して、忠義をぞ顯しける。

十市・池降參の事

長岡郡十市の城主をば、細川備前入道宗桃とぞ申しける。細川武藏守賴之十代の孫なり。息男二人あり。嫡子備前守某・二男池豐前守賴和、是は池を領して、栗山に在城す。「淺茅生の野邊にしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけり」と詠みし、池といふ所是なり。長宗我部信濃守、山田・大津・下田を討取り、勢漸く强大なれば、此人に向つて敵せん事、蟷螂車を遮るに等しからん。只此方より降を乞ひて、彼旗下に屬し給ふべしと、家臣一同に諫めければ、備前入道兎も角も、旁が意見に任すべしと評議極りて、豐前守へも言遣しけり。賴和家臣を呼びて、此事いかゞあるべきと申

されければ、何れも承り、十市殿御降參に於ては、御同意然るべく候。同根一枝の御事に候へば、吉凶榮辱一同の儀、勿論に候とぞ申しける。池の長臣岩松七郎經重は、常に武勇を專にして、假にも懦弱を好まぬ者なり。默然として聞き居たりけるが、進み出でて申しけるは、こは御詮議とも覺えぬものかな。國親武勇なりといひなせども、恐るゝに足らず。其軍功を考ふるに、山田治部少輔は、武道拙なき不覺人なり。大津は又、岡豐の神託に恐れ戰き、家中の上下、攻めざる先に、逃支度したる者共なり。下田は、老女が手引して燒崩したり。國親の武勇智謀は、偶中の幸なり。何ぞ譽とするに足らん。武士たるもの、見逃をさへ恥辱といふに、鬪逃に等しく、敵の旗色をも見ず降參あらん事、此七郎に於ては、ふつと同意せしめず。此上にも御降參あるべきに候はゞ、經重は御暇給はりて、國親に一箭射て、腹切つて死すべしと、傍若無人にぞ申しける。賴和も、不快には思はれけれども、其理なきにあらざれば、重ねて談ずべしとて、其日の評議は止みけるが、兎角岩松が詞にや恥ぢたりけん、十市も池も、降參の沙汰はなかりけり。國親宣ひけるは、十市が一族、間近く下田が滅亡

を見ながら、降を乞はぬは痴者なり。近日踏潰すべしとありければ、中島大和申しけるは、池の家老に、岩松七郎と申者の候が、勇猛にして智慧深く、人を懐くる事、妻子の如くなれば、士は申すに及ばず、鄕民までも父の如く、隨ひ付くと聞え候。彼一人討ち給はんとては、數多の人を失ひ給ひ候べし。御家興起の始に候へば、一人にても失ひ給はぬ御思慮專要なり。爰に一つの愚案候。池萬五郎とて、是も同じく池の家臣にて候が、智慧淺く欲心深き者に候へば、賄を遣し誑し候はんに、味方に與せぬ事は候まじ。隨分彼に親しみ寄せ、七郎を討たせ候べし。其時御馬を向けらるゝに於ては、卽時に攻取り給ふべしと申しければ、國親實にもと思ひ給ひ、さらば汝計らへとぞ仰せける。去程に大和は、樣々に便を求め、萬五郎に親しみ寄り、折に觸れ事に寄せて、太刀・刀・馬・鞍・金銀・衣服、數を盡して送りける。案の如く萬五郎、是は思ひ寄らざる厚志、報謝するに詞なしと、無二の氣色に見えければ、或時大和、萬五郎に囁きけるは、我れ岩松七郎に、年來遺恨ありといへども、本望を達せず。無念日夜胸を焦し候。何卒彼を討つて給はれかしとぞ賴みける。萬五郎、それこそ易き事に

候。近日討取り、數日の御芳志を謝し奉るべし。御心安かれとぞ諾しける。七郎是をば夢にも知らず。或日慰の爲、劒尾邊に出で徘徊する所を、萬五郎、木陰より鐵炮を以て、狙ひ澄して眞只中を打ちければ、岩松うんと計にて、馬より逆に落ちて死にける。郎等共肝を消し、主の死骸を引起し、是はいかにと周章つる隙に、萬五郎は逃返り、急ぎ大和が方へ注進し、空嘯きて居ければ、何者のなせし事とも、知る人更になかりし。斯くて池十郎には、國親近日進發あるべき由聞えければ、老臣共評しけるは、兎に角國親に敵對は叶ふべからず。然りと雖、今又降參あらんは、經重討たれたる故に、早臆したりと、諸人に笑はれん事疑なし。幸ひ市正殿、未だ御妻室ましまさねば、國親の息女を御緣組ありたき由、仰入れらるれば、國親爭でか違背あるべき。斯くして和睦あらば、誰か褊し申すべきと、評議一同して、岡豐へ言送りければ、信濃守大に悅び給ひ、許諾ありて吉日を選び、入輿の行粧刷ひ、豐前守賴和の子息市正賴定へ歸嫁し給ふ。互に寇讐の心を飜し、いつしか父子の親みにて、隔てぬ中となりければ、上下安堵の思をなし、皆萬歲をぞ唱へける。斯りしかば、池萬五郎が惡行

一向坊主になりて、一生を送りけるとぞ聞えし。

岩井屋次右衛門鮹魚を釣る事

彼岩松七郎經重が家傳を聞けば、盛衰掌を返したり。其の先祖を尋ぬれば、清和源氏の流岩松四郎經氏が末葉なり。經氏は、後醍醐天皇に仕へ奉り、武名を顯し、忠賞他に異にして、肩を雙ぶる者もなかりしが、天皇逆臣の爲に御沈落の後は、一族郎従散々になり、諸國を牢浪して、經氏當國に下り、片山の邊に忍び居たるを、細川某が招に依りて、遂に家臣となる。今七郎經重迄は、十一代と言傳ふ。經重家を繼ぐべき男子なかりし故、須賀刑部が一子を養ひて子とす。此須賀と申すは、當國安藝の領主安藝備後守蘇我の元親の家臣なり。不慮に横死して、一子僅に九歳なるを、後家連れて、長岡郡種崎浦に、所縁の者あるを便り、忍び居たり。岩松七郎是を聞きて、名ある者の子なればとて、母共に迎へ取りて、養ひける所に、幾程なく經重は、池萬

五郎が爲に討たれければ、女房は詮方なく、又種崎へ立越えける。一子漸く成仁し、次郎左衞門とぞ名付けゝる。其母の種姓は知らね共、女心の淺ましきは、常に次郎左衞門に敎訓しけるは、構へて武士になる事なかれ。先祖は代々武門なれば、彼所の軍叓の戰に討死す。たま〳〵生殘れば、武士の本意にあらずとて、生甲斐もなきやうにはいはれぬ。さらば男役を立てんとすれば、二つなき命を失ひ、兎に角武士程うたてしき者はなし。汝不思議に、命生殘りたるこそ幸なれ。我に孝行には、商人になりて、世を樂しく渡れよと、明暮申聞かせけり。朱に交はれば赤くなる、母が心にや似たりけん、又母の訓誡否み難くや思ひけん、武士を止め、爲松といふ姓を改め、岩井屋と號し商人となり、種崎にぞ住しける。其上當國土佐郡に、一人の寡婦あり。大江の某が妻なりしが、夫は死して、十二三計の男子を持てり。家貧しく、朝夕の飧も微なり。或時此子、母に向つて申しけるは、斯る御有樣こそ悲しく候へ。終に道路に飢ゑ死なん事、程候べからず。所詮武士を止め商人となり、利を得て、御心安く過させ奉らばやと口說きければ、母淚を流して、やさしくもいひつるものかな。流

石火工程ありけるぞや。志はさる事なれども、武士の本意にてはなきぞよ。汝幼少と雖、我一言を耳に止めて、忘るゝ事勿れ。夫れ人としては、衣食住の三つ、一つも缺けてはなるべからずと雖、武藝の家に生れては、是を調へなすものにてはなきぞとよ。是を調へなすものは、農工商の三民なり。是を天下の三寶といふ、三寶を亂るを盜賊といふ。其盜賊を征罰するものを、士といふなり。士農工商の四民と雖、士と三民とは其道大きに替れり。武士は國家を護持するを道とし、弓箭を業とす。安樂に住する身にあらず。然るに高祿を得て、安逸を求め、武義を勤めざるは、誠に武門の盜賊なり。僭偸の罪に百倍す。夫れ武士は信を以て本とす。信にあらざれば道立たず。商人は僞を先とす。僞にあらざれば利少し。武士は、財を捨て義を思ひ、命を輕んじて名を惜む。商人は、財を惜しみて義を知らず。恥を忍びて命を惜む。士と商とは、黑白表裏の違なり。されば利を見て義を忘れ、危きに臨んで恥を忘るゝは、武士にあらず。凡そ武の家に生るゝ者は、假初にも名を下さぬを心とすべし。名を惜む時は、たとひ譽はなくとも、恥辱に遠ざかるべし。只一盤の殆と一

日の命を惜み、名を下す。淺ましき事に非ずや。郡縣廣大の國も、百萬斤の金も、末代の名に比ぶれば、只一盤の飧に等し。百年の命も、末代の名より見れば、一日に同じ。古き歌に、「世の中は今日ばかりこそ悲しけれ昨日は過ぎつ明日は知られず」と詠めり。一日の命にあらずや。道を守りて飢死すると、不義にして身を保つとは、何れを褒め、何れをか誹らん。他人の上を以て考ふべし。勇と義とは武士の面目なり。勇は面を淸め、義は名を汚さず。我れ女なりと雖、武士の家に生れたるは不運なり。家貧しきは天命なり。飢死すといふとも、悔ゆる所にあらず。武士の道に違うて、安樂を求むるは、我心にあらず。況商人となりて、貴賤を選ばず、是に手を束ね詞を卑くして、生きて何の益かある。早く死せんには如かじ。構へて患ふる事勿れとぞ申しける。事に觸れ時に臨みて、常に是を敎誡せしかば、其子成長して、再び家を興し父母を顯し、先祖の名をも揚げにける。彼も寡婦、是も寡婦。彼も一子、是も一子、其見る所は一つなれども、其揆は懸隔せり。黃精鈎吻、其形相似たり。淸濁もと一なりとは、斯樣の事をや申すらん。次郎左衞門二人の子あり。兄は次右衞門、

弟は茂右衛門とぞ申しける。天正十三年四月七日、次右衛門小舟に乗り、棱島の沖へ漁獵に出で、一つの蛸魚を釣上げたり、見れば茶碗二つ手に纒うてあり。飴色にて、亘り三寸四五分、深さ二寸四五分あり。是は奇代の珍事なりとて、宮内少輔殿へ、是を差上げければ、元親御覽じて、誠に前代未聞の不思議なり。彼が家の吉慶なるべし。重寶にせよとて、返し給はりけるとぞ聞えし。

土佐物語卷第二終

土佐物語巻第三

西養寺物語の事

長宗我部信濃守國親は、大津・下田を退治あり、介良・十市・蚊井田等降參しければ、近國の在々巡見の爲め、先づ下田に至りて、彼城中へ手引したる老女を召出し、過分の恩賞をぞ給ひける。それより介良に立越え、源の希義の古墳に詣で、卽西養寺に入り給へば、住持出でて、樣々にぞ饗應しける。國親仰せけるは、希義は、年越山にて討たれ給ふと言傳ふ。今尋ね見るに、年越山といふ所知るものなし。又夜深けて野の宮まで來りしといふ此宮も、又知れず。當寺に委しき傳記ありやと尋ね給へば、住持申されけるは、昔は寺の傳記、將軍家の御下文、諸家の寄進狀等ありと雖、近代の兵亂賊徒の爲に紛失し候か、頃日考ふべき舊記もなく候。愚僧一年關東へ下りし

時、不思議の縁にて、三代將軍鎌倉日記東鑑と申す物を求め出して、悉く書寫致度は候ひつれ共、事繁多故無力の及ぶ所に非ず。只當寺の由來、希義君の御事のみを書拔きて候間、御目に懸け申すべきとて、取出でてぞ見せられける。

養和二年壬寅

一、九月廿五日癸巳　土左冠者希義者武衞弟也。母季範女。去永曆元年依左典厩縁坐配流于當國介良庄處、近年武衞於東國擧義兵給之間、稱有合力疑可誅希義由平家加下知。仍故小松内府家人蓮池權守家綱・平田太郎俊遠各當國住人爲顯功擬襲希義。希義日來與夜須七郎行家（土州住人）依有約諾之旨、辭介良城向夜須庄。于時家綱・俊遠等追到于吾河郡年越山誅希義訖。行家者又家綱等聞希義之由聞及之、爲相扶件一族等馳向之處、於野宮邊希義被誅之由聞、空以歸去。而家綱等又欲討行家之間、粧船一族相乘之、自佛崎海上逃亡。家綱等馳到于其船津、先爲度行家遣二人使者於行家之船、有可談合事、稱可乘臨由。行家令察家綱等造意、斬二人使者首、棹船赴紀伊國云々。

一、十一月廿日丁亥　爲征土左國住人家綱・俊遠等、被差遣伊豆右衛門尉有綱於彼國。有綱以夜須七郎行家爲國中仕承、令暁首途。件家綱等依誅土左冠者科如此云々。

元暦二年乙巳

一、三月廿七日庚戌　土左國介良庄住侶琳猷上人參上于關東。是有功于源家者也。去壽永元年武衞舍弟土左冠者希義、於彼國爲蓮池權守家綱被討取之時、欲曝死骸於遐邇。爰土人之中自雖有存忠之輩、怖平家後聞不及葬禮沙汰。而此上人以往日師壇垣田郷内點墓所、訪歿後未怠。又取幽靈鬢髪令度懸頸所參向也。屬于走湯山住僧良覺申仔細之間、武衞有御對面、以上人之光臨用亡魂再來由被盡芳讃云々。

一、五月二日甲申　土左上人琳猷歸國。令止住關東可掌一寺別當職之由頻雖抑留給、於土左冠者墳墓可凝佛事之旨申請之間有御餞別會、是上人住所介良庄恒光名津崎在家被停止萬雜事畢。加之此上人依訪故希義主夢後、爲酬其志

可賞翫之趣被仰土佐國住人等云々。

文治三年丁未

一、正月十九日辛酉　文治元年所被寄附于希義主墳墓之土佐國津崎在家等、爲甲乙人致濫妨狼藉之間、琳猷上人參訴右武衞。仍可停止濫妨之由被加下知訖。彼上人雖可參訴關東、行程隔遠路之條、武衞爲一品衞耳目在京之間如此云々。

一、三月十日壬子　土左國住人夜須七郎行宗與梶原平三景時遂對問、一品直令決斷之給。行宗壇浦合戰之時生虜平氏家人周防國住人岩國三郎兼秀・同三郎兼末等召進畢。募其功可被行賞之由日來言上之處、景時支申云、彼合戰之比全無稱夜須之者。件兼秀等者自然歸降之輩也。經年序後行宗廻奸曲申仔細之由訴申之。而行宗彼時者與春日部兵衞尉令乘同船之由令陳謝之間召出春日部被尋問之處、申勿論之旨。已爲分明證人。仍可被加賞之趣被仰含行宗。景時依讒訴之科可作鎌倉中道路云々。俊兼奉行之。

一、五月八日己酉　爲二土左冠者希義主追善一、於二彼墳墓一被レ建二一箇梵宇一、以二介良恒光名幷津崎在家一御寄附先訖。而今日又有二沙汰一、供料米六十八石爲二毎年役一被レ施レ之。若令二不足一者引二募庄內乃貢一可レ沙二汰珞獻上人一。於レ事可レ施二芳志一之由被レ仰二遣源內民部大夫行宗一。于時介良庄地頭兼預所也。

一、八月廿日戊子　民部大夫行景使者自二土左國一參着。以二弓百張幷魚鳥干物以下一積二一艘船一進二上之一。又依レ勵二故土左冠者希義追善一、可レ憖二琳獻上人一之由、先日被レ仰事、殊可レ存二其旨一之趣捧二請文一云々。件弓廿張者仰二堀藤次一被レ納二置之一。八十張者分二給伺候壯士等一。其中勤二仕弓場御的一之輩者賜二三張一。所謂下河邊庄司行平・和田小太郎義盛・佐野太郎基綱・三浦十郎義連・稻毛三郎重成・榛谷四郎重朝・藤澤次郎近清以下也。

建久元年庚戌

一、七月十一日癸亥　土左國住人夜須七郎行宗可レ安二堵本領一之旨賜二御下文一。是土左冠者被レ討取一給。于レ時不レ惜二身命一討二取怨敵蓮池權守一以降度々有二勳功一云々。

是れ將軍家の記錄にて候へ共、一つ不審なる事の候。希義、介良の庄を辭して、夜須に向ひ給ふ所に、家綱・俊遠等、吾川郡年越山にて追着き討取ると云々。平田太郎は、幡多郡平田の住人、蓮池權守は、高岡郡蓮池の城主なり。當國七郡は、御存知の如く、先づ東は安藝郡、其次は香美・長岡・土佐・吾川・高岡・幡多郡と、西へ段々に並びて候。彼介良は、長岡郡なり。然るに希義介良を出で、東の方香美郡夜須へ落ち給ふに、西の方土佐郡を經て、吾川郡敵地近く赴き給ふ事、不審し。長岡郡を、吾川郡と事誤りたる爲、又年越山は、今坂折山の事なりと申傳へ候。彼山を、祈年山と號す。此山中に、祈年の神坐ますに依つてなり。三代實錄に云、清和天皇御宇貞觀八年五月廿二日乙丑、授土佐國正六位上祈年神從五位下云々。此社の事なり。祈年を誤り、年越と書き候か。又野の宮は、香美郡深淵の鄕、大谷深淵の神社の事分明なり。當國廿一社の其一、深淵の神社是なり。夜須より介良への道筋なれば、七郞是迄出來り候事、さもあるべし。扨又佛ヶ崎は、同郡今の手結崎の事と言傳ふ。或說に、希義君は、初は鎌田兵衞正清養ひ奉りて、鎌田の冠者と號す。其後當國に流されさせ給ひて、

土佐の冠者と稱し、又吾川郡弘岡の郷、吉良に御坐しければ、吉良の冠者とも申すなり。然るに平田・蓮池、西の方より討手に來ると聞えければ、夜須七郎を賴みて、香美郡に越えさせ給ふ所に、吉良より二十町計東鳥越山にて、平田・蓮池追着きて討取り、御死骸を路街に捨置きたるを、當時の住侶琳猷上人、修行の折節見奉りて、深く勞り、傍にて煙になし、御骨を首にかけ當寺に歸り、御墓を築き、西養守殿圓照と號して、後生菩提を弔ひ參らせ、仍つて當寺を、走湯山密嚴院西養寺と號す。されば鳥越山を誤りて、年越山と記したるか。希義住居は吉良、墳墓の地は介良なり。吉良・介良詞近ければ、在世の住所も墳墓の地も、介良と申誤り候か。又彼日記に、介良をひらきと讀めり。是國人の知らぬ事にて候。東國にひらきといふ所、此文字なりと承る。其例を以て、訓點を附け候か。扨今の吉良駿河守殿は、希義君の末葉と申候。其謂は、希義配所の御徒然に、一人の美女を愛し給ひ、男子を產めり。暫は人是を知らず。希義討たれ給ひて後、民間に養はれて成長せしが、將の器や坐しけん、終に吉良の城主となり給ふ。今駿河守殿までは、十三代とも又十二代とも申すなり。扨彼

夜須七郎、始めには行家、後には行宗とあれ共、二人には候はず。建久元年本領安堵の所に、土左冠者被討取給。于時不惜身命討取怨敵蓮池權守以降度々有勳功といへり。同人なる事明らけし。今此の如く彼鎌倉日記を疑ひし事、御不審に思召さるべく候へ共、聖經賢傳にも、闕文錯簡少なからず、近き事には玄惠法師の記したる太平記は、諸國の事を、正しく書きたるものに候へども、元弘の昔、一宮尊良親王、當國幡多へ流されさせ給ひしを書きたるを見るに、彼幡多と申すは、南は山の岨にて高く、北は海邊にて下れりと云々。黑僧修行の折節、當國殘らず一見仕りて候が、當國は總て六十町を一里にして、東西灘道九十七里餘、浦の數は九十九浦、東と西は數十里、南へ出でて、彎々として三日月の如し。南は蒼海漫々として、天を浸す。天武天皇白鳳十三年十月壬辰、逢于人定諸國大地震、土佐國田苑五十餘萬頃沒爲海とは、此所かと驚く計なり。南に見ゆる山の端もなく、歌にも詠みたるとかや。北は山にて高く、南は海にて下れり。遠國の事は、人傳へ聞傳へに候も、事の相違あるまじきにも候はず。必罪を筆者に歸し難く候と、二時計り語られければ、國親大きに

感じ給ひしとぞ。

香宗我部和談の事

其頃香宗我部出羽守秀義といふ人あり。其先祖を尋ぬれば、清和天皇の御末甲斐源氏武田の姓氏族なり。當國香美郡宗我部に在城して、武田の姓を改めて、宗我部と名乘りけるが、香美郡の領主なればとて、香宗我部と號し、所の名をば下略して、香宗とぞ申しける。源順が和名集に、香美郡曾我といふ所是なり。三千餘貫の領主なり。家の臣下には、池内肥前眞武・岡本伊賀・下司九郎左衛門・北村新左衛門・久甫内芳威・池田長介・岡本與兵衛とて、譜代相傳の士相並びてぞ守護しける。數代此所を領しければ、恩を荷ひ徳を戴く者多く、繁榮の家とぞ聞えし。斯る所に長宗我部國親、近邊の城を打隨へ攻靡け、其の威漸くに强大なれば、岡豊八幡の神託、愈疑ふ所にあらずと、上下恐怖する事斜ならず。秀義も豫て敵し難くや思はれけん、家臣を呼びて、我れ女子のみありて男子なし。信濃守息男一人申請け、養子壻にして、家督

長宗我部國親香宗我部秀義と結ぶ

を定むべきと思ふは如何にと申されければ、家臣共、是は餘儀なき御思慮に候。國親頃日の勢を以て考へ候へば、國中を平呑あらん事、程候まじ。然れば御和睦の御計策、根を深くして帶を堅うするの儀、是に過ぎ奉らずと、一同に申しければ、出羽守悅喜ありて、さらば通達せよとて、卽池內肥前を使として、岡豐へ遣し、秀義老年に及ぶと雖、名跡相續の男子なし。只一人の女子を持ちて候。願くは御息達の中御一人申請け、箕箒の妾に致たく候と、懇にぞ申送られける。國親甚だ喜び、香宗我部は、甲斐源氏武田の一族として、氏も種姓も凡俗ならず。大慶是に過ぎずと、許諾禮謝して、使者をば返され、吉日良辰を選び、三男內記を、香宗へ召遣しける。後に香宗我部左近大夫親泰といひしは此人なり。出羽守の弟に、孫十郎といふあり。彼を家督にせんと、豫ていひしに引換へ、內記を家嫡に定めければ、孫十郎怒りて、兄ながら心得ぬ事共かな。豫て某を家督にせんと宣ひしは、人皆知る所なり。然るに變改あるは、我に不義ある故なりと、諸人に指を指されん事こそ口惜しけれ。所詮折を窺ひ、刺違へ死すべしとぞ怒りける。出羽守聞きて、こは心得ぬ所存かな。家あ

りてこそ、家督も所領もあるべけれ。此度は當家安否の境なれば、力なく降を乞ひ、和睦する所に、其儀をも顧みず、不義の企、天理に背ける者なれば、偸に討つて捨つべしと、八木何某に下知しければ、たばかり寄せて討取りける。無慙なりける事共なり。其子は未だ幼稚なるを、乳母抱へて、母方の祖父池備前入道を賴みて、他へぞ立越えける。さる程に出羽守は、內記に家を讓り、其身は法體にして、中山田に營を構へ、隱居して居たりけるが、つく〴〵心に思ふやう、さるにても孫十郎が、我を恨みしは理なり。又骨肉を分けし兄弟を討ちし事、我ながら無道の至り、今更悔ゆるに益なし。切て孫十郎の一子を養ひ立て、此隱居の領を讓り、孫十郎が亡魂の、恨を少し晴らさせばやとて、書簡を認め、起請文を認めて、池備前入道へぞ遣しける。池斜ならず悅び、頓て華やかに仕立てゝ送りける。此上にも若し出羽の入道、不義の程計り難しとて、一人の郎等を相添へ、內議を示して遣しけり。秀義入道大きに悅び、實子の如く養ひ立て、中山田左衞門佐とぞ名乘らせける。

國虎法體の事

さる程に信濃守國親は、亡父覺譽常通幽靈菩提の爲め、安祥寺を再興して、常通寺と改め、追孝の作善、所存の如く執行はれけるが、常に宣ひけるは、我六歳にして孤となり、九歳にて母に後れぬ。人間の不幸、身に於て止めぬ。然るに不思議の天運に叶ひ、今既に家を興すと雖、心常に是を悲しむ。孔門には、身體髮膚を毀ひ傷らざるを孝とすといへども、我は是れ釋尊の道敎に任せて、兩親尊靈と一佛淨土、二世の緣を願ふべしとて、眘惠法師を戒師として、天文十六年四月初め、春秋四十四歳にて薙髮法體して、覺世とぞ申しける。

太平山城守敗績の事

爰に太平山城守とて、高岡郡高岡鄕、其他近鄕を領して、四千貫の主にて、蓮池に在城す。去永正六年、本山に語らはれ、長宗我部兼序を討ちし太平是なり。同十四年、

津野が一族降參の後は、太平を初め高岡郡、悉く一條殿の幕下にぞ屬しける。彼蓮池の城は、本山左近大夫茂宗が領分、吾川郡の境なれば、用心の爲に、一條殿より加勢を籠置き、番手に代へて守らせらる。始の程は、山城守も番手の士も、互に隔意ありて、慇懃に禮厚かりしが、交久しき時は、敬み衰ふる習なれば、後には膝を組み脛をもたせて、心の底をぞ語りける。或時山城番申しけるは、各何とか思ひ給ふ。御所敎房公・房家卿・房冬卿・房基卿は、何れも性質正直温和にして慈悲深く、萬事儉約を守り、民の費を厭ひ給ひしが、今の中納言殿は、萬づ雅意に任せ、放逸無慙の御行跡なれば、行末覺束なし。畢竟一條家の末になり給ふと覺えたり。長宗我部・本山兩家の内に奪はれ給はん事疑なし。何れも豫て其覺悟し給へと申しければ、番の士、されば我々共が所存も、同意なりとぞ申しける。山城守、是は互に隔なき雜談なり。構へて洩らし給ふなと、囁きてぞ止みにける。病は口より入り、禍は口より出づと、文士の格言なるを、知らぬ事こそ悲しけれ。其中に舩戸左衞門は、本は津野の士なるが、近年一條殿に屬して、在中村しければ、此番手に入れられたり。常に山城守と不

快にて、萬づ後向なりければ、此雜談を聞きて、哀れ事こそ出來たれ。是を披露して讒せばやと案じ濟し、俄に病と稱して城を出で、町屋を借り療治すといひて、潜に檮原へぞ立越えける。仲平兵庫是を見て、こはいかに、御邊は蓮池の城番に越されたりと聞きつるに、只今は何の爲に、是迄來られ候や。不審なりと申す。左衞門小聲になりて、さればよ夫につき、忠節の爲に參じて候。山城守逆心を企て、番手の士を語らひ、本山に與すべきとの內談にて、何某は兎申し、誰々は角いひてと、針を棒にぞなし、事々しくぞ支へける。兵庫聞きて打うなづき、能くこそ告知らせたり。其方存知の如く、津野・太平は年來親しく、互に患難を救ひ候ひし。然るに去る戸波の合戰に、いかなる所存にかありけん、知らぬ由にて打過ぎぬ。彼戸波と蓮池は、僅に一里計なり。遙々中村より大軍後卷ありて、津野の一族、數を盡して討死しけるに、太平近里にありて、知らぬ由にて過ぎぬるこそ遺恨なれ。何卒此鬱憤を散せばやと、晝夜胸を焦す所に、本意を遂ぐべき時節到來なり。此旨言上して、元忠討手に向ふべし。御邊は急ぎ歸られよと、引出物して返しけり。左衞門は、急ぎ蓮池に立歸

り、病氣本復せしとて番所に出で、さらぬ體にて居たりけり。斯くて兵庫は、急ぎ中村へ立越え、羽生肥前に對面して、太平山城守、番手の士を語らひ、逆心を企つる由、船戸左衞門訴人仕り、證據分明に候。急ぎ討手を遣はさるべし。但元忠案內よく存じ候。御先手仕るべしとぞ申しける。羽生卽ち申上げければ、一條殿四人の家臣を召集め、內議評定取々なり。土居宗三申しけるは、唯今討手を遣さるれば、番手の士共も、一所に籠城すべし。先づ何となく、番手代りの士を遣したばかり寄せ、一々首を刎ね、其後討手を差向けられ、然るべしと申しければ、一座此議に決定して、究竟の者を選び、方便を言含め、蓮池城へぞ遣しける。さる程に代の士、蓮池に着く由聞えければ、前の番人打寄り評しけるは、是は不思議の事共かな。每年十月、番替りの定例なるに、今漸く四月なり。若し違亂の事あらば、先達て案內通達あるべき所に、何の沙汰もなく、俄に代の士差越さるゝ事こそ心得ね。いかさま仔細あるべしと、取々評定する所に、船戸左衞門は、身の上をや危みけん、何心なく座敷を立ちて出でけるが、行方も知らず逐電せり。人々驚き、此者元來佞奸にて、常に我々共と不快な

り。去頃病と稱して暫く籠居して、人に對面せざりしは、扨は偸に中村へ立越え、此方の雜談を、讒言したるは必定なり。夫につけ我々共をたばかり寄せ、一々首を切らん爲、何心なく代の士を差越さるゝ事疑なし。今は遁れぬ所なり。代の士を討取り、一所に腹を切るべしと、詮議一途に相極めてぞ待ち居たる。程なく皆々着きければ、さらぬ體にて請じ入れ、遠方御越は苦勞の至りなり。永々の御勤、隨分御精入られ候べし。此度は例に替り、各早く御越し候へば、我々共は、頓て在所へ立歸り、緩々休息致し、此程の勞氣を休め候べし。暇乞の盃なりとて、珍膳を認め、樣々に饗應し、亂酒になり、入替り〳〵大盃にて强ひたりければ、皆々飮み醉ひ、前後不覺にぞ眠りける。時分はよしと立寄り、殘らず首を打落す。附き來りし家人共をば、態と別屋に置きければ、是をば夢にも知らず。遙々の道を凌ぎ來り、足洗ひ湯浴して、帶紐解きて休み居たる所を、大勢一度に押入り、是はといひて周章るを、撫切にしたりけり。さらば最後の用意せよとて、逆茂木・掻楯・堀を掘り、其役々の手分して、寄する敵を待懸けたり。さる程に番手の下人、漸く四五人遁れ出で、中村へ逃歸り、

此由を告げければ、一條殿、こは手延にして不覺を取りたり。さらば討手を遣はせとて、弘治三年四月半、仲平兵庫・福井玄蕃を先として、都合其勢卅餘騎、蓮池の城へぞ押寄せける。太平は、一千餘騎を二手に分け、鐵炮足輕二百餘騎、ふんぎりの橋へ差向け、其身は八百餘騎、十町計り引退きて控へたり。是は足輕を以て敵をおびき寄せ、川へ追竄めん方便なり。寄手は、蓮池勢の分際、豫て知つたる事なれば、只一軍の勝負なりと、鬨の聲三度揚ぐる程こそあれ、皆拔連れて、橋の上を一息にぞ押入りける。蓮池勢、鐵炮少々打懸けて、跡をも見ずして引退く。寄手勝に乘つて、さこそあらめと、備を亂して追懸くる。太平は豫て定めし事なれば、眞先に進んで些も擬議せず、大勢の中へ駈入りて、東西に追靡け、南北に駈散らし、八方透さず切つて廻れば、寄手案に相違して、一度に崩れて逃げけるを、太平急に追懸けしかば、返し合する者一人もなく、行先狹き橋の上に、大勢我先にと込合ひける程に、或は堰落されて水に溺れ、又は己が太刀長刀に貫かれ、命を墜し疵を蒙る者其數を知らず。親討たるれども子は知らず、主討死すれども、郎從之を扶けず。物の具を脱棄て、弓を

杖に突きて逃げふためき、戸波の城へぞ籠りける。斯くて四五日人馬の息を休め、軍評定ありて、又蓮池へぞ向ひける。仲平兵庫申しけるは、古人の詞に、大敵を欺き、小敵を侮らずといへり。然るに最前は太平を思ひ侮りて、却て不覺の負軍して、人口に落ちぬる事、生涯の恥辱なり。今度の軍、又先の如くして退きなば、萬人の嘲哢たるべし。相構へて、面々身命を輕んじて、以前の恥を雪がるべしと、衆を勇め氣を勵してぞ打立ちける。山城守ふんぎりに出向ひ、弓を射かけ鐵炮を放し、互に時をぞ移しける。斯る所に福井玄蕃、豫て相圖やしたりけん、手勢二百騎計り引分けて、波介の山際を東へ、敵の後を遮り、蓮池の城下へ入らんとぞ進みける。太平是を見て、城下へ敵を入立てゝは叶はじと、馬引返せば、仲平兵庫得たり賢しと、橋を打越え突いて懸る。蓮池勢、引立ちたる事なれば、一度に吐とぞ崩れける。されども太平、町口にて馬駈居ゑ、貳し返せと呼ばはつて、一支支へて防ぎけるが、爰をも終に押破られ、城中へ引いてぞ入りにける。寄手は大勢なれば、荒手を入替へ息をも繼がず、夜晝九日攻めたりけり。城中小勢と申せども、究竟の者共、死を一途に定めて、攻寄す

れば追拂ひ、懸れば追戻し、討らつ討たれつ、何れ勝負見えざる所に、俄に空掻曇り。雷電稻妻類にて、大雨車軸をぞ流しける。蓮池の城と申すは、南北は高山にて、其間に田澤ありて、戸波谷三里に續きたり。東は贄殿川とて、國中への大河なり。洪水出づれば、逆様に蓮池・戸波へ押入りて、海の如くなる所なり。寄手も案内あるなれば、洪水の程計り難し。先づ此陣を引返し、重ねて寄せられ然るべしと、攻口を開きて引返す。城中には是を見て、籠の鳥の、空を翔ける心地して、悦び合へること斜ならず。雨は次第に降増る。高岡・蓮池・波介・北地・戸波谷、一面に海となる。元より城は小城なり、兵糧矢玉の蓄も乏しければ、重ね〳〵敵寄せ來らば、網に掛れる魚の如くなるべし。此の隙に落つべしとて、皆散々にぞなりにける。斯くて空晴れ水も干落ちければ、さらば急に攻めよとて、始の如く押寄せ、鬨の聲をぞ上げにける。城中には音もせず。さては落失せたりといひければ、いや〳〵如何なる方便にやといふもあり。兎角一度に攻入れと、四方より押入り見れば、敵一人もなし。津野某取敢ず、

蓮池は花はいつしか散りはてゝみはとびぬけて行方しられず

と詠みければ、諸軍勢笑壺に入りてぞ笑ひける。其後又此城を攻めて、番手の士を籠置かる。

一條殿・本山不和附吉良駿河守自害の事

昔日は國中一和して、一條殿を尊崇し、國主と仰ぎ拜趨せしが、近年は諸將各になり、私領を守り威を爭ひ、御所に出入る者もなし。一條の黄門兼定卿仰せけるは、昔は國中の上下我命を重んじて、大小事となく、違背する者もなかりしが、近年に至つて命を輕んじ、下知を背く者多し。其根元を考ふるに、是本山が驕奢より起るなり。其仔細といつぱ、頃日大名と稱ふるは、安藝・本山・長宗我部なり。安藝は我親族なり。長宗我部は、又當家の從屬なり。されば此兩家は、我を輕んずべき謂なし。本山は土佐・吾川兩郡を領して、手さす者なければ、驕奢の餘りに昔の好を忘れ、我を蔑如する故に、以下の諸士是に習ひて、無禮を盡すと覺えたり。去頃蓮池の番人共、反

逆を企てしも、畢竟本山が逆威を振ふに依つてなり。哀れ本山を亡し、諸士の法令を正さばやとぞ宣ひける。言の漏れ易きは、禍を招く媒とかや。壁に耳、岩の物いふ世の中なれば、誰いふともなく、本山左近大夫義宗此由を傳聞き、こは不思議の事を宣ふものかな。國中の上下昔に替り、一條殿の命に隨はざるは、其身の行跡法に違ひ、人々に疎まれ給ふ故か、又世の末になれば、人の心もすなほならぬ故かなるべし。何ぞや罪を、我一人に歸せられたるぞ心得ね。敎房公、京都の亂を避けて漂泊し給ひしを、長宗我部文兼勞り、當國へ招請すと雖、國中擧つて尊崇するは、文兼が一身の功にあらず。我が父祖を始め諸將一同して、勅許にあらずと雖、國司と仰ぎ冊きしなり。されば我々をば、親しみても猶親しみ給ふべきに、恩を讐にて報じ給はんとの志は、天理も知らぬ愚人かなとて怒られける。其の頃吉良駿河守とて、吾川郡弘岡の鄕吉良の城主あり。去る永正六年本山に力を合せ、長宗我部兼序を討ちしかば、本山も他に異なる思をなし、互に肩を並べ膝を組み、詞を讓らぬ友なりしが、近日本山發向して、土佐・吾川兩郡を掌に握りければ、時世に隨ふ習にて、今は吉良

も本山が旗下に屬し、媚び諂ひて居たりしが、いつしか不和になりて、萬快からぬ事共多かりけり。されば共互に色を立つる事もなかりし所に、駿河守偸に蓮池に立越え、番人に便りて、一條殿の幕下にぞなりにける。是は本山と不快なれば、行末覺束なく、自然の事あらば、一條殿へ加勢を乞はん爲とぞ聞えし。是に依つて西畑・仁村・森山・仁井・秋山等も皆降參して、在中村しければ、一條殿より森山に砦を構へ、數多の士を籠置かる。本山是を聞きて、一條殿我を惡口し給ふさへあるに、況して領內を犯さるゝ事こそ安からね。是駿河守が胸臆より出づるなれば、彼が首取つて軍神に捧げて、直に幡多へ攻入るべしとぞ申されける。此本山左近大夫茂宗は、祖父伊典より相續きて、本山に在城せしが、去る天文の頃、子息式部少輔茂辰に城を讓り、其身は法體して梅慶と號し、土佐郡朝倉山重松が古城を攻めてぞ移られける。此城より吉良へは、行程僅に一里計りなれば、偸に忍を入れ、日々に敵の陣をぞ窺ひける。是をば知らで駿河守、家臣共を召集め、面々も存知の如く、我常に鶺鷹の逍遙を好むと雖、近年諸方の忩劇に依つて、其沙汰も聞かず。此度一條殿へ降を乞ひ、存分に任

本山梅慶吉良駿河守を討つ

する上は、是に過ぎたる悦なし。夫に就き來る二日、贄殿川にて鵜を使はせ、家中の面々にて見物させ、若者共に一曲謠はせ、共に慰まんと思ふはいかにとありければ、老臣承り、誠に有がたき御志なりとて、役人共に申付け、其用意をぞしたりける。忍の者是を聞き、究竟の事こそあれと、朝倉へぞ告げたりける。梅慶喜び其日を待ち、七百餘騎を二手に分け、弘岡へぞ向けられける。一手は鵜來巢紀伊守・義井修理を先として、吉良の城に向ひ、一手は式部少輔を大將として、贄殿川へぞ押寄せける。此川に如來堂といふ島あり。是阿彌陀如來を安置したる所なれば、如來堂と申すなり。斯くて駿河守は士共を引具し、彼島に渡り、鵜を使はせ見物あり。雜餉を取散らし、主從の隔なく、さいつさゝれつ飮醉ひて、謠ひ舞ふ。折しも城に當つて、鬨の聲鐵炮の音聞えければ、こはいかにと驚く所に、ゆきとうの山陰より、ひゝかふと三百騎計り、鬨を作りて駈出で、如來堂に向つて、弓鐵炮を放つ事雨の如し。駿河守些しも騷がず立上り、大音上げ、是へ寄せたるは、式部少輔と見るは僻目か。某が手並は豫て存知の前、其處を引くなと、舟に乘らんとする所に、流矢來つて眉間にはつしと

當りければ、口惜や是迄なりと押肌脱ぎ、腹十文字に掻切りければ、郎等頓て介錯して、其太刀を取直し、己が咽笛に突立て、主の死骸に打重つてぞ死にたりける。吉良掃部・齋藤新五・中島近江・幾間才藏を始め、究竟の者共、心は猛く思へ共、弓鐵炮五ヶ所七ヶ所二ヶ所三ヶ所、疵を蒙らぬはなかりければ、迚も遁れぬ所なりと、腹掻切つて死するもあり、或は刺違へ、又は川に飛入るもあり。哀れなりし有樣なり。恥をも知らぬ下部共は、用石・高岡へ逃ぐるもあり、右往左往になりにけり。斯くて城の寄手共、大手の門に押寄せ鬨を上ぐ。城中には唯女童、扨は用にも足らぬ老人、又は若き番の士、今日は殿の留守なればとて、帶紐解きて晝寢して居たる折なれば、防ぐ兵一人もなく、皆散々に逃げければ、寄手難なく乘取り、悅びの鬨を上ぐ。去程に式部少輔は、本山の城には、伯父本山佐渡守茂定を入置き、其身は吉良の城に移りて、本山を改め、吉良式部少輔とぞ申しける。

吉良駿河守自殺

森山・蓮池砦落去の事

森山の砦は吉良へ程近く、聲も屆く計なれば、駿河守討たれ、式部少輔吉良へ入替りたるを聞きて、彼番の者共、定めて聞逃せんずらんと思ふ所に、結句反つて弘岡の鄉人共を追捕して、些も油斷あらば、吉良へ逆寄にせんと議する由聞えければ、式部少輔、小敵と思ひ侮つて、膝下に差置く事、百足を懷中に育つるに同じ。油斷すべきにあらずとて、弘治三年二月廿日、六百餘騎を引率して、森山へ押寄せたり。城兵二百餘騎、元來期したる事なれば、些も擬議せず打つて出で、前後に當り左右を拂ひ、駈破り打通り、千變萬化手を碎きしかば、寄手若干討たれ、色めき立ちて見えければ、式部少輔馬を控へて、言甲斐なき者共かな。敵縱ひ鬼神なりとも、あれ程の小勢を見て、引く事やあるべき。只一度に駈寄せ中に取込め、息をも繼がせず揉立てよやと下知せらる。六百餘騎の兵共、此詞に力を得て、二百餘騎の敵を、眞中に追取込め、餘さじとて揉んだりける。城兵心は矢竹に逸れども、敵は雲霞の如くなれば、爰に圍まれ、彼處に取込められ、二百餘騎の勢、僅に廿五騎に打なされ、一所になりて息繼ぎけるが、我々城を預りて、言甲斐なく攻落され、何の面目ありて、再び中村へ歸る

べき。此城こそ墓所なれ。迚も遁れぬ命なれば、潔く切死と、又敵の中へ駈入りて、一足も退かず、一人も殘らず討死す。吉良方の手負死人を算ふるに、三百人に餘れりと雖、究竟の敵二百人討取りければ、人皆勇みをなす。さらば頓て蓮池の城へ寄せよとて、同廿五日の早旦に、贊殿川を越えて馳向ふ。大將茂辰申されけるは、森山の城は、力攻にしたる故に、多く士卒を討たせけり。蓮池をば、方便を變へて攻むべしとて、高岡の在家に火をかけ、鬨を作りて押寄せたり。蓮池には、森山の城攻落されぬと聞きてければ、定めて是へも寄せんずらん。今日は遁れぬ所なり。死して野外の犬の腹に葬らるゝ共、逃げて人口には落ちまじものをと、互に機を進め、靜まり反つて待懸けしかば、高岡の火の手を見ても、騒ぐ景色はなかりけり。斯りしか共寄手の勢、城の邊へは近寄らず、遠卷してぞ居たりける。城中には是を見て、敵深き慮あるべし。油斷するな面々と、役所々々へ下知をなし、晝夜物の具をゆるめず、今や寄すると待つ所に、寄手は己が陣々を構へて、幾年をも經べき氣色なれば、城中には慰む方なく、退屈してぞ見えにける。斯る所に或夜、南の方より鬨の聲を上げ、鐵

蓮池城陷る

炮の音頻なり。すは敵の寄すると見る所に、さはなくして、北の方より鬨を作り、鐵炮を打かけ押寄すると見れども、さもなく、又東の方に鬨を上げ、鐵炮をつるべ掛けたり。城中には其中々を守りて、待明し待暮らす。斯の如く煩す事、七日七夜なり。寄手は時を定めて入替り、息を繼ぎ身を休む。城中には替る勢もなし。食する隙もあらばこそ、玉藥さへ打盡し、心身共に勞れ果て、此體にては、手もなく攻取らるゝは必定なり。迚も死すべき命なれば、敵陣へ逆寄にやする、又は城を明けて落ちや行くと、僉議區々たる所に、八日に當る早旦に、敵陣を見渡せば、燒捨てたる篝火少少殘りて、敵一人もなし。扨は南の山より、西へ勢を廻すか、北の山に勢を隱したるかと、四方へ人を遣して尋ぬれば、夜中に弘岡へ引返したりといひければ、淵魚の海に出でたる心地して、先づ些なりとも息を繼げとて、籠手脛當を枕として、前後も知らず寢入りたり。吉良勢、時分や計りけん、又大勢寄せ來り、鬨の聲をぞ上げにける。疲れ果てたる城兵共、寢怯れたる事なれば、始めの義勢も失せ果て、塀を越え狹間を潛りて、我先にと、城を明けて落行きければ、寄手頓て入替り、勝鬨をぞ上げたりけ

る。式部少輔打笑ひ、何と茂辰が計策を見たるかと自讃し給ふ。卽ち城を改めて、番の士を籠置かる。

奇怪の事

永祿元年六月十一日の早旦、本山梅慶入道、庭に出でて、諸木の梢を見給ふ所に、年の程十七八歲なる美しき女房、あざやかなる衣裳を着、松の梢に立ちて、梅慶を見て、莞爾と笑ひて居たりけり。入道見給ひ、誰かある、弓持つて來れと呼ばはり給へば、何事に候と、若侍急ぎ弓矢を揃へて差出す。梅慶弓を取つて見上げたるに、形は失せて見えず、虛空に大きに笑ふ聲して、朝倉の宮の方へぞ行きにける。四五日計ありて、城の大手に植ゑたる大木の杉の根より、火燃え出でたり。見る內に數百本に燃付きて、黑煙天を掠めり。諸人驚き、水よ熊手よなど騷ぎて、立寄り見れば、火にはあらず、杉の枝每より血流れ出でたり。集りたる人數、皆朱に染みてぞ歸りける。斯る不思議もある事にやと、上下囁く所に、或夜女の聲にて、數百人踊る音しけり。

是を聞けば、本山は又本山になると諷ひける間、月陰に見れども、其形は見えざりけり。其次の夜、二三千人の聲して鬨の聲を上げ、大石大木を崩す音しけり。すはや敵の寄せたるはと、上下騒ぎて立出で見れども、人もなし。いかさま天狗の所爲にやあらん。遠行寺に於て、大般若經を眞讀あるべしとて、彼寺へいひ送られければ、住持頓て返答ありて、使をぞ返され、例の眞經の時節になりければ、直に佛前に向ひ勤行ある所に、何處より來るとも知らず、大なる鼠一つ、燈明の油錠(あぶらつぎ)の中へ飛入り、油に浸り、本堂の棟木に駈上り、身を擦りて又走り來り油に浸り、棟木へ身を擦る。斯の如くする事百餘度に及べり。住持不思議に思ひ、目も放さず守り居たる所に、鼠又來りて、己が尾に火を附けて棟木へ上ると見れば、猛火忽に燃え出でたり。同宿下部驚き騒ぎければ、住持見給ひ、是自滅の時節到來なり。人力の及ぶ所にあらず。經臺を初め、寺物一つも出すべからず。其儘燒捨てよとて、本尊藥師如來を同宿に負はせ、寺の方を二目とも見ず、朝倉へぞ立越えける。七八町に作り並べたる寺堂・廻廊・鐘樓・經藏・二王門。工人妙を盡し丹青を飾りしも、一時の程に燒失せて、灰燼

忽に地に充てり。悲みても猶餘りあり。住持朝倉へ立越え、此由を申されければ、大きに心に懸けられけるとかや。其後も朝倉の城中に、不思議の事共多かりけれども、深く隱して、沙汰はせざりしと聞えし。

朝倉神社の事

朝倉神主共是を聞きて、是唯事にあらず、當社の御祟なるべし。其故は過し頃、何の爲にやありけん、梅慶の下知にて、此宮林の木を伐らせしに、神主出でて、神木を伐らせ給ふ事、いかゞなりと申しければ、入道是程の茂りたる林にて、僅の木を切りたりとて、何程の事あるべき。但し神の惜み給ふにはあるべからず。神人達の私ならん。若し又神の惜しく思召すとも、梅慶此所の領主なれば、少しは見許し給ふべしと笑はれたれば、神主共、穴恐し。此御神は、土佐國風土記曰、土佐郡有朝倉郷、郷中有社、神名天津羽々神、天石帆別命、今天石門別神子也云々。是當國廿一社の其一、朝倉の神社是なり。斉明天皇六年に當りて、百濟王より日本へ加勢を乞ふ事あ

り。天皇御許容あり、明年の正月、攝津國難波浦今の大坂より御出船、御子天智天皇、時に皇太子たり。其御弟清見原王子後に天武天皇共に供達せらる。同年五月、土佐國朝倉へ御着船ありて、橘の廣庭の宮に入らせ給ふ。朝倉山の材木を以て、假の內裏を作らせ給ひて御座す。丸木の黑木にて作りたる假の皇居なれば、木の丸殿とぞ申しける。是より廿町計西南の方、八田海道苅萱の地に關を居ゑて、晝夜警衞怠らず。百官軍兵に至る迄、內裏へ參る者は、其名を名乘りて關を過ぎぬ。天智天皇、

朝倉や木の丸どのに我居れば名乘をしつゝ行くはたが子ぞ

と詠ぜさせ給ふ。然るに宮林の木を伐りたるによつて、神の祟にかゝらせ給ひ、齊明天皇御惱ましく、同年七月廿四日、此行宮に崩じ給ふ。盤瀨を御廟所として、八月朔日の夕送り奉る。時に山上に鬼出で、大きなる笠を着て、是を望み見る人、皆奇異の思をなす。盤瀨は今の鵜來巢山なり。天智天皇喪廬に御坐して、

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

と詠じ給ふ。抑此喪廬と申すは、平民にも倚廬とて、父母の喪の時は、謹み居る所、

天子は諒闇の間、御悲に堪へず、假庵を作り、かたはいにして板敷を下げ、葦の簾をかけ笘にふし、壞を枕にし給ふとなり。斯る御起臥なれば、民の上を思召やらせ給へる御製とかや。其後天智天皇勅詔ありて、齊明帝の盤瀨の御陵を、天津羽々神の宮に遷し奉り、羽々神・齊明帝一所に祭るなり。國俗誤つて朝倉の宮を、齊明天皇といふは此謂なり。羽々神の御祭日は八月十八日、齊明帝の御忌日は七月廿四日なり。和歌の家の說には、朝倉木の丸殿は、筑紫に舊跡ありと雖、日本紀延喜式に記して、土佐國にありといへる事慥なれば、是を正說とすべしと、藤原兼良公書置かせ給ふ。されば天子の御上にさへ、宮林を伐らせ給ふ神の御崇ましゝます。況凡下の身として、奢侈の餘りに、神木を切りたらんに、などか神意に背かざるべき。穴怖しといひ給へりけるが、果して思合する事にぞなりにける。

土佐物語卷第三終

土佐物語巻第四

岡豊・本山義絶幷長濱城夜討の事

本山茂宗死去

さる程に本山左近大夫茂宗入道梅慶は、永祿二年夏の始より、例ならぬと聞えしが、老衰の極なれば、藥力針功も叶はず、同年八月下旬、朝倉の城にて死去し給ふ。子息式部少輔茂辰は、吉良の城には番の士を入置き、頓て朝倉へぞ移られける。國親入道覺世も行き弔ひ、萬づ隔なかりし所に、禍は下より起る習にて、不慮の事こそ出來けれ。永祿三年五月初め、岡豊より艜一般に兵糧を積みて、種崎の城へ漕せらるゝ所に、茂辰の領分潮江より舟二艘乘出し、孕の渡間にて、彼水主を切捨て、兵糧船を乘取りける。覺世聞き給ひ、大きに怒りて宣ひけるは、梅慶は予が爲に、父の怨敵なりと雖、先年一條殿の口入に依りて、止む事を得ず、一家同門の好をなす。況孫共多く

本山茂辰長宗我部兩親不和

出來せしかば、倶に天を戴くの辱を顧みず、寇讎の意を飜す事、親睦に人口を忌みたり。然れば式部少輔も、父子骨肉の思をなすべき所に、此度潮江の鄕人共が惡逆は、是併茂辰が心底より起るなりと、大きに怒られける。式部少輔驚き、是全く茂辰が知る所にあらず。欲心熾盛の溢者共の仕業なりとて、彼海賊の棟梁三人の首を斬つて出され、樣々陳じ給へども、覺世曾て承引なく、遂に親子厚緣の道絕えて、胡越の隔をなしければ、今に國の騷となりて、いかなる事か出來んと、歎かぬ者もなかりけり。さればあらぬ事をも許するは、斯る時の習なれば、是を聞きける者共申しけるは、潮江の鄕人の惡行は、吉良殿の心底より起ると、覺世入道殿憤らるゝは理なれども、其惡黨共を殺害して陳謝せらるゝ上は、何の遺恨かあるべき。夫に猶覺世憤を含み給ふは、畢竟梅慶の死去を幸にして、事を左右に寄せらるゝと見えたり。親族に於ては不仁なり、武義に於ては不覺なりといふべし。兎にも角にも、兩家の確執に及ぶべき時節到來にこそあらめ。是父祖の惡は、子孫に報ふ習なれば、朝倉の御神の、本山家へ祟をなし給ふ所なるとぞ申しける。其頃長濱に、福原右馬丞とて、上

手の名を得たる大工あり。元は岡豐の者なりしが、故ありて家領を歿收せられて、吉良の屬士、長濱の城主大窪美作守が扶持を得て居たりけるが、密に岡豐に來りて申しけるは、先年不慮の過失に依りて御勘氣を蒙り、御家を立去り、一日の飢渴淩ぎ難く、大窪美作を賴み罷在と雖、重代の主君爭か忘れ奉るべき。哀れ先非を御寬宥あらば、一命を抛つて、忠節を盡し候べきと、起請文を捧げて申しければ、覺世、是天の與ふる幸なり。吉良への事始に、先づ長濱の城を夜討にすべし、手引仕れと仰せければ、右馬丞悅び畏りて、彼城は、某棟梁にて築き候へば、案內曇りなく候。誠に某、城中へ出入仕るに、晝夜共誰咎むる者もなく候間、手引仕らん事、いと易き御事に候と申しければ、覺世悅び給ひ、さあらば汝は急ぎ歸り、時分を計り告知らせよとて、右馬丞をば歸され、頓て究竟の兵三百人勝り立て、種崎の城へぞ遣はし置かれける。斯る所に同月廿六日、暮過ぐる頃より暴雨頻にして、夜色窈溟たり。是ぞ待つ所なりとて、三百人の兵、宵より種崎を出で、御磐瀨に至り、右馬丞が一左右をぞ待ちにける。是をば知らで美作は、今宵雨中の徒然に、酒宴して慰まんと、家の子郎等

召集め、謳ひ戯れ舞ひ遊ぶ。此有様を見澄し、右馬丞手引して、城に忍び入り、頓て火をかけ、鬨の聲をぞ上げにける。城には思ひ寄らざれば、防がんとする者一人もなく、火の光を便にて、敵なき方へと逃ふためき、我先にと落行くを、追詰め〳〵討取り、勝鬨を擧げ、生捕少々連れ、種崎へ歸りしは、勢猛にぞ見えにける。浦戸の城は、其間手指す計に近けれども、風雨烈しかりければ、數輩の士、徒に門を締め戸を立て、前後も知らず休みしかば、鬨の聲も聞かず、火の手をも見ず、味方の城の落ちけるを、餘所にして夜を明しける。

長濱合戰の事

大窪美作は、希有にして命を助り、急ぎ朝倉へ立越え、此由を申しければ、茂辰大きに驚き怒りて、此上は是非を評しても益なし。唯運命を天に任すべしとて、一族從兵二千五百餘騎を率して、長濱に馳向ふ。さる程に長濱の城夜討の次第、岡豊へ注進ありしかば、覺世大きに悦び、取る物も取敢ず、急ぎ種崎へ立越え給ふ所に、茂辰

長濱へ出張あると聞えしかば、頓て其勢一千餘騎、慶雲寺の前へ打出でらる。式部少輔は日出野の西の方に備へ、兩陣互に弓鐵炮を進めて、鬨の聲を上ぐる程こそあれ、敵味方三千五百餘騎、一度に颯と懸合ひて、思ひ〳〵に相戰ふ。半時計切合ひて、互に勝鬨を上げ、四五町が程兩方へ引分れ、敵味方を見渡せば、兩陣過半濺ひて、死人戰場に充滿たり。覺世の子息彌三郎元親十八歲、今日初陣なりけるが、いかゞして か味方を離れ、戸の本の西の方に、廿騎計にて控へ給ふ。吉良の士是を見て、願ふ所の幸なりと、大窪美作・其子勘十郎・吉良民部・宇賀平兵衞・長越前・河村四郎左衞門を始として、五十騎計驀直に打つて懸る。元親少しも擬議せず、鎗取つて近付き、敵三騎弓手馬手に突伏せ、大音聲を上げて、昨日までも互に肩を雙べ膝を交せし同僚ぞかし。爰を引退きて、何の面目ありて再び人に面を合すべき。夫武士は、命より名こそ惜けれ。一足も引くべからずと、駈出で〳〵下知し給へば、元より逸雄の若者共、此詞に勵まされ、黑煙立てゝぞ打合ひける。池添源兵衞は、大窪勘十郎を討取り、東四郎右衞門は、吉良民部が首を取る。宇賀平兵衞是を見て、遁すまじと打つて懸る

を、濱田久左衞門つと駈寄せて、火花を散らし戰ひしが、濱田敢なく討たれけるを、弟善左衞門駈出で、平兵衞を討取りけり。吉良民部少輔是を見給ひ、一騎合の勝負は、叶はじとや思はれけん、大勢を以て取籠めよと、惣軍横合に懸りけるを、覺世見給ひ、彌三郎討たすな。續けや〳〵と下知し給へば、長宗我部左京進親貞・吉田伊賀介・其弟江村小備後・一圓但馬・井上六郎兵衞・同喜介・高島三郎左衞門、眞先に進んで鎗を入れ、敵味方入亂れ、汗馬東西に馳違ひ、追つ返しつ、旌旗南北に開き別れて、十七八度揉合ひたるに、兩方共に戰ひ屈し、東西に引分れ、暫く息を繼ぐ所に、岡豐勢の中より、洗革の鎧着たる武者一騎、八端帆の船の帆柱のせうもとを取りて、輕々と打擔げ、閑々と、小歌謠うて進み出でたり。兩陣の兵、あれを見よ、人間にてはあるまじと稱美す。敵陣近く歩み寄りて、高聲に申しけるは、敵味方互に面を相知りて候へば、名乘るも鳴呼がましく候へ共、時に取つて知らぬ人もあるべければ、申すにて候。是は江村小備後と申す者なり。日來旁とは、茶の會酒宴の席に於て、參會すると雖、弓矢の對面は是始に候へば、一際華やかなる働して、敵味方の瞳を醒させ候べ

し。すは參り候ぞと、群立ちたる敵の中へ走り懸れば、一度に崩れて逃行くを、追討に討つ程に、只卵を、石を以て押すに異ならず。誰か是に手向ふべき。漸々として式部少輔は、海際を東へ、浦戸の城にぞ籠られける。覺世續いて押寄せ、掴みに揉んで攻めにける。長宗我部左京進は、群に拔んで、糖塚に馬を控へて下知せらるゝ所に、黑糸の鎧を着て、鎗提げ城より駈出で、井の村左助と名乘りて、左京進に走懸り、胸板を丁と突くを、左京は太刀を以て打拂ひ、三打四打打合ふ所に、左京進郞等、中に取籠めんと、大勢駈寄するを見て、左助叶はじとや思ひけん、城中にぞ引取りける。片岡二郎左衞門とて、强弓の矢繼早、眞先に進み出で、大勢を射落し、矢種盡くれば、打物を拔いて戰ひしが、敵皆城に入り、堅く守りて出合はざれば、斯くて城を見上げて日を送るも徒然なるぞ。一番乘して眠を覺させんと狂言いひて、切岸半計上りけるを、城中より放つ鐵炮に討たれて、眞逆樣に落ちて失せにけり。其後覺世下知して、若宮の前南北海際まで柵を結ひ、海には番船を浮べて、四方の通路を留めければ、城中には、籠鳥の雲を戀ひ、涸魚の水を求むるが如くなれば、いつまでの命を、此

世中に殘さんと、寄手は是を歡び勇み、味方は是に弱りて悲めり。斯る所に覺世、いかなる所存にやありけん、攻口を開きて、種崎へ引退き給ひければ、茂辰頓て浦戸を出で、朝倉の城にぞ籠られける。

元親潮江城を乘捕る并覺世卒去の事

さる程に覺世は、種崎にて人馬の息を休めて坐しけるが、少し例ならぬ心地なりければ、先づ岡豐へ歸陣ありて、療養を遂げられ、重ねて發向あるべしとて、浦戸の城には左京進親貞、種崎には江村小備後を置かれ、長濱の城は破却して、船にて歸陣し給ひける。元親も共に歸り給はんとて、既に船に召されけるが、此事は潮江より起るなれば、重ねて先づ潮江を攻むべし。然れば此序に、宇津山より見分して、西孕より、船にて岡豐へ歸るべしと宣へば、老臣共、宇津山は城より山續きにて、手指す計に近く候。只是より岡豐へ御歸陣、然るべしと申しければ、いや何程の事かあるべきとて、手廻りの勢三百騎、御奥瀨・河古目・横濱を經て、宇津の山に至りて、先勢坂を半

計り上り行く所に、いかにしてか聞きたりけん、潮江の郷人百二三十人、宇津の山の峠へ駈出で鬨の聲を上げ、石を落し大木を倒し、喚き叫んで攻懸る。先手の勢、思ひ寄らざる事なれば、一度に吐とぞ崩れける。元親是を見て、貳き者共の有様かな。あの郷人原に、後を見するやうやある。鐵炮をつるべかけ、其勢に乘りて押上れ、懸れ懸れと齒噛をして下知し給へば、逸雄の若者共、鐵炮を打かけ、曳々聲を出して捲り立て〳〵、排して攻上りければ、郷人共怺へ兼ね、我先にとぞ逃去りける。山傳ひに、西を指して行くもあり、鹽屋崎を北へ逃ぐるもあり。元親は峠にて、暫く見分し給ひ、いざ此城を攻むべしと、眞先に懸りしかば、老臣諫めけるは、城中の勢量り難し。此の小勢にて寄せ給はん事、覺束なく候。本山をさへ亡し給ひ候はゞ、斯樣の端城は、獨り落ち候べし。大義の前の小事、閣き給ひ、平に御歸陣候べしと申しければ、いや〳〵元親見所あり。此城には人はなきぞ。急ぎ攻入れと宣ひければ、若者共承り候と、われ〳〵と攻寄せ、逆茂木を除け塀を越え、門押破つて見れば、實にも元親の推量に違はず、爰の木の枝彼處の梢に、旗馬印を結付けて、敵一人もなかりけ

長宗我部元親沈勇

り。老臣共大に驚き感じて、暫く閉口して居たりける。元親の前に畏つて、抑城中に、人なきを知召され候は、如何なる御思慮に候やと申しければ、元親仰せけるは、つく〴〵此城を見るに、天に飛ぶ鳥、林に居る鳥、嘗て驚く事なし。是一。又旌旗動かざるは詐なりといへり。城の旗印、所定まりて動く事なし。是二。扨逃ぐる者、城に味方ある時は、出づるを待兼ねて、必ず城を見やるべし。然るに城の方を見るもの一人もなし。是三。人城より必ず打つて出づべし。是四。城に人なき事明らけし。疑ふ所にあらずとぞ宣ひける。此元親は、生得背高く色白く、柔和にして、器量骨柄天晴類なしと見えながら、要用の外は物いふ事なく、人に對面しても會釋もなく、日夜深窓にのみ居給ひければ、姫若子と異名を付けて、上下囁き笑ひけり。されば當家も末になりぬと、覺世深く嘆き給ひ、數度の軍にも具せられざりしが、今年既に十八歳なりければ、戰場をも見せんとや思しけん。此度初めて長濱へ伴ひ給ふ所に、戶の本の合戰に、味方を離れて坐しければ、覺世見給ひ、あのうつけを見よ。唯捨置きて、打殺せとぞ宣ひける。斯る所に元親、大きに勇を振ひ給ひしかば、覺世悅

長宗我部國親死去

び給ふ事限りなし。又小勢にて、敵城近き宇津の山に至り給ふのみにあらず、此城を乗取り給ひしかば、諸軍舌を振ひ、是凡人にあらず。後には天下に譽を顯し給ふべしと、稱歎せぬはなかりけり。さる程に覺世は、岡豐に歸り給ひ、種々の醫療をされけれ共、針灸調劑の術も絶え、既に臨終に及びしかば、彌三郎を呼びて、我病命今に迫りぬ。本山は怨敵の張本なれば、報酬の志深しと雖、時至らずして打過ぎぬ。然るに今度彼が領內に入りて一戰に打勝ち、三ヶ城を乗取る事、生前の本望、死後の思出なり。されば我爲には、本山を討つより外に供養なし。我死せば、一七日の間は、世法に隨ひて汝が心に任すべし。夫過ぐれば、喪服を脫ぎて甲冑に換へ、軍議を專にすべし。此旨堅く心得よと宣ひ、永祿三年六月十五日、五十七歲にて、遂に卒去し給ひけり。さらぬ別れの悲しけれども、扨あるべきにあらずとて、岡豐の東北千歲山謙序寺にぞ葬りける。斯くて元親は、一七日の作善、心の如く執行ひ、悲涙未だ乾かずと雖、亡父の遺言に任せ、吉良退治の評議をなし給ふ。

吾川陣幷一條殿、蓮池城を攻め給ふ事

浦戸・長濱・潮江落城すと雖、吉良は素より多勢の城の多かりけり。先づ本山には本山佐渡守、森には和田美濃守、白箸には種田岩右衞門、梅木には大黑與七兵衞、今井に今井左馬助、尾立に中內記、杓田に大黑主計、萬々に吉松式部、秦泉寺に秦泉寺大和守、久萬に久萬豐後守、一宮に近藤某、國澤に國澤將監、高坂に大高板權頭、井口に井口勘解由、福井に稻毛右京、神森に神森出雲、木塚に木塚左衞門太夫、其外吉良・秋山・西畑・仁野村・森山・神田等、詰り〳〵に城郭を構へ勢を入置き、其身は朝倉に在城して、本山阿波・義井修理・鵜來巣紀伊守・吉良五郎兵衞・德久左助・島田善左衞門・川村四郎左衞門・長越前・同左近左衞門・竹中彌右衞門・中島新介・高石與七・岡崎與左衞門・河村兵庫・森本六郎次郎などいふ究竟の者共、是を守護す。柏尾山・鷲尾峯・三谷の峠・久禮野山・樫山・國見峠、其外山々峯々手寄々々に、烽火の場を定め、時々刻々に相圖をなし、相救ふ事、毒蛇の首尾を合すが如くなれば、吉良を攻傾けん事は、中々思ひ

も寄らず見えにける所に、式部少輔長濱の軍に討負け、朝倉へ引退き給ひしかば、俄に事の出で來るやうに、上下周章騷ぐ事斜ならず。　城々大きに恐怖すと聞えければ、元親、時は且くも失ふべからずとて、同廿五日、急ぎ岡豐を打立ち、種崎に一日逗留ありて、長宗我部左京進・江村小備後を先手として、吾川郡へ發向あり、木塚の城へ押寄せらる。　城主左衛門太夫出向ひて戰ひ、勇を振ふと雖、多勢に無勢叶はず、人質を出して降參す。　夫より秋山・森山・西畑・仁野村等の城を攻伏せられて、腹を切るもあり、明退くもあり、降參するもあつて、手向ふ者なかりければ、直に吉良の城を取巻き、一日一夜息をも繼がず、新手を入替へ攻むれども、本山の一族、多勢にて籠りしかば、固く守りて降らず。　元親城の體を看得して、一旦には攻干し難し。　先づ此陣を引くべしとて、攻口を開き、森山の城には富家刑部を入置き、秋山・吉原・木塚にも加勢を籠置き、既に歸陣に趣かるゝ所に、一條權中納言兼定卿より使者を以て、先年蓮池の砦を本山に攻取られ、無念少なからずと雖、勢微にして本意を遂げず、年月を打過ぎぬ。　然るに足下出勢の折を窺ひ、其費に蓮池を取返すべしと思立ち、勿論其

一條兼定蓮池城を攻む

方より、彼地へ人數を差越されまじく候とぞ仰せける。元親委細畏り承り候。高岡郡に於ては、些も手を指す覺悟に候はず。急ぎ彼表へ御勢を差向けらるべく候。若御人數不足に候はゞ、加勢進上仕るべしと卽答ありて、八月廿七日、岡豊へ歸られけるが、頓て名を改めて、宮內少輔とぞ申しける。さる程に兼定卿、卅餘騎の軍兵を牽して、宇佐浦より三森を經て、蓮池の城へ押寄せらる。城中の者共は、土佐・吾川の城殁落の沙汰、日々に聞えければ、吉良・朝倉もいかゞあらんと、唯岩に腰かけたる心地する折なれば、防ぐ兵一人もなく、我先にくにとぞ落行く。扨こそ蓮池・高岡の郷、再び一條家の采錄となりにけり。

土佐郡城々軍の事

爰に大高坂權頭國澤將監・大黑主計は、多年本山の幕下にて、政事を談じ軍議を評し、茂辰も他に異なる思をなして、自然の時は、一方の大將にと賴み思はれける所に、彼等は皆長宗我部が一族なれば、日來の契約を變じて、元親にぞ屬しける。是を始と

して秦泉守大和守・吉松式部・稻毛右京、人質を出して降參し、近藤某は、城を明けて失奔す。久萬豐後守俊宗は、固く守りて降らざるを、谷式部左衞門先登して攻入りければ、久萬叶はず、城を明けて落行きけり。此久萬と申すは、左馬頭義朝の五男希義、父の緣座に依りて土佐國へ流され、吉良に坐して、吉良の冠者と申しき。其一子八郎終に吉良の城主となり、數代連續して、十六代の孫吉良常陸介俊國が次男次郎高俊、此久萬を領してより氏とす。今豐後守俊宗までは、五代とぞ聞えし。俊宗、元親に攻落され逐電して、久萬の城は、久武肥後に給はる。然るに豐後守は、國澤三河守が長女を娶りて、親族たるに依つて、三河守口入して、後に元親へ降參す。此時久武肥後老年に及び、法體して正源と改め、一宮のとどうに隱居せしかば、豐後守には、本領久萬を給はりて還住す。斯くて土佐郡へは、長宗我部右兵衞・吉田備中入道周孝・同次郎左衞門・福留隼人・中島大和を差向けらるゝ。中にも備中入道は、一年聊所用に付きて、本山へ立越え、暫逗留せし事ありしに、井口勘解由と一所にありて、心安く語りしより、常に書音を通はしければ、使を以て、急ぎ降參候へ。周孝取持つべし

といひ送りける。勘解由使の者に向つて申しけるは、御心入祝着せしめ候。迚もの事に、元親是へ御向ひ候へかし。降參の印に、一矢進上申すべしと、嘲哢してぞ返しける。周孝聞きて、憎い井口が言分かな。さらば返禮申さんと、手勢計を引具して、井口の城に押寄せける。勘解由聞ゆる勇者なれば、百七十騎を左右に備へ、寄手の城中へ駈入りて、七横八縱に打破る。寄手怺へず、一度に崩れて逃げければ、二郎左衞門馬駈居ゑ大音上げ、扨も黒き有樣かな。返せ〳〵と呼ばはりければ、家臣吉田九郎右衞門・同又兵衞・西內助左衞門・同助七・横田九郎左衞門、大將を捨てゝ逃ぐるといふ事やあるべきとて、惣軍取つて返し、時移る迄、火を散らして戰ひけるが、互に兩方へ颯と引きて息を繼ぎ、井口は馬駈廻し、下知する所を、三郎左衞門が郎等中野新八、岨を傳ひ繁みの際より狙ひ寄つて、ひやうと射る。井口が左の脇より右の方へ、矢先六七寸射拔きたり。さしもの勇者と雖、究竟の矢强なれば、一言に及ばず、うんと計を最後にて、馬より落ちて亡せにけり。新八箙を叩ひて、城の大將を射止めたるぞ。續け人々と呼ばはりければ、寄手悅び、一度にどつと懸りける。城兵共、何

の爲に惜むべき命ぞと、駈出で〳〵一人も殘らず討死す。周孝父子城に駈入り、勝鬨をぞ上げにける。頓て使を馳せて、岡豐へ事の由申しければ、元親感悦ありて、井上城を周藤にぞ給はりける。神の城へは、長宗我部右兵衞・福留隼人・中島大和向ひける。此城は、雲に聳えたる高山にて、四方皆嶮岨なり。中にも北の方は、屏風を立てたる如くにして、鹿兎も通ふ事能はず、西一方のみ山に續きたるに、大木を倒して、逆茂木とし、石を疊みて垣としければ、人の上るべき樣もなし。されども攻めずして、城の落つべき道なければ、惣勢曳々聲を出して押上る所に、弓鐵炮の手垂共籠りたれば、只寄手手負ひ討たるゝ計にて、城中恙なかりけり。只麓に控へて進み得ず、徒に日をぞ送りける。隼人申しけるは、今の如く味方討たるゝ計にては、城を落す事難かるべし。此城、四方を放れたる高山なれば、城内に水はあるべからず。西の方の山續より、汲み運ぶと覺えたり。勢を廻し是を防ぐならば、城中渴に臨んで、獨り落つべしと、西の方芝牧山へ勢を廻し、鐵炮を備へ、城より人の出入を留めけり。斯くて六七日過行けば、城中今は渴に及ぶらんと思ふ所に、夕つかた城内西の方少

し小高き所に、馬引出し、瀧の如く水を汲みかけて洗ひける。寄手輿をさまし、いやいや城に水は澤山なるぞ。晝夜爰を守りたるは何事ぞ。方便を替へて攻むべしと、攻口をぞ開きける。後に是を聞けば、城中既に渇に臨み、草柴の露にて咽を濕し、雨を待つとも降らざれば、城主出雲、敵の機を取らんと、日暮物の色さだかならぬ時分に、米を馬に酌みかけしかば、外へは、水のやうに見えけるとかや。斯りし程に寄手も退屈して、皆面々に陣取りて、帷幕の内にぞ休みける。爰に福井の住人共、一所に集り居たりけるが、或夜一人申しけるは、方々は何とか思ひ給ふ。我々共は此度降參の者と雖、案内者にせられ、此寄手にも加へられたり。然るに人並に、城の旗計を守り居て、仕出す事もなくては、人口を塞ぐに所なし。思ふに此城北の方は、鳥も翔り難き嶮岨なれば、敵爰をば油斷して、番人をも附置くまじ。いざや人々、他の勢を交へず、我計此所より忍入り、城を攻落さんといひければ、傍より、いや〳〵若仕損じたる時は、二なき命を失ひ、而も人に笑はれん。無益なりといひければ、始の男、士の言は、再び返さず。我忍び得たらば、城に火をかくべし。其時は各鬨を作りて寄せ

給へ。火の手上らずは、討たれたりと思召し、念佛して給はれと打笑ひ、いひ捨て立出でけり。其中に一人、串さるゝ所潔し。日頃一所に語りし傍輩を、一人見放すといふ事やあるべき。我も伴ひ行かんと立出づれば、我々も見繼がんと、三人跡より續きける。頃は九月廿三日亥刻計の事なるに、空掻曇り小雨降りて、目刺すも知らず暗き夜に、神の森の北の岨へぞ向ひける。元より此所、木もなく竹もなく、切岸の如くにして、一片の雲に聳えたるを、死出の山よと戯れて、楸茅の根荊なんどを力とし、足も耐らぬ所に、命を限りに上りける。二時計辛苦して、今は半を過ぎぬらんと、一息繼いで見上ぐれば、何とは知らず笠の如く覆ひ懸れり。雲影に能く見れば大岩なり。取らんとするに便なく、歸らんとするに道もなし。進退爰に谷りて、草の根一つを命にて、大息繼いて居たりける所に、廿三夜の月、ほのぼのと出でにけり。其光に邊を見れば、茂りたる楸あり、一人手を延べて取付き、兎角して岩の上に上り、頓て差繩を岩角に結付け、其端を下しければ、四人是に取付きて、岩の上に上りつゝ、是より上は嶮しからず、人の行交ふ道見えたり。今は是迄なりと五人立別

れ、三所に火をかけ、靜り返つて、事の樣をぞ見居たりける。暫くあると城中より、黑煙を卷きて燃え出でたり。五人の兵八方に驅廻り、鬨の聲を上げければ、山彥に答へて、大勢の聲とぞ聞えける。殘りし者共是を見て、扨は五人の輩、乘り得たるにこそあれ。續け者共と呼ばはれば、惣軍取る物も取敢ず、鐘太鼓を鳴らし貝を吹き、鬨を作りて押寄せたり。城には思ひ寄らざれば、防がんとする兵一人もなく、我先にと逃げにける。出雲が妻女は、周章てゝやありけん、北の岨より逆に落ちて死にけり。卽其處に葬りけるが、後に人に祟をなしければ、近隣の野人村老集りて、落神と名付け、一社の神に齋ひて、今に祭禮をなすとかや。出雲は焰の中を逃れ出で、東の尾崎に驅上り大音聲して、神森出雲腹切るぞ。寄つて首を取れと呼ばはれば、我討取らんと、七八人先を爭ひ驅寄るを、眞先に進む二人を、同じ枕に切倒せば、殘る者共膽を消し、かいふつて逃げにけり。出雲是迄なりと、腹搔切つて亡せにけり。されば此所を鄕人共、腹切森とぞ申しける。石立にも神田にも是を聞きて、叶はじとや思ひけん、兩城共同日に明けて、皆朝倉の城にぞ籠りける。さる程に本山領、南

長宗我部元親勢威振ふ

郡は吉良・朝倉の外は、皆岡豊へ隨ひ靡きければ、元親下知して、城々を守らせらる。先づ一宮・米本には、谷忠兵衛を差置かれ、近藤某が居城近藤谷、幷にはけ谷・鴟が峠の城をば、皆破却せらる。神田城は細川備前入道宗桃、石立の城は吉田三郎左衛門・廣田四郎兵衛を入置かる。此外降參の輩は、舊領に安堵して在城す。神森・鷲尾は勝れたる高山にて、遠候の便よければとて、鷲尾には番手の士を籠置き、神森城をば非有に預けて守らせらる。此非有と申すは、元は眞言坊主なり。當國瀧本寺の僧侶にて、元親の歸依僧なるが、其器にや當りけん、國政の奉行になし、山内三郎右衛門・久萬二郎兵衛・豐永五郎と相並び、公事評定軍議に預かる。諸方の間者にも行きしとかや。元親頓て落墜せよと宣へ共許容せず、一生精進潔齋にて居たり。毛利に安國寺、長宗我部に非有。時の人是を一對坊主といひ習はせり。されども安國寺は名利に耽り、一度發名しけるが、佛意にや違ひけん、終に生捕られて、首を刎ねられぬ。此非有は國政に交はると雖、毫髮の私なく、利慾に耽らず、武功もなく勇名もなく、一生終りけるとぞ聞えし。此森の邊は、非有が知行なればとて、此城を預けられた

り。楠瀨年人・岡村平兵衞・同善左衞門・同與四郎などいふ家の士を、遣し置きてぞ守らせける。谷忠兵衞とて、元親の肱股の臣なりしは、非有が弟なり。

秋山城夜討幷吉良城軍の事

斯りし後は、長宗我部へも附かず、吉良へも歸らず、勝負を兩方に窺ひける近隣の者共、皆岡豐へ靡き隨ふのみにあらず、本山相傳譜代の家人、厚恩異なる郎從共の中にも、緣を求め便に隨ひて、降參する者多かりけり。さる程に爰の亂妨、彼處の放火、苗代返し、苅田、麥薙、鐵炮の競合、永祿三年より同五年に至る迄、日々夜々止む時なく、死生存亡を宗とする程の軍はなけれども、吉良は日に添へて衰へ、長宗我部は月を隨つて猛威を振ひけり。式部少輔申されけるは、亡父入道殿、土佐・吾川二郡幷長岡郡の北の山分を領して、一度先祖の家を興し、後榮を子孫に殘す。茂辰苟も遺跡を繼ぐと雖、全く保つ事能はず、三年を經ず、長濱の合戰に打負け引退きしより後、數ヶ所の城廓を攻落さる。我生前死後の恥辱なり。一度是を取返さずんば、縱ひ元

親と死を共にすと雖、嘗溺の口をば雪ぎ難し。亡父尊靈、草の陰にて、さこそ言甲斐なく思召すらんと、恐れる眼に涙を浮べて宣へば、義井修理、御諚御理に候。さり乍ら故入道殿、忍の字を額に書きて、御座の側に掛けて、常に仰ぎ候ひしは、忍にあらざれば功をなすことなし。汝等構へて忍の字を忘るゝ事なかれと仰せられ候ぞ。只幾度も、忍の字を御心に味ひ給ひ、兵を伏し武を隱し、時を待ち給ふべしと、詞を盡して申しければ、茂辰の理に打たれて、古人の詞に、敗軍の將は再び謀らずといへり。兎も角も修理に任すべしと宣ひけり。茂辰の嫡子將監親茂は、默然として聞き居たりけるが、潛に吉良の城へ立越え、諸將に向つて申されけるは、式部少輔殿の所存、義井修理が諫言斯の如し。然れども我是を信服せず。抑膝下の城を敵に取られ、餘所に見て、晴然として守るといふ事やある。是を取返さんに、何の難き事あらんや。畢竟味方の士共、皆敵に機を呑まれ、攻取らんと思ふ心なき故なり。いざ今宵秋山の城を夜討にすべし、手近き森山を閣き、秋山へ寄せんとは、よも思ひ寄るまじ。太公望も疾毀ニ其不意一といへり。若し森山・木塚より後詰をせば、夫こそ願ふ所

本山親茂秋山城を襲ふ

なれ。豫て手分をして、兩方へ附入り、一度に乘取るべしと、謀細やかに、義に當つて宜ひければ、一座均しく此一言に勵まされ、尤然るべしとぞ同じける。さあらば暫くも猶豫すべきにあらずとて、夜討に馴れたる兵四百人勝りて、二百人をば秋山の寄手とし、二百人をば後詰の手當として、笠符を一様に付けさせ、合詞を約束して、夜既に二三更の程なりければ、秋山の城へ押寄せ、二百人同音に、鬨を吐と作る。城中大きに震動して、馬よ物具よと犇く程に、暗さは闇し、分内は狹し、馬放れ人騷いで、手負ひ討たるゝ者數を知らず。我先にと逃げふためきて、生捕らるゝ者も多かりけり。頓て城に火をかけ、勝鬨を上げて、吉良の城へ引取りける、扨こそ長濱の返報はしたりと悅ばれけり。木塚左衞門太夫は、浦戶城へ所用ありて立越え、夜更けて歸る所に、何とは知らず、大勢崩れ懸りて來る音す。左衞門驚き、人を遣して何事ぞと問へば、爾々と答へて、足早に行くを追懸け、木塚の城はいかにと問へば、秋山より先に、燒落され候と云捨てゝ逃延びけり。左衞門、扨いかゞせんと思案す。郞等共、急ぎ岡豐へ立退き給ひ、重ねて大勢を以て取返され、然るべしと申しければ、

左衛門、いや〳〵我れ城に在合はず、燒落されたる事、誠に不運至極なり。其燒跡も見ずして立退きたらんには、後日の嘲哢逃れ難し。思ふに敵は、未だ城の邊にあるべし。紛れ入りて、よからん敵と組んで、刺違へ死すべし。爰を遁れて、逃げたりと沙汰せられては、再び人に面は向けられず。後るな〳〵と眞先に進みければ、諸人此議に同じて、揉みに揉んでぞ歸りける。城近くなりて見れば、城は恙なし。不思議に思ひ、人を先達て、左衛門殿御歸りぞと呼ばはりければ、城中には、悅合ふ事限なし。左衛門若し長濱より、直に岡豐へ落行きなば、世の物笑となるべきに、勇は面を起し、名は義を汚さずと、諸人擧つて感じける。此由岡豐へ聞えければ、油斷すべきにあらず。さらば討手を遣せとて、長宗我部左京進・江村小備後・福田隼人・中內惣右衛門・桑名彌兵衛・木塚左衛門太夫・富家刑部、其勢一千三百餘騎、吉良の城へ差向けらる。吉良よりは、森美作・大窪美作・本山阿波・竹中彌右衛門・岡村與左衛門・河村兵庫、城を出でて駈向ふ。さる程に兩方の軍勢、弘岡の野に打臨みて、敵三度鬨を作れば、味方も鬨の聲を合す。馬の足に障る草木もなき、平々たる廣き野に、兩陣相懸り

に懸りて、一所に颯と入亂れ、火を散らしてぞ戰ひける。汗馬の馳違ふ音、太刀の鍔音、矢叫びの聲、山彥に答へて夥し。辰の刻より未の終まで、十七ヶ度の駈合に、兩方に討たるゝ兵八百餘人、疵を蒙る者は數を知らず、兩陣互に戰ひ屈し、相引に引退き、城兵は城に入れば、寄手は陣を取り、帷幕の內にぞ休みける。其後は互に弓鐵炮軍にて、捗々しき合戰はなかりけり。

朝倉合戰の事

長宗我部元親本山茂辰合戰

長宗我部元親は、永祿五年九月十六日、朝倉へ發向あり。香宗我部內記・同右兵衞・久武肥後・同內藏介・中島大和・吉田伊賀助・同二郎左衞門・馬場因幡・國吉甚左衞門・岡左衞門太夫・桑名丹後・野田甚左衞門・十市備前守・池豐前守・横山九郎兵衞・工文將監・國澤將監・大高坂權頭・秦泉寺大和守を先として、以上其勢三千餘騎、朝倉城に押寄せ、鬨の聲を揚ぐれば、城中にも鬨を作り、辰の刻より、兩陣互に矢合して、入替へ入替へ息をも繼がず。其日は一日戰ひ暮らし、相引に引取りける。翌日早旦岡豐勢、

鬨を作りて押寄せ、兩陣相挑みて、未だ戰はざる所に、若武者一騎、緋威の鎧に、同毛の甲、龍頭打つたるを着て、塗籠藤の弓を持ち、葦毛の馬に乘り、大門開かせ、大音聲にて、是は本山將監親茂なり。伯父に向つて弓彎かん事、大の恐れ候へ共、うけて御覽候へと、暫く堅めて、元親の旗を指してぞ射たりける。其矢三町餘を越えて、宮內少輔の前に立ちたる兵の、甲の金物射削り、元親の草摺に、裏をかゝせてぞ立ちたりける。卽此矢を取つて見給ふに、本山將監親茂と、漆を以て書きたり。元親、世悴めはいつの程に、是程に射習ひたるぞと宣ひけり。親茂生年十六歲、背高く骨太く、心も剛に、手も利いたり。祖父梅慶入道は、無雙の精兵なり。式部少輔は些し劣りけるが、將監は壯年の頃ほひは、父を越え祖父にも勝るべしとぞ、人皆申しける。親茂二の矢を取つて、一陣に進み來る。與津左衞門太郎を、狙ひ澄してはたと射る。思ふ矢坪を違へず、胸板をかけず射通して、後に控へたる野中三郎左衞門が乘りたる馬の平頭に、沓卷責めてくざと射籠みたりければ、與津は、あつといふ聲と共に、馬より倒に落ちて死す。野中が馬は、屛風を倒すが如く倒れければ、主は、弓杖突きて下立

ちたり。長宗我部は、隱れなき精兵なるが、是を見て、いで某も一矢仕らんと、十五束三伏の金磁頭、沓卷を殘さず引詰めて、弦音高く切つて放つ。遙後に控へたる蒲原彈正が甲の眞向より、眉間を碎きて射拔きたりければ、一言に及ばず、馬より落ちて、起きも直らで死しけり。其後二人立並びて、矢種を惜まず差詰め引詰め、散々にぞ射たりける。沓の子を打つたる樣に控へたる敵なれば、何かは外るべき。馬武者十六騎射落されければ、惣軍前へも進まず、後へも返さず、矢面なる人を楯にせんと、背を縮め色めく所を見澄し、得たり賢しと、鵜來巢紀伊守・義井修理・中內記・金井左馬助・川村四郎左衞門・島田善左衞門・長左近左衞門、勝鬨を作りて七百餘騎、轡を雙べて駈けたりければ、寄手立足もなく、一同に崩れてぞ逃げにける。元親目を怒らし、試し返せと、馬を駈居ゑて下知し給へ共、大勢の靡き立ちたる習なれば、返し合する者一人もなく、我先にと引きける間力なく、勇將も猛卒も、同じ樣にぞ落行きける。朝倉勢勝に乘つて追懸けゝる。元親も、旣に危く見えけるを、野中・五百藏が一族返し合せ防ぎ戰ひ、一所にて皆討死しける。其間に元親は、急ぎ遁れて、神田の城に

ぞ籠られける。茂辰透さず押寄せ、前後より追取卷き、只一揉みにと、息をも繼がず攻めたりければ、城中にも、爰を專途と、喚き叫んで防ぎける。逃げ散りたりし岡豐勢、爰彼より馳集り、寄手の跡を遮らんと取卷くを見て、後より捨鼓打つて引きける間、式部少輔も朝倉へ引返すを、岡豐勢、追打に、其數あまた討取りける。扨こそ兩方、牛角の戰になりにけれ。明くれば九月十八日の卯の刻に、元親神田を立ちて朝倉へ押寄せ、茂辰は朝倉を出で、鴨部の宮の前に馳向ひ、兩方鬨の聲を上げ、火を散らして相戰ふ。先陣互に討たれて引退けば、二陣入替り、喚き叫んで切合ひ、討たるゝ者多かりけり。其時式部少輔、三百騎を左右に立て、元親の旗本へ、一文字に駈入り、天を響し地を動して攻戰ふ。卯の刻より酉の下まで、卅餘度の戰に、吉良一族廿三人、賴み切つたる郎從八十五人、其外軍勢二百卅五人まで討たれければ、岡豐方の討死五百十一人と記しける。互に續きて敵にも懸らず、暫く手負を助けて、元親は岡豐へ引退き給へば、茂辰は城を守りて、中々軍もなかりけり。

草薙陣附茂辰本山へ退去の事

兎角する程に年も暮れて、明くれば永祿六年正月元日、年の始を祝ふ所に、朝倉の在家より失火出來、北風盛にして、黒煙天を焦して燒上る。あはや城にも火かゝるかと見る所に、俄に風替り、西より東へ吹卷りける間、城は恙なかりけり。後に是を聞けば、大黒主計・吉松式部、朝倉を燒拂ひ城を乘取り、功に備へんと密に内談して、在家に火をかけゝれども、城には恙なく、火を防ぐ者の外は、靜り返つて居たりければ、流石城へ寄する事も叶はず、守り居たる所に、俄に風替りて、猛火を味方へ吹きければ、吉松・大黒、跡をも見ずして逃歸りける。是を憎しと思ふ者やありけん、草薙陣と名付けてぞ笑ひける。是は日本武尊東夷征伐の時、草薙劍の事に準へて斯くいひしとぞ。朝倉には、味方に返忠の者ありて、敵を引入れ火をもかけゝると云沙汰して、互に心を置き合へり。三軍の敗も、狐疑より生ずといへり。斯くては當城にて、功を立てられん事難かるべし。本山へ引退き、國見・樫山兩所を差塞ぐ程ならば、敵

縱ひ何萬騎向ふとも、恐るゝに足らず。但し本山は、餘り山深く八里遠くして、四方へ往來の便惡きに依りて、故入道殿、當城に移り給ふと雖、本山は究竟の要害の上に、田畠廣く兵糧澤山なれば、攻の城に扱ひ置かれ候なり。是へ取籠り、五年十年も相戰ひ候はゞ、元親も退屈して和談あるべし。其時に至りて、猶計策をなし給へと、諸臣一同に諫めければ、茂辰實にもとて、既に打立ち給ふ所に、領家の郷人數十人馳來りて申しけるは、領家山こそ、究竟の要害にて候へ。先是へ御開きありて、兎角の御評議遊ばし候べし。彼山の西の方に、一宿城と申す城あり。是は御當家御草創の始、本山より朝倉の城へ押寄せ給ふ時、俄に彼城を取立て、御一宿ありし故に、所の者共、是を一宿城と申習はせり。其時輙く朝倉を攻取らせ給ひ候。されば御當家の爲には、御吉例に候間、彼地へ御退きありて、御計略を廻らされ、程なく是へ御歸城なされ候べし。御迎の爲に參り候と、謹んで懇情を盡し、誠に他事なげに見えければ、大將も士卒も、皆頼もしき思をなして、永祿六年正月十日の夜、朝倉の城に火をかけ、其光を道のしるべとして、領家山にぞ籠られける。尾立・大栃内(おほがち)・行川(なめかは)・宗安寺・伊野・

本山茂辰本山城に籠る

賀田・横矢・大理・今井・白岩、其外裏山等の軍勢馳集り、深山を堺うて栖籠りしかば、岡豊勢、輙く攻寄すべき樣もなかりけれ共、分內狹く諸事自由ならざれば、本山に至り給ふべきに衆議一同して、同月廿八日、領家山を立ちて、茂辰夫婦父子其外軍勢、皆佐渡守茂定が居城本山の城にぞ籠られける。吉良の城にも、朝倉と同夜に明けて、一所に落行きけるとぞ聞えし。さる永祿元年夏の頃、朝倉山にて女の聲して、本山は又本山になると諷ひしは、斯る前表にやと、今こそ思ひ知られけれ。さる程に長宗我部左京進親貞、吉良の城主となりて、吉良左京進とぞ申しける。

土佐物語卷第四終

土佐物語卷第五

瑞應寺建立附豫岳寺の事

長宗我部元親、老臣を呼びて申されけるは、亡父臨終の遺誡背き難く、悲涙未だ乾かずと雖、供佛御施法の勤もなく、軍門に臨む事、衰亂の時とはいひながら、歎きても猶餘あり。然るに天運に叶ひ、土佐・吾川兩郡南分、悉く存分に屬し、吉良・朝倉を攻取り、亡魂の欝憤を晴らす事、生前の大慶、何事か是に如かんや。此上は佛事供養すといふとも、遺言を背くにあらず。謙序寺を再興し、父母の追善をなさばやと、思ふはいかにと宣へば、各承り、冠昏葬祭は、禮の大なるものといへり。齊家治國の大本に候。急ぎ思召立ち給ふべしと申しければ、元親悦び給ひ、其役々を定め、人夫を揃へ、大工小工を集め、北谷の地形を傚し、石木を刻み、丹靑を飾り、珠玉を鏤め、日を重ね

月を積みて成就しければ、巍然として輝き、儼然としてあらたなり。御父瑞應覺世大居士、御母祥鳳玄陽大姉の菩提寺なればとて、千歳山謙序寺を改め、祥鳳山瑞應寺と號して、千石の田地を寄せられければ、家臣の面々、四百石の知を、司堂田と稱して寄進す。月々の祭貢、朝暮の勤行怠慢なく、佛法繁昌の靈地なれば、二親尊靈、成道正覺疑なしとぞ見えにける。此時の住侶は、通安和尙とて、高才有驗の活僧なり。其生國は知らず。去る弘治三年丁巳、長門國碧雲寺の輪音を勤め終りて、西國順禮の爲め四國へ渡り、岡豐の城下に來り、泊り給ひける。爰に阿波塚とて、岡豐の東に古墳あり。是は往昔、當國豐永の領主、阿州勢を語らひ、當所に攻め來りしに、當山八幡大菩薩、不思議の瑞驗ありて、敵を悉く討取り、其死骸を山中に埋めたりと言傳ふ。然るに彼墳、夜々鳴動する事夥しく、月を積みて止まざりしかば、男女恐るゝ事斜ならず。宿の主、彼僧に向つて、爾々の事あり。法力を以て鎭め給はれといひければ、易き程の事なりとて、彼墳に行き、一偈を書きて立てければ、其夜より忽に鳴止みけり。翌日旅宿を立出でんとし給へば、主又鳴出づる事もやあらん。今暫しと止め

ければ、我れ急ぐ旅にあらずとて、一七日逗留ありけれども、再び鳴る事なかりければ、今は仔細あらじと、宿を立出で給ひける。此由覺世入道へ申しければ、左様の活僧を兼々願ひしに、それは何方へとか聞きつるぞ。豫州へ赴くとこそ仰せられて候ひしがと申しければ、急ぎ呼返せとて、人を追懸けさせけるに、吾川・贄殿川にて追着き、伴ひてぞ歸りける。覺世大きに悦び、對面ありて、先づ山田郷豫岳寺に移して、もてなし給ひける。此豫岳寺と申すは、文正元年丙戌、雪心和尙の開基なり。山田下總守大中臣元道、此年卒去ありて、豫岳常悦と謚し、其菩提の爲に、一字の伽藍を建立して、豫岳寺と號し、山田氏代々の位牌所とす。曹洞宗越前國永平寺の末派なり。長門國碧雲寺の輪番を勤め來れり。開山雪心和尙より、今通安和尙までは、十二代とぞ聞えし。此寺の境內に藥師堂あり。本尊は、下總守元道一年上京の時、不思議の靈夢を蒙り、洛陽因幡藥師を盜取りて下國し、此所に安置す。因幡堂には、其頃の新佛を崇めけるとかや。さる程に元親は、謙序寺を再興して、通安和尙を住侶にせんと宣へば、老臣共申すやう、謙序寺は、豫岳寺の末寺にて候。本寺より末寺へ、

移住然るべからずと申しければ、然らば謙序寺に在りて、豫岳寺を支配せさすべしと仰せければ、是は餘儀なき御計らひに候と、其儀にぞ定まりける。斯くて通安和尙を開山として、瑞應寺に入院あり。今に至りて瑞應寺の住持、豫岳寺を支配するとぞ聞えし。其後文正年中、元親居城を大高坂へ移されたる時、常通寺をば、土佐郡石立村岩戸に移され、瑞應寺は同郡大高坂の北、猿が馬場國島に移して造營あり。其後又浦戸へ城を移されて、此兩寺をも引取らるゝに極りける所に、元親卒去あり、程なく盛親も亡び、國替りて其事止みけるとぞ。

元親緣邊の事

永祿六年の夏、元親家老の面々を召集めて、我れ既に廿五歲に及ぶなり。妻女を求めばやと思ふはいかにと宣へば、家老共承り、是は目出度御思慮、御家門繁昌下民安泰に候。何れをか迎へさせ給はんやと申しければ、元親、美濃國稻葉伊豫寺が孫、齋藤豐後守政吉が息女を娶らばやと思ふと宣へば、家臣共驚きたる風情にて、暫く閉

口の所に、中島大和謹んで申しけるは、遠國よりの御緣邊、深き御了簡候か。當國は申すに及ばず、阿讃豫の三國にゝ大名城主數輩御入り候。是をこそ御緣者になされ、自然の時は、御方に賴ませ給ひ候べし。近國を閣れ遠境御緣組は、豫て御容色の御事など聞召し及ばせ給ひての上に候か。戰國の時節と申し、遠國といひ、世上の人口をも御思惟候へかしと申しければ、元親打笑ひ、申す所理なり。さり乍ら天神地祇にかけて、全く彼息女が、容色の沙汰を聞及びたるにあらず、色は兎もあれ角もあれ、祖父伊豫守父豐後守、武名香ばしき士なれば、彼腹に出生の子、父祖にあやかる事あらんと思ふ計なり。昔和田の義盛が、木曾義仲の妾巴と嫁したるは、色を好むにあらず、彼が勇力を望みて、朝夷三郎といふ、天下無雙の勇者を產めり。誠に宜しからずや。但それは、其武勇を面の當り見ての事なり。今の世に、巴如きの女あるべきとも覺えず。よし又ありとも、其者を見るべきやうなし。唯父祖の武名を慕ふなれば、遠國をも、强に厭ふべきにあらずと宣へば、何れも大きに感歎して、天晴武將の器なりと、上下擧つて稱しける。斯くて吉田左衞門佐を使者として、濃州へ遣しけ

れば、豐後守も伊豫守も大に悅び許諾あり。頓て吉日を選び、婚禮をなし給ふ。政吉子三人あり。長子は石谷兵部少輔。其次は齋藤內藏助政治、後に利三と改む。三は女子、元親の北の方是なり。內藏助も子三人あり。嫡子は明智孫次郎入道立本。二男齋藤土產左衞門。三は女子、稻葉惣左衞門に嫁す。後に台德院殿秀忠公の御乳母春日の局是なり。され共兄土產左衞門も召出され、與三右衞門と改め、御旗本の數に加へさせ給ふとぞ聞く。斯くて元親、子供あまたあり。第一は女子、一條左中將內政朝臣の室。第二は彌三郎信親。第三は女子、吉良左京進親實妻。第四は香河五郎次郎親和。第五は津野孫次郎親忠。第六は女子、佐竹藏人妻。第七は右衞門太郎盛親。第八は女子、善松十右衞門妻。是皆政吉娘の腹なり。第九は右近某。第十は女子、小宰相と號す。これは小少將といふ女房の腹に出來たり。家門の繁昌いふ計なし。

秦泉寺并白岩夜討の事

吉良式部少輔は、領家にも悚へずして、本山へ引退れしと聞えしかば、昨日までも、

朝倉へ追從したる輩、岡豐へ隨ひ附く事斜ならず。中内記・今井左馬助・大黑與七兵衞・横矢が一族、皆降參す。種田岩右衞門は、白石の城を明けて、本山へぞ籠りける。されば岡豐には、春雷聲を發する勇をなせば、本山には、蟄虫戶をさす思をなせり。中島新介申しけるは、唯今の如くにては、味方日に增し月に隨ひ通り行きて、獨り首陽に餓死すべし。夫武士は、唯戰ふべき所を戰はずして、身を愼むを以て恥とす。扨も本山の者共が、敵を恐れて混逃(ひたにげ)に逃げ藏(かく)れて、頸をも出さぬ事の可笑しさよと、諸人に笑れん事こそ口惜けれ。迚も死する命を、只蹲り居て、徒に死期の來るを待つ事、且は云甲斐なく、且は武士の本意にあらず。いざ敵地に入り、民家を燒拂ひ、或は亂妨し、其費に乘つて、漸々に岡豐へ攻入るべしといひければ、諸卒皆此議に同じて、究竟の兵を勝りて、一手は中島新介・高石與七・森本六郎次郎を大將として、久禮野より一宮へ向ふ。一手は岡崎與左衞門・德久左内・桑川久助を大將として、白岩より今井・大理邊を放火すべしと、相印合詞を定め、遙々の山坂を凌ぎて、兩方へ馳向ひけり。頃は五月五日の夜なれば、月は宵より入りにけり。時刻よくなりぬとて、

二百餘人久禮野の坂を下りて、一宮の在家に火をかけたれば、魔風盛に吹かけ、民屋撫づるが如く燒通り、餘煙四方に覆ひて、西御前・東御前・三所・若宮五十八所・稻女社・七所の王子・天神社・竈殿・惠比須の社・辨才天・津宮・若王子・御奥社・犬宮・仁王堂・護摩堂・鐘樓堂・三昧藏・經寶藏・國司屋・天上屋・廐屋・經所・井屋・東西塀門・一鳥居・二鳥居・三鳥居・三重の塔・社僧社人神主の居所、悉く一時に灰燼となり果て、煙蒼天に立登る。淺猿しかりし事共なり。されども大明神の本社計、殘らせ給ふぞ不思議なる。本山の軍兵共、一宮に火をかけて、爰をば閣き、秦泉寺の在家へ打入り、老若男女をいはず、撫切に打つて捨て、三谷の方へ引取りける。秦泉寺大和守是を聞きて、我領内に入り來る敵を、安穩に生けて返すといふ事やある。遁すまじと、手勢八十餘人引具して、揉みに揉みて追懸けたり。本山勢、山の麓にて返し合せ、火出づる程にぞ戰ひける。大和守手繁く切りければ、寄手引色になる所を、森本六郎次郎眞先に進みて、駈入り打破り、兩方へ相引に颯と引きて、大和は麓より引返しければ、本山勢も、難なく三谷を越えてぞ引取りける。斯くて一手の本山勢、是も同じく五日の晝より、谷

原・白岩に集り、夜更けて近邊へ押入り、亂妨放火せんと議しける所に、野心の者ありて、方便の次第を、細に今井左馬助に告知らせけり。今井頓て一族親友へ觸廻し、今井六郎左衛門・同彦左衛門・大黑太郎左衛門・弘瀨甚左衛門・同三郎左衛門・同三郎兵衛、其外近邊の軍勢相催し、敵の後へぞ廻りける。本山勢は、夢にも知らず休み居たり。夕陽山に隱るゝ頃ほひ、大勢後より來るを聞きて、味方の油斷者共、馳に來ると覺えたりと、一同に大笑して居たる處に、大勢咄と鬨を作りて押寄せたり。本山勢仰天して、鑓よ太刀よと周章ふためく所を、縱橫無礙に駈破り、追詰め追廻し、切臥せ突伏せければ、戰ふもの一人もなく、我れ先にと、前後不覺に逃散りける。恥を思ひ名を惜む輩は、馬を控へ、戴し返合せよと呼ばはれ共、耳にも更に聞入れず、ちりぢりになりて落行けば、力及ばず、猛將も鋭卒も、本山迄ぞ引取りける。

馬上の城番人狼藉の事

安藝の郡安藝の領主安藝備後守蘇我の國虎は、蘇我赤兄の大臣の末裔なり。元暦の

古、平家滅亡の時、能登守教經と組みて入水せし、安藝の太郎が後なりけり。數十代此所を領して、繁華又並ぶ方もなかりしに、永祿六年の秋、不慮の小事より事起りて、同十二年の秋、安藝の家亡びけるこそうたてけれ。其頃長宗我部元親、中郡大略討隨へ、人勢日に增し月に盛なり。素より秦家興立の志なりければ、幡多・安藝兩郡をも窺ひたく思はれけれ共、幡多は厚恩の主君なり、安藝は一條殿の聟なり、同根一枝なれば、天の恐れをや思はれけん、又は中郡未だ悉く治まらざりければ、先づ其内を整へて、外を窺はんとや思はれけん、其色もなく、互に音信通路ありて、障る事もなかりけるに、不慮の亂出來にける。其濫觴を尋ぬれば、千丈の堤の壞も、僅に蟻穴より起り、大厦の傾き覆るも、唯一楔の甘きに初まるとかや。安藝郡和食の鄉に、金岡・馬の上とて、二つの城あり。是安藝よりの砦にて、香美郡の堺なれば、用心の爲に數十人の士を籠置き、寄手に替へてぞ守らせける。或時馬の上の番の若士申しけるは、香美・長岡・土佐・吾川の邊は、此の城攻、彼の合戰などいひて、慰ありと聞く。長宗我部殿は、唯手に合ひたるもの計を、侮り廻らるゝと見えたり。當郡は多勢なれば、

手さす事もなし。我々淋しくて暮し兼ぬるに、あはれ元親、些し指をなりとも指されよかし。よき慰ならんといひければ、又一人進み出で、其方が如何程願ふとも、宮內少輔殿は來られまじ。唯何卒して、眠を覺すやうにせよといひければ、尤なりとて、腕押・脚押・首引・枕引・手綱引・盤持・飛こくら抔して、日を暮らし夜を明しける。又始の男のいひけるは、日每に同じ遊なれば、事古りて面白からず。手を換へて遊ばんといひければ、さらば何をがなして遊ばんと、あらぬ事共を企てける。一人進み出で、爰に究竟の事を思ひ出したり。今は菓多き時節なり。いざや鄉民の園へ、理不盡に押入りて取るべし。主咎めば、城番の若士、慰に取るぞといふべし。若し又强ひて咎むるならば、一當當てゝ見知らすべしといひければ、是に過ぎたる事あらじと、一番二番の鬮取をし、東西南北の手分をして、役所をば打捨て、少々番に殘置き、方々へ立越えける。實にや世俗の諺に、垣越ゆる馬一疋あれば、千疋の馬垣を越ゆるとは、斯る事をや申すらん。人の園に押入り、栗柹などを取りければ、亭主之を見て、何者ぞ、狼藉なりと、捧ちぎり木にて向へども、さらぬ體にて居たりける。亭

主呆れて、抑誰人なれば、斯る振舞をばし給ふぞと問ひければ、是は馬の上の城番の若士、慰の爲に來りたりと、打笑ひてぞ居たりける。亭主聞きて、始より御名乘候はば、慮外を致申すまじきものを、眞平御免ありて、御心任せに御慰み候へと、慇懃に述べてぞ歸りける。始の程は、斯樣にも會釋すれ、度重なり、樹木菜園を荒しければ、鄕人共腹を立つれどもすべきやうなく、もてあつかひてぞ居たりける。金岡の番人之を聞きて、若き者共、是は面白からん。何にても珍しき遊をせんといひければ、其中に老人共、いや〳〵無用なり。我々如きの役にも立たぬ老人を、番人の數に入れらるゝは、斯樣の時の爲なり。全くばさらを働かする事なるべからず。見よ〳〵馬の上の禍、近日にあるべし。油斷大敵、堅く愼むべしと制しける。若士苦笑ひして、孔子臭き男が見聞く所にては、何をしたりとも面白からじ。詮ずる所、宰予が流を汲みて、晝寢せんには如かじと、互に叫き笑ひける。爰に香美郡大忍の庄、夜須といふ所あり。是は大備後重俊が城地なり。此庄は、其先安藝に屬しけるが、近年は岡豐の領となりければ、元親の下知として、安藝の境なればとて、大備後、上夜須の城に

移住す。此城を、大藏が城といふ。其外二丈松・釣鐘の森・尼が森とて、三の城を構へてぞ居たりける。馬の上の盜者共、始の程は近鄕を立廻りけるが、次第に取るべき菓葉もなくなりければ、私領他領の遠慮もなく、四方を駈廻りける間、上夜須の鄕へ押入り、例の如く、人の園の姉の實を、是非なく押倒してぞ取りにける。主是を見て、やゝ大膽の晝强盜、遁さぬぞと、大聲上げて喚けども、さらぬ體にて居たりける。主愈腹を立て、子供隣友呼集め、大勢一度にはつぱより、押へて繩をぞかけにける。盜者共肝を消し、我々は、馬の上の番人なり。斯樣々々の次第なりと、始終を申しけり。主聞きて、よし何者にもせよ、盜をしたれば盜人よと、取つて引立て、吉田に斯くぞと申しける。大備後、誠に禍は下より起るとかや、國虎知らるゝ所にあらず。以來互の爲なればとて、若士一人相添へ、此者私領に押入り、不義を働き候に付、鄕民共搦取り候間、引かせ進じ候。若し此方の下部共、御領に於て不義ばし候はゞ、召捕り下さるべしと、慇懃にぞ申しける。國虎聞き給ひ、何吉田の領へ押入り、狼藉したるものなりとて、搦捕りて差越したりとな。其吉田といふもの、昔は兎もあれ角もあ

れ、今は元親が家臣なり。禮儀を存せば、黒岩か有澤が方へこそ使を遣すべきに、國虎に直に使を越すのみならず、彼が下部共、此方へ來りて不義あらば、召捕り給ひよなどとは、誠に緩怠過ぎたる詞かな。其召人召せとて引寄せさせ、仔細を尋ね給へば、始終を申しける。國虎、若き者共徒然の餘りには、あらぬ事をもすまじきものにあらず。是は竊盜强盜の類にもあらず。それ〳〵とて、使の前にて繩を解きてぞ許されける。使驚き、返答は聞くに及ばずとて、つい立ちて急ぎ立返り、吉田に斯くとぞ申しける。吉田が嫡子伊賀介、怺へぬ男にて、討つて捨つべきものを、手延にしたる事の無念さよ。此上は馬の上の城を乘捕り、本望を達せんと、究竟の若者廿三人勝り立て、先一人百姓の體に作り、馬の上へ遣し案内を窺ひけり。番の者共は、安藝より咎もなかりければ、愈恐るゝ方もなく、遠近を駈廻り、あらぬ惡事をなしにける。斯る所に彼百姓行きければ、番の者四五人殘り居て、晝寢して居たりけるが、此者を見て、何者ぞとて咎めける。彼者畏りて、是は和食村彌五介と申すものにて候。當所の御番と仰せられ、若き御士衆御越なされ、野菜樹木を荒され、迷惑いたし候。重ね

て御越なきやうに、御取成下され候はゞ、有難く候はんと、謹んでぞ申しける。番の士起きも上らず大笑して、いかにも理なり。當國の名物といひ、汝が住所の物といひ、和食蘿蔔持參せよ。其返禮に、よく取成し得させんといひければ、彼者、それこそ易き御事に候へ。近日蘿蔔差上げ候べし。能きやうに賴み奉り候と、打笑ひて立返り、此由を申しければ、伊賀介喜び、我先にと押寄せける。番の者、人音を聞きて、又鄕人共が大勢來ると覺えたり。物ないひそと、空寢入して、高鼾かいてぞ臥しにける。吉田が勢、一度に吐と押入れば、番の者驚き、こはいかにと起上らんとする所を、起しも立てず、一人も餘さず討捕り、吉田が家の三引兩の旗押立て、鬨の聲をぞ上げにける。廿餘人が聲なれども。山彥に答へて、數百騎が聲とぞ聞えける。方々へ立越えたる溢者共大きに驚き、立歸らんと見上ぐれば、吉田が旗を差上げ、大勢乘入りたりと見えければ、詮方なく右往左往に落行きけり。金岡には是を聞きて、老人共、さればこそ、いはぬ事かとぞ申しける。國虎此由聞き給ひ、大きに驚き、吉田めに謀られぬるこそ口惜けれ。頓て取返し、無念を晴らすべしとぞ忿られける。何

者の仕業にやありけん、一首の歌を高札に書きて、安藝の町にぞ立てにける。

伊賀の介やりを廻して馬の上唯一散に乘取りにけり

斯くて伊賀介は、直に馬の上に在城して、壘を高く塹を深くして、用心嚴しくぞ見えにける。

吉田伊賀介妻女の事

さる程に元親は、本山へ大勢を差向けられ、日々夜々鬨の聲鐵炮の音鳴止む隙なく、此に攻寄せ彼に押寄せ、打合ひ切合ひ、利を得て進む時もあり、怯れて退く時もあり、互に雌雄まち〳〵にして、いつ果つべき軍とも見えざりける。吉田伊賀介も、寄手の人數にて、本山へぞ向ひける。斯る所に過し頃、馬の上の城を取られし番の者共、留守の折をや窺ひけん、百四五十騎相催し、馬の上へぞ押寄せける。折しも伊賀介が妻女は、女房共を集め、四方山の物語をして居たりける。其中に年十四五計なる女の童、何心なく緣に立出で、遠見して居たりけるが、大勢寄せ來るを見て大きに驚

き、敵寄せ來り候と、大聲上げてぞ申しける。伊賀介が妻女些も騒がず、立出で見遁して、いかさま是は彼番人共が、城を取返さん爲に、留守の隙を窺ひ、寄せ來ると覺えたり。さらば此方にも用意せよとて、城中にあらゆる何がしが女房下女はした、扨は言甲斐なき下部の男迄を呼集め、下知をなして、頭に甲を着せ、手毎にも甲を持たせ、塀の上へ差出し、或は左右に鎗長刀を持つもあり、前後に印を挿すもあり、大旗小旗を木の枝塀柱に結付けて、大勢籠りたる體にぞ見せかけゝる。寄手の者是を見て、案に相違やしたりけん、暫し猶豫しけるが、さらぬ體にて城へは寄せず、西の方へ打通り、頓て安藝へ引返しける。一朝の謀にて、虎口の難を遁れ、夫の名をも揚げにける。其頃何者か詠みけん、

打落ちし馬の上人今もまた乘りも得ずしてかちでいにけり

上下男女笑ひ訇りければ、國虎怒りて、其臆病の者共、一々縛首打てとぞ宣ひける。斯くて伊賀介は、和食・赤野をも領しける。和食に永松寺といふ寺は、伊賀介が菩提寺なり。

一條殿御簾中御離別の事

一條氏衰微

一條黃門兼定卿は、去る永祿元年戊午、伊豫國宇津宮某娘を迎取り給ひける。一度笑ひば、百の媚ある御粧、優にやさしく御座しければ、二葉の末かけて、變らぬ色を賴みつゝ、淺からぬ御中に、二男一女出來させ給ひければ、偕老同穴の御語らひなるべきに、定めなきは世の習ひ、月に叢雲花に風。いかなる障や出來きけん、黃門御心に叶はぬ事ありとて、俄に御離別あるべしと聞えければ、長臣土居宗三大きに驚き、兼定卿の御前に出で、淚を流し申しけるは、斯る御事候の由粗承り候。若君姫君をば如何にと思召候ぞや。且は輕々しく、且は御情なしと、詞を盡し理を責めて諫め奉れども、更に承引御座しまさず。同七年甲子、終に道理通されける。連理も枝折れ、比翼も友を離れつゝ、御子達を捨置き給ふ御心の內ぞ痛はしき。其後程なく、豐後國大友宗麟入道の息女を迎取り給へり。容色無雙の美人なれば、御寵愛淺からず。されば
こそ此御事を聞召し及ばれて、先の御簾中を出し參らせ給ひけん、移り安く

賴み難き御志なれば、此後も又、いかなる御心か出來んずらんと、吁かぬ者はなかりけり。晝は盡日遊宴をのみ事として、國の危をも顧みず、夜は終夜婬樂にのみ耽みて、世の政をも聞き給はず、唯長時の樂にのみ誇りて、禮儀の事をば忘れてもいはず、天理に背き人法にも違ひ、上荒み下廢れて、終に一條の家、衰へけるこそ淺ましけれ。

一條殿豫州合戰の事

人腸胃虛則外邪易ㇾ侵、國政亂則盜賊易ㇾ起。頃日幡多中村の野風、上惰り下怨みて、天地否をなしゝかば、豫州宗和郡の溢者共、斯る所をや窺ひけん、一揆を催し、幡多の山々里々へ打入り／＼、亂妨放火す。是のみならず同國久留島の賊船共、幡多の浦浦へ押寄せ、在家を燒拂ひ追捕しける程に、浦里の男女怖ぢ恐れ、四方へ逃隱れて、幡多は人なき里となりにけり。一條殿此由を聞召し、鄉人原に邊境を侵されて、上下驚き騷ぐ事こそ安からね。急ぎ馳向ひて、狼藉を散らせよとて、軍勢を伊豫國へ差向けらる。同國法華津播磨守則延は、常に味方に志ありければ、頓て馳加はりて、

一條兼定
西園寺公
廣合戰

宗和郡の在々に押入り〳〵、苗代返し麥薙刈田、亂妨放火して、爰に戰ひ彼に競合ひ、老若男女を選まず撫切にして、西園寺左衞門太夫公廣が屬城三所まで攻取りける。公廣聞きて、安からぬ事共かな。三ヶ城を取返し、直に土州へ攻入るべしと、軍勢を驅催し、黑瀨の城を出で馳向ふ。土佐勢是をば夢にも知らず、三城を輙く乘取る。鄕人共皆逃散りて、手向ふものあらざれば、豫州勢恐るゝに足らずと思ひ侮りて、城には言甲斐なき老人下部共を殘置き、富家に入りては押取し、酒家に入りては數盃を酌み、狼藉頗甚し。公廣此由聞き給ひ、軍勢を三手に分け、旗を卷きて擔がせ、靜まり返つて、土佐勢を三方より取廻し、同音に鬨を作りて押寄すれば、土佐勢驚き、すはや敵の寄せたるぞ。馬よ物具よと犇く所へ、公廣眞先に進みて、喚いて懸けて、七横に追廻し、八縱に打破り、驅通り打通し、無法無礙に揉みける間、討たるゝもの數を知らず。希有にして逃延びたる者共も、鎧・腹卷・太刀・刀・弓・鐵炮を打捨て、赤裸になり、命計を遁れつゝ、這々土佐へ逃歸る。見苦しかりける分野なり。二ヶ城の者共是を聞きて、叶はじとや思ひけん、敵未だ寄せざる先に、城を明けて落行きけり。

さる程に公廣三ヶ城を取返し、勢に乘つて國中を打靡け、近日土佐へ立越え、中村の城を攻取らんとぞ議せられける。一條殿は、軍兵あまた討たるゝのみならず、儲けたる城を取返され、天下の人口に落ちたる事、生涯の恥辱と思召しければ、自身馳向ひ、雌雄を一戰に決せんと、岡豊へも臼杵へも、加勢をぞ乞はれける。元親は、江村小備後を大將として、五百餘騎差遣はす。大友義鎭入道宗麟は、合圖を定め、豊後の臼杵を立ちて、豫州へ向はる。兼定には、法華津播磨守と牒し合せ、其勢五十餘騎、中村を打立ち給ふ。西園寺左衛門太夫公廣是を聞き給ひ、居ながら敵を待たんは、武略の足らざる所なり」とて、二千餘騎を率し、城を出でて馳向ふ。兩陣鬨の聲を合圖に、打物拔いて一度に入亂れ、東西に分れ南北に合せて、七八度揉合ひたるに、土佐勢戰屈して、引色に見えければ、公廣、爰を揉めや者共」と、眞先に進み給へば、惣軍一同に打つて懸る。あはや土佐勢破れぬと見る所に、武者一騎駈出で、江村小備後と名乘りて、洗革の鎧着て、大身鑓の四尺計なるに、樫木の八九寸廻なるを四間柄にして、尾なし鹿毛とて、隱れなき駿足の、五尺計の馬に乘り、競ひ懸る敵の中へ、無二

も嫌はず駈入り縦さま横さま前後左右を、突伏せ打伏せ擲り伏せ、或は甲の鐵を胴へ打込み、或は胴中を裏表かけず突通し、又は小手・髄當・太刀・長刀を微塵になし、或は人馬共に尻居に打居ゑ、當るを幸に薙ぎ廻りける。此勢に辟易して、さしも勇ある黑瀨勢、開き靡きて引退く。公廣大音上げ、一騎合の勝負は叶ふまじ、大勢懸つて取籠めよと、駈出で〳〵下知し給へば、惣軍取て返し、喚と喚いて打つて懸る。兼定打見給ひ、江村討たすな、小備後討たすな、續けやとて、相懸りに懸りて、火を散らして攻戰ふ。互に味方を恥しめて、引くな進めといふ聲に、退く兵なかりけり。大友宗麟は、兩方戰屈し、力疲れたる所を見て、荒手に替へんと、遙の外に控へて居給ひしが、時分を見澄し二千餘騎、唯一手になりて、横合に懸りけり。黑瀨勢暫く支へて戰ひけるが、敵は大勢なり、味方は疲れたり、馬强なる新手に駈立てられ、あまた討たれて引退く。寄手勝に乘つて、鬨を作り懸け〳〵追ひける間、黑し返せといふ族多かりけれども、大勢の靡き立ちたる習にて、一度も更に返さず、我れ先にと城に入り、門戸を差固め、爰を專とぞ防ぎける。兼定卿にも宗麟も、軍は十分に勝たざるを

よしとす。一旦敵にしほを附けぬれば、重ねて發向すべしとて。是より引分れ、互に開陣し給ひけり。

江村小備後歸陣并五倫切の事

一條黄門兼定卿は、豫州より御歸陣あり、江村小備後を召して仰せけるは、汝此度の武勇、兎角詞に述べ難し。傳聞く栗生・篠塚にも、何か劣るべき。比類なき高名なり。我れ四國・九州に譽を得る事、唯汝が一刀の功に依れり。感謝するに餘りあり。急ぎ在所に歸り、休息せよとて、鎧一兩・太刀一腰をぞ下されける。此の鎧、黄門御召の領に拵へたる韋の鎧なり。黄門は背高く骨太く、力飽く迄強ければ、自ら頼みて拵らへたる、したゝかなる鎧なれば、若士二人して舁出でたり。小備後有難しと、謹んで戴き拜謝して、頓て岡豊へ立歸り、元親に見えて、軍の次第を申しければ、元親悦喜淺からず、我年來四國を打取り、漸く興行の志ありと雖、時至らずして過ぐる所に、今度量らざるに、汝豫州に至り武勇をなし、四州はいふに及ばず、九國・中國に譽

を顯す事、我本懷を達する前表なり。是れ事の始といひ、此度の歸陣といひ、祝儀の規式あるべしと宣へば、小備後悦び樣々の設をなして、元親御夫婦御子達女房以下、殘らず請じ入れ、二日二夜、善盡し美盡してぞ饗應しける。色々の品を捧げ奉る其中に、五倫切とて、二尺一寸の小刀を、彌三郎殿へ差上げける。此五倫切と申すは、先年此江村の近邊に人多く失する事あり、死しても失せず、飛んでも失せず、座敷に連つて、集り居たる中に立つとも見えず、出づるとも見えず、搔消す樣に失せて、其行方も知らず、恐しなどもいふ計なし。いかなる化生の所爲とも、人の目に見えざりしが、後には化物顯はれ、或は鬼形となり、又は女に變じ男に化して、上下を選ばず男女を嫌はず、思ふ程に取失ふ程に、近邊の貴賤、申の時より下りになれば、人をも入れず、出づる事もなく、門を閉ぢてぞ居たりける。小備後其頃十三なりけるが、よし何者にもせよ、我住む邊にて、障目附をなすを、餘所に聞きて暮らすといふ事やあるとて、或夜深更に及びて、人靜つて後、人をも具せず唯一人、西江村の住居を出で、丑寅の方へ向つて行く所に、七尺有餘の大の法師、物をもいはず道に立つて居たりけり。

小備後、是なん聞ゆる化者よと、さらぬ體にて近付き、過ぎ樣に拔打にはたと切る。太刀音高く手答して、倒るよと見えしが、掻消すやうに失せにけり。其時聲を上げ、化物を切つたるぞ。續け者共と呼ばはりければ、近所の者驚き、手に〳〵松明を燈し、馳來り見れば、血流れたり。是を追行く程に、遙北の山に、大きなる古墳の五倫倒れて、空の倫牌二つに割れ、血の流れけるこそ不思議なれ。所の者共、是程の古石に誑らされ、あまたの男女惱されしこそ安からね。いざ墳を掘崩し、白骨と五倫とを、大路に曝すべしと評議しける。國親此由聞き給ひ、是は奇代の不思議なり。罪業深く、惡趣に墮せし人なるべし。誠に不便の事なりとて、石塔をあらたに立て、僧を請じ、墳の前にて經を讀み弔はせ給ひける、情の程ぞ有難き。其後は化物なかりけり。夫よりして此刀を、五倫切と名付けたり。天晴源氏重代の髭切にも、爭で劣り候べき。是を帶ばせ給ひて、敵を亡し國家を保たせ給ふべしとて、彌三郎殿へぞ捧げける。斯る所に一條殿より、土居宗三を使として、國行の太刀一腰・栗毛馬一匹、是は薩摩國瀨崎牧下しなり。下山弓百挺、内五十挺は白木、五十挺は塗籠なり。元

親へ送られけり。是今度加勢合力の御禮なり。彼下山弓と申すは、當國の名物なり。初め高岡郡深崎に、市川とて、隱れなき弓打の名人あり。後に幡多部下山の江川といふ所に移住せしに依つて、下山弓と申すなり。文治三年八月廿日、民部大夫行景使者、土佐國より參着、弓百挺幷魚鳥干物以下を以て、一艘の船に積み、鎌倉殿へ進上せしも、此市川が弓なりといへり。島彌九郎へも、腰物をぞ給はりける。此彌九郎と申すは、元親の弟なり。何故に今此太刀をば給はりけるにぞと、其仔細を尋ね聞けば、去年馬の上の番人狼藉より事起りて、安藝・岡豊不和になり、旣に鋒楯に及ばんとす。されば一條殿、元親に御心置かれぬ事はあるまじ。是全く元親が心底より起るにあらず、其御疑を晴らさせ奉らん爲にとて、舍弟彌九郎を、中村へ人質に參らせしかば、黄門大きに感悅ありて、卽彌九郎へ、佐賀にて千石の知行を與へ置き給ひけるが、豫州より御歸陣の時、小備後と共に、彌九郎をも返し給ひける故とぞ聞えし。宗三は、隱溪寺といふ城下の禪寺を宿として止め置き、城へ請じて、七五三の饗膳、樣々善美を盡されけり。斯くて宗三へ、元親より國俊の刀一腰・馬一匹、是は依

光鹿毛とて八寸六分あり。綿三百把、彌九郎より鐵炮二挺引出物にし、三日三夜、馳走奔走を盡してぞ返されける。

安藝より幡多へ加勢乞はるゝ事

安藝備後守國虎、老臣を集めて申されけるは、扨も馬の上の城を取られたる事、生涯の恥辱なり。其時人數を以て、取返すべしと思ひ立つと雖、旁が諫に任せて閣きぬ。然れども唯餘所に見て、年月を經ば、愈武略の言甲斐なき誇に落つべし。近日大勢を遣し、馬の上を攻取るべしと宣へば、有澤石見進み出でて申しけるは、御諚御理に候。さりながら衆愚の謂々は、一賢の唯々に如かずと申候へば、道を知らぬ人の議は、取つて評するに足らず候。勇將鋭士多勢にて籠りたる城、輙く攻落されたる例珍しからず。況少勢にて守る城をや。是れ時の運による事に候へば、一偏に戰の科といひ難く、合戰の習、一旦の勝負は、見る所に候はず。大行不顧細謹、大禮不必辭讓。大將の宗とする所なり。小事を聞きて大事を忘るゝ時は大功ならず。昔新

田義貞は、無雙の名將と雖、赤松圓心に誑られしを嗔つて、尊氏を閣きて、日を經て是を攻めらる。其際に尊氏、西國の大軍を率ゐて攻上られ、義貞敗軍す。其後又義貞、大敵の尊氏を忘れ、小敵の黑丸を目に蒐けて、無法に戰死せらる。是れ一時の嗔に天下の草創を忘れて、莫大の佳名を失ふ。古人の詞に、若先暴怒唯能自害。豈能害ㇾ人といへり。誠なるかな後醍醐天皇、朝敵の爲に傾けられさせ給ふ事、聖運開くる時、未だ至らずといひながら、元此人の戰死によれり。されば君の爲には不忠にして、身に於ては瑕瑾なり。是併し乍ら本を捨て末を求め候事にして、大事忘るゝの誤なり。彼を以て此を思ふに、今岡豊を閣きて、馬の上を攻められん事、然るべく候はず。但宮内少輔が軍功を尋ね承るに、其向ふ所、傾けずといふ事なく、其攻むる所、落さずといふ事なし。中郡大略彼手に屬して、其威漸く近邊に振ひ候。國中悉く討隨へん事、程あるまじきと、諸人擧つて沙汰し候。然れ共幡多は、厚恩の主君なり。御當家は、一條殿の御親族に候へば、兩郡に於ては手指す事もあるまじく候處に、不慮の變義出來しぬれば、是を幸にして、御當家を窺はん事必定なり。先づ内を調へ

安藝國虎一條兼定に加勢を乞ふ

て、外を窺はんが爲に、中郡平治の後を待つ事疑なし。御油斷あるべきに候はず。然れば頃日、本山の城攻合戰にて、岡豐は定めて無勢なるべし。軍は不意に起す時は、必らず敵を拉く習にて候。此時岡豐へ急に取懸る程ならば、暫時に攻落し候べし。當郡の勢を差向けられなば、不足はあるまじく候へ共、一條殿へ加勢を乞はせられ、大軍を以て、一戰に功を顯さるべし。然る時は夜須・馬の上は、攻めずして獨り落ち申すべし。此議いかにと申しければ、國虎も家臣も、然るべしとぞ同じける。さらば一條殿へ加勢を乞ふべしとて、頓て使者をぞ立てられける。元親は、本山を攻めらるれば、國虎は又岡豐を攻めんと議す。蟷螂蟬を窺へば、野鳥蟷螂を窺ふと、人間世を譬へたる、莊子が詞ぞ誠なる。一條殿家臣を召され、此事いかゞすべきと、損益を問ひ給ふ。安藝左京畏つて申しけるは、是は勇々しき大事に候。其故を如何となれば、安藝殿は、御親子の御中に候へば、御望に任せて、御加勢遣されん事勿論なり。若さなきに於ては、御中悖亂に及ばせ給ふ事掲焉なり。又軍勢を差遣し候時は、宮内少輔恨み奉るべし。彼は御當家の御恩深く蒙り候へば、偏に主君と仰ぎ奉

り、無二の忠貞を盡し候事、上樣にも能く知召して候。然るに其志を無に處し給ふ上は、怒を起し恨を含みて、怨讎となる事疑なし。然りと雖親疎遠近を以て考ふる時は、御親子の御中捨て難き事に候へば、先づ安藝へ御加勢を遣され、其上にて御扱を入れられ、和平の御取持なされなば、兩方恨もあるまじく候と申しければ、兼定卿實にもとて、三千人竊に安藝へ遣し給ふ。

安藝國虎長宗我部元親を襲ふ

安藝勢岡豐を攻むる事

さる程に國虎は、幡多よりの加勢到着しければ、此事洩れぬ先に、急に岡豐の不意を襲ふべしとて、都合其勢五千餘騎、矢流(やながれ)・和食(わじき)・手結(てい)山を、終夜打越え、香美部岸本にて勢揃して、安岡〔虎〕(カ)左京・專當右馬丞に三百餘騎差添へ、夜須の城の押に置き、赤岡を西へ物部川を打渡り、久枝(ひさえだ)より二手に分れ、一手は野田・立田を北へ、國分寺の前より押寄する。一手は大埇(おほそね)・篠原を經て、布師田の東へ打出でたり。斯くて東西の在家に火をかけて、鬨の聲をぞ上げにける。折節岡豐は、無勢の上に俄の事なれば、騷

動する事斜ならず。上下南北に馳せ散じ、男女東西に逃迷ひ、周章する事窮なし。元親見給ひ、素より城は要害の地なり。敵寄せ來るは覺悟の前、驚くは未練の至なり。それ〳〵とて在合ふ番の士以下、大手搦手の手分して、靜に下知をなし給ひ、其後西山治右衛門を召して、敵の樣を見て來れと宣へば、治右衛門畏つて立ちて、坂本より馬に打乘り、石清川を打越え、布師田近く乘寄せ、夫より東の手へ廻り、急ぎ立歸り、寄手は安藝の勢にて候。西の手は惟宗右衛門尉・一圓但馬守・安岡〔並カ〕三河守、其外一條殿よりの加勢と覺えて、大略幡多の士の旗印にて候。東は安田又左衛門・有井玄蕃・安藝內藏丞、幷に松田宗圓・宗武・恒光・光國等と見えて候と、備の次第を委細に申しければ、元親甲斐々々しき物見、神妙なりとぞ宣ひける。斯る所に近邊に住居の士一領具足等聞傳へ〳〵、山傳ひ岨傳ひして馳付け〳〵來る程に、城兵既に五百騎計になりければ、今は人數に不足なしと勇み進み、一同に打つて出で、敵味方入亂れ、火花を散らして戰ひける。爰に上夜須の城主吉田大備後重俊は、敵より押への勢を置き、岡豐へ寄せたりと見てければ、先づ足輕を出し、弓鐵炮にて會釋、日

を暮らして打破らんと計りける。寄手是をば知らず、城中は無勢なり、打出づる事は思ひも寄らずと、仕寄の陰に休みけり。斯る所に手結山の方より、武者百四五十騎押し來る。城中にも寄手にも、敵か味方かと見る所に、近付く儘に、三引兩の旗を颯と差上げ、吉田伊賀介重康と名乘りて、一文字に打つて懸る。寄手扨は敵なるかと、後を防がんとすれば、前に城兵支へけり。前に當らんとすれば、後より攻懸る。前後に途を失ふ所を、城中よりも打つて出で、揉立て追廻し駈破りける間、寄手立つ足もなく、四方へぱつと逃散りたり。大備後是を見て、逃ぐる者をば追ふべからず。岡豐の軍心元なし。敵の後を遮り、引包み討取るべし。後より續け者共と、伊賀介と相共に、諸鐙を合せて、揉みに揉みてぞ急ぎける。案の如く岡豐勢、心は猛く勇めども、多勢に無勢叶はず、殘些なに討なされ、城中に引いて入り、爰を專途と防ぎける。寄手は機に乘つて、大手の門を押破らんと、息をも繼がず、喚き叫びて攻めにける。既に斯うと見えし所に、不思議や八幡の社大に鳴動して、白羽の矢二筋飛出で、百千の雷の落懸る如く鳴はためいて、寄手の上を飛廻りければ、大將も士卒も、

安藝國虎敗走

是唯事にあらずと肝を消し、皆地に平伏して居たる所に、暫ありて又本の如く、宮中へ飛返りける。其矢今にありて、毎年祭禮に、神主是を携へて、神樂の先を行くとかや。敵味方奇異の思をなす所に、吉田勢追々に駈け來り、鬨の聲をぞ上げにける。寄手、すはや後巻するはといふ程こそあれ、一度に吐と崩れつゝ、子は親を捨て、郎從は主人を知らず、物具・太刀・長刀・旗・差物をも打捨て、我先にとぞ逃げにける。名を惜しむ勇者共は、黑し返せ〱と呼ばはれ共、大勢の引立ちたる事なれば、耳にも更に聞入れず、右往左往に落行きけり。城中には是を見て、涸魚の海に出でたる心地して喜び勇み、門を開き打つて出で、我劣らじと、鑑の野三里の間、追打にぞしたりける。中にも福留隼人・熊谷源助、相並びて追懸けしが、隼人、源助を呼かけて、是程の大崩れに、荒切して通るべし。小切は若者にせさせよといひければ、源助心得たりと、福留廿人切れば、熊谷は十八人ぞ切つたりける。此時國虎が、一人當千と賴みたる兵共、其數あまた返し合せて討たれける。

峯寺觀音緣起附國虎・元親和談の事

峯寺觀音緣起

爰に吉田伊賀介が三男孫助俊政は、常に峯寺の觀音を信じけるが、取分宿願の事ありて、一七日參籠してぞ居たりける。中島藤藏人是を聞きて、結願を祝せんとて、酒肴持ちて參りければ、住持も立出でてぞもてなしける。孫助申しけるは、俊政當山觀音を信じ奉ると雖、未だ緣起を知らず。參籠の次に、御物語承り度候と申しければ、住持、當寺は往昔數度失火にて、舊記悉く燒失せて、委しき事は知れずと雖、今日の御慰に、荒增語り候べし。抑當寺、八葉山求聞持院禪師、峯寺俗に峯寺と號す。嵯峨天皇の勅願、弘法大師草創の所なり。本尊は十一面觀音にて御座す。昔此寺初めて回祿の時、本尊光明を放ちて、南方補陀洛界に飛去り給ふ。其後寺堂再興ありて、本尊を勸請せんと、供養の規式執行の所に、本尊の種子、空中より忽然と壇上に降り給ふ。又當山の西の方に、石土の神社あり。是當國廿一社の其一なり。社の側に、福蛇毒蛇の穴とて、巖穴二つあり。其古き事計りなし。彼穴中より大蛇出で、此山

へ常に往來しけるが、或時遽に身より火出で、林木に燃付きて、餘煙寺堂に及んで、再び燒亡す。其身も燒死して蛇骨殘りけるを、厨子の下に納め置くと云々。其後又度々回祿にて、靈寶舊記悉く紙滅して、代々帝王の勅裁・將軍家御下文・田畠寶物・寄進狀等、多しといふ說のみにて、今詳ならず。二王は湛慶が作なり。其側に紅葉あり。是を飛鳥井紅葉といふなり。是昔よりは候はず、近頃飛鳥井曾衣、御寄進の爲に植ゑ給ふに依つて、所の老父共、申習はし候。御覽候如く、惣じて此山の石、大となく小となく、皆南へ傾きたり。是觀音の淨土南方無垢補陀洛界に向ふといへり。當山は南の峯にて、去斯不遠の補陀洛界なれば、菩薩鎭座の道場なる事著し。一度歩みを運ぶ輩は、二世の悉地を得る事疑なし。況常住歸敬尊信する人をやと、詞に玉を連ねて語られければ、孫助歡喜の思をなして、感淚をぞ流しける。斯くて四方山の物語になりて、酒肴取散らし、餘念なく樂しむ所に、藏人が郞等、慌しく走せ來り、今朝より北に當りて、鬨の聲鐵炮の音聞え候間、道行く人に尋ねて候へば、安藝より大軍にて岡豊へ押寄せ、今軍最中なりと語り捨て通り候と、大息繼いで申しけ

れば、各驚き、一座の興もさめて、暫しは茫然として居たりける。中にも孫助は、今年十六七の若者なれば、一應の思慮なく、南無觀世音菩薩、力を加へ給へと、大音聲に太刀押取つて出でんとす。藏人引留め、其儘にて向はれんはいかゞなり。館へ立越え武具を認め給へ。我も人數を連れて、倶に行くべしといひければ、孫助打笑ひ、運は天にあり、鎧は質屋にありと戯れて、山下へ走り降り、馬に打乘り、諸鐙を合せ、北を指して馳せたりける。恒河山を過ぎて東を見れば、大勢崩れ懸り逃走る。扨は敵はや敗軍したると心得、東を指して追懸けたり。久枝の邊を見れば、十四五騎眞丸になりて、靜々と立退く武者あり。孫助大音にて、やさしく見え給ふものかな。返し給へ。斯くいふは吉田孫助俊政と申す者なりと、詞を懸くれども、聞かぬ由にて落行きけり。孫助腹を立て、臆病者遁さじと駈寄りて、後なる武者二騎切つて落す。殘る者共膽を消し、散々になりて逃げにける。中にも大將と思しき者、大太刀拔いて打つて懸る。心得たりと二打三打打合ひしが、押並んで引組み、孫助取て押へて、首掻切つて立上るを、敵一人返し合せ、鎗を以て丁と突く、孫助さしつたりと、

鎗のしほくびしつかと取る。敵鎗を取られじと引合ふ所を、孫助、こはやさしやと、力に任せて捻ぢければ、鎗の柄、中より折れにけり。敵肝を消し、跡を見ずして逃げにけり。藤藏人は手勢引連れ、遲馳に來りて見れば、人の死骸は數知らず、算を亂して臥したりけり。敵はや物部川をも越えて、味方の勢、長追なせそとて、川より歸るに行逢ひたるに、首三つ取らぬもなく、勢ひ懸つて見えたりける。藏人餘り本意なさに、川端へ行向つて見れば、三人浮きぬ沈みぬ流るゝ者あり。それ〳〵と引上げさせ、何者ぞと問ひければ、是は安藝の夫丸にて候と答ふ。藏人、彼奴等が首を切りたりとても、譽にもならず、助けてやるべしとて、彼等に向ひ、汝等が首は、某がものなり。取つて行かんと思へども、定めて惜しく思ふらん。皆々首を取らするぞ。急ぎ安藝へ歸り、中島藤藏人といふ大善人に、首を繼がれたると申すべしとて、渡瀬を敎へてぞ返しける。孫助是を見て、藏人殿はいつに替り、大慈悲者になられたりといひければ、我素より佛敎をうけて、殺生戒を保つなり。南無阿彌陀佛と大笑して、岡豊へぞ參りける。さる程に元親は、此勢に乘つて、安藝を攻亡さんと義勢あれば、

長宗我部元親安藝國虎和睦

國虎は又、今度諸將の拙き故に仕損じたり。自身岡豐へ馳向ひ、安否を一戰に決せんと、互に牙を硎ぎ、不日に打立たんと、軍勢上を下へぞ返しける。一條黄門此由を聞召し、是兩家滅亡の機、一國動亂の端なり。措くべきにあらずとて、安並・爲松を使として、樣々扱を入れ給へば、兩方其理に服しつゝ、互に和談をなし、軍兵弓を袋に入れ、太刀を鞘に納めて、皆故鄕に歸り、父母妻子寄合ひ、安堵の思をなして、萬歲をぞ唱ひける。

土佐物語卷第五終

土佐物語巻第六

本山陣の事

吉良式部少輔茂辰朝倉を落ちて、領家にも怺へず、本山に籠られければ、味方の兵、氣を失ひ力を落して、此に集り彼に集ひ、逃支度の外は、させる義勢もなかりし所に、高津・野比浦・古味・伊野窪・片見・廣野・西川・黒岩・八畦・立石・大石・大砂子・柳瀬・長淵を始として、韮生の小松・萩野・縦屋・我野・白川・太郎丸・五百藏・野尻・吉野・五王堂・槇山の專當・山崎・押谷・別役・豐永の小笠原・森の土居・北泉・宮古野・相川・地藏寺・石寺・和田・瀬戸・本川の高野・船戸・大藪・桑瀬・寺川の越・裏門・大森・裏山の桑尾・高川・西川・東川・都積・楮谷・中村郷の腊賀瀬・楠瀬・梁瀬・上八川・下八川・寺野・古郷・程野・清水・津賀才・黒瀬・徳光・新別・樅木・安居・大崎の者共、馳集りける間、其勢雲霞の如くなれば、とはかうと可

み喜ぶ事限りなし。彼本山と申すは、國中第一の要害なり。山重なり岸高く、數百丈斷えざる峯の腹に、僅に足を側つ計の細道あり。見下せば靑岩峨々として、淵水音遠く、旅客行人胸を冷す。見上ぐれば白雲峯を埋み、空の衣を涵す馬ならでは。駈り難し。西に樫山、東に國見峠とて、二の道あり。中にも國見峠は、雲半腹を廻つて、國中を一瞬に見る高山なり。若一夫怒つて關に臨めば、萬侶通るを得難き難所なれば、何萬騎向ふとも、攻入るべき樣もなし。本山の境內に入りては、田あり畠あり、村あり里あり。大河流れて林木多ければ、幾十年籠城すとも、疲勞困窮の患なし。故梅慶入道、攻の城に構へ置かれたる、智慮の程こそ淺からね。斯る要害に、多勢にて籠られければ、元親今討手を差向けられ難くぞ見えにける。されども攻めずしては、敵の落つべき道なければ、多勢を遣すと雖、寄手手負び討たるゝ計にて、毎度利を失ひて引退きければ、元親も退屈して、軍議に肺肝をぞ碎かれける。爰に森近江といふものあり。是は其先森の城主森右近賴實が一子なり。本山左近大夫入道梅慶草創の始、森を攻むる事度々なりしかども、右近は聞ゆる勇者なれば、大きに防ぎ

吉良茂辰本山近衛合戰

戰つて降らず。梅慶、和田若狹を語らふに、和田が一族與力して押寄せ取圍み、攻むる事隙透間もなかりければ、右近力盡き、大きに勇を振つて討死す。其子千松丸、虎口を遁れて、爰彼さまよひ、程經て岡豐へ行きて、覺世入道を賴みければ、深く勞り、懇に扶助せられける。頓て元服せさせて、近衛とぞ名乘らせける。其後元親、潮江の城主となし給ひければ、近江大きに悅び、いかにもして本山を討ち、覺世父子の恩を報じ、父の讎をも返し、身の恥辱をも雪がんと、念慮骨髓に徹りければ、より／＼森の地下人共を語らふに、舊恩を思ふ者共多く與して、潛に岡豐の人數を引入置き、此の古城に取籠りける。茂辰此由聞き給ひ、大きに驚き、急ぎ討手を差向けんと議せらるゝと雖、味方に、又何れか野心を企て、いかなる手立をかせんずらんと、互に心を置合ひて、勇む兵なかりけり。斯くては此城にて、始終の功を立てられん事叶ふべからず。瓜生野（うりふの）の要害に引籠り給ひ然るべしと、諸臣一同に諫めければ、茂辰、議は宜しきに隨ふに如かじとて、永祿七年四月七日、本山の城を明けて、瓜生野にぞ籠られける。岡豐勢續いて押寄せ、日夜の境なく、樣々質（てだて）を替へて攻むれば、城中色

色工を替へて防ぎける程に、勝に乘つて進む時もあり、負けて退く時もあり、兩方相引に引く時もあり、雌雄區々なりと雖、寄手は日々に勢加はりければ、城兵は夜々に落失せて、身を放れぬ一族、厚恩異なる郎從の外は、殘り留まるはなかりけり。斯る所に西谷口へ、大勢押寄すると聞えければ、義井修理罷向つて追拂ひ候はんとて、既に打立ちけるが、是を最後とや思ひけん、人數をば殘し置き、手勢八十五騎を引具してぞ向ひける。寄手大浪の如く、同音に喚き叫んで、一面に押入る中へ、些とも擬議せず駈入りて、蜘手十文字に打通り、引通しては駈破り、四方八面に追散らし、とある松の木に馬を控へて息繼ぐ所に、流矢來りて、胸板にはつしと中る。ものものしやとかなぐり捨てけれども、痛手なれば耐らず、馬より落ちて亡せにけり。郎等共は主を討たせて、何の爲に命を惜むべき。一足も退かず、枕を並べて討死す。さる程に西谷口も破れて、敵押入るとて、上下周章騷ぎければ、茂辰、今は遁れぬ所なり。あらぬ敵と討死せんも口惜し。只尋常に自害して、恨を死後に報せんとて、鎧を脱置き給へば、是を見て北の方、些もわろびれたる氣色なく、二人の姫を取り、右に並

べ、守刀を袖に隱し、茂辰の左の方に座し給ふ。嫡子將監親茂・二男內記茂廉・三男又四郎茂直、其外一族郎從二行に列んで、大將御自害あらば、御供申さんと、腰の刀に手をかけて、靜まり返つてぞ居たりける。屠所に赴く羊の歩み、近付く命ぞ哀れなる。斯る所に本山佐渡守が郎等、慌しく馳來り、軍は御和談になりて候ぞ。粗忽に御自害候な。佐渡守はや參り候へども、先達て知らせ奉ると、勢ひ懸つて申しける。こはそも何とある事ぞといふ所へ、佐渡守來りて申しけるは、義井修理討死いたし、御方の軍勢氣を失ひ、色を損じたる體を見候ひしに、斯くては西谷口破られぬと覺え候ひつる間、茂定罷向ひ候所に、吉田大備後入を越して、暫く矢留をいたし候へ、申すべき仔細ありと申に付、其の意に任せ候へば、吉田來りて申候は、誠に不慮の事より起りて大義に及び、骨肉同胞の道絕えて、吳越を隔て候事、啻禍一朝一夕の故にあらず。覺世入道殿舊讐を報ぜんと欲し、臨終の遺言にも申置かれて候へば、宮內少輔殿、亡父の遺誡背き難く、是迄の沙汰に及び候事、唯天理を思召し給ふ故なり。然りと雖、親にも超えて睦しきは、同氣兄弟の愛なり。甥は猶子の如しといへり。聟は

子にあらずや。何れを近し、何れを遠しといはん。時に臨みて恨み、事に及んで恐る事ありと雖、難きに臨みては是を歎き、是を患ひざらんや。縱令合戰に及ぶとも、情なき沙汰を致すなと、岡豊より給ひて候とて、御文數通取出し見せて候と、委細に申しければ、扨は仔細あらじとて、其日の自害は留りてげり。其後茂辰、佐渡守を側へ呼びて申されけるは、元親兄弟、甥姪の事なれば、惡しと思はれずとも、茂辰には、心置かれぬ事あるべからず。恐懼の中に日を送らんも口惜し。所詮妻子をば岡豊へ遣し、我は阿州へ立越え、三好河内守を頼み、時節を待つべしと思ふなり。御邊は妻子を具して岡豊へ行き、宜しく計らひ申されよと宣へば、茂定畏り、涙にくれてぞ居たりける。茂辰此事を知らせなば、よも岡豊へは行くべからず。深く慕ひ歎かん事こそ悲しけれ。又知らせずば、後迄も永く恨むべし。いかにも賺さばやとて、北の方に向つて、御身は子供幷に佐渡守を具して、岡豊へ參り給へ。我は思ふ仔細あれば、阿州へ立越え、三好長治と常に親しければ、是を賴みて、暫月日を送り候べし。御身心安く落着き給はゞ、迎の人を越し給へ。其時頓て岡豊へ行き、一所に暮らし

申さんと、誠しやかに宣へば、北の方、實にも岡豊を、覺束なく思召候は御理、さあらば我々は、佐渡守を具して參り候べし。いか計の事御坐しますとも、構へて粗忽の事ばしなし給ひそ。隨分忍びて、恙なくあらせ給へ。頓て迎の人を參らせ候はんと、立出でんとし給ふが、さるにても、斯る風情になるべきとは、かけても思はざりしをと、伏沈み歎き給ふを、茂定漸々に勇め參らせ、岡豊を指してぞ急ぎける。道すがら北の方、口說き給ふぞ哀れなる。痛はしや、式部少輔殿、行方も知らぬ旅の空、さぞ便なく御坐すらん。いかなる不思議か御坐さん。何の日の何の時か、御迎を參らせ、共に語り慰みて、憂を忘るゝ事やあらんと、歎き沈ませ給ひけり。茂辰は、今を限りと思ひ定め給ひければ、いと悲しさぞ增りける。理なるかな、一樹の陰に宿り、一河の流を汲む程も、知られず知らぬ人だにも、別となれば、名殘を惜む習なるに、況連理の契淺からず、茂辰十七、北の方十三より馴初めて、あまたの子供坐しければ、火の中川の底へも、共に入り共に沈み、限ある別路までも、遲れ先立たじとこそ思ひしに、今より後は夢ならでは、相見る事は有難しと、足摺してぞ歎かれける。扨しも

吉良茂辰三好長治に頼る

あるべき事ならねば、今まで附纒へる者共に暇給はり、郎等七十三人召具して、阿波國へぞ落ちられける。殘りたる者共は、譜代相傳の好、年頃日頃の重恩、爭か忘るべきなれば、歎き悲む事限りなく、茂辰、阿州勝瑞に至り給へば、三好長治大きに悅び、所領を與へ、一方の大將に定め給ひしとぞ聞えし。さる程に北の方は、岡豐の北浦谷といふ所に、結構に營を構へ、深く勞り給ひける。將監は城下に居住し、内記は吉良左京進に預けられ、蓮地にて知行給はりける。又四郎は、西和田越後が入聟になり、西和田勝兵衞とて、馬廻にて、城下にぞ侍りける。

安藝・岡豐義絕の事

永祿十二年四月初、元親、使者を安藝備後守へ遣して申されけるは、先年不慮の事出來て、互に確執に及び候ひぬ。然りと雖戰國の習なれば、必ずしも是を始終の怨敵といふべきに候はず。殊更一條殿の御扱にて、合體せしむる上は、爭でか宿意あるべき。然るに近年中郡の忽劇に依りて、終に會釋に能はず、猶隔意あるに似たり。

近々岡豐へ御來臨候へ。對面を遂げ、互に天神地祇を驚かし、誓約を固くして、骨肉同胞の睦をなし、過失相親し、患難相救ひ候べしと、懇詞をぞ盡されける。使者安藝に立越え、黑岩越前に謁して、此旨申入れければ、國虎宣ひけるは、古典の法を考ふるに、戰國の時、隣國の諸侯、國の境に出で牲を備へ、蘆毛馬の血を啜り、會盟をなすといへり。互に領分の境に出で、誓約をなさんといはゞ、さもあらんか。然るに我を岡豐に來れとは、降參せよとにや。渠は秦の始皇帝の末流と言傳ふれども、日本渡海の後は、大藏・宮員・長官或は隨身等を歷たる計にて、未だ公卿に昇りしものを聞かず。我は赤兄の大臣の苗裔なり。家の勝劣といひ、官位の尊卑といひ、祿の高下といひ、彼が幕下に降るべき謂なし。況我は一條殿と父子の親みなり。彼は一條家恩顧の者なり。何ぞ同列ならん。禮義を存ぜば、元親是へ來りて手を束ね、膝を屈して和をなすべし。我と骨肉同胞の睦をなさんとは、緩怠過ぎたる詞なるに、剩へ我を岡豐へ來れといふ、奇怪の至り、是非に及ばず、元親近年中郡を打隨へ、勢を得るに依つて、我に無禮をなし、事を寄せて當家を窺ふと覺えたり。馬の上を取られたる遺

恨といひ、諸將岡豐敗軍の恥辱といひ、欝憤甚しと雖、一條殿の扱にて、意趣を抑へて打過ぎぬ。素より願ふ所なれば、運を天に任せ、安否を一戰に極むべしと、大きに怒り給ひける。越前畏りて、御諚尤御理に候。さりながら元親小身より發りて、中郡大略討取り、勢日に隨つて強く、月に隨つて盛なり。夫萬物は春生じ夏長じ、秋收冬藏、自然の理なり。今兩家の機を考ふれば、元親は春夏の氣を得て、發達の勢あり。御當家は數十代、繁華榮耀にして、物滿ち事足りぬ。秋冬にひとし。高き則ば危かり易く、滿つる則ば溢れ易し。されば大なる賈は、深く藏して露さず、巨なる富財を蓄へて移らず。勢強きものは、弱を示して暴ならず。是皆老成の遠き慮にして、識見高き者のする所なり。凡そ凡下の法、吉を見吉を聞けば、吉の端なり。凶を見凶を聞けば、凶の相なりといへり。今元親の無禮は、御當家不吉の相なり。深く張公藝が忍の字を味ひ給ひ、枉げて宮內少輔殿の望に任せられ、岡豐へ御參向候べし。是れ強に御家の疵ならず。越王は吳王の溺を嘗めて、會稽の恥辱を雪ぐ。韓信は人の胯を潛りて、大功を立つる事、和漢稱する所なり。大行は細謹を顧みず、一旦渠に

御隨ひあらん事、豈恥辱とするに足らんや。事なき先に御合體あらば、國中並なき御大家なれば、宮内少輔殿も、自餘の城主に準ぜられず、一家同根の思をなし給ふべし。若又元親威に乘りて驕奢あらば、是れ願ふ所なり。將驕る則ば兵必怠る。其機を討つに、事一戰にあるべく候と、理を盡してぞ諫めける。國虎つく〴〵聞き給ひ、汝がいふ所、其理ありと雖、我は八千貫の領主、彼は三千貫の主なれば、昨日迄も、我は爾思ひしぞかし。然るに今更彼旗下に屬して、岡豐に行かん事、中々思ひ寄らず、再び義絶して合戰に及ぶとも、時節到來なり。元親中郡を打隨へると雖、我も安藝郡悉く手裏に屬して、下知を背くものなければ、軍勢は不足なし。其上一條殿へ加勢を乞ふべし。兩家の勢を合せば、中郡の勢は物の數ならず。たとひ元親多勢にて向ふとも、矢流山・新居・穴内の砦を堅うし、姫倉・金岡へも人數を遣し戰ふならば、元親當郡へ手指す事は思ひも寄らず。反つて岡豐を攻取らん事、案の中なりとぞ宣ひける。越前重ねて申しけるは、仰の如く安藝郡は、悉く御手長の境内たりと雖、他を以て自を考ふるに、吾川・土佐兩郡の城持共は、本山に隨ひて無二の味方にて、忠義

を盡し候ひしか共、近年は元親に屬して、反て式部少輔の寇になる。然れば今野根の惟宗殿こそ、御一族の御親みに候へ。其の外安田・多野・奈半利・岡・北川・羽根・吉良、浮津・室津・崎の濱等の城主は附勢なれば、家の子郎等のやうには覺え候はず。是も中郡の者の如く、强からん方に與力すべきなれば、賴みて憑まれず。殊更姬倉・金岡へ人數を加へ、防がれん事も然るべからず。姬倉より此方に、吉田大備後、上夜須・二丈松・釣鐘が森・尼が森四ヶ城を構へ、同嫡子伊賀介、和食の鄕を領して、馬の上に在城す。近里といひ道筋といひ、兵糧武具の運送、自在には通じ候まじ。又矢流・新庄・宍內を要害と思召さば、龜鼈の甲を賴むに同じ。大軍に截所なしと申事の候ぞや。又一條殿御加勢の事覺束なく候。黃門御心宜からず、恨むる者多く、喜ぶ者少く、上下一和せず。此折を得て豫州より、蜂の如く窺ふと承り候間、加勢を乞はせらるゝとも、捗々しき事は候べからず。今元親と鋒楯に及び候事、偏に石を抱きて淵に臨むに等し。御家の滅亡、日を過ぐべからず。能々御思案候へと、憚なく申しければ、國虎大きに腹を立て、扨は我を、元親に對揚すべき器にあらずと蔑して、戰は

ざる先に、軍の勝負を決する事、察するに是れ汝が一分の所存にあらず。諸人の指す所と覺えたり。武門の瑕瑾、生涯の恥辱なり。命の長短、家の盛衰は天運なり。たとひ道路に首を曝さるゝとも、元親が幕下に降る事は思ひも寄らずと、大音上げて宣へば、黒岩力及ばず、此上は主從一所に、尸を曝すより外なしと呟きて、岡豐の使者をぞ返しける。

姫倉・金岡落城附小谷・專當返忠の事

さる程に元親・國虎、和睦忽に破れしかば、安藝へ馳行く輩には、惟宗出羽守益長・同和泉守長俊・栂越太郎左衛門・室津牟三郎・安岡彈正忠・同源兵衛・一圓但馬守・同民部・安岡出雲・北川木曾進・平鍋(ひらなべ)兵部・中山權太夫泰俊・安田三河守益信・宮田菊之進定俊・同太郎兵衛歳將・馬路藏人・有井玄蕃・松田島・新藤五・江川孫六左衛門島齋・河北兵衛・黒瀬兵庫入道・並河近江守・神部左衛門・柳瀬兵部左衛門、是等を先として、都合五千三百餘騎、安藝・西濱・東濱・有井・松田島に充滿(みちみち)たり。岡豐に集る面々には、長宗我部

左近太夫親泰・吉良左京進親貞・比江山掃部助親興・長宗我部右兵衛親氏・吉田備中入道周孝・同治郎左衞門重貞・秦泉寺豊後守・吉松式部・稲毛右京・大高坂長門守・國澤將監・十市細川備前入道宗桃・同備前守・池豊前守・大黒主計・同與七兵衞・今井左馬助・弘瀬甚左衞門・石谷民部少輔・鍋島加賀守・永谷飛驒守・五百藏左馬進・野尻藤藏・太郎丸彌惣次・猪佐古外記・神通寺源藏兵衞・柳井瀬彌市郎を始として、中郡の勢馳集り、七千二百餘騎とぞ記しける。先んずる時は、人を制するに利あり。暫も猶豫すべからず。不日に打立てとて、香宗我部左近大夫・吉良左京進を先陣として、七月十日岡豊を立ちて、姫倉へぞ押寄せける。城には期したる事なれば、究竟の射手百八十人、櫓の上、狹間の影より、差詰め引詰め、鏃を支へて射ける間、時の間に手負死人若干出來て、寄手陣をなし兼ねたり。城主姫倉豊前守・同右京是を見て二の城戸を颯と排いて二百餘騎、轡を並べて打つて出で、東西南北駈破り打通りければ、寄手蜘の子を散らすが如く、散々になりて、廿餘町ぞ引きたりける。城中には、初度の軍に打勝ちて、首途よしと悦びけり。され共寄手は多勢なれば、蟻蜂の如く四方より押懸け、

長宗我部元親安藝國虎合戰

安藝國虎敗軍

息をも繼がず攻めける間、豐前守叶はずして、安藝を指してぞ落行きける。金岡の城には、黑岩越前、五百餘騎にて籠りけるを、長宗我部右兵衞・比江山掃部、二千餘騎を率して押寄せ、揉みに揉んで攻めけれども、黑岩聞ゆる勇者なれば、更に事ともせず、三日三夜、息をも繼がず相戰ひ、敵を討取ること若干なりと雖、味方の軍兵、殘少なに討たれければ、黑岩今は叶はじと、城を明けてぞ退きにける。姫倉も金岡も、同時に落されて、大勢寄せ來ると聞えしかば、安藝の騷動斜ならず。さらば矢流・穴内を防げとて、其手分をぞしたりける。さる程に元親は、和食に着陣して、軍評定ありける所に、吉田大備後申しけるは、重俊が領分夜須の鄉は、其先は安藝の領にて候ひき。其頃池八木(いけやき)とて、富榮の者二人あり。國虎が祖父備後守元親、驕奢の餘りに、彼在家の重寶共を無體に所望して奪取られ、悲みに絕えず、樣々に詫訴候へば、領主の命を背く科なりとて、二人共に所帶を歿收して追放され、彼方此方さまよひ、終に飢死す。其妻子古鄉夜須へ歸り、古き一族親友を憑みて、微に住居し候。重俊、夜須入城の始より、彼者共來りて、安藝へ御旗を向けられ候へ。我々案内仕り、父が讐を

報じ度候と、再三余義なく申すに付、卽彼者を安藝へ間者に遣し、飽迄見透し候に、有澤石見・黑岩越前より外に、心惡き者は候はず。中にも小谷・專當・横山は、人數をも持ち、勇功も多く候へども、共に慾心深く智慧淺く、一定味方すべきと存じ、常に音信を通じ、心安くいひ談じ候間、彼間者を遣し、三人を計り候はゞやと申しければ、元親悦喜淺からず、急ぎ拵へて見よとぞ宣ひける。大備後頓て間者を呼寄せ、小谷・專當・横山が方へ遣して申させけるは、近年宮内少輔殿、中郡殘らず平均ありて、此度安藝を打果さるべき爲め大軍を率し、姫倉・金岡等暫時に踏破り、和食に至て着陣あり。近日安藝へ押入る用意に候。卽時に攻破る事、案の内なり。然るに於ては安藝幕下の輩、一人も安穩なるべからず、貴殿達の事は、安藝譜代の家臣といふにも非ず、時の權に隨ひ給ふ計なり。我常に親しく候故、宮内少輔殿へ能く取成置き候。弱みなき先に、急ぎ味方致され候へ。本領はいふに及ばず、加恩は請に任せらるべしとぞいひ遣しける。間者急ぎ立越え、潛に對面して、事の由を申聞かせける。敵の威勢にや恐れけん、慾心にや耽りけん、一議にも及ばず、皆領掌してぞ返しける。

中にも小谷四郎右衞門は、取る物も取あへず、郎等四五人召連れ、吉田が陣所へ來りける。大備後悅び、連れて本陣へ參りける。元親見給ひ、早速來らるゝ事神妙なり。急ぎ手引仕れと仰せければ、畏り候と、赤野の沓が崎より、矢流の北を東へ、小谷・禪尻を經て、内原野へ引入れけるこそうたてけれ。

矢流崩れの事

矢流の砦には、斯る事をば夢にも知らず、姫倉・金岡言甲斐なく攻落され、人口に落つる事、たとひ其列にあらずとも、味方のおくれは、何れも同じ恥辱なり。相構へて面々一足も退かず、潔く討死して、先度の恥を雪ぐべしと、二千餘騎の軍兵共、神水を飲んで、靜まり反つて控へたり。事の躰、實に思ひ切つたる體かなと、先づ涼しくぞ見えたりける。岡豐勢は、兩度の軍に打勝ち、安藝勢恐るゝに足らずと思ひければ、何しに些も休らふべき。我先にと押寄せ、鬨の聲三度上ぐる程にそあれ、兩方打物拔いて亂れ合ひ、喚き叫びて攻戰ふ。馬の足音雷の如く、射違ふる矢は雨の如し。

痛手負うて戰ふもあり、深手負うて臥すもあり、或は引組み刺違へて死ぬるもあり、或は取つて押へて、首を掻くもあり掻かるゝもあり、或弓手妻子に相付けて、切つて落すもあり、落さるゝもあり、孰れ隙ありとは見えざりけり。血は馬蹄を浸し、尸は野徑に横たはれり。城兵心を一にして、爰を專途と防ぐ間、寄手戰屈し、既に引色に見えける所に、思ひ寄らぬ沖の方より、貝鐘を鳴らし舷を叩きて、鬨の聲をぞ上げにける。味方も驚く計なり。後に聞けば、吉田左衞門佐孝俊が計らひにて、近邊の獵舟を集め、鄕人共を乘せ、山の戰半なん時、後より鬨を作れと、家臣西田藤兵衞に申含めけるとかや。安藝勢、すはや敵後へ廻りたるは、手を分けて防げやと色めく所を、得たり賢しと、一度に咄と突懸れば、安藝勢終に打負け、散々になりて引退く。有澤主膳爰を引きて、何の爲に命をば惜むべきと、競懸る敵の中へ、些も擬議せず駈入り、火を散らしてぞ戰ひける。二階孫右衞門十七歲、鎗を取つて突懸り、有澤を打取りけり。北村大藏遁すまじと打つて懸る。永吉飛驒是にありと、駈塞つて切結ぶ。互に手利の達者、入混もせず打合ひしが、飛驒左の眼より鼻へかけて切付けられ、既

に危く見えしが押懸り、拂樣に切りければ、北村、腰の番を切放され、上は、逆樣にどうと落つれば、下は、馬にぞ乘つたりける。恒光新左衛門・宗武源四郎・光國彌三郎・宗圓八郎左衛門・天野內藏丞・松田島新右衛門、返し合せ〳〵、或は手負ひ討死して、防ぎ戰ふと雖、敵は氣に乘つて、勝鬨を作りかけ〳〵、攻付けて追懸けしかば、安藝の二千餘騎、混引に引立ちて、曾て後をも顧みず、我先にと落行きける。時の人、是を矢流崩れと申すなり。黑岩越前が一子掃部種直、十六歲なるが、大に戰ひ、右の腕に深手負ひて働き難かりければ、日暮れて安藝へ引取らんと、新庄の林の中に隱れ居たる前に、別役左衛門が下部に、勘解由・新德とて二人、甲斐々々しきものあり、掃部が隱れたるを見て、首取つて能き設にせんと、茂みの中を押分け〳〵來る所を、掃部左の手にて刀を拔いて、新德を切りければ、勘解由逃れんとするを、飛懸り取つて押へ、我を城下へ負行くべし。異儀に及はゞ、首を切るべしといひければ、畏り候と、背に負うて茂みを押分け〳〵、漸々と凌ぎ、安藝の町に至りければ、掃部悅び、勘解由に飯を與へ、鳥目取らせてぞ返しける。斯くて岡豐方には、中島與市兵衛・横山九郎兵

衞・吉田左馬允・井上六郎兵衞・同喜介・横山源兵衞・蚊居田修理、群に拔んで働きけり。吉田次郎左衞門は、逃ぐる敵を追懸け行く所に、誰とは知らず大の男、三間柄の鎗を持ち、久禮田の一領具足何某とかや、白髮の老人、大きに勇を振つて、分捕功名す。吉田次郎左衞門は、逃ぐる敵を追懸け行く所に、誰とは知らず大の男、三間柄の鎗を持ち、茂みの陰に隱れ居て、近々と寄せて丁と突く、周章てゝやありけん、左の目を横樣に突當てたり。次郎左衞門はつといひて、其鑓を奪取り、敵逃れんとするを、郎鎗を付け、郎等に首を取らせけり。夫より次郎左衞門、片目になりければ、時の人、先の次郎左衞門とぞ申しける、其故を問へば、次郎左衞門、常に圍碁を好みて、其頃名を得たる上手なり。碁の先は一目なれば、片目に裝へて、異名にしたりとかや。さる程に矢流の砦も破れぬれば、新庄・宍內を固めよとて、黑岩越前・有澤石見を先として、宗徒の勇士籠りける。そも此新庄と申すは、矢流より安藝の城下へ六十餘町、左は大山、屛風の如く峙ち、右は海邊、逆浪雲を卷き、其中に僅に濱崕の道ありと雖、細砂深くして、人馬の駈引自在ならず。されば山上より矢石を放す時は、何百萬騎の勢なりとも、石を以て卵を押すが如くなり。況新庄の汀、巖石の間に逆茂木を結ひて、

數百挺の鐵炮を備へたれば、元親雲を凌ぎて越えられんは知らず、安藝の地へ足踏は思ひも寄らず、岡豐勢、哀れ疾して寄せよかし。姫倉・金岡・矢流、數度の恥辱を雪ぐべし。西へは一足も進むとも、東へは引くべからずと、諸卒心を一致にして、靜まり反つて待懸けたり。

安藝國虎最後の事

矢流の砦も破られて、殘黨皆新庄・穴内に籠りぬる由聞えければ、國虎一子千壽丸とて、十三になりけるを呼出し、此度の軍、味方每度打負け、新庄・穴内へ引退きぬと聞ゆ。汝は畑山兄弟を召つれ、急ぎ阿州へ落行き、矢野備後を憑み、時節を待ちて人數を催し、此本懷を遂ぐべし。矢野は我常々親しければ、よも見捨はすまじきぞと宣へば、千壽丸畏つて申しけるは、唯今斯樣に承り候は、定めて御生害を遂げさせ給ふと覺え候。夫武士の家に生れても、五や六や乃至十歲に足らぬ時ならば力及ばず、我旣に善惡を覺ゆる程になりて、父の討死を見捨て、何方へ落行き誰をか賴み、誰に

か面を向ふべき。縦ひ如何なる果報ありて、後の榮華を開き候とも、道を知らぬ者とて、人に指を指されんは、生甲斐は候まじ。只御最後の御供いたし、死出の山三途の川の御手引仕り候べしと、落ちんず氣色はなかりけり。國虎聞き給ひ、申す所理至極せり。流石國虎が子程ありけるよな。さりながら心を靜め能に聞け、姫倉・金岡・矢流等の城々破られぬと雖、宍內・新庄の兩城堅固にして、大勢楯籠るなれば、此軍必ず負くべしといふにもあらず。然れ共軍に臨みて、活殘らんと思ふは、不覺の至りなり。況大軍を引請くるをや。自然の事のあらん時、父子一所に討死せん事、且は智の薄きに似たり。且は又誰ありて、再び家をも興し、我が欝憤をも散ずべき。此理を辨へず、父が詞を背くならば、七生迄も勘當ぞと、一度は怒り一度は勇めて宣へば、此上は力なし、如何にも仰に隨ひ奉るべしと、涙にくれて居たりけり。實に畑山內藏丞・同右京・同左近丞とて、兄弟三人あり。安藝氏にて、國虎が從兄弟なり。畑山に住しければ、畑山とぞ申しける。國虎、內藏丞・右京を呼出し、斯樣々々の次第なり。御邊達千壽丸を憑むなり。先の事は定め難し。能く謀らひ申さるべし。敵寄

せ來らぬ先に、急ぐべしと宣へば、兎角辭するに詞なく、忍びて城を立出づる。又逢ふべきも片原の、寄邊も知らぬ身の行方、親子主從の憂別れ、思ひやられて哀なり。小川・畑山・正藤・中の川・影野を經て、阿波へ赴きたりといふ。又柳瀨の內、西川やくら小屋より、きとう山を淩ぎ、落行きたりとも申すなり。三好河內守長治の家臣矢野備後を賴みて、日を送りける。矢野女子ありて、男子なかりければ、頓て養子聟にして、家嫡に定め、矢野又六郎とぞ名乘らせける。安藝、城中の軍兵共は、味方新庄を差塞ぎて防ぐと聞きしかば、爰を破らん事は、鬼神は知らず、人間の所爲には思ひも寄らず。岡豊勢は矢流に集まりて、軍評議に日を送らん。さあらば上下退屈して、油斷するは必定なり。其時は新庄より、夜討して追散らすべし。我々は城を守りて、安樂に暮す事よと、鎧・腹卷・太刀・刀をば枕に取散らし、高鼾かいて居たる所に、元親は、小谷四郎右衞門が案內にて、內原野に押上り、城を目の下に見下し、二千餘騎同音に鬨の聲を上げ、弓鐵炮を雨の如く放し懸け、喚き叫んで攻めにけり。城兵驚き騷いで、或は維げる馬に馭つて、鞭を打つものもあり、或は弛める弓に矢を付けて、

射らんとするものもあり、物の具一領に、二三人取付き、我よ人のよと引合ひける。其間に子は親を捨てゝ、從者は主を知らず崖堀ともいはず、倒れ轉びてぞ落行きける。其中にも恥を知り義を思ふ輩は、貳き人々の振舞かな。大將に憑まれ參らせて、大敵を受くる程の者共が、俄の事なればとて、戰はで逃ぐる樣やある。何の爲に惜しむべき命ぞやと、向ふ敵に走り懸り〳〵、火を散らして戰ふ程に、太刀・長刀をも打折り、一足も退かず、枕を並べて討たれけり。新庄・宍内には思ひも寄らず、弓の弦喰しめし、鎗長刀を引側め、寄手遲しと待つ所に、元親間道より內原野へ攻入り、城既に危しと、急を告ぐる事櫛の齒を引く如くなれば、諸軍大きに驚き、此上は力なし、主從一所に討死せんと、要害を打捨て、安藝の城にぞ籠りける。扨こそ濱の手の寄手共、難なく町へ押入りければ、有澤・黑岩、急ぎ國虎の前に出でければ、備後守、小谷・專當めが舊恩を忘れ、返忠して、敵を是迄引入れたるなり。最後に彼等の首を見て、心安く自害せばやと宣へば、兩人承り、こは無念の事共かな。しやつらが首取つて、御目に懸け候べしと、二人一所に打つて出で、大音上げ、有澤石見・黑岩越前なり。

小谷・專當はなきか、我々が首取つて、返忠の印にせよと呼ばはり、大勢の中へ駈入り、追廻し駈亂し、八方を拂つて四維に當りしかば、萬卒忽に散じて、馬の足をぞ立て兼ねたり。元親見給ひ、言甲斐なき者共かな、敵縱令鬼神なりとも、只二人を見て引く事やある。馬の足を立寄せて、中に取籠めて打留めよやと、透間もなくぞ下知せられける。諸軍是に力を得て、二人を中に押取籠め、遁さじとこそ揉んだりけれ。黑岩・有澤些も擬議せず、小谷は何所にあるぞ。駈出でて黑岩が首取れ。專當はなきか、出合ひて有澤を打留めよと、聲々に訇り呼びて、東西南北駈廻り、向ふ者の眞向・小額・左右の小手、逃る者のおしつけ・母衣つけ、當るを幸に切つて廻る。其膚撓まず其目瞬がぬ勇氣に、三軍敢て當り難く見えしかば、岡豐勢七千餘騎、開き靡きて引退き、遠攻にぞしたりける。有澤・黑岩は、備後守殿、持遠にぞ御座し候はんとて、共に城中へ引いて入り、國虎の前に畏りて、小谷・專當、眼に遮る程ならば、天晴何萬騎が中に圍まれ、鐵網を張りて楯籠るとも、踏破り打取るべしと存じ、敵百騎二百騎乃至四五百騎群りたる中へ駈入り〳〵、打破らずといふ事なく、表を破り裏へ拔け、

隨分尋ねて馳廻り候へども、能く影を隱し、それぞと思ふ者もあらず。手元に近付く奴原、生死は知らず、凡百七八十騎、打捨て候はんと、事もなげに語るにぞ、最後に近き國虎も、此一心を晴らされける。斯くて寄手の勢、新手を變へて攻懸る。城中は小勢なれども、心を一致にして、千騎が一騎になる迄も、互に引かじと氣を勵まし、爰を專途と戰へば、此軍何果つべしとも見えざりけり。斯る所に横山民部、潛に城中の井水に鴆毒を入れ、頓て吉田が陣所へ行きて、此由をぞ告げたりける。惡まぬ者はなかりけり。是をば知らで城兵共、一日戰ひ渴に臨みて、井水を汲上げ飲みければ、身心惱亂して、忽悶絕僻地するもの數を知らず。こはそも如何なる事ならんと、周章騷ぐ所に、天物いはず、人を以ていはしむる習、誰いふとはなけれども、横山が惡逆にて、城中の井に鴆毒を入れたりといふ程こそあれ、諸軍呆れ果て、鬼を欺く國虎も、手足も痿ひたる心地して、黑岩・有澤を召して、今は力なし。迚も叶はぬ物故に、大勢に物思はせんより、我早く自害して、軍勢を助けばやと思ふなり。夫に付けても北の方、一所に失はんこと痛はしゝ。又捨置かんも流石なり。何とぞ幡

多へ送届け、心安く臨終せばやと思ふなり。扨如何計るべしと宣へば、越前、御臺所を送届け奉らんは、何より易き御事なり。某計らひ、御供仕るべし。御心安く思召候へ、石見は御最後御供致されよ。某も跡より追着き奉るべし。死出の山にて待ち給へと、鬼のやうなる黒岩も、涙にくれてぞ居たりける。石見是を見て、おくれたり黒岩殿、主に別れ給ふも、幡多へ往來の間なり。御跡より追着き給ふべしといひければ、黒岩、こは忘じたりと、頓て用意をぞしたりける。其後備後守、宮内少輔へ人を遣して、國虎運命既に盡きぬ。城を出で、淨貞寺に於て生害を遂ぐべし。軍兵共をば、命を助け給へ。若夫所望叶はずば力なし。士卒と心を一にして、玆に尸を軍門に曝すべしと申されければ、元親聞き給ひ、國虎生害の上は、諸軍は悉く助け候べしと、起請文を書きて遣し、攻口を開かれければ、國虎悦び、軍兵共に皆暇を給はりけり。今まで一所に討死せんと、附纒ひたる者共なれば、何れも名殘を惜みつつ、涙ながらに立別れ、己が樣々なりにけり。さる程に備後守、北の方に近付き給ひけるが、今最後を知らせては、別れの際を如何にせん、後に聞きて歎き給はんは力な

し。先づ雖して幡多へ送らばやとて、宣ひけるは、味方終に打負けて、軍もはや今日明日に極りぬ。千壽丸をば先に阿波へ落しぬれば、我も今夜の内に忍びて落行くなり。御身はあの姫を伴ひ、幡多へ立越え、時節を待ち給ふべし。何所にも心安く落着きたらば、夫よりして迎の人を參らせめと申されければ、北の方は只夢の心地して、兎角の返事もせず、伏沈み給ひけるが、良ありて、情なくも承るものかな。いかならん野の末山の奥迄も、具しこそせさせ給ふべけれ。同じ草露、一つ底の水屑とならんとこそ契りしに、今更捨てられ參らせて、誰を頼み何を頼りに暮らすべき。切めて身一つならばいかゞせん。幼き者をばいかにせよと思召し、捨置かせ給ふぞと、口說き歎かせ給ひける。されども叶はぬ道なれば、國虎思ひ切つて立たれければ、姫君走り出で、父の鎧の草摺に取付き、是は、何れへ行かせ給ふぞや。我も參らん、具せさせ給へと泣き給へば、子は三界の首伽とは、今こそ思ひ知られたれ。中々なりける暇乞かなと、却て悔しく思はれければ、よくも最後を知らせざりけりとぞ泣かれける。扨あるべきにあらざれば、有澤一人御供にて、住慣れ給ひし城中を、今

安藝國虎自殺

を限りに立出で、一句の偈を授け奉り、心靜に念佛して、腹一文字に切り給へば、有澤介錯仕り、其太刀を取直し、腹十文字に搔破り、自ら首を搔落し、質は猶座せるが如くにして死にけり。爰に近習に仕ひし何がし、國虎の勘當を得て、籠居して居たりけるが、今は是迄なれば、最後の供をして赦免を蒙らばやとて、主君の跡を慕ひ行きけるを、國虎顧み大きに怒つて、道より追歸されけるぞ無慙なる。然るに茶道坊主一人・下部一人、寺まで潛に附き來り、最後の供をしたりける、志こそやさしけれ。抑國虎は、何故に此寺にて、生害を遂げられけるぞと、其故を尋ぬれば、國虎の祖父を、備後守元親といふ。安藝の元親とは此人なり。法名正仲淨貞と諡す。菩提寺なればとて、元親山淨貞寺と號し、先祖代々の位牌を安置しければ、爰にて圓寂し給ひけり。一佛淨土の緣を結ばれけんと、哀なりし事共なり。國虎をば、圓海心覺居士と諡し、有澤石見をば、桂岩芳樹禪定門と號しけり。蘇我赤兄の大臣苗裔此國に下り此所を領する事一千餘年、子孫も多く繁昌して、恩澤を蒙るもの其數を知らず。國に又肩を並ぶる者もなかりしかば、永祿十二年八月十一日、如何なる日にかありけ

ん、數十代の花盛なる時も所も、名にしあふ秋の紅葉と散失せぬ。始あれば終あり、盛なるものは必ず衰ふ。有爲轉變の世の有樣、今更歎くも愚なり。

國虎の北の方幡多へ送屆附黑岩殉死の事

さる程に越前は、城外へ駈出で、敵陣に向つて大音上げ、是は黑岩越前と申す者なり。御陣へ申度事ありと呼ばはりければ、寄手の陣より武者一騎駈寄り、何事にやと問ひしかば、越前、備後守既に生害致されて候。北の御方は、一條殿の御息女なれば、是に捨置き申事、誠に御痛はしく、某御供致し送屆けよと、國虎申置かれ候間、哀れ御免を蒙り、中村へ送屆度候旨、御披露憑み奉ると、謹んでぞ申しける。武者立歸り、此由を申しければ、元親仔細なし。急ぎ送屆けよとぞ許されける。越前喜び、小船を拵へ、北の方姫君を乘せ參らせ、折節順風なりければ、程なく幡多中村一條殿に御供して、事の由を申入れ、船をば某所に捨置きて、飛ぶが如くに歸りけるが、元親安藝よりの歸陣に、鑑の野にて行逢ひたり、先手の士是を見て、黑岩越前は、いかにもし

て活殘り、只今爰に來るらん。いかなる所存にやあるらん。餘すまじと立騷ぐ所に、元親聞き給ひ、苦しくもなし、其者召せと宣ひければ、承り候と、若士立向ひ、それなるは、黒岩越前殿と見えたり。宮内少輔殿對面あるべきとの事に候。急ぎ御參り候へと申しければ、越前畏りて、若士と連れて、御前にぞ出でにける。元親、只今幡多より歸られ候か、海上恙なく、送屆けられたるかと問ひ給へば、黒岩承り、御寛宥を蒙り、御臺所姫君具足し奉り、送屆け候事、誠に生々世々有難き御厚恩に候と、謹んで申上ぐれば、宮内少輔、安藝へ歸りたりとも、立寄る方もあるまじ。元親に奉公致されよ。前知に増して召使ふべきぞと宣へば、黒岩謹んで、冥加至極難有御諚なり。安藝滅亡の上は、何所にか立寄る方候べき。直に岡豐へ御供いたし、御奉公仕度候へ共、主君備後守殿、最後の時も參り合はず、其上御臺所姫君を送屆け、一條殿へ手渡し致し候事、切て位牌に披露申、一七日の法事を遂げ、其後岡豐へ祗候仕るべしと申上ぐれば、元親、神妙の志、さあらば急ぎ安藝へ立越し、心靜に法事を遂げ、不日に岡豐へ來るべしと仰せければ、越前畏り候と御請を申し罷立ち、安藝を指してぞ歸り

ける。吉田大備後、黒岩が後姿を見送り、涙を流して人に語りけるは、此者は重俊內縁にて、常に親しく音信を致せしが、近年の急劇に依つて、通路を絶しぬ。されば彼が心底をば、我能く知れり。只今御請は申上げたれども、全く降參する者にあらず。今見給へ、飢死すとも來るまじきぞと申しければ、實にもといふ人もあり、いや〳〵勇氣も世にありての事、飢ゑては心も替る者なりと、申す族もありとかや。大備後只今の體を見て、弔らはざらんは本意にあらず。且は不便なり、且は彼が樣子をも窺はん爲なればとて、形の如く雜餉を調へ、家臣橫田三郎右衞門して、黒岩が方へぞ送りける。斯くて越前は、安藝に歸りて見れば、城廓は敵の爲に燒落されて形もなし。況民家に於てをや。我住み來し跡さへ、何處なるらん。誤入二仙家一雖レ得二半日之客一、恐歸二舊里一纔逢二七世之孫一ひけん心地して、涙も更に止らず。妻子の行方問ふべき人もなければ、尋ぬるに及ばず、直に淨貞寺に立越え、主の菩提を弔ひけり。斯る所に橫田三郎右衞門、雜餉持たせ來りて、使の趣述べければ、越前聞きて、一家の好を忘れず、今此節に及んで懇志に預る事、海よりも深く山よりも高しとぞ悦びける。

明日は亡主の一七日なれば、法事燒香を遂げ、心靜に返牒すべし。夫迄は休息せよとて、寺の傍にぞ休ませける。其後供養心の如く執行ひ、横田を呼出し、急ぎ歸つて申すべきは、此度宮内少輔殿の御恩を蒙り、北の方姫君を送屆け、亡主の祭奠心の儘に執行候事、二世迄の御芳志、誠に報じ盡し難く候。然れば早速岡豐に參じ、御奉公申度候へども、宮内少輔殿は大勢を召仕はれ、備後守殿は有澤一人具せられ、黃泉の旅に赴き給へば、さしも淋しく、萬不自由に候はんと痛はしく候。譜代相傳の主君見捨て難く、跡より追着くべきと存じ、佛前にて切腹いたし、一家の好に貴殿御手にかゝると思ひ、三郎右衞門に介錯憑み候なり。妻子の行方も候はゞ、宜しく賴入候と、懇に申すべしといひも敢ず、押肌脫ぎ、腰の差添拔き持ちて、左の肩先に突立て、右の袴際まで引つけ、又太刀を左に取直し、右の肩先に突立て、左の袴際へ引つけ、佛に向ひ合掌して、念佛高聲に唱ふる所を、横田首を打落す。碧叟久岩禪定門と諡りける。

主君國虎は、八月十一日に生害あり、黑岩越前は、同十八日に、亡主一七日の追善をなして、殉死をぞしたりける。前代未聞の事なりと、惜まぬ人はなかりけり。

安藝滅亡の瑞相并卒都婆が本の事

凡天地の間、吉を顯し凶を示す事、初めて驚くべきにはあらねども、安藝の家の亡ぶべき前相、豫て顯れけるこそ不思議なれ。今年正月三日、畑山內藏丞父子兄弟、安藝の城年始の禮に出仕す。祝物規式畢りて、四方山の物語に來らるゝ。國虎、內藏丞が一子熊王丸を呼びて、汝は千壽丸と同年にて、今年十三になると覺えたり。定めて智慮も同じかるべし。是を一同に讀みて見よとて、戲に白紙一枚投出されしかば、兩人畏りて同音に、今年安藝に兵亂起り、城忽に落去して、一族悉く亡び、千壽·熊王敵の擒となると讀み上げける。滿座興をさまし色を失ひ、目と目を見合せ、一言出すものもなく、各退出したりけり。不思議といふも愚なり。國虎はさらぬ體にて御座せしが、大きに心に懸けられけりとぞ聞えし。其後城中に妖恠多かりしかども、深く隱して、人には知らせず。諸寺諸山に仰せて、護摩祈禱を盡されけれども、物には限あり、盡くる時節や至りけん、終に滅亡したりけり。哀なりし事共なり。安藝

旣に沒落せしかば、有井の城をも明けて退きたり。安田三河守・惟宗益信は、降を乞うて幕下になる。田野の城主縱倉右衞門尉は、一子千代勝を人質に出して降參す。奈半利岡の城主安岡出雲は城を明けて、吉良川へ落行き、先づ彈正と一つになり、後に又紀伊國へ立退きけるとぞ聞えし。此岡の城は、其先山崎甲斐守が居城なりしを、北川道清、方便をなして討取りけるが、子もなく其跡絕えしかば、國虎の下知として、姬倉の城主安岡出雲を入置かれけるとかや。頓て此城を破却して、里の城を築き、桑名丹後に、番子十八人預けて入置かる。斯くて安田・田野・奈半利の浦里奧山まで も、殘らず降參して、手向ふ者なかりければ、諸方へ下知をなし給ひ、降參の輩は、皆本領に安堵す。有井の城には、長宗我部美濃を入置かる。後に伊尾喜美濃といふ。有井の在名を、近年伊尾喜と改めしに依つてなり。新庄の城は吉田左衞門佐、姬倉の城は長宗我部左兵衞を入置かる。後に子㞕豐後在城す。安藝・土居の城は、香宗我部左近大夫親泰入城して、安藝守と改名す。抑親泰が改名しける其起を尋ぬれば、其頃の風俗に、敵地を打取り其所に在城して、敵の姓を取り名乘るを譽とす。譬

へば八木伊典養明、本山に在城して、本姓を改めて本山と號す。本山式部少輔茂辰、吉良駿河守を討つて、其跡に入城して、吉良式部少輔と號し、長宗我部左京進親貞、吉良式部を討つて其城を取り、吉良左京進といふ。其例に任せ、親泰も安藝氏に改むべしと、家臣共に談じければ、老臣池田肥前畏つて申しけるは、殿の御本姓は、長宗我部に候へ共、香宗我部の御家を續がせ給ふなり。御本姓に候はゞ、御改の事、御心に任せらるべく候へ共、他家御相續の上は、今安藝に御改め候時は、香宗我部を斷絶なさるゝに同じ。然れば御養父へ不孝なり。幸安藝守は、御名に附け給ひても宜しく候間、所詮安藝守に改めらるべきかと申しければ、親泰、誠に然るべしとて、香宗我部安藝守とぞ名乘りける。田舍武士の頑なりとはいひながら、あへなかりける事共なり。後に親泰、阿州海部の城主となりし時、右衛門太郎庶親、暫く此城に御坐しける。其後十郎新右衛門を城主とす。慶長五年關ヶ原合戰、十郎出陣して城主なかりしかば、岩神左衛門進、安藝浦里の惣奉行になり、城中をも支配すといへども、東濱に居住して、入城はせざりしなり。さる程に畑山內藏丞・同右京兄弟は、千壽丸を

供奉して、阿州へ立越え、矢野備後を憑み置き、其身は故郷畑山へ歸りけるが、安藝一族皆亡び、幕下の輩は、皆元親へ降參して、一身置くに所なく、野中三郎左衞門に所緣の由緒ありければ、野中に便りて、元親へ降を乞ひ、畑山に住しけるが、元親より內通やありけん、親泰、畑山兄弟を、安藝の城へたばかり寄せ、詰腹をぞ切らせける。畑山が家人共、是を聞きて一所に集まり、淚を流して評議しけるは、扨も兄弟の人々、たばかられ給ふ事、無念といふも餘りあり。我々隨ひ行きなば、暗々とは討たすまじきに、此上は安藝の城へ押入り、親泰を討取り、欝憤を散ぜんと、卅六人神水を飮みて、出づるを最後と思ひ定め、安藝の城へぞ向ひける。親泰聞きて、死夫の向ふ所、碎き難き習なれば、小勢とても侮り惡しとて、究竟の兵二百餘人、勝り立てゝぞ防がせける。卅六人の者共は、素より思ひ切つたる事なれば、切るとも突くとも事ともせず、一足も退かず、一人も殘らず、同じ枕に討死す。城兵も、其數あまた討たれけり。此由岡豊へ注進ありければ、元親、哀れ剛の者かな。一騎當千とは是等をぞいふべき。最も義あり勇あり、感歎するに餘あり。其靈魂を弔はずんばあるべからず。

且は諸士の手本に見せしめん爲なればとて、彼討死の場に、卅六本の卒都婆を立て、あまたの僧を請じて、弔ひ給ふぞ有難き。夫よりして此所を、卒都婆が本といふとかや。ためし坐き事共なり。

土佐物語卷第六終

土佐物語巻第七

蓮池・戸波落城の事

さる程に一條殿は、安藝・岡豐和睦破れて、合戰に及ぶと聞召し、雌雄いかゞあらんと、御心を安んじ給はざる所に、國虎打負け生害ありて、北の方姫君は、恙なく歸り來り給ひければ、歎の中の悅びとぞ見えし。されども親子の人々、明暮歎かせ給ふを御覽じて、忍び難くや坐しけん、さるにても壻は子にあらずや。是を顏前に討たせて、餘所に見て暮らす事こそ無念なれ。一度元親が首を切りて、國虎が影前に、手向けばやとぞ宣ひける。壁に耳、岩の物いふ世の中なれば、誰告ぐるとはなけれども、弘岡の城主吉良左京進親貞、此由を聞きて、扨は油斷すべきにあらずとて、急ぎ岡豐へ立越え、斯樣々々と承り候。兼定卿常に豫州の諸將數輩、懇に親み給ひ候。

其上大友宗麟は、所縁の中に候へば、國々の勢を催され候はゞ、由々しき御大事に候。先立ちて此方より御發向あり、然るべしと申されける。元親聞き給ひ、申さるゝ所、尤其理ありと雖、一條殿の御事は、厚恩の家なれば、彼方より討手を差越されんは力なし。防箭射さすべし。下々共雜説をいへばとて、色見えぬ先に、此方より弓ひかん事、天の照覽勿體なし。天に背く者は、一旦利ありと雖、必禍ある者なり。構へて不義を行ふべからずと宣ひて、御座を立ち給へば、親貞呆れて居たりけるが、熟と思案して、謀書を認め、吉田大備後・中島大和を偸に招き、斯樣々々の次第なり。宮內少輔殿、我に較べて人を計り給へども、人々各なれば、底を方にして、蓋を圓にするものならん。其上兼定卿は短慮にして禮なく、高慢强盛の人なれば、よも穩便にはあるべからず。油斷は大敵なり。夫に付き宮內少輔殿を、たばかり諫めばやと思ふなりとて、謀書を取出し、手立の次第を語りければ、兩人尤餘義なき取計とぞ同じける。其後親貞、郎等を召して謀書を渡し、委細に申含め、其身は岡豐に滯留してぞ居たりける。翌日暮方に及び、元親家臣共を集め、四方山の物語して坐しける所に、親

貞家臣吉良團介方よりとて、一つの手箱を差上げて申しけるは、團介が下人所用ありて、須崎へ罷越し歸路の刻、名護屋坂にて一人の飛脚に行逢ひ、道の傍にて共に休み居て、是は何方より何方への御飛脚ぞと尋ねて候へば、一條殿より蓮池の城へ參るなりと申しける間、何事の御用にやと問ひければ、安藝殿は一條殿の聟君にて候處、長宗我部殿に亡され給ふに付、一條殿は憤深く、其儀に付きて參るなり。いかなる軍出來んも知らずと申しけるを、互に語る體にて油斷を見澄し、彼飛脚を谷底へ突落し、文箱を奪ひ來り候と、誠しやかに申して差出しければ、吉田惣四郎受取り、披いて是を讀む。

長宗我部宮内少輔、頃年騷二動國一殘二害民一極レ奢縱レ慾。暴惡之至不レ可二勝言一也。今度不レ被レ誡、後日之災難レ計。黄門深歎思召、被三牒二合豐州大友殿・豫州河野一族・美庄法華津等一、近日可レ被レ攻二岡豐一内儀決定候。各存二其旨一守二例法一、可三相二待御進發一之由御下知之所也。仍如レ件。

元龜元年十月廿一日　　安並左京

爲松若狹

蓮池城番衆中

元親熟聞き給ひ、親貞が覺見些も違はず。此上は力なし、用意せよとぞ宣ひける。左京進しすましたりと悅び、さあらば親貞に任せ置かれ候べし。蓮池の城を乘取り、足代に致すべしと申されければ、宜しく計らはれよとぞ許されける。蓮池の城は、吾川・高岡の堺なれば、幡多より番手の士を籠置かれける。弘岡と其間僅に六七十町計なり。內々左京をば、存ずる旨やありけん、常に蓮池の番人を、吉良の城へ呼びて饗應をなし、或は川狩鹿狩をして、在番の鬱氣を晴らさせ、又は旅宿萬不自由に候はんとて、酒肴或は衣服を送りなどして、番人の心を計り見るに、平尾新六郎・土居治部・沖彌藤次、此等は首にして智慧ある者共なれば、取分懇にぞ親みける。斯くて親貞は、岡豐より歸り、平尾・土居・沖が方へ人を遣して、近來障る事あり、高岡表へ立越え、數日滯留せしめ、互に相看に能はず、疎遠に打過ぎ候。明日各御同心にて御來臨候へ。圍碁を催し、近來の蟄懷を晴らし候べしとぞいひ送りける。中にも土居

治部、其頃蓮池の城下妙蓮寺といふ寺に行き、住僧に向ひ、某が當卦の吉凶を考へ給はり候へといひければ、住僧頓て蓍策を取出し、卦刧過牒の後、治部に申さるゝは、風雷益の卦を得て候。必功名成立あるべし。夫益の卦たる、震巽の八卦相合し、風雷の勢交り相助け、日々に進みて止まざるの心あり。大川を渉り行く所に利ありと辭に見え候。され共其中、善に遷り過を改むるは、益事の大なるものにて候。御覺悟あるべしとぞ申されける。治部急度心づき、贄殿川は、當國の大河なり。此川を越え行きて、立身の方便あるべし。熟當時の變を案ずるに、一條殿行跡人法に違ひ、威勢日に隨つて衰へ、長宗我部は、月を逐うて繁昌すれば、終には一國の主とならん器量なり。翫其磧礫而不窺玉淵者不知驪龍之所蟠也とかや。當家を去つて秦家に仕へば、善に遷り過を改むるの理ならんと案じ澄し、便宜を窺ふ所に、左京進より使來りければ、大に悅び、彌藤次・新十郎を伴ひて、吉良の城へぞ立越えける。親貞樣々饗應し、四方山の物語に、酒も漸く酣に及びて、左京進申されけるは、倩當時天下の分野を見るに、英雄蜂の如くに起りて、干戈止む時なし。古人の所謂操刀必割、執

ゝ斧必伐の時至れり。然るに一條家驕奢甚しく、風流を專として弓馬の道に拙し。されば各達武功多しと雖、恩賞もなく、小身にて坐す事、痛はしく候。夫武士は、身を立て名を揚ぐるを以て志とする事なるに、寔に本意なき事なり。中村の老中、己に諂ふものをば、功なきをも、功あるやうに取成し立身せさせ、己に隨はざるをば、功あるをも、いひ落さるゝ由、皆人沙汰し候が、僞ならぬかと覺え候。畢竟一條殿闇主故なり。あはれ岡豐へ忠節致されよかし。いかにも親貞、取持つべしとぞ申されければ、渡に舟とぞ悅びける。兩人も豫て治部と同意にやありけん、一議にも及ばず、皆一同に、こは忝き仰に候。内々さは存じ候へども、御内意計り難く、うち過ぎたるぞ。以後兎も角も仰に隨ひ奉るべしと、返事申されければ、左京進、さあらんに於ては、爾來の十雙倍に賞を行ふべしと、互に起請文を取交し、蓮池の城を乘捕るべしと、堅く相圖を極めけり。頃は元龜元年十一月六日の夜、土居治部、己が役所に火をかけゝり。殘る番の士共、反逆とは思ひも寄らず、手過と心得、火を防げ財寶出せと、上を下へと返す所に、弘岡には是を見て、大勢贊殿川を越し、鬨を作りて押寄すれば、

防ぐ兵一人もなく、我先に〳〵と落行けば、親貞之を見て、此者共必定戸波の城へ逃籠るべし。さる程ならば、城中大きに騒動すべし。臆病神のさめぬ先に落せよとて、跡を追うてぞ押寄せける。案の如く戸波の城には、思ひも寄らず、夜更け人靜りたる折柄、落人共慌しく門を叩く。何事ぞと戸を開けば、大勢一度に込入りたり。寢怯れたる者共、扨は敵のたばかりたると心得、周章騒ぐ事夥し。いや蓮池の落人なりといへ共、猶鎮まらず。城主福井玄蕃立出で、事の由を聞きて、敵にてはなきぞ。靜り候へ〳〵と、大音にて呼ばはれども、耳にも更に聞入れず、ひた騒ぎに騒ぎけり。斯る所に弘岡勢、鬨の聲を揚げて押寄せたり。騒ぎ立ちたる者共なれば、寄手の旗の色をも見ず、右往左往に逃げにけり。玄蕃是を見て、黒し返せと呼ばはれ共、大勢の引立ちたる癖なれば、返し合する者もなく、我先にと逃げければ、福井も力及ばず、中村指して落ちにける。さる程に左京進親貞、吉良の城には、番の士を籠置き、其身は蓮池の城へぞ移りける。夫よりして蓮池左京進と申し、又此所は、太平氏數代住みたる所なればとて、太平左京進とも申しけり。戸波の城へは、長宗我部右兵衛親

武入城して、戸波右兵衛とぞ申しける。一條殿此由を聞召し、大きに驚き給ひ、宮內少輔は、今何故に逆心を企つらんと宣へば、家臣共、是は常に安藝殿の敵なれば、元親が首を、備後守殿へ手向けられればやと仰せられしを傳へ承りて、深く恨み參らせての事とぞ承り候へと申しければ、黃門、嗚呼口は禍の門なりといふ事、今更思ひ當りたりと仰せける。斯くて土居・平尾・沖は、岡豐へ仕へて、後皆名を改め、新十郎は佐渡、治部は肥後、彌藤次は加賀とぞ申しける。

日下の渡り地藏附瀨上りの事

其頃何者の所爲にやありけん、一首の歌を高札に書きて、佐竹信濃守が居城久禮の町にぞ立てたりける。

　秋果てば一でう冬にかゝるべし又來む春を何と信州

一條家幕下の輩是を聞きて、恐怖し奉る所に、戸波・蓮池の城攻落されければ、幡多・高岡の騷動斜ならず。津野は素より內緣の由緒ありて、常に書音使節を通じければ、

頓て降參して、幕下に屬す。元親、岡豐を立ちて蓮池に入りて、二日軍評定あり、佐川を攻めらる。同所松尾の城主中村越前守、城を出でて防ぎしが、一戰に負けて逐電す。卽ち城を改めて、片岡出雲を入置かる。後に久武内藏助在城す。同所香美郡の城主米森玄蕃、大きに勇を振うて戰死す。城を安並但馬に給はる。其後但馬は、一揆の爲に討たれぬ。波川玄蕃・江村尾張守・其子片岡左衞門太夫・三宮越前守・其子筑後守・能津左兵衞・尾川入道友淸・山内・首藤一族を始め、豫州堺の山分まで、攻めざる先に、人質を出し降を乞ひ、手向ふ者なかりければ、直に久禮へ向はれけるが、豫て聞及ぶ日下の渡り地藏を一見すべしとて、立寄り開帳ありて禮拜し、其後別當の僧を召して、地藏の由來を尋ね給ふ。僧畏りて申しけるは、古來の記錄緣記等見えず候へば、由來確ならずといへども、元亨釋言廿九卷曰、土州中村有二一宇一安二地藏像一。一時獵者得レ鹿入二此宇一。烹宰啖嚼自若。其中一人曰、尊像恐思二貞穢一乎。一人曰、像若惡レ之蓋躍出避レ之。時帳中有レ物、飛出如二鳥之過一。諸獵怪而趁追。落二深草中一。近而見レ之有二地藏像一。其長六寸。諸獵於レ是悔レ咎改懺。遠近來奔恭敬供養云々。是此地藏菩薩

の御事なりと申傳へ候。然れども我々へ渡り給ふ事詳ならす。古老の傳ふる所荒荒申上候べし。此日下の庄小村より、四町計西の方川向ひ、中村と申す所に、往昔地藏鎮座し給ひたる跡、顯然として今にあり。其跡に祠を立て、鎮守と崇め申候。釋書にいへる如く、此所より三町計川向ひ、井上畠と申所へ飛去り給ふと云々。其落ち給ひたる深草の中より、光明虚空にみち〳〵、日を戴く如くなり。依つて此所を日下と號す。又深草の中、異香薫じたる故に、草香と稱す。今國俗日下の文字を用ひ習はす。其後地藏祟をなし給ひ、人に乘り移り、獵師が一族を取殺さんと罵る。獵師大きに恐れ、一門眷族家々にて、毎日怠慢なく恭敬供養すべしと歎き詫びて、彼獵師出家して別當となり、地藏を圓子に入れて背に負ひ、一族の家々へ毎朝供奉して、一日一夜供養して、翌朝又隣家に送る。是より事初りて、當座の中一家も殘らず此の如くす。此事往古怠轉なき故に、渡り地藏と申すなり。又彼祠の邊には、三抱餘りの椋の木あり。此木に付きて又一説の候。此日下の庄に土民あり、其妻、姑に不孝なる事甚し、彼姑、蠶を飼ひければ、是に與へんが爲に、或夜桑の木の本によつて、葉

を取りけり。妻是を知つて、夫に告げて、桑を盜む者あり、是を射殺せといふ。夫心得たりとて、弓を以て射殺し、火をとぼして見れば母なり。夫悲み怒りて、其妻を忽に射殺し、母を葬りて、印に楳を植置きぬ。夫悲歎に堪へずして、彼桑の木を伐り、帝都に行き、竹師に誂へて地藏の像を刻み、墳の傍に、一宇の堂を建て安置す。其後は姑祟をなして、妻の類族を取殺す。其門葉大きに恐れて、地藏を每日家々に迎へて、一日一夜供養し、他の家に送り初めしより、恒例となるとも申傳へ、兩說の傳ふる所此の如くに候。每日鬮を下し、御宿に當りたる者は、精進潔齋し、御迎に參り請待す。不淨不義の家には鬮下り候はず。數月を經ても御宿せざる者も候。左樣の者は大に怖ぢ恐れて、身を愼み心を改めて、御宿を願ふ時は、必鬮下り申すなり。寔に靈驗奇特なる事は、言語道斷に候と、事詳に申しければ、元親熟聞き給ひ、我軍旅に赴き、此の佛を拜する事こそ不思議なれ。此度向ふ所、地藏の至り給ふ家々の如く、隨はずといふ事なし。行末永く守り給へと、御酒を備へ、頂戴して禮拜をなし、田畠を寄せられ、別當の僧には、引出物をぞ給はりける。其後所々老人を召して宣ひけるは、

昔伊豆の國箱根の別當、當國日下の庄へ流されたりといふ說あり。其在所はいづくと聞きつるよと尋ね給へば、老人畏りて、其別當、此庄江尻にて、圓寂し給ひたりと承り候。所の者の申傳へ候は、別當生國は、土佐國日下の庄大和田の人にも候か、箱根の別當に備り給ふ。曾我五郞時宗の師匠にて候ひしが、曾我十郞祐成・同五郞時宗、親の敵工藤左衞門祐經を狙ひ、駿河國富士の御狩場へすがるとて、權現へ祈誓の爲、又は別當に暇乞の爲に、箱根へ參りければ、別當名殘を惜しみ、權現の寶殿より、太刀二振申受けて兄弟にぞ引かれける。十郞には、みじんとて鞘卷を引かる。此太刀と申すは、木曾冠者義仲の家に、代々相傳のみの寶あり、第一りうくく作りの長刀、第二には雲おとしといふ太刀、第三に此みじんなり。此三の寶を祕藏して持たれけるが、子息淸水冠者、鎌倉殿の壻になりて、海道を攻上り給ふと聞えければ、義仲其祈の爲に、此みじんを權現へ參らせられたり、一腰は、源氏重代の太刀、鬚切・ひざ丸とて、二の太刀、代々に不思議ありて、度々改名あり。中にも鬚切をば、後に友切丸と號けられ、左馬頭義朝の世に至りて、鞍馬の毘沙門へ籠められけるをば、男九郞御曹

子、牛若丸と申しける頃、毘沙門へ祈誓あり、夢想を得て給はり、身を離さず持たれけるが、平家を追討して、鎌倉へ下り給ふ處に、梶原が讒言にて、腰越より追返され給ひしかば、其祈の爲に、此御山へ參らせられたり。卽是なりとて、兵庫鏈の太刀を、五郎にぞ給はりける。斯くて兄弟、富士野に於て敵祐經を夜討にし、大將の御陣に狼藉して、其身も又討たれて、彼友切丸出來り、賴朝卿別當を怪しみ給ひ、召寄せ、事の由を尋ねらるべしと聞えしかば、別當大きに恐れて、潛に山を忍び出でられしが、時宗が形見に致し置きたる太刀を取持ち、都の方へ上り、夫より土佐國日下の庄大和田へと志し給ひけるが、同庄江尻に至り、民家に立寄り休らひ給ふが、俄風の心地にて痛はり、日を經て身心衰へ、終に其所にて遷化し給ふ。其臨終に及びて、宿の主を近付けて、我は箱根の別當なるが、爾々の事にて、古鄉へ逃下る所に、今斯く相果つるなり。此太刀は、曾我五郎時宗常に佩かれたる名劍なり。凡下の手に取傳ふべき太刀にあらず。急ぎ宮寺に籠め置くべし。構へて汚す事なかれと、いひ置きて亡せ給ふ。主是を聞きて、天晴能き儲をもしつるものかな。此太刀を富家に持行き、能

き代物を取りて德つかばやと、心中笑を含み、頓て太刀を取持ち行く所に、川端に至りて、此太刀己れと拔けて川へ飛入り、忽に大蛇となり、白浪を蹴立てゝ、川上を指してぞ上りける。主膽を消し、急ぎ逃歸り、こはいかにせんとぞ周章てける。夫より大蛇あらはれ、往來の人を取惱ます。恐しなどもいふ計なし。貴賤上下怖れ悲しむ事斜ならず。いかにしてか靜め奉らんと、野人村老集まり評定して、別當の御坊の遺言に任せ、急ぎ宮を立て、彼太刀の鞘を籠め、神に祀るならば、靜まり給ふべしとて、頓て宮を造立し、彼鞘を籠置き、貴賤群集して祭禮をなしければ、納受やし給ひたりけん、何の間にか彼太刀、元の鞘に入りて、大蛇は靜まり給ひけり。夫よりして此太刀を、瀨上りと改名して、今にあらたに御坐し候と申しければ、寔に希代の物語なりとて、あたりより僧を請じ、自らも潔齋して、彼太刀を取出させ見給へば、赤銅作りにて、柄鞘は少古びたれども、刃は昔に替らず、拔けば玉散る計なれば、四百餘歲を經ても、太刀の威は猶劣らず。大蛇となりて不思議ありしも、僞ならじと宣ひ、元の宮へ返し入られけり。

久禮陣并仁井田五社の事

斯くて元親は、日下を立ちて、須崎に至り、五日逗留ありて、人馬の息を休めらる。須崎と久禮の間に、門屋坂・やけ坂とて難所あり。中にもやけ坂は、嶮しき事屏風の如くにして、九折に道を付けたれば、先行くものは、後なる人の頭を踏む計なり。一夫怒りて向ふ時は、萬卒も通る事を得ずとは此所なり。されば久禮より爰を塞ぐならば、空を翔り地を潜らんは知らず、久禮の地へ足を入れん事は、思ひも寄らずと、諸軍口々にいひけるを、元親いや〳〵、やけ坂には敵はなきぞ。早打立て者共と眞先に進み、やけ坂を越え行くに、敵一人もなかりけり。元親、何と我案は、違ひたるかと宣へば、諸軍奇異の思をなしにけり。寄手久禮に押入り、先陣後陣一同に、鬨の聲を上げければ、山野海岸に響き渡りて夥し。信濃守も鬨を作り、矢合をしけるが、叶はじとや思ひけん、人を出して降を乞ひ、舍弟太郎兵衛を人質にぞ出しける。後に是を聞けば、兼々岡豊へ申通はしけれども、中村の聞えを恥ぢて、一矢射て降參し

けるとかや。元親やけ坂に敵はなきぞと宣ひしも、此故ならんと人申しけり。斯くて仁井田に至り給へば、遠近の諸士奔り來り降參して、高岡郡殘らず掌握に落ちければ、諸方へ下知をなして、既に岡豊へ歸らんとし給ふ時に、家臣共此勢に、幡多を攻取るべしと申しければ、元親、いや〳〵、幡多は一條殿の本領なり。下々足をも入るべからず。猥藉はいふに及ばずとぞ申されける。後に黄門聞召し、元親が心底の恥しさよ。仇を恩にて報ぜられたりとぞ仰せける。此仁井田の郷と申すは、東はそへみらすとて、久禮の大山なり。嶮しき坂の間、數十町上つて、上は浩々たる平地なり。床敷・栫の木山・濱の川・窪河などいふ村あり里あり、田あり畠あり、川流れたり。南は、志和・與津などいふ所へ下る事又數十町　北は大野見半山・津野山に續きたり。西は片坂とて、高岡・幡多の郡堺にて、磐折に下る事も、又數十町なり。下は伊與木谷とて、兩方は大山にて、三里の山川流れたり。是より幡多郡なればとて、片坂の峠より遠見して、郷を分れけるが、大鳥井村五社に詣で給ひて、奉幣を捧げ、神樂を奏せられ、其後社人を召して、當社の來歷を尋ね給ふ。社人畏りて申しけるは、抑此五社と

申し奉るは、古老傳へて、山つみの五神と崇め奉り候。伊弉諾尊軻過突智を切りて、三段となし給ふ。上島の三社是なり。又爲二五段一各化成二五山祇一、大山祇・中山祇・麓山祇・西勝山祇・雜山祇、合して是を五社明神を崇め奉る。是土の全體なり。いと深き理ある神の御事、あさ〳〵しくは演說し難く候が、中宮は、大山祇にてまします。人皇七代孝靈天皇第二の皇子をば、彥狹嶋尊と申しける。其時は四國の名未だ別れず、總て伊豫の國と號す。尊是に封ぜられ給ひて、伊豫親王と申しけり。薨逝ありて、此大鳥井村に御廟を立てらる。後に中宮に、御陵を移して一所に祭る。依之國俗、中の宮を伊豫大明神と申すなり。親王の御母は細媛尊と號す。御社は、是より十一町計北の山上にあり。後世傳へ誤り候て、中の宮の右の二社は、大宮と大神、左の兩社は、今宮・森の宮と申候。中の宮を本社と稱し、左右の四社を末社と稱す。又本社は阿彌陀、大宮は相模國大山不動、今大神は大和國泊瀨の觀音、今宮は三河國鳳來寺の藥師、森の宮は、愛宕にて御座すと申傳へ候へども、兩部習合說論するに足らず。又五社は、仁井田五人の衆の氏神と申候。西・東・志和・西原・窪川とて、五人の

領主、是を五人衆と申すなり。西とは河内の城主西田彦太郎宗勝、東はてんにちの城主福良助兵衛宗澄、志和は志和の城主南波勘介宗茂、西原は西原城主西原攝津守貞清、窪川は窪川の城主山内備後守宣澄、今の五人衆是なり。扨伊豫の宮は窪川殿、大宮は東殿、今大神は西殿、今宮は西原殿、森の宮は志和殿の氏神と稱して、各崇め祭り給ひ候。毎年九月十九日祭禮あり。昔は長岡郡仁井田へ十八里、神輿を促し奉りぬ。一とせ例の如く祭禮をなし參らする所に、高岡郡龍崎にて風波荒く、御船を覆し、神人數輩沈沒す。されども神輿は恙なく、龍崎の汀に上らせ給ひければ、扨は神の御心に叶はざりけるよとて、此事止み、其後は高岡郡津野の庄三間瀨と申所へ、三四里計神輿を促し候ひしが、何の頃よりか夫も又止みて、今は當所にて、祭禮を執行候。惣じて當社の謂れ、舊記も見えず、考ふるに由なしといへ共、古老の申傳、大概此の如くに候と、玉を連ねて述べければ、元親感信して、社人に引出物を給はりけり。

槿花の宮の事

元親仁井田表順見ありて、堂原に至り給ふ所に、槿花の宮といふ祠あり。是は聞き及ばざる祠なりとて、所々老人を召して緣起を尋ね給へば、老人畏りて申しけるは、此宮には不思議なる物語の候。志和の城主和泉守の息女、容色無雙の美人なりしを、西原藤兵衛重介是を娶りて、比翼の語らひをなす所に、或時妻女、藤兵衛に申しけるは、我に恨めしき事の候、暇を給はり候へと、涙と共に申しければ、藤兵衛、こは心得ぬ事を宣ふもの哉。二世迄とこそ思ふに、扨は異心もあるにやといひければ、女房涙を流し、申すも恥かしく候へども、申さぬ時は御疑あり。よな〳〵我閨へ通ふ者の候。いづれより來るとも知らず、又いかなる者とも知らず、夢ともなく現ともなく忍び入り候を、始めの程は、我も否み候へども、終に隨ひ、終夜語らひ、彼者歸りたりと覺えて、夢の覺めたるやうに候。始めは夢とのみ思ひしかども、一夜も缺ける事なく、移り香の腥く覺え候。いかなる化生の所爲にやあるらん。我れ心ならぬ事とはいひ乍ら、君と二世を交しながら、斯る淺ましき事こそ候はね。御暇を給はり、急ぎ里へ歸り、兎にも角にもならばやと、聲を上げて泣きければ、藤兵衛、扨も

不思議なる事を聞くものかな。我と枕を並べ臥して、我知らぬものを。定めて夢なるべし。我何しに夫を厭ふべき。心にたゞ懸け給ひそと、打笑ひ申しけるが、異心もありて、我を僞るにやと思ひながら、又不思議もある者なればとて、樣々の祈禱をして、札落しなどしけれども、女房は只物思ふ景色なり。頃は大永七年三月廿二日の未刻計の事なるに、女房、藤兵衞に向ひ、世の中の儚き事などを語りけるが、何心なく立ちて、緣の方へ行くよと見れば、庭の梢の上を、平地を行く如く步みて、塀の上にぞ立ちたりける。藤兵衞驚き走り懸り、引留めんとしければ、藤兵衞殿さらばといひて、塀より下へ飛落つるを見れば、はたひろ計の大蛇となりて、淵の庭にぞ入りにける。不思議といふも愚なり。下女はした共は、大きに怖れて逃入りけり。藤兵衞は、斯る姿を見しかども、流石名殘惜しまれて、十方に暮れてぞ歎きける。斯くて程經て後、女房の父和泉守が、常に召仕ひし次郎介といふ下部、草苅に出で、此川上にて、一つの鎌を落したり。あたりを見れどもなかりければ、草を分けて尋ぬる所に、覺えず浩々たる野に出でたり。四方を見れども、見慣れぬ所なれば、歸る道をも

知らず。足に任せて行きけるに。大きなる築地あり。門を始め家作り結構いふ計なし。門の內を見れども人一人もなし。奥へ立入る所に、一人の女房機を織りけるが、それなるは次郎介かと問ひけるを見れば、藤兵衞が妻女なり。次郎介驚き、何とて爰には渡らせ給ひ候ぞ。君失せさせ給ひて後は、御二親君の御歎き、中々申すも詞なく、御母君は、終に歎き死に亡せ給ひぬ。御父君も只管の御歎きに、今は御命も危く見えさせ給ひ候。いざさせ給へ。御供して歸り參り候はんと申しければ、女房淚を流し、我斯くなりて後は、二親の御歎推量りて、明暮悲しく、我ながら淺猿しく思ふぞよ。されども前世の宿業なれば力なし。切めて此野風ながら命ながらへ、子も繁昌してある事を知らせ參らせ、些しは御歎を安めさせたく思はれ候へ共、再び人界へ音信すること叶はねば、是のみ悲しく思ふぞよ。今日はこれの殿も、あびやうし殿とて、是より廿町計北に、あびやうしが淵の主あり。それへ慰の爲に、眷屬共皆引具して參られたり。よき隙なれば、汝に此所をも見せ、斯る分野をも父君に傳へ度思ひ、假の方便にて、汝が鎌を此所へ隱したるなり。其鎌は此機に懸けてあり。

取りて歸り、此有樣を委しく父君へ申上げよ。構へて他人にばし語るなと申されければ、次郎介、扨御子達は何所に御坐し候ぞと尋ねけるに、あれに晝寢して居るなりとあるを、立寄り見れば、小蛇いくらともなくうづくまり、重なり伏してあり。身の毛よだちて覺えけれども、さらぬ體にて、いざ殿の御留守の隙に、古郷へ歸らせ給へ。御供仕り候はんと申しければ、女房涙に咽び、我もさ思へども、再び人界へ歸る事はならぬぞよ。汝は殿の歸り給はぬ先に、急ぎ歸れとありければ、此上は力なし。又こそ參り候はめと立出づれば、女房は名殘惜しげにぞ見送りける。次郎介、四五町歩むと思へば、元の川端に出でにけり。後を顧れども、來りたる道は何處なるらん、川には水流れ、谷には草のみ茂り、其行方はなかりけり。次郎介不思議に思ひ、友達に斯る事に逢ひけると語りければ、聞く者舌を震はす者もあり、何事をかいふらんと、否む族も多かりけり。斯る所に次郎介、俄に物怪のやうに躍り狂ひ、人に語るなといひしものを。惡い奴かな。我住家へ連れ行くべしと、大聲上げて喚きしが、其夜行方も知らず失せにけり。恐しなどもいふ計なし。藤兵衞是を聞きて、妻女蛇道

へ落ちたる事の淺ましさよ。いかなる業因にやあらむ、切めて苦しみを助けやらんと、此祠を立て、槿花の宮と號げられて候。果敢なき心にこそ候らん。藤兵衞深く歎き給ひしが、程なく空しくなり、子もなかりければ、其跡絶えて、城には住む人もなし。女房の父和泉守、悲しみに堪へず、志和の里に、天神の宮ありけるに、一所に祭りこめて、北野の天神・今天神とて、一社の内に社壇をならべて御坐し候。其後蛇道を免かれ給ひたる由、あらたに御託宣ありしを、諸人承り、有難き事、肝に銘し候と申しければ、元親、さあらば西原の城を見るべしと、立入り一見し給ひけり。此城の體、山の尾崎、屏風の如くなる切岸の上に、塀をかけたり。下は鵜の巣の淵とて、深き事計なし。碧潭の色、藍をなせり。大蛇の住みたりといふも、僞ならじとぞ覺えたる。斯くて元親、高岡郡城々へ仕置の下知をなし、岡豊へ歸り給ひける。

島彌九郎戰死の事

曾子曰、人之生也、百歲之中、有二疾病一焉、有二老細一焉。故君子思二其不レ可レ復者一而先施焉

といへり。されば有待の身、心に任せぬ習にて、長宗我部故覺世入道の末子島彌九郎は、いつしか病惱に染み、身心快からず、醫療樣々なりと雖、皮膚削るが如く、骨露れて柴の如し。日を追うて身疲れ、月に隨つて力衰へければ、暫く都に上り、閑に治術を求めんと、旅の粧引繕ひ、元龜二年の春、浦戸より纜して漕出す。實なる哉一葉船中載病身と、白樂天が作りしは、我身の上と思ひやり、西寺・東寺の御崎をも過ぎて、阿波の沖に至る所に、俄に風替り浪荒れければ、頓て海部・素佐の湊に船をかけて、順風を待つてぞ居たりける。斯る所に海部の城主越前守、如何して聞きたりけん、其勢百騎計りにて押寄せ、鬨の聲を上げ、長宗我部元親が弟島彌九郎と見るは僻目か、海部越前守とは我事なり。宮内少輔に宿意あり、同姓の弟なれば、一人も餘さじと、弓鐵炮を放し懸くる。降る村雨の板屋、を過ぐるに異ならず。彌九郎は病床に伏して居たりしが、かつぱと起き、舷に立出で、何を越前守が宮内少輔に意趣ありて、某に敵するとや。遺恨の仔細は知らね共、同じ兄弟の事なれば、尤さぞあるべし。其所を引くなといふまゝに、主從僅卅餘人、物の具ひし〳〵と差固め、彌九郎聲を上

島彌九郎討たる

げ、我れ弓馬の家に生れ、病臥に死さば無念ならん。戰場に命を落すは武士の本懷、家門の鼻目なり。死すべき節を失はざるを以て、後代に名を汚さず。今必死の期に迫れり。潔く討死せよ。臆して人に笑はるなと、眞前にかけて陸に上れば、郎等ども、何の爲に命をば惜むべきと、切先を並べ打上り、大勢の中へ駈入り、駈入りては引組み、引組んでは刺違へ、一足も退かず、枕を並べて討死す。嚴しかりし擧動なり。

越前守は、頼切つたる郎等若干討たれけれども、彌九郎を討取り、悦ぶ事限りなし。

抑越前守、宮內少輔に宿意何事ぞと、事の起りを尋ぬれば、土州安藝の領主備後守國虎は、元親の爲に討たれぬ。海部は國虎が一族なれば、安藝の落人海部を憑みて居たりけるが、元親の舍弟と聞きて、舊主の讎を報いんが爲に、越前守を勸めけるとぞ聞えし。元親此由聞き給ひ、扨も無念の事共かな。我一世の內に、海部めが首取りて、溺の器にして、仇を返さんずるとぞ申されける。

一宮再興の事

故信濃入道覺世草創の始、長岡郡に發向ある所に、一宮の神主社人尊貴、さるさきに降參して、土佐郡の内一番に手裏に入りければ、大明神の當家を守護せさせ給ふ所なりと、信心を凝らされける。思ふに合せて、向ふ所降らずといふ事なく、攻むる所、傾けずといふ事なし。野草に風を刈るが如く、國中殘らず靡き順ひければ、愈拜趨の禮を重くして、益興隆をぞ祈られける。抑一宮正一位高賀茂大明神と稱し奉るは、延喜式神名帳に載する所の都佐座神社是なり。日本書紀に、土佐大神といへるも、亦此神の御事なり。古事記曰、大長谷若建命雄略天皇坐長谷朝倉宮治天下也。天皇一時登幸葛城山之時、百官人等悉給著紅紐之青摺衣服。彼時有其自所向之山尾登山上人。既等天皇之鹵簿、亦其裝束之狀及人衆相似不傾爾。天皇望令問曰於玆倭國除吾亦無王。今誰人如此行。卽答曰之狀亦如天皇之命。於是天皇大忿而矢刺、百官人等悉矢刺爾。其人等亦皆矢刺。故天皇亦問曰然告其名。爾各告名而彈矢。於是答曰吾先見問故吾爲名告。吾者雖惡事而一言、雖善事而一言、言離之神葛城之一言主之大神者也。天皇於是惶畏而白、恐我大神有宇都志意美者自宇都下五字以音不覺白而

大御刀及弓矢始而脫百官人等所服之衣服以拜獻。爾其一言主大神手打受其捧物。故天皇之還幸時其大神滿山末於長谷山口送奉。故是一言主之大神者彼時所顯也。土左國風土記曰土左郡家西去四里有土左高賀茂大社、其神名爲一言主尊、其祖未詳。一說曰大穴六道尊子味鉏高彥根尊。續日本紀曰天平寶字八年十一月庚子復祠高鴨神於大和國葛上郡高鴨神者法臣圓興與其弟中衞將監從五位下賀茂朝臣田守等言、昔大泊瀨天皇（雄略）獵于葛城山時有老父每與天皇相逐爭獲。天皇怒之流其人於土左國、先祖所主之神化成老夫、爰被放逐。於是天皇（稱德）乃遣田守迎之令祠本處。釋日本紀曰曆錄曰雄略天皇四季庚子春二月天皇獵于葛城山、忽有長人面形似天皇。天皇知是神人故問何處公。對曰現人神願稱皇諱。答敕朕是稚武尊。長人曰僕是一言主神也。遂與盤于遊田言辭泰恪有若逢仙日斜田罷神送天皇至來目川。群臣各脫衣服而獻神拍手而受之。凌空而還、一說懸一柏末而受之。是時咸知有德天皇矣。或說云、時神與天皇相競有不遜之言、天皇大瞋奉移土左。神隨而降神身已隱以祝代之。初至賀茂之地、後遷于此社。而高野天皇寶字八年從五位上高賀茂朝臣田守等

奏而奉レ迎二鎭於葛城山東下高宮岡上一。其和魂者猶留二彼國一、于レ今祭禮云々。國記曰雄略天皇卽位二年戊戌奉レ移レ鄕者誤也。多氏古事記曰天皇一時獵二葛城山向堆之上一、有下如二天皇儀一者上、彼此同容。天皇大異遣レ使問曰、大倭之國豈有二如レ朕之人一儞。是誰何與レ朕同儀耶。大神所レ答之辭與二天皇一同。天皇懷レ瞋更問。然則稱レ名。大神答云、先問レ吾者汝也汝宜二先稱一レ之。天皇敕答、朕是大倭根子稚武天皇也。大神答曰、吾是吉事一言凶事一言言放之葛木一言主神也。天皇大驚下レ馬而拜、百官羅拜。大神答拜又如二天皇一而射二狩山獸一。言語相通者、蓋疑此時有二不恭之言一乎。論者曰夫神祇者陰陽不測與二寂寥虛無一利用出入民咸用レ之者也。雖下懷二自然之聰明一、蘊中自然之猛烈上、而不レ得レ勝二於天皇之威一、而慝二心質幽冥之境降魂邊鄙之邦一。是所謂剛而柔弱以レ蒙養レ正妙二萬物一而爲レ言、不レ可三以形語二者也。而今女巫計レ利假レ威宣二誑頑俗一迷二溺流弊一不レ止非レ銷レ禍招レ福更調レ氣和レ物之本意一者也。今正月十五日立レ例百姓相聚行二射禮於社下一。五月下旬申二南畝功竟之事一月上旬貢二封戶調物一、國司必向、自レ古成レ蹤云々。古老傳へて當社の因緣なりとす。さればば代々の帝王御渇仰御座して、昔は大厦玉を磨き、高樓金銀を鏤め、燈明の光日月

に映じ、音樂の聲溪泉に響き、修行・神主・社僧・鍋島・國貫・社人とて、神職六段にして七十五人あり。七百五十町の社領を寄せられ、一年に七十五度の祭禮をなす。正月中の五日に射禮あり。七月初の三日を正記として、神輿を船に乘せ奉り、十餘里坤の方、高岡郡浦の門の入海に促し、船中にて祭儀あり。是を御船遊といふ。依つて御船大明神とも申すなり。彼御神を土佐國へ移し參らせたる時、御船を浦の内へ寄せ、即其所に御宮を立て、賀茂と號して崇め奉りしに、或時御神體現れさせ給ひ、此所は我が御勸めに叶はずとて、あたりなる石を取りて、此石の落止まりたる所に宮を立て、我を祭るべしとて、艮の方に向つて投げ給へば、十餘里を經て、今の一宮に落止まりしかば、此地に宮を立てられける。礫石とて今にあり。浦の内へ、御船あそびも此故とぞ聞えし。天平寶字三年丁亥、例の如く祭禮をなす所に、吾川部長濱の沖にて、俄に難風吹きて、御船を覆さんとする間、宮村が汀に御船を寄せて、磯傳ひに御輿を廻らす所に、赤木山の麓へ、狼數百群り出で、神人を喰みしかば、扨は神意に叶はざりけるよとて、此事止みて、其後一宮より一里餘の南の方、長岡郡五臺山の

西麓に祠を立て一宮と稱し、神輿を促しける。初めて浦の内より、一宮へ移り給ふ時、此所へ御船を寄せたる故とかや。されども星霜推移り、雲霜既に古くて、而も近年國破れ民亂れて、兵革街を動し、鯨波山野を響かしゝかば、神社の尊崇佛堂の拜禮もなく成行きて、當社もいつしか廟宇漸く傾き、門牆半朽ちて、祭禮も僅に御宮の境內五町餘の馬場を、二王門まで御輿を廻らして、唯其儀式計り殘りて、神光漸く衰ひ給ひける間、元親再興あるべしと評定せられしかども、世の怱劇に依りて、兎角延引ある所に、去永祿六年の秋、本山の軍士宮村の民屋を燒拂ひ、餘煙當社の境內に及びて、本社の外は、末社神人の居宅迄、殘らず回錄せしかば、元親深く患へ給ひ、急ぎ造營果し遂げらるべしと、頓て京都より大助とて、隱れなき上手の大工、幷に檜皮師を呼下し、同十年丁卯、十一月十五日斧初、元龜元年庚午九月十三日棟上あり、四十座の末社・二王堂・護摩堂・鐘樓堂・三昧堂・經藏・寶藏・國司屋・天上屋・廳屋・經所・井屋・東西廊門・一の鳥居・二の鳥居・三の鳥居・三重塔・神宮寺・長福寺・一和尙・神人の舍屋に至る迄、春秋五年にして、同二年の春、土木の功成就す。工人細を極め丹青の飾を竭し

ければ、言語道斷の壯觀なり。雜人原御宮の境内に入りて、竹木を伐り牛馬を繋ぎ、御宮に落書、堅く禁制の高札をぞ立てられける。元親參詣あるべしと仰せければ、愈宮を汚すべからずと、晝夜番人を附置き、其日になりしかば、役人共は宵より相詰め、曉天に庭の塵取らせ、蜘の巢を拂はせ、新に淸めける所に、御宮の垂木を見れば、何者の所爲にやありけん、何の間にか書きたりけん、大文字に、一首の歌をぞ書付ける。梯ならでは及ぶ所にあらず。不思議といふも愚なり。

元親は長き弓矢の家と聞くさいかうまくを一の宮かな

役人共是を見て大きに驚き、御宮に落書等をさせまじき爲に、番人を附置かれたるに、斯る不義あるを知らざる事、兎角詞に述べられず。いかなる罪にか逢ふべき。急ぎ工人を呼びて是を削らせやする。垂木を取換へやすると、とりどり評議しけれ共、其程の時刻もなければ、先番人を搦めてぞ置きける。兎角する程に、元親參詣ありて神樂を奏し、神拜事終り、御宮順見ある。老臣畏りて、右の次第を申しければ、元親立寄り給ひ、是は不思議の事共かな。何さま人間の所爲とは見えず、數多の番

人を附置くといひ、殊更尋常の梯も及び難き所なり。たとひ雜人の所爲にもせよ。歌の體、元親が再興、神意に叶ふと覺えたり。番人の科にはあらずとて、繩を解きてぞ免されける。頓て祭禮執行はれ、國中の良賤參り會ひて、神威愈顯はれ給へば、靈驗益明かなるべしと、神慮も暗に計られたり。神は人の敬に依りて威を增すとは、斯る事をや申すらん。されば人は神の德に依りて、運を得る理なれば、秦家繁昌武運長久疑なしと、仰がぬ人はなかりけり。神職社領先規の如く、祭禮舊式に任せて、年々怠慢ある事なし。其後當社造替ありしかども、彼垂木をば取換へず、今にあるとぞ承る。

小島源藏相撲の事

元親は常に相撲を好きて、己が鄉民によらず、取手を集めて見物ある。其頃泉州小島に源藏とて、天下に名を得たる相撲取あり。五畿內に手に足るものはなかりければ、東國に下り、夫より北國西國修行して取廻るに、楯突く者なかりしかば、南海道

を望み、土佐國に來りて、前の濱といふ所に、宿を取りてぞ居たりける。元親此由聞き給ひ、其者呼寄せ、男の體見るべしとあれば、源藏頓て出仕して、卷樽二つひふく百本進上す。家中の取手共をも召寄せ見せらるゝ。男の長六尺五寸、袴は大布を八尋縫ひ並べて着したり。其の頭は四尋袴なりしが、是には足も入らざりしとかや。年は廿八九と聞えしが、面構は四十計にぞ見えたりける。力は百四五十人力ありといふ。料理給はりて、前の濱へ歸りける。聞きしより見て驚く計なり。元親宣ひけるは、是迄遙々來りたるに、相手なしとて返しては、家の恥辱なり。是非取らせて見ばやとて、家中の面々を召寄せらる。其頭取手と聞えしは、岩神三郎左衞門・久萬豊後・國澤三河・久萬兵庫・長崎磯之助・宮地團介・宮崎善右衞門・江村小備後・長宗我部右兵衞等なり。中にも磯之助は八十人力、右兵衞は磯之助に遙增さりたり。男の太さも源藏に劣らず、國中一の大力なり。又小備後は、去長濱の合戰には、端帆の船の檣のせみもとを取り、大勢を打伏せし者なれば、力の程は計られず。其外の者共、何れも劣らぬ强力なり。此者共に、如何思召すやと宣へば、此中に、右兵衞より外に、源

藏と一組仕らん者は覺えずと、皆一同に申しければ、右兵衞、此度親武をば御免なさるべし。若し取負くるに於ては、御名字をも始め、家老たるもの、天下の負名を得ん事、且は御家の瑕瑾、且は私の恥辱に候と申しければ、元親、理なり。夫は時宜によるべし。扨誰をか相手に出すべしと仰せければ、久萬兵庫進み出で、さ候はゞ俊政仕り見るべし。扨取様はいかにと宣へば、兵庫、あの様なる大力の相撲は、必力を賴みにして、細に手を取らざる者なり。只大手を廣げ、かゝり候所を、つまとり仕るべし。取り得たるに於ては、負け候まじと申す。元親聞き給ひ、大力の者に逢うて、さやうに定めたる樣にはなり難かるべけれども、先づ賴もしゝと宣ひて、各退出したりけり。頃は天正元年八月十四日、岡豐の城下、犬の場にて取らせらる。行士は福留隼人、式正の出立にて是を勤む。元親は、北の方一段高く棧敷を構へ見物ある。近鄉の上下群集せり。源藏裸になりて出でければ、諸人肝を消し、是は人間にてはあらじ。鬼といふ者にやあるらんと申合へり。斯くて相撲初まり、久萬豐後・國澤三河出でて取る。源藏二人乍ら、同じ手に安々と捻付けたり。其時兵庫立出づる。背

は五尺八九寸の男なれども、源藏ゝ立並びければ、二王の前に、小兒の遊ぶに異ならず。對揚すべきとは見えざりければ、唯一摑みの勝負なるべし、尋常に止めて入らんには如かじと、見物の上下も呵き、元親も手に汗を握り、固唾を呑みてぞ坐しける。源藏前の如く、同じ手に捻付けんと、大手を廣げ攫み付かんとす。兵庫近寄らず、手先にてあへしらひ、二三返廻りけるが、兵庫時分を見て、源藏が兩手のつま取り押ため、源藏引放さんと引けば、ついて引かれて、取りたる所は放さず。源藏土俵へ廻りたる時、餘りに強く引放さんと少し仰のく所を、兵庫取りたる兩手を打捨差下り、四結を取りて、元親の前へどうと投げたりければ、源藏が足の上りざまに、元親の立笠を打破りたり。其時見物の上下、一度に吐と鬨を上げ、取つたりや兵庫、投げたりや久萬殿と、暫しは鳴も靜まらず。元親悅喜限りなく、當座の褒美として、兵庫に持長刀を給はりけり。源藏には帷子五つ鳥目十貫給はりてぞ返されける。翌日御悅として、家中の上下登城す。元親兵庫を召され、此度の手柄、比類なき高名なり。相撲は遊戯の業なりと雖、互に勝負を決する上は、戰場の組討に異ならず。汝が手柄

を以て、天下の外聞、家の面目を施したり。源藏諸國を廻り取しく所に、彼に打勝つ上は、兵庫が相撲、併しながら日本一といふべし。自今以後相撲を止めよと宣ひて、知行加恩あり、兵庫は名をぞ上げにける。

東灘邊退治の事

天正元年の秋、元親東灘邊退治あるべしとて、岡豊を打立ち給ひける。羽根・吉良川・西寺・實津・崎の濱・野根・甲浦の一揆共、此由を聞きて相催し、尾僧山に隱れ居て待懸けたり。元親は、一揆是まで取出づべきとは、思ひも寄らず。先手を乘越え、馬廻小性計にて、中山を上らるゝ所を、茂の隱より、吐と喚いて突懸る。各是はと色めく所を、中島與市兵衞・門田與右衞門・福富甚兵衞、眞前に鎗を合せければ、殘る輩も、同じく續いて突懸り、敵味方入亂れ、押しつ押されつ、黑煙を立て、二時計り競合ひ、互に勝負見えざる所に、元親馬を驅出し、敵を蹴散らし、騷ぐ所を得たり賢しと、惣軍一度に突懸り、無性無盡に打つて棄て、右往左往に追散らし、羽根の領主一圓但馬守。

其弟民部少輔が栖籠る尾僧の城に押寄せ、火水になれと攻めける間、人質を出し降參して、先手にぞ加はりける。吉良川の城主安岡彈正・其子源兵衞、城を出でて降を乞ふ。是も同じく先手にと加はりけり。浮津の城主は明けて退きたりければ、北村見齋を、奈良士の土居に入置かる。此見齋と申すは、其先西寺の住持なりしが、落墜して武士になりけるとかや。室津の城主室津半三郎は、浮津境・甘崎二ヶ所に城を構へ、番手の士を籠置き、其身は室津の城に栖籠り、逆茂木・搔楯・堀掘らせ、弓鐵炮を備へ置き、元親猛威を振ふ共、是より東へは、一足も入れ立てじと、靜まり返つて待懸けたり。元親聞き給ひ、優しき室津が擧動かな。只一息に踏潰し、阿州迄の見懲にせんと、平攻に攻寄せ、夜晝の境なく、揉みに揉うてぞ攻入りける。城兵共、爰を破られては、末代の瑕瑾なりと、義を鐵石の如く守りて、防ぎ戰へども、寄手は目に餘る大勢なれば、終に押破られ、室津が一騎當千と憑みたる宮地兵藤次は、韮生の住笹次郎左衞門に討たれければ、半三郎力及ばず、甲を脱ぎ弓弦を外し降參す。津呂・東寺・三津・椎名悉く降參しければ、人質を取らしめ、岡豊へ歸り給ひけり。

吉良式部少輔横死の事

斯る所に坊主一人、岡豐の城下、道の傍に畏つて居たりけり。若士立寄り、何者ぞと尋ぬれば、是は其先吉良式部少輔殿の茶道にて候。彼家歿落の後は、寄る方なく牢牢の身と罷成候間、御當家に召仕はれ下され候やうに、御取成頼み奉るとぞ申しける。此由披露申しければ、元親申しけるは、茂辰近習にて、懇志に預りし者なれば、我をたばかりにや來るらん。急ぎ追返すべしと宣へば、坊主申すやう、御疑は御理、某阿州へ立越え、吉良殿に鴆毒を參らするか。然らずば討取り、御疑を散じ奉らんといひ捨て、立歸りけるが、頓て樣々の菓子を調へ、鴆毒を交へ一器に入れ携へて、勝瑞へぞ急ぎける。痛はしや茂辰は、小鹿の角の束の間も、別れてあるべきものかはと、思ふ中を引別れ、堪へぬ思に伏沈み、其方の空を遙々と詠めやり給へば、連々たる暮山の雲、いとゞ涙の雨となり、空しき床に只獨り、寢ても流石に寢られねば、切て相見る夢もなし。秋夜長夜長、無眠天不明、耿々殘燭背壁影、蕭々暗雨打窓

吉良茂辰鴆毒に死す

聲、見るに付けて思を沈め、聞くに隨つて歎を増さずといふ事なし。或日の雨中の徒然に、來し方行末の事など思ひやりて、觀身岸額離根草、論命江邊不繋舟と、獨り口ずさみ涙ぐみ給ふ所に、案内乞ひて來るものあり。見れば昔近習に召仕ひし茶道坊主なり。餘りの事に、いかにやと計にて、先づ涙に咽び給へば、茶道も涙を流して、斯る御有様を、せめて見奉らん爲に參じて候とて、一器をぞ捧げける。神ならぬ身の悲しさは、我を害する劍戟と、夢にも知らぬぞ哀れなり。舊恩を忘れず、遙々來る志、詞にも盡し難しと、一器の菓子を賞味して、終夜語り明し、翌日坊主は、暇乞ひて歸りしかば、茂辰門外に送られ、名殘の涙せき敢ず。其日より茂辰、五體黄疸の如くなりて、五臟湧くが如く、六腑燃ゆる如し。筋骨苦痛して、三日と申すに、終に果敢なくなり給ふ。哀れなりし事共なり。茶道は側に隱れ居て、此由を聞き大きに喜び、急ぎ岡豊へ來りて、吉良殿に鴆毒を進めて、忽に失ひて候故、入道殿より以來、一念に懸けられし怨敵を亡す事、天晴忠の者にて候ぞ。厚く御恩賞申し給ふべしと、高名顏にぞ申しける。元親聞き給ひ、主君を弑逆の者は、天地容れざる所、論ずるに足ら

ず。望む所の恩賞には、大國を遣すべし。慈悲の功德には、火焙を止めて、只打つて捨てよと、大聲上げて宣へば、坊主聞きて大きに驚き、立つて逃行く所を、若士二人追懸け、三の丸の門前にて打捨てけり。天罰遁るゝ所なしと、惡まぬものはなかりける。

土佐物語卷第七終

土佐物語巻第八

中納言殿放蕩の事

一條康政遊蕩

一條從三位權中納言兼定卿は、御諱を改め、康政と號せらる。元來此卿は、生質輕薄にして、常に放蕩を好み、人の嘲を顧みず、日夜只酒宴遊興に耽り、男色女色し訣をなし、又は山河に漁獵を事とし、輕業力業異相を專とし、近仕の輩には、主從の隔なく、唯親友の如し。肩を押し膝を組み、或時は男女を集めて踊を踊らせて、其中に立交はり、祭禮の庭、說法の道場にも、深編笠を着、頰被抔して諸人に交り、男に近付き女に馴れ、樣々の戲玩をなし給ふが、人是を知らじとや思しけん、外樣の士に向ひては、立居行跡重々しく、目の見返しもやらずして、輕々しく詞もかけず、鵜鷹逍遙などの折柄、往來の旅人は是を知らず、笠を冠り、或は馬にて過ぐるものあれば、奇

怪なりとて、鐵炮を打かけ弓を射かけ、又は人を馳せて打擲せさせ、無禮不義を正すべしとて、些の科をも免さねば、大小上下、安き心はせざりけり。舊臣土居・安並・羽生・爲松、君不義あるを見て、諫めずんばあるべからずとて、時々諫言すれども、更に承引ましまさず。萬心の儘に振舞ひ給ふ。或夜若士共を召寄せられ、御酒盛ありけり。黄門仰せけるは、昔和田義盛、一門九十三騎を引連れ宿交し、長者の許に打寄つて、夜晝三日の酒盛に、曾我十郎がおもひ者の虎御前を見て、義盛腰を拔かし、盃の爭して、今迄の夜語となりしぞかし。義盛が白髮頭をしても、忘れぬものは戀の道なり。寔に男として戀せざらんは、玉の盃の底なきが如しと、吉田の兼好といひし曲者も、書置きしぞかし。哀れ今も、虎がやうなる女に酌を取らせば、夜の明くるも、日の暮るゝも知るべからず。男計の酒盛は、何となう心淋しと宣へば、若士進み出で、虎御前は昔の事に候へば、聞く計にて、目に見たる事候はず。爰に御領内平田の源右衛門と申す百姓の娘、雪と申して、今年十七八と見えて候が、其姿容、昔の虎御前も、爭か彼には勝り候べき。是を召して御酌を取らせられ候へと、打笑ひ申上ぐ

れば、黄門はや心移りして、何と汝も見たるかと問ひ給ふ。若士二三日以前にも、所用の事候て平田へ立越え、源右衛門が方へ立寄り候へば、雪ふと立出で某を見て内へ入り、さながら人間とは思はれず。見る人消ゆる計に候へば、雪とは能く號け候と申しければ、何とそれは妻に望む者はなきかと宣へば、見るもの望まぬ者はなく候へ共、兩親いかなる所存にや候らん、遂に肯ひ申さず。素より富榮の者に候へば、深窓に養はれて、常には人にも見えず候。若し御所樣へ奉公をも望むかと覺え候と申しければ、黄門いとゞ嬉しげに聞とれ、早見ぬ戀にあこがれ、いざ明日行きて見るべしと宣へば、夫は餘り輕々しく候。是へ召寄せられ、然るべしと申しければ、いやいや片時も早く見たきぞとて、外へは所勞にて、保養の爲め籠居し給ふと披露して、主從四人、旅人の姿に樣を替へ、忍びて平田へ行き給ふ。折しも雪は庭に出で、梢を詠めて居たりしが、此人々を見參らせ、恥しげに打笑ひ、内へ入りたる粧は、此世の人とは思はれず、胸打騷ぐ計なり。黄門は足元もたどたどしく歸り給ふが、忘れんとすれども忘れず、鷹狩に事寄せて、源右衛門が家に立寄り給ふべしとて、俄に

平田へ泊り、鷹野に御越あり。源右衛門が館を、御宿にぞ定められける。斯くて御酒宴酣に及びて、源右衛門を召して、御盃を下されけり。其時若士に御目配せありければ、頓て心得、つゐ立ちて、源右衛門が妻も娘も、共に出でて御盃を頂戴せよといひければ、畏り候と、裝束を改め、親子座敷に立出づる。雪は恥かしげなる氣色にて出でたる粧、雲の鬢づら花の貌、芙蓉の紅、柳の綠にたとへ、六宮の粉黛顏色なしといひし唐の楊貴妃も、斯る姿にやありけんと、黃門餘りの事に、二目とも見給はず、盃取上げ給ふが、わな〳〵と振ひて、膝に酒を溢し給ふ。先づ母に下され、其後雪にさし給ふ。御酌心得、盃になみ〳〵と、餘る計につぎければ、雪は恥かしげに、いかにせんと案ずるを御覽じて、それ此方へと仰せければ、顏打赤め、盃を持つて立たんとす。御酌是へと、飮殘したる盃を、其儘御前へ差上げしかば、黃門御機嫌甚しく、是三世の盃なりと取上げ、さらりと乾し給ふ。逢うて彌增す我思ひといふ其頃の時花歌、謳うつ舞ひつ醉亂れ、其夜は其所に泊り給ふ。いつしか雪の下紐も、心も共に解けぬれば、秋の夜の、千代を一夜になせりとも、言葉殘りて明けぬべし。假初伏し

の新枕が、交す間もなく明渡り、東雲も早過ぎぬれば、名殘の袖を引別れ、中村へ歸り給ふ。それより日々に、平田へ鷹狩に御越あり。其後平田に新殿を立てられ、源右衞門を番人として、御殿に入置き、平田の鄕を給はりける。近鄕の百姓共は、一條殿、平田往來の夫に使はれ、茶菓魚鳥はいふに及ばず、遠方珍怪のものを持運ぶ。源右衞門が下女はしたに至るまで、綾羅綿繡を身に纏ひ、金銀珠玉を飾りければ、鄕民共は、源右衞門御所とぞ申しける。美目は果報の花なれや、女は氏なうて玉の輿に乘る。楊貴妃寵ありて、姉妹兄弟大國を封ぜられ、人皆女を產む事を重くして、男を產む事を輕しとせし、昔の譬に異ならず。土居宗三是を聞きて、大きに歎きて諫めけるは、平田に於て御遊興御樂み、何事か是に如かん。然りと雖當時自國他國、共に隙を窺ふ折柄、遙々平田へ日々御遊興、且は御油斷且は輕々し。只彼女を御所へ召され候べしとぞ申しける。康政卿聞召し、汝が申す所、一として心得ず。今の世なればとて、鶉鷹の遊びすまじきにあらず。此頃平田に小鳥多き故に、鷹狩に行くのみなり。全く女に迷ふにあらず。又敵、隙を窺ふに於ては、城中に在つても、運盡き

なば滅ぶべし。咸陽宮、何ぞ頼むに足らん。又政務の事は、汝等に兼々任せ置く上は、能きに計らふべし。我に談ずるに及ばずとて、御座を立ち給へば、宗三御後姿を見送り、偖々御先祖に變らせ給ふものかな。一條家の末になりたる先表なりと、淚を抑へて退出す。其頃は、宗三を始め老臣共出仕すれば、所勞と號して對面し給はず、日々平田へ御越あり。雪は御傍を離れず、晝は終日にしかば、夜は口を專にす。春宵短きを覺えて、日闌けて起く。政事は老臣に任せられ、祭奠は近士に勤めさせ、禮日の勤もなかりけり。されども御機嫌伺とて、平田へ參る者もあり、夫者進むる者もあり、何條源右衞門の宅へ立入るべきやうなしとて、音問絶するも多かりけり。されば中村の城へは、番人の外は、出仕する者更になし。兎にも角にも、一條家の滅亡の兆顯れぬと、心ある人は悲めり。

黃門御出家の事

去程に宗三は、康政卿を諫め兼ね、父有ㇾ過子三諫、而不ㇾ聽則號泣隨ㇾ之。君有ㇾ過臣三

諫、而不ㇾ聽則其義可㆓以去㆒といへり。然れ共我は、譜代相傳の主君なれば、去るべき道なし。君雖ㇾ不ㇾ君臣不ㇾ可㆓以不ㇾ臣。兎に角身を捨て丶諫むべし。然らば王子比干が如く、胸を剖られんは必定なり。さあればとて君の不義を見て、諫めざるは人臣の道にあらずと、一途に思定め、先づ妻子家僕をば、緣を求めて遣し、其身は、下には經帷子を着し、上には常の裝束にて、城中へぞ參りける。折しも平田へ御越あるべしとて、御供の面々集まりければ、若士立迎へ、殿は御不例に候間、出仕の衆中に、御對面あるまじきとの御事に候。是より御歸り候へ。序を以て申上ぐべしといひければ、土居聞きて、宗三が出仕するを、汝等が取次せんとは何事ぞや。御所勞ならば御寢所へ參り、御機嫌伺ひ申さんと、若士を突退け、奥へつと入りければ、康政卿は立出でんとし給ふが、此由を御覽じ、御氣色替りて、兎角の御詞もなかりけり。宗三畏りて、御違例と承り候處に、御機嫌よく、目出度存じ奉り候と、謹んで申しける。中納言殿、案内なしに推參は無禮の至なり。急ぎ退出すべしと宣へば、土居畏りて申しけるは、恐れ乍ら御心を靜められ、事の道理を聞召され候へ。事新しき申事に

候へども、君襁褓の内より、守立て奉り候へば、晝夜によらず、御寢所へ參じ候とて、終に人を以て案内申上げたる事は御座なく候。平田御遊興の事、再三諫言申上ぐるに付、疎ましく思召し、舊功をも忘れさせ給ひたりと覺え候。君は知召され候まじ。此頃の取沙汰に、平田の御殿をば、源右衞門御所と稱し、君をば平田の入聟と號け、上下蔑し、物笑ひに致す由承り、偏に御家の末と存じ、淺猿しく候。宗三齡傾き、御家の亡びんを見奉らん事、何ぼう悲しく候。哀れ諫言を入れさせられ、御過を改められば、御家門繁昌御武運長久に渡らせ給ふべし。是をも猶御用ひなく、奇怪に思召すならば、宗三が皺首を召され候て、其後はいか程も、御心の儘に働かせ給ふべしと、涙を流し申しければ、康政大きに怒りて、夫れ諫言は人臣の常なり。然るに皺首打てとは、餘り過ぎたる詞かな。さらば願を叶へんと、腰の刀に手をかけ給へば、土居素より思ひ設けし事なれば、些も騷がず、近仕の輩に向ひ、旁能く覺え給へ。宗三罪せられなば、遠くは三年、近くは今年を過ぐべからず。御家潰亡に及び御後悔あり、却て宗三を思出されんぞ。早首召され候へと、押肌脫ぐかと思へば、下なる經帷

子を顯し、西に向つて合掌す。康政腹に居ゑ兼ね、腰の差添するりと拔き、水もたまらず討落さる。無慙なりける次第なり。惜いかな、其身勇氣ありて智慧深く、禮讓厚く人を懷け、主君に仕へて、善を勸め不義を諫め、賢人を上げ佞奸を退けぬれば、道治まり家整り、上下安堵の思をなし、偏に父母の如くなりしに、宗三刑せられければ、闇夜に燈消えたる心地して、歎かぬ者はなかりけり。されども近仕の若者共は、宗三が賢人顏してむづかしかりしに、今は遮る者もなし。世は廣くなりぬとぞ喜びける。徽子去つて殷の世傾き、范增罪せられて楚王滅びけるを、知らぬ事こそ悲しけれ。斯りし後は、君、惡を積めども、臣敢て諫を獻ぜず。只群臣口を噤み、萬人目を以てす。平田の御遊彌增しければ、所々の城主領主はいふに及ばず、俸祿をうけ職を勤め、總て人に名を知らるゝ程の者は、御機嫌伺ひの爲、日夜の境なく出仕をなし、或は人を參らせ、捧物山を動しける程に、平田の繁昌は、中々にいふ計なき事共なり。されば中村は寂び返り、城門草深く、庭上木の葉滿ちて、主なき宿に異ならず。忌はしかりし分野(ありさま)なり。痛はしや康政卿の御臺所は、唯御嫉み勝にて、御袖の乾く隙も

なし。風吹けば沖つ白浪立田山、人の情は薄紅葉、色には出さで明暮に、胸の炎の立登り、提子(ひさげ)の水の湯となりし、昔語を今更に、御身の上に準へて、御惱み勝にぞ見え給ふ。斯くて宗三が一門類族親友は、我々共、如何なる罪にか沈まんと、己が領地に取籠り、討手向はゞ一矢射て、腹切るべしと支度す。其外の者共、今までは、宗三があればこそ、御家は治まりたれ。此後は、如何なる事か出來んずらんと、危まざるはなかりけり。安達・羽生・爲松、此由を聞きて評しけるは、宗三は諫めて死す。然るに我々共、君の不義を餘所に見て、御家の滅亡を待つ事、且は不覺なり且は不忠なり。安否を運に任せんと、評議一途に相究め、平田の道に大勢を遣し、御越を止め申せ、御供の衆中狼藉せば、一々に搦取れと、先づ源右衛門親子三人を、一間なる所へ取つて押込め、番を附けてぞ守らせける。中納言殿、斯る企をば知召されず。毎度の如く御越ある所を、大勢取卷き止めたり。黄門驚き給ひ、こは何事ぞと仰せければ、斯樣斯樣の次第にて、平田の親子三人をも、召取り候と申しければ、兎角の仰もなく、涙に暮れさせ給ひける。唐の玄宗皇帝、安祿山に襲はれ、楊貴妃と同車にて、蜀の國

へ赴き給ひしに、馬䃭が原にて御車を止め、楊貴妃を失ひし、昔の恨に相同じ。此上は力なしとて、中村の城へ歸り給ひけるが、さるにても宗三が亡魂の、思はん事の恥かしさよとぞ宣ひける。老臣、急ぎ御隱居ありて、政務をば、若君へ讓らせ給ふべき由申しければ、いかやうにも計らへとて、天正元年癸酉九月十六日御出家ありて、自得宗惟と號せらる。御年卅一とぞ聞えし。哀れなるかな平田の雪は、一間なる所に押籠められ、夢の心地して居たりけるが、君を再び見もし、見え奉らん事は叶ふまじ。活きて物思はんより、君が一日の恩に、妾が百年の身を失ふには如かじと、夜に紛れ忍び出で、四萬十川とて大川あり、彼川岸に臨み、西に向ひ手を合せ、南無や西方極樂無界の本主阿彌陀如來、本願あやまたず、厭かで別るゝ妹背のなからひ、必一つ蓮に迎へさせ給はれと、深き淵に飛入りて、底の水屑となりにけり。哀れといふも愚なり。父母番の士共、夜の間に雪が見えざれば、何方へか落行きけんと、彼方此方と尋ぬる所に、道行く人、あな可愛し、美しき女房の、何の恨にか、四萬十川に身を投げ、空しくなりて、岩の硎に流れ懸つて坐すなり。南無阿彌陀佛と、語り捨てゝぞ通り

ける。扨は雪にやあるらんと、急ぎ大勢立越え、死骸を引上げ見れば、疑もなき雪なり。美しかりし姿容も替り果て、綠の黑髮藻に亂れ、目も當てられぬ野風なり。「我妹子が寢亂髮を猿澤の池のたまもとみるぞ悲しき」と、時の帝の御製まで、思ひやられて淺ましき。中納言殿聞召し、哀れ甲斐なき妾なりとも、今一度行きても見まほし。共に沈みも果てなんと、歎き沈ませ給へども、夫も流石に叶はねば、朝な〳〵夕々の御心、譬へていはん方もなし。行宮見レ月傷レ心色、夜雨愁猿斷腸聲、夕殿螢飛思潜然、孤燈挑盡未レ成レ眠。見るにつけ聞くにつけ、御袖の乾く隙ぞなき。或時三日月を御覽じて、

あかざりし人の眉根にたぐへても名殘ぞ惜しき三日月の影

情動二於中一而形二於言一とも、詩の序に書きたりし、筆の跡こそ誠なれ。

一條入道殿沈落の事

一條黃門康政卿は、政事をば、幼稚の御子息萬千代殿に讓り、出家入道し給ふ上は、

子孫繁昌、扨は西方極樂世界南無阿彌陀佛をこそ願ひ給ふべきに、明幕諂諛佞奸の若者共を集め、さるにても老臣共が、我を諫むるは理なれども、平田の親子を縛めしは、誠に情も知らぬ奴原なり。いかにもして彼等を打つて、我妄念を散じ、雪が亡魂の恨を晴らさせばやと思ふなり。汝等隨分隙を伺ひ、闇打にせよ、たばかりて毒酒を飮ませよ。少の過あらば、速に申上げよ。罪に落すべきぞと、樣々の惡行を企み給ふ。構へて人に知らすなと、連歌の興行・詩歌の會・十炷香の遊抔と稱して、夜晝潛に集りて、內議評定とりどりなり。隱すとすれど自ら、天知る地知る神知る我知る習なれば、爭か人の知らざるべき。惡事千里を走り、羽生が郞等此由を聞き、急ぎ主人に知らせける。羽生驚き、爲松・安並を呼び、潛に內談しけるが、若し告ぐる者の誤にやあらん。空知らずして、暫く事の由を窺へとて、忍を入れて見聞かせけるが、いやいや何方より、如何なる方便のあるべきも知れず。延引して事强大に及びては、後悔すとも甲斐あるまじ。急に實否を糺すべしとて、黄門近習の坊主間崎專阿彌に、所用の事あり、來臨すべしと、人をして言遣りける。專阿彌何事にやと、來

る所を取つて押へ、汝確に聞け、君近來連歌・詩聯句・十炷香等の御會は、我々が首を討たるべき御企の由、告知らする者あり。汝知らぬ事はあるまじ。ありの儘に眞直に申せ。些も僞らば栲問すべしと、あらゝかに申しければ、專阿彌驚き震ひ〳〵、先づ些し爰を寛げ給へ。御尋の上は、何しに僞り申すべき。君は斯樣の御諚あり。何某は兎いひし、誰々は角申しきと、ある程の事、殘りなく申しければ、此上は免し遣すべけれども、若又彼方へ此旨を告ぐる事あるべし。其内押込め置くとて、一間なる所に、番を附けてぞ置きにける、專阿彌は餘りの怖しさに、只夢の心地ぞしたりける。老臣共、さらば入道殿を他國へ送り棄て、若君を守立て、長宗我部宮內少輔を賴みて、後見をせさすべし。但主君を追出す事、大惡逆に似たれども、若君を守立て、御家門長久の計策にて、私にあらざれば、天の照覽も恐るゝ所なしと、衆議一同して、入道殿の暴惡、諸臣共の所存、委細に書記し、稻吉民部を邊路に出立たせ、江村小備後が方へぞ遣しける。此小備後は、一年入道殿豫州へ發向の時、元親より加勢の大將したる故、中村の家老とも、常に書音を通せし故とぞ聞えし。小備後、彼書翰を差上

げしかば、元親披見あり、誠に希代の珍事かな。入道殿の梟惡、一々言語に絶えたり。扨主君追出の事、前代未聞といひ乍ら、衆議一同の上は、今更評するに及ばず。次に我後見の事、御家門長久の爲なれば、辭する所に非ずと、同心の返牒し給ひけり。諸臣喜び、扨追出の方便は如何に、相傳の主君を手籠にするも流石なれば、謀り出し、船にて豫州か豐後の方へ送り捨てんと評定して、近習の若士して、近來は御徒然に渡らせ給ふべし。龍串の磯へ、御遊覽に御越遊ばし候へかしと申しければ、入道殿たばかりとは知召さず、老臣共が先非を悔ゐて、我を慰むるにこそと、大に悦び給ひける。頃は天正二年甲戌二月半、船にて御越あるべしとて、下田浦指して出で給ふが、霞み渡れる山の端に、雲かと疑ふ花の色、行手定めぬは心なしとて、間崎より直に陸にて、いつ田山の嶮しき坂を凌ぎ、下の茅・かいがけ・雲母・大岐・加久見などいふ所を御覽ありて、三崎浦に着き給ひ、當麻の濱を過ぎて、龍串の磯に出で給ふ。磯の石異形にして、風景も又雙なく、譬ふるに所なし。畫圖の中に座するが如しといひけんも、斯る所をや、王質が入れし仙境にもやあるらん。爰に至る人、毎に斧の柄

も祈すべくぞ覺えたる。日本廣しと雖、雙ぶ方なき境地なり。されどもかたつ田舍なれば、太山の櫻、夜の錦と、房家卿惜しませ給ひけるとかや。抑龍串と申すは、石の形に、阿の龍吽の龍とて、二つの龍あり。阿吽は口の開合なれば、龍の口石といふを、略して龍串といふなり。或說に、二つの龍を貫きたるが如くなれば、龍串といふなり。又一說には、奇石の中に、殊更龍の勢勝れぬれば、龍附島を略していふともいへり。後は青山巍々として、其形屛風を立てたらんが如し。前は蒼海漫々たり。舟帆片々として、滿海の風景を浮べ、漁浦綿々として、嘉陵の靄氣を含む。汀には異類異形の石の數、逐一に是を見ば目も及ばず、百日を經るとも、盡くべからず。中にも東に男體の山、西に女體の山あり。東は陽西は陰、天地自然の形なり。阿の龍は東にあり、吽の龍は西にあり。陰陽不側の姿なり。麓には數十丈の布引岩・焙烙岩・佛岩・唐獅子岩・疊しき岩・障子岩、國俗海邊の岩を呼びて、岩といふ。見上ぐれば、鷄足山の洞と號けたる洞あり。其中に尊き僧の立像あり。迦葉尊者入定して、佛の涅槃を闍に知召しけん、月氏國の鷄足山、今目の前にあらはしぬ。いと尊くぞ覺えける。

其側に紫雲石、望衆來迎の雲の氣色、神妙不思議の筆勢は、傳へ聞く畫工摩詰が堪能も、是には筆を投ずべし。天の反橋・五百羅漢・梅の古木といふ石あり。中にも此梅は、屏風の如き岩の腹に、梅の古木を彫付けたり。其美しき形粧は、東風吹かば匂おこせよと詠み給ふ、彼御神の所爲ならでは、斯る奇特のあるべきかと、見る人感をなすとかや。櫻濱といふ濱あり。眞砂にはあらで、美しき貝の殼のみの濱なりけり。花の石にある櫻貝、秋は錦の紅葉貝、流れて早き月日貝、憂世は水の車貝、駒の爪貝蹄貝、衣の玉貝寶貝、名も懐しき女郎貝、思ひます貝色貝の、面影殃す鏡貝、手飼の虎の猫貝や、猿貝鳥貝鶉貝、沖行く船の帆立貝、鹽吹貝に流れ貝、夜明を告ぐる鳥貝、くぼ貝うの貝かた白貝、赤貝すり貝まつこ貝、妹は逢らん子安貝、やさし姫貝小袖貝、ひな貝つぼ貝おもり貝、矢竹心や武士の、甲貝鎧貝、ひし貝ほう貝竹の子貝、をさ貝錢貝おつむき貝、雲貝龍貝いたら貝、さい貝まん貝かた口貝、其貝の品々は、幾千種といふばかりなし。空に知られぬ雲の色、散しく花の如くなれば、櫻濱とは申すなり。入道殿御覽じて、

まきし世の種ぞあやしきいかでこの花は櫻の濱に朽ちせぬ

みそ石より石礫石、海老石龜石水船石、此水、昔はなかりしを、空海大師爰に獨鈷を打ちて、法水を求め給ひしかば、其儘湧出で、滔々として今に絶えせぬみのりとかや。鹿の落角、龍馬の足跡、座頭の晝寢、其外無量の所々を過ぎて、水蒸の岡の湊とて、舟の形にて、小船只一艘出入る計りの自然の湊あり。筆の海を見渡して、昔大納言爲家卿、

水莖の岡のみなとのなみよりや筆の海てふ名には立つらん

と詠みしは此所の事にやあらん。遙坤の方、爪白の磯に入り、船の島・長島・猿嵜・龍嵜といふあり。此入船の島の昔語を聞けば、大元國の老皇帝、支那四百州を討取りて、勢天地を凌ぎしかば、日本を攻隨へんと、萬將軍を大將として、日本王畿五箇國を、四方三千七百里に勘へ、其地に兵を透間なく立雙べて是を數ふるに、三百七十萬騎に當れり。此勢を大船七萬餘艘に取乘せ、文永二年八月十三日、九州博多の津に押寄せたり。日本の勢馳集り、防ぎ戰ふといへ共、九牛が一毛、大倉の一粒にも當ら

ぬ程の小勢なれば、羊を引きて虎の口に入るものなりと、日本一州の貴賤、如何にせんと周章騒ぐ事斜ならず。帝驚き思召し、諸社の行幸御幸、諸寺の大法祕法、宸襟を傾けて肝膽を碎かる。都て六十餘州大小神祇、靈驗の佛閣に勅文を下され、奉幣を捧げられしかば、凡上中下廿二社は申すに及ばず、神名帳に載する所の三千七百五十餘社乃至山家村里の小社櫟社、道祖の小神迄も、御戸の開かぬはなかりけり。弘安四年八月十八日、萬將軍が七萬餘艘の兵船、門司赤間が關を經て、長門・周防へ押渡る。兵船既に渡中をさしゝ時、さしも風止み雲閑なりつる天氣俄に替りて、黑雲一村立渡るとぞ見えし。風烈しく吹きて、逆浪天に漲り、雷霆鳴りて雷光地に激烈す。異賊七萬餘艘の兵船共、或は荒磯の岩に當つて微塵に打碎かれ、或は逆卷く浪に打返されて、一人殘らず失せにけり。其中に只一艘、當國に流れ來りけるが、神明猶許し給はず、忽に沈みて其儘島となる。中低にして兩端高く、即舟の形なれば、入船の島と號けたり。異賊は猿辟と現はれ遠ざけらる。是を見れば猿猴の形にして、近寄り見れば異賊の姿なり。夢の渡りに至りて見れば、僅五丈計の渡りなれ共、滑な

る大岩の腹に、屛風を些し峙てたる如くなるに、拇指の跡ほどの陷き所一二尺計隔て、向ひの方へ雙びたるを道とせり。下は蒼海の泂なれば、碧浪底澄みて、魚鼈自在に游行せり。所の賤の男賤の女は、常に往來する道なれ共、初め是を見る人は、肝を冷さずといふ事なし。夢の渡りと號けしは、宣旨なりとぞ覺えたり。爰を渡りて、爪白・入船の島を見ばやと宣へば、御供の面々、斯る危き所をば、御船に召され、然るべしと申しければ、入道殿莞爾と笑ひ、夫人界は如㆓夢幻泡沫㆒如㆑霞亦如㆑電と、金剛經に說かれたり。出づる息、入るをも待たぬ身を持ちて、危しとは思はずして、千歲の秋を待ち貌に、斯る所を恐るらんとはいひながら、我も亦知り顏にして知らぬかな。必死する習ありとは覺りても何かせん。いざ便り能からん所にて、御遊覽あるべしとて、是より又立返り、風呂臺子石の側、數百人並居る計の所に御座を構へければ、入道殿御機嫌よく、誰かある、一首仕れと仰せければ、鹿持大膳、

いくとせか目なれても猶龍串はいつもはつねの山ほとゝぎす

入道殿聞召し、昔興福寺の別當花林院のやうゑん僧正、聞く度に珍しければ、時鳥い

つも初音の心地こそすれと詠みて、初音の僧正といはれしとかや。今是を本歌にて詠みたれば、龍串の大膳といふべしと笑ひ給ふ。時に若藤右京、

心あらん人に見せばや土佐の海いつこはあれど龍串の磯

入道殿御機嫌甚しく、御盃を傾け御入輿ある所に、豫て期したる事なれば、若士一人遽しく馳せ來り、君は知召され候まじ。此度御遊覽を勸め奉るは、御慰の爲には候はず。日來の御惡行超過し給ふにより、大小上下恨を含み、御遊輿を勸め參らせ、御歸路の節、船津に於て失ひ奉り、御近習の面々を一々に搦取り、縛首討つべきとの結構にて、下田に人數を集め、老臣共始め、御歸を待ち居申候。只是より御船に召され、急に豐後へ赴かせ給ひ、大友殿を御憑みありて、時節を待たせ給ふべうもや候と、誠しやかに威しける。入道殿を始め御供の面々、互に目と目を見合せ、呆れ果てたる計なり。良あつて萬千代はいかにと宣へば、長宗我部宮內少輔を御後見として、守立て參らすると承り候。諸士共君を疎み參らせ、失ひ奉らんと企み候も、畢竟御家門長久に、御繁昌ならしめん方便とこそ承り候へと申しければ、入道殿、向後の事は、

一條康政豐前に遁る

善惡いらふまじきものをと宣へば、いや〳〵此際に至りて甲斐もましまさず。疾々と諫め申せば、さらば汝も供せよと仰せけるを、いや妻子眷屬、如何なる目にか逢ひ候べき。彼等を忍ばせ、御後より追着き奉るべしと申し奉れば、此上は力に及ばずとて、水莖の岡の湊より、はし舟に召され、沖なる御座船に、移り給ひける。水莖の岡の湊の洲の上に、數書き捨てゝ歸る鴈の便もあらば、古郷へ、今の辛さの有增を、傳へまほしくや思しけむ。御身の過とはいひながら、痛はしかりし御事なり。御供の士共、御船に乘るもあり、深山の奧へ逃隱れて、行方知れぬも多かりけり。春花の下に樂盡きて、秋霜の患目前に遮る。哀れなりし分野なり。一條殿御一門の人々には、東小路殿・西小路殿・飛鳥井殿・白川殿などと聞くよりも、皆伊豫・讃岐の方へ立退き給ふ。應仁の古は、京都の亂を避けて、攝家淸花を始め、月卿雲客殿上人、邊土遠國に趣き給ふ中にも、一條殿は、當國へ御下向まし〳〵ければ、御一門の人々も、後を尋ねて下らせ給ひ、年月を送り給へば、往めば都の習にて、田舍の端も、いぶせく思召さず、古鄕の心地して、行末懸けて憑み座しつるに、賴む木の下に雨洩りて、立

寄る影のあらざれば、己がさま〴〵なり給ふ。

限りあればかやが軒端の月も見つ知れぬは人の行末の空

と隱岐院の詠せさせ給ひけん、世の習こそ悲しけれ。

中村陣井內政朝臣大津城に移らるゝ事

爰に加久見左衞門は、所用の事ありて、三崎浦に赴く所に、向より大勢遽しく馳せ來る。こは何事ぞと尋ぬれば、斯樣々々の次第にて、入道殿は豐後の方へ落ちさせ給ひ候。我々も身を隱さばやと存ずるなりといひ捨て、散々にぞなりにける。加久見聞きて大きに驚き、臣弑二其君一子弑二其父一此謂二亂臣賊士一逆罪の第一、天地容れざる所なり。我々も、一條殿數代恩顧のものなり。仇を報せずんばあるべからずと、一族親友を語らふに、與力する輩には、大岐左京進・立石右京進・江口玄蕃・橋本和泉・山路出雲・伊與木對馬・同左平治・上山出羽左衞門・同源介・小島下總・和田上野・依岡左京・野町四郎丸・沖長四郎・大塚米左衞門、彼是廿三人、其勢五百八十騎、中村へぞ押寄せ

ける。中村の家老共は、入道殿を追出し、侫奸の輩行方も知らずなりければ、猶彼一門黨類を尋ね捜し、或は死罪又は追放し、其家々を順見し、財寶を改め番を附け、國政を改替すべしと、役人を定め、評定所に集り、詮議まち〳〵なる所に、加久見左衞門を先として、三方より追取巻き、鬨の聲をぞ揚げにける。中村には、思ひ寄らざる事なれば、太刀一振・弓一張に、二三人取付きて、我よ人のよと引合ひ〳〵、鎗よ長刀よと犇きける。其間に、主討たるれども從者は知らず。親討たるれども子も助けず、蜘の子を散らすが如く、八方へ逃行きける。羽生監物是を見て、爰を落ちては、何の面目あつて、再び人に面を合すべき。命をば何の爲に惜むべきと、大肌脱ぎになりて駈入りて、切死にこそ死にゝけれ。爲松兄弟は、鍋島の城に籠りけるを、透さず取巻き、三日三夜息をも繼がず攻めければ、兄弟大きに勇を振ひ、刺違へてぞ失せにける。寄手、今は本望を遂げぬと、勝鬨を上げて引返しけるが、若者共申すやう、家老の不義は、畢竟萬千代殿を立てん爲なり。幼少とはいひながら、罪一人に歸する理なれば、中村の城を攻めんとて、われ〳〵と勇みける。伊與木左平治諫めけるは、家

老の面々、主君に敵するを誡めて、今又幼主に仇をなすは、古人の詞に、惡を憎みて惡に陷るといふに同じ。所詮向後我々が領知に引籠り、中村へ禁足して、主君とさへ憑まねば、憎げも恨もあるべからず。さらば引返せとて、城下の町に火をかけて、鬨の聲を上げて、しづ〳〵と引取りける。城中には、安並左京を始め、近習外様の老若馳せ集り、大門に門さし堅め、今や寄すると待つ所に、引返しぬと聞えければ、鰐の口を遁れたる心地しけれ共、いかなる方便やあるらんと、上下心を安すんぜず、晝夜氣を詰め用心す。此由岡豐へ注進ありければ、宮内少輔、左樣に諸將一和せず、意趣を含むならば、行末覺束なし。若君をば、岡豐の近所に移し、中村へは、武功の勇士を遣し、狼藉を靜めさせ、若君壯年に及び給はゞ、中村へ返し移すべし。其內は元親近里に在て後見して、守立て奉らんとて、大津・天竺の古城を改めて萬千代殿を移し、大津の御所とぞ申しける。後に御元服ありて、內政と號す。從三位に敍し、左中將に任ぜらる。元親の息女を迎へて、御簾中に定め給ふ。斯くて中村の城は、吉良左京進親貞預かりて入城し、惡を懲らし善を進め、政道私なし。諸人安堵して見え

吉良親貞死去

ける所に、親貞聊不例の事ありと聞えしが、天正四年丙子七月十五日、卅六歲にて忽失せ給ひける。元親は、連枝の別れといひ、秦家の柱石摧けぬと、一方ならぬ愁歎、特に淺からず。扨あるべき事ならねば、親貞の嫡子新十郎元服して、左京進親實とぞ名乘らせける。卽谷右兵衞、中村の城代となる。其後桑名彌次兵衞も入城せしとかや。さる程に中村の士共は、親貞に附くもあり、大津へ參るものもあり、岡豐へ仕ふるも多かりけり。入道殿を追出し、惡人共を退けて、世は心の儘なるべきと思ひしに、若君中村を引拂ひ、大津の城へ移り給へば、こはいかにせんとて、上下悲しみ合はれける。後悔先に立たずとは、斯樣の事をや申すべき。

世を捨てゝ山に入る人山にても猶うき時はいづち行くらん

と、凡河内躬恒が、山の法師を諫めしも、今更思ひ合せけり。無道の君を退け、幼主を立つると稱しけれ共、實は幼主を蔑如して、己が威を肆に振舞はんが爲なれば、天是をや憎み給ひけん、元親をして抑へしむ。酬の程こそ怖しけれ。兎にも角にも、一條家の末になりたる先表なり。中にも安並左京は、我は一條殿の家臣なり。何條

宮内少輔が下知に附くべき謂なしとて、逢坂の城に楯籠る。元親此由聞き給ひ、萬千代殿の御坐次を、知らぬ事こそ奇怪なれ。急ぎ詰腹切らせよと、大勢を差向けらる。左京は素より期したる事なれば、城を出でて防ぎけるが、手勢悉く討たれければ、一門家子一所に集り、腹掻切つて失せにけり。さる程に入道殿の御船、豐後國佐伯の浦に着き給ひ、急ぎ船より上り給へば、水主楫取頓て船を漕出す。入道殿御覽じて、扨ははや彼等さへ、我を見放しけるよと、淚ぐみ給ひける。扨しもあるべき事ならねば、安並玄蕃を使として、佐伯宮内少輔惟敎が許へ遣し、御賴みありければ、誠に痛はしき御事なりと、急ぎ御迎に出でて請じ入れ、暫く止め能きに勞り、其後臼杵へぞ送りける。大友宗麟大きに驚き、扨も無念の事共かな。御心安く思召されよ。頓て本懷を遂げさせ奉らんとぞ申されける。一條殿をば、土佐にて御所と申しければ、何しか讃岐一條と、作り立てたる紙衾、破れ果つれば御所めきもせず。昔後嵯峨院第一皇子宗尊親王、鎌倉の將軍に備はり給ひしが、官を辭して都に歸らせ給ひて、

古は虎とも人の恐れつる今は鼠のあなう世の中

と詠ぜさせ給ひけんも、斯くやと思ひやられたる。斯くて入道殿の御簾中姫君は、未だ幡多中村に御坐しけるを、宗麟、柴田治右衞門を土佐へ遣し、御親子の人を迎へ參らせ給ひける。再會期なきと思召しけるに、今は一所にならせ給へば、辛き中にも又御心を慰み給ふ。

蹉跎山并加久見が形見の石の事

彼加久見左衞門は、當時無雙の强力なり。爰に蹉跎山とて、加久見より四里計南に當りて、觀音垂降の靈地あり。加久見左衞門若年の頃より深く信じ、日參をなしけれども、近年世上の忩劇、公務の忙がはしきに紛れて、暫く不參しけるが、我齡既に傾き、明日を頼む身にあらず、觀音へ今生の御暇乞の爲、又は後生善所の爲にとて、過ぎし年の夏、足摺へぞ參りける。此の蹉跎山補陀洛院金剛福寺と申すは、嵯峨天皇の御願忠仁公の執奏として、弘法大師に勅詔ありて、弘仁年中の御草創、本尊は千手

観音なり。仰ぎて地形の勝絶を見るに、後は大悲の山峩々と聳え、慈意則大の雲靄靄然たり。前は弘誓の海漫々として、波浪不歿の粧蒼々乎たり。此寺、昔は月輪山と號し侍りし。金峯上人住持の時、天魔來りて障碍をなす。上人一指を上げて降伏し給ひしかば、諸魔悲歎蹉跎せし故に、月輪山を改めて蹉跎山と號すとなり。惣じて六十二億恒河沙彌菩薩の中に、觀音の功德殊に勝れ、三千世界の衆生の間に、我國の因緣最深し。我國に於ては、四州孤山金剛福寺は、去斯不還の補陀洛界なりといへり。從三位顯鄕卿、文明年中一條敎房公と一所に、當國に御下向あり。常に此觀音を信じ給ひ、顯鄕卿、

今ぞ知るしめちが原に置く露をやがて衣のうらの玉とは
願堂の無南のそらは遠くともはるかに照せ山の端のつき
結び置きし契ありきや朱の糸の亂れぬ筋を今も聞くらん

此山は、元熊野權現垂跡の地なりしを、大師初めて觀音を崇め奉り給ふとかや。されば一山の衆徒、毎朝觀音を崇め奉り、讀經過ぎて、熊野三所の拜殿に於て讀經あり、

畢りて我寺々へ退きて又勤あり。毎朝寅の刻より、辰の刻迄の勤行なり。些も怠慢あれば、樣々の妖怪珍しからず。當山に放主坊とて、兩面一足の天狗あり。是護法神なりといひ傳ふ。雖有魔及魔民皆護、佛法の經文に見えたり。勤行の退不退に隨ひて、善惡の二報あるべしとぞ覺えける。此山、東は窪津川より、西は松尾のはらひ川まで、其間百八十町を境內とす。鎭護には、窪津の一の王子、津呂の金毘羅大谷權現、大戶の八面荒神、俗にやつらといふ。化粧堂・二の王子・伊勢兩宮・濱の宮、爰を熊野のはなといふ。かねの石とて、打てばかねの音あり。此麓を天狗濱といふ。是彼上人、一指を擧げて降伏し給ひし時、天魔此所に落ちて蹉跎せし故に、天狗濱といふ悲歎せし故に、淚の濱とも申すなり。

如何計海士の衣手しほるらむなみだの濱の五月雨のころ

と典侍の親子の讀みしは、此所の事とかや。三鈷の石とて、石面に刻彫付けたるあり。愛滿の島・寶滿の島・せんばが島・石の鳥居、是大師一夜に刻み給ひしが、夜既に明けゝれば、立てずして其儘置かれけるといふ。沖にかちや岩・音樂の岸といふあ

り。生身の大士不退に影向あり。簫・笛・琴・箜篌、海部に響く故に、音樂の岩といふ。惣じて此山に、七不思議あり。本堂の前に龍石といふ石あり。每夜龍燈此石上に來りて佛前を照らす。夜半のさゝ湖とて、每夜丑の時計に、本堂の庭へ潮さして、階を浸すなり。龍の駒の笹、よな〳〵龍馬來りて、此笹を食むといふ。齒の跡あり。馬の病を療すといへり。午時の雨とて、每日午の時、必ず雨降るなり。湖のまこしの石とて、石上の水に進退あり。又不增不減の水とて、石上に水あり。雨にも增さず、日にも減ずる事なし。ゆるぎの石とて、二三百人しても動し難き大石、小女童男手を以て押せばゆるゝなり。又强力の丈夫押しても、少しも動かぬ時あり。是其人の罪の輕重によるといへり。是等を合せて、世に七不思議と申すなり。犬石、是は昔上人、補陀洛に渡り給ひし時、手飼の犬、跡を慕ひ歎きて、石になりしといひ傳ふ。當寺の僧、補陀洛渡海のためし、賀登上人・日圓坊・阿日上人・忠義上人を初め、其外數數ありといふ。中にも賀登上人と申すは、一條院の御宇の人なり。長保の頃補陀洛渡海の爲に、難行苦行積功思德し侍りしに、弟子日圓坊、奇瑞によりて先づ渡海あり

しかば、上人嗟嘆の餘り五體投地し、發露涕泣し給ひて、其淚不增不滅の水となれり。扨上人は、當國安藝の大領蘇家の某、常に師弟の契約ありけるにや、誘ひ渡海し給ひける。又同日上人は、後花園院の御宇の人、補陀洛渡海の行、怠る事なかりしが、享德四乙亥年正月三日夜丑刻、庵室の戶を叩く者あり。誰ならんと、上人戶口に差出で給ふに、播州の修行者正實沙彌なりけるが、白眼にして曰く、吾護法の託し給ふなり。上人渡海の願、二六時中怠り給ふ事なし。行德いかめしければ、何の滯かはあらん。

われといふ心を草にやどしおけ尋ねずとても法をしるべし
惡きよのちよの初のめぐみをば今宵の月を待つとこそしれ
朱のいとつゝみそへたる我もまたきれてきれぬは賤が心ぞ

夫れ佛神の御歌は、端的の儘にて、裝を付くべからずと、古賢の說き侍りしかば、中中是非に及ばず。彼沙彌は一文不通の者なりしが法文など由々しく說聞かせ、山上山下過現未の事共、すさまじき迄いひ罵しりければ、人皆奇特の思をなせり。其

頃また當國一宮に、善樂寺空圓律師とて、持律の法華持經者あり。其坊に千松丸とて、九歲なりける童子ありしも、託ありて曰く、我は往古の如來たりしかども、闡提拔世の誓願によりて、本覺果滿の位を隱し、十方諸國土無刹不說身の利益を施さんとて、蹉跎山に久しく跡を止むるなり。されば州里の人民は、誠に悉是吾子なり。然るに懦慢放逸にして、步を運ぶ者なし。愚癡不信にして、念ずる事忽なり。緣なき衆生は賴りなし。暫し法身正覺の都に歸らばやとて、打歎かせ給ふが、良ありて阿日上人、渡海徒然を慰めんとて、三首の和歌を詠じ給ひ、又宣ひけるは、扨代々の院主は、多生廣切の宿緣ならでは、生れ合ひ侍らず。然りと雖其人の心ばせ、行跡に從ひて、否泰通塞の運あるべきにや、下山の時は雙馬となりて跡を送り、登山の時は、急ぎ路頭に向ふなり。知らずや律師と我と、多生の契ありて、法華讀誦の法味を感じて、かけりて爰に示すなりとて、庭上に立出で、身上出火身下出水の奇妙を顯し、刹那に三面千手大悲菩薩となりて、相好光明言語道斷なり。無尊在無の不思議も斯くやと計り、仰頭恭敬の所に、菩薩は上らせ給ふと見えて、本の童子になりにけ

り、此奇妙に驚きて、律師急ぎ蹉跎山に登り、此旨趣を語りけるに、正實沙彌が言葉に違はず、三首の和歌も變らず。諸人手を打ち、驚歎せずといふ事なし。されば末代ともいふべからず、絕域とも欺くべからず。信心の水澄めば、利生の月豈浮まざらんや。心念不空過念々忽生疑といへり。斯くて上人六年を經て、紫雲棚曳き迎へ、八音虛空に聞え、異香薰傾し、白花散亂して、南方渡海し給ひけるとぞ聞えし。荒神・大黑・辨才天、夷の宮・鐘樓堂、爰に和泉式部の墓といふ古墳あり。上東門院の御時の人、歌仙の程は世に遍く、洛陽誓願寺に墓あり。誰か爰に移しけん、傳者の誤にやいぶかし。塔婆は、多田滿仲の造營なり。本尊大日如來、御身の中に、淸和天皇の御爲、多田滿仲造立供養といふ識文鮮なりと、緣起に見えたり。當山の緣起は、享祿壬辰の春、前大僧正尊海の御述作なり。此僧正は、仁和寺總法務にておはしませし。當國へ御下向あり。當山に御座ありけるに、一條大納言房家卿、御所望に依りて書かせ給ふとかや。何の頃よりか、御室の宮の御隱居所として、御衰老の後、數代當寺へ御下向ましまし〱けるとぞ聞えし。經藏・藥師堂・後に行者堂・熊野三所天神・御願堂・護

摩堂、其傍に小野の小町の墓といふあり。其由來は知らず、二石とて、道の兩傍にあり。南は不動明主、北は毘沙門天といふ。白山權現奥院は、白皇といふ。本尊は藥師如來牛頭天王なり。松尾の天神、はらひ川・見富川ともいふ。是足摺の境内、土佐道三里鎭護の神祉、祕所祕窟のあらましなり。觀音堂は、延慶三年正月二日、度々回祿せしとなり。宇多・醍醐の帝王より已來、代々の勅裁、此外往古の公驗、貴賤田畠寄進狀等、此時悉く灰燼の由、本家政所の御下文に見えたり。加久見左衞門は、案內曇なしと雖、此度を最後なりけりと覺え、彼方此方殘らず一見して、石の鳥居の下に至りて、熟眺め居たりけるが、我若き時は、是程の石は物の數とは思はざりしが、年老い力落ちければ、いかゞあらんと獨言して、二三十人しても動し難き鳥居の柱を、輕輕と打かたげ、二町計歩みて、二王門の邊に置きしが、いや〳〵是は大師一夜に彫刻し給ひながら、立てずして置き給ふといふ。定めて深き理にこそあらむ。今散々にせん事勿體なしとて、又本の如くかたげ行かんとする所に、住持の僧是を見て、暫く待たせ給ふべし。其石、本の所へ返し給はんとの御所存はさる事なれども、此石一

入してかたげ、是迄運び給ふ事、古今無雙の强力なれば、其儘其所に置かせ給へ。加久見殿の形見の石と號け、後の末代迄語り傳へ候べし。徒に他所へ取捨て給ふにあらず。此山に置き給ふ上は、大師の御心にも違ひ給ふまじと宣ひければ、加久見打笑ひ、住持の仰の上は、辭するに由なしとて、其儘其所に下し置きて今にあり。參詣の老若、見る度に驚駭せずといふ事なし。

長宗我部元親崎の濱一揆を伐つ

崎の濱合戰の事

天正二年三月上旬、元親、崎の濱へ發向ある。此所に源內左衞門とて、隱なき武勇の者あり。彼は番匠なるが、己が產業をば脇になして、明暮輕業勇力、唯武邊のみぞ磨きける。去年羽根の尾僧山迄取出でしも、源內左衞門棟梁なり。此にても源內左衞門、彼にても源內左衞門とて、其名を得たる曲者なり。物は類を以て集まる習、國中の盜者共馳合ひ、一揆强盜止む時なし。元親、崎の濱の者ならば、犬迄も遁さず打捨てよとぞ觸れられける。此度は小性の面々、先手を申請けてぞ打立ちける。是は去

年羽根山にて、先陣して高名したる申立とぞ聞えし。斯くて元親、室津を夜を込め打立ち、崎の濱へ押寄せらる。例の如く源内左衞門、夷堂の松の本へ、眞先に駈出づる。伴ふ奴原、我劣らじと馳來り、敵味方入亂れ、火花を散らして切合ひけり。寄手は、我先に分捕して、高名に備へんと、思込みたる若武者共、放れ合せ開き合せ、揉みに揉んで攻め近付く。一揆原は、死生知らずの溢者、親子討たるれ共顧みず、主從滅れども屑ともせず。乘越え〳〵切結ぶ。夜晝七日が間、息をも繼がず相戰ふに、城中の勢二百餘人討たれければ、寄手も三百餘人討たれにけり。され共寄手は多勢なれば、終に濱の手を押破り、黑岩又左衞門十五歲、傍爾十右衞門十七歲、眞先に進み、黑岩首二つ、傍爾首一つ取る。是を始として、思ひ〳〵に分捕す。一揆共其數あまた討たれて引退く。源内左衞門、こは見苦しき有樣やと、勝誇りたる敵の中へ、些も擬議せず駈入りて、縱樣橫樣四角八面に突廻り、大勢を追散らし、又松の本に馬駈寄せ、邊を拂つて控へたり。澤田太郎右衞門鎗取りて、參るといひて突懸れば、源内左衞門、こは死急ぎする男やと、鎗取直し突合ひけり。兩方聞ゆる手利なれば、暫し勝

負見えざりしが、澤田が運や强かりけん、源內左衞門を突伏せ、抑へて首を取る所を、源內左衞門が味方馳來りて、太郞右衞門を丁と切る。旣に斯うよ見る所に、澤田が郞等走り來りて、彼者を打取りたり。太郞右衞門は、深手七ヶ所負ひけれども、死せざりければ、感狀を給はり、醫師を添へて、在所へぞ返されける。源內左衞門討たれにければ、皆散々に逃行くを、直に在所へ亂れ入り、老若男女を選まず、悉く撫切にこそしたりけれ。此勢に野根・甲浦をも攻取るべしと、諸軍勇みけれども、阿州堺近く働くに於ては、若し彼地より加勢あらば、却て難儀に及ぶべし、軍は十分に勝過ぎざるを、軍法の祕傳とすとて、野根山限りにして歸陣し給ふ。

所々一見の事

元親は、崎の濱の一揆退治ありて、岡豐へ歸り給ふが、道すがら一見あるべしとて、旣に崎の濱を立ち給ふ所に、老翁一人黑き石を持ち來り、是當所の名物、明星石と申す物にて候。昔弘法大師、闇夜に此汀に出で、御經讀誦し給ふが、天に向つて加持し

給へば、一つの星降りて、近邊を照す事日中の如し。其星其儘石となり、今に夜、星の如く光り候。惣じて當國に貝石・不喰芋・明星石とて、三の奇物の候。貝石は神の峯、不喰芋〔此間七字缺ク〕にあり。明星石は是にて候とぞ申しける。東寺に立寄り給ふ。此東寺と申すは、平城天皇の御宇大同二年丁亥、弘法大師草創の淨場なり。室戸山明星院最御崎寺と號す。本尊は大師一刀三禮の虚空藏菩薩なり。是を東寺と稱す。嵯峨天皇より以後、代々帝王の勅願所たり。此寺、昔は室戸の東北、今四十寺といふ高山にありしを、中頃此地に移しけるとかや。大師四國順禮の邊路、八十八ヶ所の札所を定め置かる。當國には東寺・津寺・西寺・高峯大日寺・國分寺・一定五臺山峯寺・高福寺・種間寺・淸瀧寺・青龍寺・五社・足摺寺山、彼是十六ヶ所の內、東寺とは是なり。大師、

法性のむろ戶ときけど我が住はうゐの波風たゝぬ日もなし

と詠じ給ひしも此所なり。山中に數多の堂社あり、殘らず巡禮ありて、御崎の窟に立入り、大師瑪瑙石にて刻み給ひし觀音を拜せらる。扨此みさきの文字を、御崎とも又三崎とも書くなり。同所潮早く波高く、海上往來の人、胸を冷さずといふ事な

し。されば怖れて御崎といへり。俗におばなと申すなり。又紀州熊野・當國足摺・此室戸崎、鼎の如く峙ちたれば、三の崎と書くともいふ。天津大明神に參り給ふ。延喜式神名帳に載する所の室津の神社是なり。

あさましやむろはうきつと聞きしかど沈みぬる身の泊なりけり

と、俊賴朝臣の詠ぜられしは、此所の事とも、又一說には、播州の室を詠めるともいふ。奈良士に至る。是なん土佐日記に、ならし都といひし所なり。爰を過ぎて、西寺に立寄り見給ふ。龍頭山光明院金剛頂寺と號す。大師最御崎といふ。同時の開基なり。東寺に對して、是を西寺といへり。本尊に藥師如來、卽大師の御作なり。是も同じく帝王勅願所なり。されば寺に傳ふる所の寶物、和漢兩朝の繪贊經卷器物、算ふるに遑あらず。中にも一つの箱あり。長さ一尺五六寸幅一尺計、高さ七八寸、內に護摩執行の具備はりたり。大師入唐の時、常に背に負ひ、山野にても勤め給ひし具なりとかや。同じく常に持たれし三尺八寸の鐵杖、一尺五寸計の劒、是を鳶切の劒といふ。柄鞘は、錦を以て包みて、上を藤にて卷きたり。柄鞘は獨鈷の形なり。

或時大師勤行ある所に、天狗、鳶に化し來りて、障碍をなさんとす。時に此劔の身拔け出で、天狗の右の片羽を打落したりとて、大きなる鳶の羽に似たるもの、劔に添へてあり。中將姫の我髮にて、自ら織り給ひたる刓、是等を始め悉く一覽あり。扨當山絶頂の池山明神を始め、山中の堂社殘らず順見して、行道窟の不動に參る、爰を佛崎といふ。此所に硯石あり。土石といふ。當國の名物なり。毎年三月三日、潮干に臨みて、海底より是を取る。時に西寺の僧出でて、經を讀誦するなり。東寺より此所まで三里の間を、都て室戸崎といふとなり。吉良川を經て、羽根浦にて、

まかとにて名にきく所はねならば飛ぶが如くに都へもかな

と詠みし羽根といふ所是なり。尾僧山を過ぎて、奈和利に至り、紀貫之が奈和の湊と書きし所なり。嶽大明神に詣で給ふ。當國廿一社の其一、多氣神社是なり。田野・安田を經て、神の峯に登り、貝石を取らせて見給ふ。蛤の形にして土の塊なり。大師の御所爲といふとも、其謂は知らず。産婦服して効驗ありといふ。されば登山の僧俗、是を取求めて歸らずといふ事なし。されども今に至りて、貝石絶ゆる事なし。

爰を過ぐれば安藝の鄕なり。續日本紀にいふ、神護景雲元年六月庚子、土左國安藝郡少領外從六位下凡直伊賀麻呂、稻二萬束牛六十頭給於西大寺授外從五位上とといへり。備後守國虎迄數十代相續せしといふ。元曆の昔、安藝太領さねやす・其子太郎さねみつ・弟の次郎も、此所に住みけるとなり。新庄八流を經て、赤野の大本の大明神に參る。是神名帳に記す所の坂本神社なりと言傳ふ。一說に坂本の社、古は何地にありけん、今は奈和利・多氣の社の中に併座といふ。其正記を知らず。和食を過ぎて手結山に至る。此所の汀を、佛が崎といふ。壽永元年平田太郎・蓮池權次、平家の下知に依りて、吉良冠者希義の討手に向ふと聞えしかば、屋須の七郎、希義を救はんが爲め馳向ふ所に、希義、年越山にて討たれ給ひぬと聞きて、野宮より引返し、佛が崎より舟に乘りて、鎌倉へ赴きしといふ、佛が崎是なり。峯本の月見山に上りて、昔土御門院、當國へ移されさせ給ひ、此所に皇居を構へ、常に月を御覽ぜられし故に、號くとなり。此海いづくとはいひながら、取分南に障る山もなく、月の爲には又雙なき景地なり。其先此山に、出雲の八百比丘といふ老尼あり、其先蹤は、如何な

る者にかありけん、出雲國に生れて、八百歳に及ぶ。故に名づくといふ。其頃何上人とかや此里に住しけるを、或時比丘、上人を伴ひ、船に乘りて此沖に押出す所に、俄に大風大浪立來りて、船を覆す。老尼は、波の上を平地の如く走り、南の方へ行きけるが、後には見えずなりけるとぞ聞えし。上人は溺死して、死骸此汀へ打上りけるを、里人是を葬りて、上人塚と號く。今は塚の形は見えず。其所の名を上人塚と申すなり。遙に赤岡の松原を見渡して、是昔よりの名所にて、彼土佐日記に、うたの松原を行過ぐ。其松の數、いくそばく、幾千年經たりと知らず。本に波打寄せ、枝毎に鶴の飛び交ふ面白しと、見るに堪へずして船人の詠みける。

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は千代のとちとぞ思ふべらなる

其うたの松原といひしは、此所の事なり。夜須の笠松を立寄り見給ふ。高さ八九丈計にして、四方へ榮ゆる事十餘丈、枝を重ね葉を敷きて、雨をも漏らさぬ計なれば、笠松と號けたり。其木立の美はしき事、畫工も是に向ひては、筆を差措きぬとぞ覺えける。彼秦の始皇の御狩の時、雨を凌がせ給ひて、大夫といふ爵を授けられしも、

斯る木立にやありけん、又雙なき名木なれば、淸水流るゝ陰ならねども、立留まらぬ旅人もなし。夜須七郎が舊壘を見て、王子の里に至り、續日本紀に、天平寶字八年十月壬申廢帝遷二御淡路國一。此時池田親王爲二諸王一配二土左國一と云々。古老傳へて、親王此地に流されさせ給ふに依りて、王子といふとかや。香宗の宗我大明神に詣で、三代實錄に、貞觀十年閏十二月廿一日庚戌、授二土左國無位宗我神從五位下一。それより立山大明神に參り給ふ。實錄又云、貞觀十二年三月五日丁巳詔授二土左國從五位上立山神正五位下一。此所昔は宗我といふ。源順が和名集に、香美郡宗我といふ是なり。中頃宗我部、近年香宗我部と唱へ傳ふるを、國俗下略して、今は香宗と申すなり。あれなる深淵の鄕、大谷野の宮は、神名帳に載する所の深淵の神社是なり。古事記、速須佐之男命生二八島士奴美神一、八島神生二布波能母遲久奴須奴神一、布波神生二深淵之水夜亂花神一といへり。深淵の神は、此御事か。國俗は十禪寺と申すなり。彼夜須七郎、野の宮の邊より歸りたるといふ是なり。三代實錄云、貞觀十二年三月五日丁巳詔授二土左國大谷神從五位下一。又云、元慶三年九月廿七日甲寅授二土左國從五位下大谷

神從五位上。大谷の神社の事、三代實錄、兩條式說云、在吾川郡神谷天石門、卽安國玉主天神社也と云々。是も廿一社の其一、吾川一座といふ是なり。神谷は元大谷といひしを、天神社ましますを以て、中頃より國人、神の谷と稱すとなり。未だ其正說を知らず。物部川を渡れば、もの部の里なり。當國にかゞみ川とて、古より言習せる名所あり。此川の事なりといふ說あり。是香美郡にある川なればとて、こざかしき男のいへる事なり。かゞみ川は、高岡郡須崎にありと、古き說なりとかや。續日本紀に、和銅七年五月癸丑、土左國人物部毛虫咩一產三子、賜穀四十斛幷乳母一云々。類聚國史云、大同五年正月、土左國香美郡人物部文連全敷女授少初位上、全敷女同郡物部連家主之妻也。彼物部氏は、數代此地を領す。是神魂命五世孫天道根命之後也といへり。夢野といふ所あり。平々たる廣野の内に、渡り五六間に、長さ四五十間計の深き谷あり。獵師谷の底に菱を植ゑて、鹿を追落して取りけるとなり。

夜をのこす寐覺にきくぞ哀れなる夢野の鹿もかくやなくらん

と西行法師の詠み置きし、彼夢合の昔語、思ひやられて哀れなり。それは津の國の

夢野とかや。此所に鏡岩とて大岩あり。磨き立てたる鏡の如くして、往來の男女の影、曇りなく映るなり。此故に此郡を鏡といふ。又近所の川をも、鏡川といふともいへり。八王子に至りて、忍穂別神社に詣づ。是當國の式社香美郡四座の一座なり。八王子と申すは、天照太神の五男三女を併稱なり。天忍穂別尊は、八王子の最首といへり。山田に至る。昔山田宿禰、此地を領して住せしとなり。宿禰は周靈王太子晉の末裔忠意の後なり。是より韮生十八鄕を順見すべしとて立越え、大河上大明神の社に參り給ふ。廿一社の其一、大川上美良布神社是なり。續日本後紀云、承和八年八月朔日辛丑、以土左國美良布神預官社。三代實錄云、貞觀八年八月七日己卯授土左國從五位下大川上美良布神從五位上云々。槇の山、別後の小松の宮に參り給ふ。是又當國の式社なり。斯くて山々谷々險難の地を見給ひ、其所の者共、簞食壺漿して迎へ奉りしかば、往古の事など尋ね聞きて、岡豐へ歸り給ひけるが、迚も書序なれば、近鄕の寺社四跡を一見すべしとて、殖田の高鴨大明神に立寄り給ふ。是も廿一社の一座、殖田神社なり。三代實錄云、貞觀八年五月乙丑、授土左國從五位下

殖田神從五位上。小野神社を拜せしが、是も式社の其一なり。土左郡布師田の葛木男神社・葛木咩神社に詣で給ふ。是皆廿一社の其一なり。瀧本の毘沙門に詣で、瀧の景を見給ふ。誠に類なき詠なれば、たゞに過ぎんは心なし。誰かある、瀧納涼を題にて、一首仕れとありければ、蜷川新右衞門入道、

瀧の糸いざむすばんと立寄れば空さへさえて雪ぞふりける

一宮・高鴨の宮に參り、神の御來歷は、急ぎて聞及びぬれば、今更尋ぬるに及ばず、寶物を見たき由宣へば、神人、是を取出して一覽に備ふ。佛舍利七粒・馬の角五十・牛の玉百十五・鏡卅七面・貝玉・古錢・銚子・沈箱・大般若經・十六善神・曼荼羅、其外樣々の寶物、記すに遑あらず。是を見て秦泉寺山を經て、三谷の觀音に參り、弘法寺の住持を呼びて、菩薩の御來歷を尋ね給へば、住持、昔大同三年、あれなる西の山上に草創あり。貴賤歩を運ぶ中にも、國澤の住人何某深く信じ、日參をなす。或時いつもの如く參詣して、山の半腹へ登り行く所に、虛空に樂の音したりければ、何がし不思議に思ひ、見上ぐれば、觀音の尊像、白馬に乘じ給ひ、あまたの音子、數の旗を捧げて隨ひ、

東の山へ飛行き給ふ。こは如何にと地に跪いて拜する所に、觀音堂より黑煙立ちて火燃え出でたり。何某急ぎ登り行きて見れば、早灰となりて、礎計り殘りけり。扨は佛意に叶はぬ事ありて、他所へ飛去り給ふと覺えたり。如何樣にも御行方を尋ね見ばやとて、東の山へ尋ね行き見れば、尊像立ち給へり。心意に銘し有難く覺えて、卽其所に堂を立て安置したり。今此本堂是なり。元親爰を立ちて、遠行寺に行きて、昔の寺の燒跡、藥師如來二王門の殘りたるを見給ひ、鴨部に至り、郡頭神社を拜せらる。是も廿一社の其一なり。續日本紀云、神護景雲二年十一月戊子、土左國土左郡人神依田公名代等四十一人、賜姓賀茂。姓氏錄云、鴨部祝賀茂朝臣、同祖大國主神の後なり。朝倉の宮に詣で給ひ、里人を召して、昔朝倉に、男女の湊といふ所ありしと聞く。其所は聞き及ばざるかと問ひ給へば、彼者畏りて、夫木集とやらんに、

朝倉や男女の湊に網引するあまのめさしにあびきあひにけり

と詠めるとかや。其男女の湊は、あれなる鶉坂の麓、網代谷の事とこそ承り候へ。昔は船をかけ網を引き、魚をとりたると申傳へ候へ共、今は草木茂りたる深山にて

候。されば國俗の歌に、

きりの海かすみの網を引はへてこのは魚とる網代谷かな

世の中の常ながら、昨日の淵も、今日は瀨となる心を、野人の申習はし候と申しければ、優しくもいひつるものかなとて、卽彼に案內せさせて網代谷を見給ひ、火打岩に立寄り、弘法大師、此岩に梵字を書き給ひ、今にありと聞きぬとて、御覽すれども見えず。扨は人のいふは僞なりと宣へば、彼里人、いや夫は常には見え候はず、水を灑ぎて見れば、見え候と申しければ、さらばとて水を灑がせ見給へば、文字鮮なり。神田・石立を過ぎて、潮江の鹽屋崎に至り、夢窻國師始めて此國に至り給ひ、此山の東の尾崎に庵室をしめて、吸江の地を見立てられしといふ。其舊跡を見て、板葺に藁の庇を差添へて、どよみ給ふは此里の事なりといふ。さればとて立廻り見給ふに、昔に替らず板屋に藁の庇を差添へたり。常には藁屋に板庇をするに、此里は事變りたりとぞ宣ひける。斯くて是より船に召され、岡豊へ歸り給ひけり。

土佐物語卷第八終

土佐物語卷第九

四萬十川合戰の事

一條入道殿は、宗麟の情にて、月日を送らせ給ひけるが、斯くて朽果てんも口惜し。人數を催し、一度中村を取返さばやと宣へ共、宗麟いかなる所存にや、先づ暫し待たせ給へと申されければ、力及ばず打過ぎ給ふが、偸に臼杵を出で伊豫國へ立越え、戸島に忍び御座して、國の樣を窺ひ給ふ。法華津城主播磨守則延は、常に親しく温問をなしければ、今とても異心はあるまじと、人を遣し御頼みある。則延には、痛はしき御事かなと、頓て私宅に請じ入れ、無二に饗應し、一度中村へ歸座せさせ奉らんと、御庄某を語らひ、當國の勢を催し、一千七百餘騎、土佐國へぞ押寄せける。土佐には宿毛・平田・手洗の者共、入道殿よりの勢と聞きければ、防ぐ兵一人もなく。皆寄手

に加はりければ、都合其勢三千五百餘騎、具同村栗木に要害を構へ、四萬十川には亂杭・逆茂木・石弓、ひつしと構へ、弓鐵炮を選びて三百騎、川の端に備へて待懸けたり。敷地相模是を聞きて、縱ひ一條殿の御勢にもせよ、我は當時吉良殿に屬したれば、豫州勢に組すべき謂なしとて、敷地の城に楯籠る。御庄此由を聞きて、惡い敷地が詞かな。さらば攻めよとて、一千餘騎にて押寄せたり。相模は聞ゆる勇者なれば、火出づる計戰へ共、手勢百五十騎、殘り少なに討なされ、三原の鹽塚の城へ逃籠るを、御庄透さず押詰め、息をも繼がず攻めければ、遁る所なく、腹搔切つて亡せにけり。
奥屋内の領主篠田宗圓は、豫州方になりて、津島の城主津島宗雲を招き寄せ、栗本に牒し合せ、中村を攻めんとぞ謀りける。津島が家臣鴨原右馬左衞門・同介兵衞・手洗川掃部・久禮勘十郎を先として、究意の兵を差遣し、在々を追捕し、民屋を放火しければ、近邊の諸士鄕民ども、中半村北の川の城に逃籠り、急ぎ加勢を下さるべしと、中村へ急を告ぐ。此由岡豊へ注進あれば、元親油斷すべきにあらずとて、三日目に打立ち給ふ。相隨ふ輩には、久武肥後・同內藏助・吉田左馬允・同孫三郎・山川五郎左衞

長宗我部元親四萬十川へ押寄す

門・細川源左衞門・福留隼人・中島與兵衞・桑名丹後・國吉甚左衞門・野中三郎左衞門、是等を先として、幡多・高岡の勢を合せ七千三百餘騎、中村に着陣し、先陣後陣手分して、四萬十川へ馳向ふ。元親下知して、先一手は、淺瀨に向つて川端に備へ、爰を渡す體に見せければ、城兵川の半途を討つべしと、川端より二三町引退きて、靜まり返つて待懸けたり。斯る所に、寄手後備より五百騎計、川上へ押登る。城兵是を見て、扨は敵、上の瀨を渡すは。勢を分けて防げやと色めく所を見澄し、元親爰を渡して、懸れ〳〵と下知し給へば、山川五郎左衞門・細川源左衞門・北代甚內、駒の頭を雙べ、眞先に進んで、川へさつと乘入れしかば、是を見て先陣後陣、一同に打入りて渡す程に、さしもの大河、大勢に堰かれて、下は淺瀨になりければ、一騎も流れず、向の岸へ喚いて上れば、城兵叶はず、一度に崩れて城中へ逃入るを、追討に討取る所の首數二百卅餘なり。斯くて首揃ある所に、久武內藏助が前に伐る首二つ、持つて行く者あり。見れば父肥後が郎等なり。內藏助、其首は汝が取りたるかと問ひければ、いや是は肥後殿の御手柄に候。實檢に備へんが爲に、持參致し候と答ふ。內藏助、其首

持參すべからず。惣じて大勢を使ふ者は、其人數を引廻し、働かするを以て高名とす。大將、自身の働きする時は、手下の人數すたるなり。人數すたる時は、何を以て軍陣に勝つべき。軍將の大なる誤なり。況老人の、若き者と爭ひ手柄立は、面目もなき事共なり。其首急ぎ側に捨てよと、大きに怒りて捨てさせけり。天晴將の詞やと、諸人是を感ず。斯くて寄手四方より追取卷き、息をも繼がず揉みたりければ、城中には怺へ兼ね、一命を御助に預らば、城を明渡すべしと詫びければ、元親頓て圍をぞ開かれける。法華津を始め豫州勢、籠中の鳥の、雲井に翔ける心地して、本國に歸りければ、平田・手洗川の者共、皆元親へ降參す。津島宗雲・篠田宗圓は、栗本の城落去して、味方悉く退散し、或は敵に屬する由聞えければ、叶はじとや思ひけん、宗雲・宗圓諸共に、山傳ひして、豫州へぞ歸りける。さる程に元親は、西は宿毛豫州境まで殘らず、南は奥内以南筋足摺領まで、悉く降を乞ひ人質を出し、幡多郡一圓に平均あり。寺領社領先規の如く沙汰せられ、吉奈の城は十市備後、宿毛の城は長宗我部右衞門太夫、後に野田甚左衞門在城す。仍て宿毛甚左衞門と申すなり。鍋島の城は桑

名彌次兵衞、鹽塚は奥宮織部、手洗川は北原平兵衞、佐賀は光富權之助を入置かる。其外伊與木には伊與木對島、加持に加持將監、蕨岡に和田・松浦・西村、敷地に諏訪大藏、藤村に沖長四郎、有岡に有岡安房、田の川に久禮掃部・野町四郎丸、山路に光富二郎兵衞、上長谷に武元兵庫、袖の木に式地官兵衞、下長谷に大塚米左衞門、立石に立石右京、大岐に大岐左京、加久見に加久見左衞門、猿野に加久見源左衞門、才津野に依岡源兵衞、口屋內に中平壹岐、田の野に上山出羽左衞門重正、下山に下山丹後、平林に兼松宇兵衞、後に平田に移る。添川に依岡左京、伊與野に依岡近江、和田に和田兵衞、押の川に押川玄蕃、柏島・沖の島に三浦等、是等は皆降參の輩なり。本領を給はり居城に安堵して、萬歲を唱へける。

袖鏡の事

元親宿毛に暫く逗留ありて、人馬を休め、平田の戸內に至りて、幡多郡式社の一庄高知坐神社を拜し給ふ。元親、昔法然上人、都にて淨土の法を說き給ふに、時の女房達、

數多是に歸依して、飾を卸し給ひしかば、天皇大に逆鱗ありて、上人を土佐の幡多へ流し給ふ。其後都に不思議ありて、程なく召返され給ふといふ。上人は此平田に居給ふとも、又都山に居給ひたりともいへり。其言傳はなきかと尋ね給へども、其舊跡を知る人なし。平田太郎俊遠が城の跡も知れざれば、近頃一條殿の立てられし平田の御所の跡を見給ひ、それより以南筋を歸陣ある。所々の案内者を召して、道すがら一見し給ふ。坂下（さかもと）の南佛堂に立入り給へば、老僧不動の繪像と、古き笈の背板を持出で、是れ當寺の寶物なりと申しけるを、其由來を尋ね給へば、老僧畏りて、一條院御宇正曆の頃かとよ、禁裏左近の櫻、右近の橘、同時に枯れ侍りぬ。是唯事にあらず、有驗の僧に祈らしめよと、勅諚に因りて諸國より召上せらるゝと雖、其効なし。當國蹉跎山の住侶南佛上人・寺山の山伏南光坊二人、下部をも連れず、自ら笈を負ひて上京す。されども其さま賤しければ、卿相雲客達敢て信じ給はず。時に兩僧、遙の外に置きたる笈を、手を擧げて招きければ、二の笈、人の步むが如くにして近づき來りぬ。皆々大に驚き、奏して祈らせらる。上人畏り承りて祈りければ、枯れたる

二木、忽に紅葉を變じて、綠の色をなし、花開きて芬々たり。帝叡感淺からず、勸賞は請によるべし。所望はいかにと仰せければ、我れ沙門の身にて候へば、何か望の候べき。但し承り及ぶ御寶の笑ひ不動を、下し給はらんと奏しければ、卽是を下されゝ、此所にて三千貫の地を宛行はる。笑ひ不動とは、此繪像なり。上人負ひ給ふ笈の背板是なり。斯くて上人は、足摺山へは歸らず、此所に坐して圓寂し給ふによつて、南佛堂と申すなりと語る。元親笈を立ちて篠山に上り、觀音堂に參り、伊豫・土佐の國境炭塚・論田などを見て、藻津に至り、自然石長三寸の藥師如來、又國境の藥師堂を過ぎて濱に出で、老人を召して、國の境を尋ね給へば、昔當國島何がし・豫州御庄某此所へ出會ひ、國の境を正し、繼代文證の爲に、歌を讀み置き候とて、所の者共今に證歌に申習はし候は、

笹矢筈正木川分松尾坂藻津濱中あしはおりのり

又は藻津濱中母島島中とも申傳へ候と申す。夫より小筑紫に至り給ふ。昔菅丞相筑紫へ左遷の時、此湊に御船を寄せられ、七日御逗留ありし故に、小筑紫と申すとか

や。あれなるは丞相碆、是は七日湊などいふを一見ありて、柏島・古間目を過ぎて、同防方御月崎自然石の月を見て、大師堂に立寄り見給へば、堂の腰板に二首の歌あり。

我心がまことの道に入るならば祈る願のかなはざらめや

西ひがし出入る月の山こゝにつゐのすみかや心なるらん

是は一條權中納言房冬卿詠じて、自筆に書き給ふといふ。いかなる御心にかありけん、いと心細くぞ覺えける。寺に立入り、弘法大師大字の名號を、梓に鏤め給ふ。文字の內皆佛體なり。名號の左右に、勢至觀音の像あり。卽紙に寫させて御覽ぜらる。小浦・宗呂・川口・爪白（つましろ）を經て、龍の串を妻手に見て、三崎・大岐・加久見に至り給へば、加久見左衞門・大岐左京出迎へて拜謝す。一條入道殿沈落の節、忠勤を褒美して淸水に至り、湊の廣大なるを見て、異國の大船數度入津せしも、理なりとぞ宣ひける。所の老父不喰芋（くはずいも）とて、莖葉は芋にして、根は芋にあらざる物を持出で、弘法大師此浦を通り給ふに、芋を洗ふ女あり。大師其芋の名は何といふぞ、味はいかにと尋ね給へ

ば、女むづかしげに聲を怒らし、是は不喰芋とて、人の食する芋にはあらずと答へたり。其時大師加持し給ひて、此芋になりけるとかや。根は芋にあらず、木の形にして、二三尺四五尺乃至一丈に餘り、高く生ひ立つなどいふを聞き給ふ所に、足摺領の士島屋・山崎・大戸・窪津など出で來て、御禮申しければ、足摺へは重ねて參詣すべしとて、以布利越に還り、下茅を過ぎて、伊豆多神社は、當國廿一社の一なればとて、立寄らせらる。下田を經て、入野の濱に出で、暫く一見あり。誠に無雙の景地かな。心あらん人に見せばやといひし、難波わたりにも劣るまじけれど、あまさがる鄙なれば知る人もなく、名所の數に入らず。夜の錦の類なりと宣へば、所の翁傍に居たりけるが罷出でて、此所、昔はいる野と申候を、いつの頃よりかいり野と唱へ誤り候。萬葉集とやらんに、

小男鹿のいる野の薄初尾花いつしか妹がたまくらにせん

と柿本人丸の詠じ給ひしは、此所の事とこそ申候へ。昔の歌人は、斯る田舍の果までも、居ながら名所を知りて候へども、末代に至りては、其國所は知らずといへども、

古歌を取りて讀みたりと覺えて、入野の歌、其數多く候へども、名所の名歌に、入野は其國未勘とある由承り候と申しければ、元親手を打ちて、翁堯の詞迄も捨てずといふ事、誠なるかな。流石此あたりは、昔一の宮尊良親王の御坐したる所なれば、其遺風にて、斯る事をも聞傳へたるにや、優しさよと宣へば、翁承り、されば其一の宮の古事につきて、此所に申傳へたる事の候。恐れながら御前にて、殘さず申上候べし。あれに見えたる森の茂みこそ、宮の渡らせ給ひたる舊跡にて候へ。宮は雲の上を出でさせ給ひ、斯る淺ましき邊に流され、御歎き深くて、

我庵は土佐の山風さゆる夜に軒もる月の影ぞほるなり

其上時の間も離れ難く思召す御息所をば、都に留め置かせ給へば、明くるも知らず歎き沈ませ給ふ折柄、郭公の訪れければ、

なけばきくきけば都の戀しきに此の里すぎよやま郭公

と詠せさせ給ひぬ。夫よりして今に至るまで、此里に子規啼くこと候はず。爰に小袖貝と申して、此浦の名物あり。是一宮の古事より出來り候。太平記に載せたるは、

御息所御迎に京へ上せられ候節、御警固の庄司が調進の御衣、阿波の鳴戸にて、船の楫に懸りしと相見え候へども、當所の者の申傳へ候は、一の宮御息所、互に御心や通じけん、又は隨身武文が念力にやよりけん、彼御衣、あれなる磯へ流れ寄り候。漁夫共は、斯る御衣をも御裝束をも、見申したる事はなし。斯樣の類をぞ、惣て小袖と申習し、彼御衣を見付け、美しき小袖流れ寄りたりとて、取上來り候。其故にや、其頃より、此所に小さき美しき貝出來候。仍て是を小袖貝と名付け、其流れ懸りたる岩を、小袖岩と申すなりと、委細に申上げければ、彼貝を取寄せて見給ふ。斯くて當郡の式社加茂神社を拜し、有井の舊跡を一見ありて、上川口・伊田・佐賀より鈴の浦を經て、與津の浦に至りて、とき網を御覽ある。此とき網と申すは、當所にて作る網なり。梶苧を大綱にして、二三ヶ年も沖にて漁獵をなし、古くなりて後、網をとき亂して網に作るなり。是を與津網又與津のとき網とも申すなり。强きこと計りなし。大浪にもゝ切るゝ事なき故に、船の綱に用ふるなり。當國にても、餘の浦にはせぬ事なり。是を見給ひて、大鶴津・小鶴津を經て、志和の里に入りて、天神の社に詣で、彼檣

花の宮の來歷、北野天神・今天神とて、一社の內に社壇二つ雙び給ふを見て、大矢井加・小矢井加・上の加江・久禮のやけ坂・門屋坂を過ぎて、須崎の鏡川に至りて、

鏡川かげ見る月に底すみて沈むみくづの恥かしきかな

是當所の歌とも、又越中國鏡川を讀めるともいふ。名越(なごし)の關は何地なるらん、其所を知る人もなし。名越の森とて、名木ありしと雖、千歲をや經にけん、碎けて跡もなく、名越をも今は誤りて、名護屋といふなれば、行きても由なしとて、須崎の濱に出で、吾井(あい)鄕の城主寺宇右衞門とて、津野の屬士、文武に名を得たる老人なるを呼びて、當國にうち山・大崎・神が小島といふ名所ありと言傳ふれども、其所を知る者なし。或人の聞きしに、須崎にありといへり。汝聞及びたる事はなきかと宣へば、宇右衞門畏りて、あれなる土崎の山を、昔は內山と申したるが、何の頃よりか土崎と改め、此濱を大崎と申したるを、今須崎と申由承り候。又此湊の左右を、神が小濱と申す。此湊の沖に、神が小島とて、沖の島・中島・へしまといふ三の島あり。皇太神心化の三神、沖・中・へつを崇め祭る故に、神が小島と申すなり。國俗はかう島と唱へ候得共、

實は神が小島にて候。此島の隣なればとて、此湊の邊を、神が小濱と申すとかや。聖武天皇御宇天平十一年庚申、石上朝臣乙麻呂、坐レ奸ニ久米連若賣一配ニ土左國一、若賣配ニ下總國一云々。此時の歌三首幷反歌、

石上振乃尊者弱女乃惑爾縁而馬自物繩取附肉自物弓矢圍而王命恐天離夷部爾退古衣叉打山從還來奴香聞

王命恐見刺並之國爾出座耶吾背乃公矣繫卷裳湯々右恐右住吉乃荒人神船舳爾牛吐賜付賜將島之崎前依賜將礒乃崎前荒浪風爾不令遇草菅見身疾不有急令變賜根本國部爾

父公爾吾者直名子叙妣刀自爾吾者愛兒叙參昇八十氏人乃手向爲等恐乃坂爾幣奉吾者叙遠杵土左道矣

反歌

大崎乃神之小濱者雖小百船純毛過迹云莫國

是萬葉に見えて、内山・大崎・神が小濱は當國の名所なり。又へしまと申す島は、今は

見え候はず。古老の傳に、昔はへしま一千餘軒立並べ、宮居も魏然として耀かせ給ひけるが、神の御計らひにや御座しけん、又は盡くる時節にも候ひけん、浪風もなきに、或時此島俄に動きて、海底に沈沒すといへり。今も風靜に浪平々たる時、船より海底を望み見れば、人家の礎、又は石にて疊みたる井の形など、見え候なりと申しければ、元親大きに感じ給ふ。浦の內に至りて、出見の千光院阿彌寺に立入り給へば、住持出でて饗應す。元親仰せけるは、當寺の千體佛、世に空海の作とし、又は惠心の作といひ、何れか是何れ彼なる、其正說ありやと尋ね給へば、住持、兩說とも正說ならず候。弘法大師、獨鈷山青龍寺草創の時、此所は隣村といひ、三方山林にして人家遠く、幽閑獨居の勝れたる所なればとて、爰に安座して、千體彌陀を刻まんと欲して、旣に五百體に及ぶ。然るに勤行の暇なきによつて、千體に滿つる事能はず、別に佛像を木に鋟め、五百體紙に寫して、彼五百體の木佛の後に、錐にて穴を彫りて、繪像一體穴の內に納め、木佛一體を二體となして、五百體を千體佛と名付けられぬ。其後惠心僧都、諸國を經廻して當國に下り、此出見に來りて五百の木佛を拜し、此所に

留りて、又五百佛を增刻し給ふ。爰に於て千體の木佛全備す。世に浦の內千體佛と稱す。當寺を、千光院阿彌陀寺と號するは此故なり。兩作の證據は、後に錐の跡あるを、弘法の作とし、錐の跡なきを、惠心の作とす。又佛工の目利あり、千體皆大師の作とし、又僧都の一作といふは誤りに候と、詳に申されければ、元親、今始めて不審を晴し候とぞ宣ひける。其所を立ちて、浦の內三里の入海・八島・七岩一見あつて、北の地に夢窻國師の庵室の跡、南に渡りて、鳴無の宮あり。土佐郡一宮・高加茂大明神の垂跡なり。昔は一宮の神輿を舟に乘せ奉り、十餘里を經て、此浦の內へ促し、御船遊ありけり。天平寳字三年の祭祀に、難風起り、狼出で人を喰ひ、種々變異ありし故、扨は神慮に叶はざりけるよとて、是より御輿をば一宮へ返し入れ奉る。長濱の沖にて、一の神像海に入りて、此鳴無の汀へ流れ寄り給ふを、卽此所に御宮を立て移し、先規の例に任せ、祭禮御船遊をなし參らする事、今に絕えず。其後高加茂の祭禮は、一宮より一里餘南、五臺山の麓に祠を立て、小一宮と號す。御旅所として、神輿を促しけるとぞ聞えし。土佐の入江の舟違ひといふ所あり。小島を隔て、入潮は島の

右よりさし、又引潮は、島の左より引くなり。されば往來の船も、潮に隨ひて出入すれば、行逢ふ事なし。仍て舟違ひといふとなり。古き歌に、

我戀は土佐の入江の舟ちがひ行返れども逢ふよしもなし

夫より青龍寺へ參り給ふ。此寺に九號あり。青龍寺・赤木寺・光明寺・獨鈷山・如意山・摩尼山・龍寶院・伊舍那院・道場院是なり。大師入唐渡天して歸朝の時、唐土明州の津に出で、赤栴檀を持ちて、我法成就圓滿の地に流れ留まれと、東に向つて海に投入れ給ふ。終に此地に流れ來るに仍りて、赤木寺と號す。あかぎ山とも申すなり。

萬代をあかぎの山のしら猿君がさかゆく卯杖にぞきる

其流れ寄りたる所を、赤濱といふ。眞砂赤栴檀の色に染みけるに依りてなり。本尊は不動菩薩なり。大師赤栴檀を以て、一刀に三千三百卅三度の禮をなして、三年三月に刻み給ひし尊容なり。其傍に、大師四十二の御年の姿の木像あり。是自ら刻み給ふといふ。寺の額は、大師の御筆なり。青龍寺の三字を、龍の形に書き給へり。庭に七葉の池あり。此寺草創の時、八人の天女天降り、一夜に掘りたり。八葉の蓮

花の形に掘らんと勤めけるが、程なく夜明けゝれば、七葉に掘りけるとなり。彼天女は、其儘此土に留つて、人間に交り、其末葉、猪尻に居住す。是を八人衆といひて、今に毎年三月廿一日御影供に、法事の役を勤むるなり。西の方に藥師堂あり。寺の地形を初めて倣しける時、土中より掘出したりとかや。奥の院は、獨鈷といふ大師、天竺より一つの獨鈷を傳來して、此所に埋み給ふとなり。其側に、求聞持堂を立てらる。是等を一見して南に出で、長者がひらと申して、昔大福長者の住みける跡、長者岩なとを見て宇佐に渡り、本越を經て、秋山の種間寺は、佛法最初の寺なればとて立寄り給ふ。聖德太子、初めて天王寺御造營の爲、百濟國の王子幷佛師巧匠を呼迎へ給ふ。天王寺造畢ありて、彼輩百濟へ歸朝の時、此海にて難風に逢ひ、此浦へ流れ寄りしかば、海上恙なく本國へ歸朝の祈願に、藥師如來を刻み、一宇の伽藍を建立す。此寺是なり。爰を過ぎて、長濱・戶の本より船に乘り、過ぎし頃の軍物語などして、浦戶に至りて、

旅寢して浦戶をあけて詠むれば月を見ませのかつら濱かな

昔より此所に言習はせる歌なり。往昔後堀河院御宇貞應二年癸未三月十六日、攝州兵庫辻村新兵衛、薩州房の津飯田備前、當國此浦戸篠原孫左衛門を召出され、卅一ヶ條の船法を定めさせられ、天下の船の式目、今以て替らずと聞及びたりとて、頓て取寄せ見給ふ。夫より山の南に出で、糠塚といふ小山あり。昔宇賀の長者とて、宇賀の社の神主なり。此社は、戸の本の東にあり。彼長者は隱れなき大富貴の者にて、大家金銀を鏤め、廊閣軒を連ぬる事數町に及ぶ。常に召使ふ男女、其數多きに依りて、米穀の糠を湛へたる所なれば、糠塚と名付けたり。或時彼長者、伊勢參宮して、萱葺の御宮を見て、扨も哀れなる御宮居、憑むに足らぬ御神なりと、あざむきけるぞ淺ましき。其神罰にやありけん、失火出來て、作り雙べたる大家廊閣、金銀珍寶跡方もなく燒失せたり。斯くて長者下向しけれども、暫し立寄る影もなく、成果てけるとぞ聞えし。御奥瀬(みませ)の沖に至り給ひ御座すともいふ。

打伏せどみましの浦のかいもなし衣かたしく人しなければ

棧島(こしま)に至る。此入海に十島あり。是其一なり。十島と申すは、洞島・比島・田部島・葛

島・大島・竹島・さるが島・きぬが島・玉島・棧島なり。是れ西に阿古目灘の袂石・飯盛、東に仁井田濱、遙に仁井田大明神を伏拜み、昔は高岡郡仁井田五社の神輿、行程十六里の海路を經て、此仁井田へ遙々祭禮をなしけるが、中頃より、其事止みぬとかや。玉島を過ぐるとて、日本書紀云、皇后得二如意珠於海中一。釋日本紀云、土左國風土記吾川郡玉島。或說云、神功皇后巡國之時、御船泊レ之。皇后下レ島休息。磯際得二一白石一、團如二鷄卵一。皇后安二于御掌一、光明四出。皇后大喜、詔二左右一曰、是海神所レ賜白眞珠也。故爲二島名一といへる。此島是なり。卽神功皇后を、此島に崇め祭りて、御宮今に顯然たり。

此島の竹は、矢篦に宜しとて、昔より用ひ來るなり。仍りて矢篦島とも申すなり。吸江に至る。是夢窻國師の開基、本尊は地藏薩埵なり。是れ勝軍地藏にて、尊氏將軍の守本尊なれば、國師安置し給ふとかや。されば尊氏卿、常に深く信じ給ひし故に、武運長く、家門も繁昌し給ひけり。此國師天姓水石に心を寄せ、浮萍の跡を事とし給ひしかば、康永年中洛陽天龍寺を建立ありて、十境を作らる。所謂普明閣・靈庇廟・曹源池・三級岩・龍門亭・龜頂塔・萬松洞・拈華嶺・絕唱溪・月橋是なり。されば爰にも亦

十境を定めらる。見國嶺・獨鈷山・磨甎堂・潮音洞・粹適庵・呑海亭・雨花岸・泊船巖・白鷺洲・玄夫島、寺を吸江庵といふ。額は尊氏卿四代の孫義持將軍顯山公の御手蹟なり。昔は吸江庵といひし。何の頃よりか吸江寺と唱ふ。國師初め潮江山の東、鹽屋崎に御座して、此地を見立てられしとかや。吸江卅首とて、國師の詠歌あり。

板の屋に蘖の庇をさしそへておとし音せぬむら時雨かな

心あらん人に見せばや吸江のむかひの山の雪のあけぼの

此歌も、卅首の內なりといふ。爰より五臺山に上り、文珠堂へ參り、尊氏將軍の御舍弟左兵衞督直義朝臣、幷義政將軍の管領細川右京大夫勝元が當山の制札あり。立寄り見給ふ。

禁制　五臺山金色院

右當山者文珠師利施二威光一行基菩薩祐二仁祠一之靈跡也。因茲去元德已來武家有二尊崇一下二制札一訖。而近年隣庄幷諸方武士甲乙之輩、恣亂二入四至內一、或伐二山林一、或臻二狩獵殺生等狼藉一之由有二其聞一。取行之企招二罪科一歟。於二向後一者固可レ令二停止之一。

若有違犯者爲處過怠可注申交名之狀如件。

貞和二年丙戌九月卅日

左兵衞督源朝臣

土州五臺山金色院

禁　制

一、軍勢甲乙人等亂入狼藉事

一、伐取山林竹木事

一、四至內狩獵殺生等事

右條々任去貞和二年御制札之旨堅令停止訖。若有違犯之輩者、爲處嚴科可注進交名者也。仍下知如件。

應仁二年閏十月廿五日

右京大夫源朝臣

下山して白鷺洲に至りて、夢窻巖とて、大なる巖窟の洞に立入り見給ふ。是は往昔國師此地を開き給ふ時、暫く此巖窟の內に居給ひたりと傳ふ。爰を過ぎて小一宮に至る。昔は一宮高鴨大明神の御旅所なるに依りて、小一宮と稱しけるとかや。近年

は其事止みて、由來を知る人もなし。絶海の磯を見渡して、吸江庵の住僧開山は夢窓國師、第二は義堂和尚、第三は絶海和尚。是皆顯密の碩徳、智行兼備の權者、世擧つて知る所なり。彼絶海衰老の後、此所にて圓寂し給ふに仍りて、所の名として、絶海と書きてたるみと訓むなりといふ。物語の内に、是より遙に東介良山の朝峯の社を見渡し、是當國式社の一座朝峯神社なり。三代實錄云、貞觀八年六月癸巳、授土左國從五位下朝峯神從五位上。昔紀貫之當國の任果てゝ、歸京の時、國人追來りて酒飲み、足を十文字に踏みし鹿兒の崎をも過ぎて、岩崎の蒔舍の清水・的が池まで一見ありて、所々の事委しく書附けさせて歸り給ひ、其後國中の名所舊蹟を改め、古歌を尋ねて書記し給ひけるが、我のみ知りて、人に見せざらんは、徒に金玉を箱に隱すに等し。且は國の面目なりとて、袖鏡と名付けて、近衞龍山公、當國御下向の時、參らせられければ、龍山公大きに感じ給ひ、田舍武士といひ戰國といひ、思ひも寄らぬ事、昔の木曾義仲とは、遙に替りたりとぞ宣ひける。

野根城夜討の事

爰に野根の城主惟宗右衞門助國長といふ人あり。其先祖を尋ぬるに、三代實錄云、陽成天皇元慶七年十二月廿五日、從五位下行下野權介秦宿禰永厚等男女十九人賜姓惟宗朝臣。永厚言秦始皇十二世孫功滿王子融通王之苗裔也といへり。此國長、其末流なりといふ。又一說には、蘇我赤兄の大臣の末孫に、惟宗と稱するものあり。此苗裔なりとも申すなり。四五百年此所を領し、恩を戴き德を荷ふもの境內に滿ち、家門の繁昌、肩を雙ぶる人もなし。元來國長、文を知らず武に疎く、明暮酒宴淫亂に長じ、山野遊獵を事とせり。安藝備後守國虎は、親しき一族なれども、彼家の亡びたるをも歎かず。元親國中に猛威を振ふと雖、用心の體もなかりけり。其心底を尋ね聞けば、領分野根山は、國中一の大山なり。其山中は、六十町を一里として、十里の道法なり。東は八町坂とて、見上ぐれば、屛風を立てたる如くなれば、人馬行交ふべくもあらねども、九折に上り行けば、雲井を翔けるに異ならず。西の麓より三里

上りて、裝束野といふ所あり。昔野根の男、奈半利より妻を娶れり。彼男初めて聟入すとて、此山を越えて此所に至りて見れば、奈半利は手指す計にて、家に出入る男女の客も慥なれば、扨は程近しとて、此野にて裝束を改め、山を下り見れば、見るほど近く見えしかば、彌威儀を刷ひ、行けども〳〵三里の道なれば捗取らず。裝束も破れ、客も疲れたり。夫よりして、此所を裝束野と申すとかや。麓より五里上りて、岩佐水といふ名水あり。十里の間、是ならで水なければ、往來の旅人、渇に臨むと雖すべきやうなし。昔土御門院、當國に遷幸ありて、又阿波國へ遷されさせ給ふ時、此所を聞召し、岩佐水と名付けさせ給ふ。御製ありといへども、今は知る人なし。それより此所の名をも、岩佐と申すなり。玄冬の空、寒風御衣を徹しければ、暫く御輿を留め、木を伐り燒火をして、あて參らせけり。帝御涙に咽ばせ給ひて、

浮世には斯れとてこそ生れけめことわり知らぬわが涙かな

此山大木茂り合ひて、日の影も見えず。常に狼出で人を惱す。斯る難所を厭ひ、よきて海邊に廻れば、羽根・吉良川・西寺・東寺を過ぎて、佛崎に犬戻り・猿戻りとて、數十

丈高き岩のはら岩かど木の根を傳ひ行く。又淀の磯にとび石・はね石とて、巖石並びたるを、彼方へ飛越え此方へ飛越え行く所あり。下は白浪淙々として、若し誤つて落つる時は、二度尸を見る事なし。暫く足を留めて、脇目を使ふ事叶はねば、親落つれども、子救ふ事能はず。其間三里なり。斯る難所を隔てたれば、元親たとひ寄せ來るとも、野根山・淀の磯に、雜人原二三十人差置くならば、空を翔り地を潜りて來らんは知らず、手差す事は思ひも寄らずと、龜鼈の甲を賴みたる心の內こそ果敢なけれ。國長は、濱より六町計西中村に下屋敷を構へ、我身は常に是に居て、男女を集めて踊を催し、夜每に濱に出でて遊宴を事として、城には番の士少々籠置きてぞ守らせける。奈半利の城主桑名丹後、忍びを入れて是を聞澄し、北の川の領主北川木曾進・同左馬介二人は案內者なれば、手引せさせて、天正二年七月十五日夜、偸に大勢を差遣す。城番是をば夢にも知らず、言甲斐なき下部共を殘し置き、踊の場にぞ出でにける。西內喜兵衞十七歲、一番に城へ駈付け、爰明けよと門を叩けば、番の士歸りたると心得、門を開きて入れたりければ、喜兵衞、物初めよしと門番を生捕り

惟宗國長野根城を逐はる

ぬ。其時大勢亂れ入り、城に在合ふ者共を、一々にぞ討取りける。其中に大戸村の熊之丞といふ者、塀を越えて逃ぐる所を、誰か切りけん、切先外れに、背の大骨を、首元より尻骨まで切下げたれども、淺手なれば死せず。寄手城を乘取り鐵炮を放し、鬨の聲を上げければ、國長を初め士共大きに驚き、一戰にも及ばず、右往左往に逃失せけり。甲浦の城主惟宗出羽守此由を聞きて、叶はじとや思ひけん、城を明けて落行く。右の西内喜兵衛と申すは、國中無雙の强力なり。元親一國平均の後、本山の城在番として、七日詰に行きけるが、常にいひけるは、我小身にして、糧の具取揃へ、嶮岨の山坂を持運ぶ事、人馬の費なり。僅七日の逗留なれば、其間の食を、私宅にて食せばやとて、七ヶ日の飯を炊せ、一度に食して、あら心安や、家人共は己等が心に任せよとて、馬にも乘らず立越え、七日番手を勤め歸りけるが、人に向つて、此程食せざるに依つて力落ちけるが、草鞋少し重く覺ゆるなりといひて笑ひけり。其頃いかなる故にや、國中の牛悉く死したり。農人田をかへすに、犂を使ふ事能はず。詮方なく究竟の若者十人計、一つの犂に取付き、牛に替り田をかへしゝが、喜兵衛殺生

の爲に出で、此由を見て大に笑ひ、汝等其處退き候へ。我れ引きて見すべしとて、彼犂取りて牛の如く往來して、田をかへしければ、往還の男女立留り、呆れ果て見物す。時に元親、其邊へ逍遙に出でられけるが、人群集したる故、何事ぞと尋ね給へば、爾爾の由を申す。元親、喜兵衞を召して、士たる者、畜生の役をする事やある。重ねて左樣の振舞すべからずと、堅く制し給へば、喜兵衞畏りて退去す。斯くて野根の城は、桑名丹後が子將監に預けらる。將監は中村に居住して、城をば番子して守らしむ。其後將監、朝鮮陣に赴き、彼國にて病死す。一子もなきに依りて、將監が妻の弟吉田甚五を、野根の城主となし、桑名甚五とぞ申しける。甲浦の城は、吉田左衞門佐に給はり、右衞門佐中留(なかとみ)にて討死の後も、嫡子孫左衞門に、遺領相違なく、此城を給はりけるが、後に孫左衞門をば、安藝郡の總軍代になし給ひけるとぞ聞えし。

土佐物語卷第九終

土佐物語巻第十

夢合の事

天正三年の春、長宗我部宮内少輔元親、不思議の夢を見給ふ。甚だ不吉の相なりと、心に障りて思はれければ、八幡宮の神主谷左近に、夢を合させばやとて召されけり。此左近は、當時隱れなき神職なり。宮内少輔對面ありて、元親夢に弓を射つれば、弦切れ、射たる矢、微塵に折れたりと見たるはいかにと宣へば、左近承り、扇を以て疊をはつたと打ちて、扨々目出度御靈夢にて候。其仔細は、弓強ければ弦切るゝ。矢強ければ矢損ず。當年より御馬を向けられんに、其矢先は耐り候まじと申しければ、元親大きに悅び給ひ、是併左近が私の演說にあらず。八幡大菩薩の御託宣なり。夫々とて、銚子土器を召されて、左近始めよと宣へば、頭を地に付け辭退す、いや是は

八幡の御酒なり。只始めよと仰せければ、左近畏りて盃を三度傾け、元親へ奉る。宮内少輔謹んで頂戴ありて、左近に返し給ひ、御持長刀をぞ給はりける。左近も頓て、眞盛の刀を進上せしかば、元親是を八幡の神劔と名付け、陣刀にしてぞ帶し給ひける。宮内少輔宣ひけるは、亡父入道殿、常に仰せられしは、我れ秦の始皇の末流たりと雖、僅に三千貫の領主にて、斯る田舍の片邊に暮らす事こそ口惜けれ。身を立て道を行ひ、名を後世に揚ぐるを、孝行の第一なりと、文宣王の金言なり。謀計を以て威名を振ひ、國家を持つは、勇士の本意とする所なり。先祖の爲め身の爲め子孫の爲めに軍を起し、秦家興隆せばやと仰せられしが、不幸にして世を早うし給ふ。元親其志を繼ぎて旗を上げ、國中不日に掌握に落ちぬ。然れども唯一國の主といはれんは、先考の本意にあらず。切て南海・西海の主と仰がればやと思ふ所に、斯る靈夢を蒙る事、併當家興隆の時節到來を、八幡大菩薩の示し給ふ所なり。天與不取反受其咎といふ本文ありと、ひし〳〵と思ひ立ち給ふ。

一條入道殿逝去の事

爰に入江左近といふものあり。一條入道殿の寵臣にて、俸祿饒く衣食に充ち、奢を極め、世に又人ありとも思はざりしに、不意に入道殿、牢々の身となり給へば、龍串の船津より逃れて、幡多の山陰に立隱れてぞ居たりける。さる程に中村の士共は、殘らず大津の御所、又は岡豐へ召されて仕へけれども、左近は善巧便佞の者なればとて、元親深く惡み給ふと聞えしかば、身の置所なき儘に。入道殿を討ちて、是を忠節にして、元親へ仕へんとや思ひけん、伊豫國へ立越え、入道殿へぞ參りける。哀れなるかな入道殿は、法華津播磨守を憑み給へば、一度中村へ歸座せさせ參らせんと、御庄・津島を語らひ、土佐國へ攻入りしかば、賴もしく思召しけるに、皆一戰に打負け、這々本國へ逃歸りければ、今は力なし、自害せばやと仰せけるを、則延樣々諫め參らせ、甲斐なき月日を送り給ふ。斯る所に入江左近、昔に替りたる有樣にて、しほしほとして出來る。入道殿御覽じて、是はと計り宣ひて、不覺の涙に咽び給ひ、昔今

入江左近一條康政を弑す

の物語して、餘りに懷しきに、一所に宿りて語らんとて、枕を雙べて伏し給ふ。入道殿深く寢入り給ふを、左近偸に起上り、脇差を拔き、御片腹に突立てたり。入道殿こはたばかられたり、出合へ者共と喚き給へば、家の內驚き騷ぎ、馳來る其內に、左近は行方知らずなりにけり。入道は、程なく空しくなり給ふ。是は定めて元親が下知たるべし。天命知らぬ愚人かなと、諸人擧げてさびしける。宮內少輔此由を聞き給ひ、入江は素より佞奸不義の者なれば、召仕はずして差置きぬ。察するに彼惡逆は、當家奉公の望にて、忠節にせんとの爲なるべし。元親、思寄らぬ惡名を得たる事こそ遺恨なれ。哀れ入江めが出來れかし。縛首切つて入道殿に手向け、我恥辱をも雪ぐべしとぞ宣ひける。左近は土佐へ逃歸りけれども、元親へ申出づる事も叶はず。舊領伊尾原の片邊に隱れ居て、飢死しけるとぞ聞えし。

元親夫婦法號の事

長宗我部元親は、田舍に素生して、勇猛のみ事とし給へども、信を守り禮を厚うし、

神佛を尊び給ひ、自ら法諱を恕三と付け給ふ。其頃京都天龍寺の策彥和尙、碩學の活僧なりと世人稱讚せり。元親、いかにもして、彼和尙に通達せばやと思ひ給ふ所に、蜷川新右衞門親長入道道標は、連歌の達人なれば、當國へ招き寄せ、宗匠として日々連歌興行ありしが、或時此事を語り給へば、夫こそ易き御事にて候へ。道標在京の時は、彼寺へ常に立入り候。急ぎ罷上り、御望叶へさせ奉るべしと申しければ、元親悅喜淺からず、道標に侍一人相添へて差上せらる。道標京着して、使者を伴ひ、天龍寺に行きて、件の由を述べければ、和尙感悅あり、雪溪といふ雅號を授け、雪溪恕三と號せらる。其說云、

土陽刺史長宗我部宮内少輔元親公、壯歲自立法諱曰恕三。古不云乎、一生二二生三、三生萬物、其命意曠而曠矣大而大矣。決不易蠡測焉。頃日公遣使使而見靳雅號幷贊語。予雖未有識韓之好、土人之入洛者、說公之爲人不凡庸。於是乎不辭而輙以雪溪字之。于時傍有客曰、雪也者何、臘月三白、端月三白、乃淸平豐歲之嘉瑞也。溪也者何、諺曰桃李不言下自成溪。此非史筆之褒李將軍之述贊也

乎。客曰、夫如公則海内聞人、而文韜武略兼全者也。師盖本于漢三傑以副其諱乎哉。予曰、不然。公不聞其顚、不方其袍之先、既有此名實之設、繇茲言之、夙勵忿流勇退之志。然而治下。闔國戸々輝大同田之富、元々倡大有年之謳、取義在茲而已。客緘默而休矣。復茲有一說、公秦氏遙々華胄也。昔曾徐方士從五百童男女而栖止熊野三山。加之登陟于一由繕之富士。富士亦爲日本之蓬萊、三峯擎四時之雪。彼此公之屋裡楊州也。公前程益措國家於太山之安、與庶黎同其樂、且除荊棘以栽子孫之桃李、則深根固蔕、而子葉之又之子葉、孫枝之又之孫枝、必當次第繁茂、欣々向榮。是所以予祝望之不淺也矣。

天正三歳々舍乙亥孟夏如意珠日

大明再渡專使前圓覺見等持策彥埜衲周良書于城西々嶺草堂下

道標下國して是を捧げければ、元親斜ならず悅び給ふ。斯くて北の方も、法號頻に望み給ひ、同年の秋、使を上して是を乞ひ給へば、和尙辭するに及ばずとて、水心理因の法號幷に其說を作りてぞ送られける。

土州府君元親公之賢室廼源氏華族之女、丈夫而履ニ貞操一閑ニ婦禮一者也。一日价レ人就レ予有ニ法諱雅稱之需一。嚮レ是應ニ府君之命一而徴ニ其號一且作ニ其說一。今也方ニ此時一拒レ辭則不可也。仍安ニ名理因一立ニ字水心一、取ニ諸楞嚴所謂十六開士水因三昧之義一、是雖レ云ニ教家者也法門一、又頌ニ出于碧巖集中一、豈可レ忽乎。遂大書以還レ之、次禪詩一篇重解レ之云爾。

淸冷盈掬月明前　揚子江頭第一泉　錯々神光覔ニ何事一

元來這々不傳傳

天正三季乙亥鞠月吉辰

前圓覺見等持策彥叟於ニ城西草堂一援毫

海部合戰の事

さる程に宮內少輔元親は、過ぎし春の靈夢に任せ、他國を窺はゞやと思ひ立たれけり。中にも阿州海部は、當國の手寄といひ、先年舍弟島彌九郎を討ちたる怨敵なれ

ば、先づ海部を討取り、年來の遺恨を晴さんと、天正三年八月十五日、八幡の神前にて軍の門出して、直に阿州へ打立ち給ふ。甲浦へ着陣して、軍評定ある所に、宍喰(しゝくひ)ははや開落したると聞えければ、頓て宍喰へ打入り給ふ。此由を聞きて、海部越前入道宗壽、鈴が峯へ取出で、弓鐵炮を揃へ鎗を伏せて待懸けたり。元親是を見給ひ、あの敵四方より引包み、一人も漏らさず打取れと、眞先に懸けられければ、先陣後陣一同に、曳々聲を擧げて攻上る。海部も、爰を專途と戰ひける。終に多勢に突立てられ、山より崩れて引きけるを、元親、それ餘すな洩らすなと、采取りて下知し給へば、逸雄の若者、逃ぐる敵に追縋りて、城の內へ入らんとす。爰に栗原伊賀右衞門とて、隱れなき鐵炮の上手、擧木戶の影に居て、近付く敵を餘さず打伏せける程に、寄手の兵、進み兼ねてぞ見えにける。黑岩治部左衞門、こは見苦しき風情やと、鎗提げて駈け向ふ。伊賀右衞門近々と待懸け、狙ひ澄して打ちけるが、いかゞしけるか當らず。治部左衞門飛懸り、突止めんとする所を、伊賀右衞門、木戶を下してぞ逃入りける。治部左衞門討洩らし、無念なりと呟く所に、あたりを見れば、大荒目の鎧に、塗籠藤の

元親海部城を陷る

大弓を持ちて、大勢を射退け、近付く敵なかりければ、大音聲にて、抑戰場に臨み給ふ人々の、弓鐵炮に怖れては、軍し給ふ事候まじ。近付き給へ。一矢仕らんと、惡體にぞ申しける。治部左衞門是を聞きて、さらば一矢うけ申さんと、鎗取直し馳寄るを、狙ひ澄して兵と射る。何をかしたりけん射損じ、二の矢を番はんとする所を走り懸り突伏せ、首取つて歸りけり。斯くて越前入道は、手勢殘らず討たれければ、降參せんと思へども、舊惡遁るべからずと、行方も知らず落失せけり。斯りしかば油木・日和佐・牟岐濱・桑野・椿泊・仁宇、皆人質を出し降參す。中にも桑野の城主東條關兵衞は、我未だ妻女なし。願くは御一族を申請けたき由望みしかば、久武內藏介が娘を、豫て御養子と定め置かれたるをぞ遣されける。斯くて南二郡悉く平均ありて、香宗我部安藝守親泰を、海部の城に入置きて、當國の軍代とす。吉田の城は、北村間齋、宍喰の城は野中三郎左衞門に預けらる。桑野は手端なればとて、加勢を籠置き、頓て開陣し給ひけり。

八幡通夜物語の事

元親岡豐に歸り、家臣を召して宣ひけるは、我當春の靈夢に任せ、阿州へ出馬せしが、日を經ずして悉く存分に屬する事、八幡大菩薩の御加護なり。御禮の社參すべしとて、種々奉幣神樂を奏し、神馬十二疋參らせて通夜し給ふ。神主谷左近罷出で、御物語申しけるは、當社は古老傳へて、影向の御神とて、別宮八幡と號し奉り候。其奇瑞靈驗算ふるに遑あらず。中にも御先祖兼光の御時、豐永の領主何某、阿波の國の人數を駈催し、甫喜山を經て、岡豐の城へ攻來る。兼光當社に向つて御祈誓ありしかば、宮中より鋒一つ白鷺二つ飛出で、寄手の陣の上を翩飜しければ、寄手大きに敗軍す。追討に打取る所、其數を知らず。其死骸を集め、塚に築込みたり。今國分の北に阿波塚とて、大きなる塚數多あるは是なり。白鷺は宮中へ飛歸りて、其後は見えず。鋒は城の巽方へ落留る。其所を今に鋒の內と申すなり。其鋒を神に祝ひて、御鋒大明神と申して、常通寺島に鎭座まします。扨又故入道殿の御時、御城中の楠折

れたる時の御託宣、其後御當代に安藝發向の時、白羽の矢宮中より飛出で、又飛歸り候事は、御存知の事に候へば、今更申上ぐるに及ばず。是併御信仰淺からざるに因りてなり。神は人の敬に依つて威を増し、人は神の德に因つて運を添ふと申す事の候へば、愈厚く御崇敬然るべしと申しければ、元親斜ならず悅び、當座に引出物し、其後知行加恩ありけるとぞ。

長宗我部彌三郎實名の事

其頃織田信長卿は、天下の器に當つて、回天の氣を吞み給へば、元親も使者を進め、常に音信せられけり。或時元親、家老の面々を召集め、愚息彌三郎今年既に十一歳なれば、信長の烏帽子子に願ひ、實名の字を申請けばやと思ふはいかにと宣へば、家老共、誠に目出たき御思慮と、謹んでぞ申しける。扨使者には、中島可之介を遣すべしと宣へば、久武內藏助、此者は若年と申し、遂に他國を見たる事もなく候へば、覺束なしと申しければ、いや〳〵元親見所あり、老功にも劣るまじきぞと宣ひて、可之介

に極りけり。此可之介と申すは、背高く色白く、勇氣ありて烈しからず。朝に武を勤め夕には文を學び、和歌に心を寄せ、優にやさしき若者なり。彼常にいひけるは、我は元より小身なれば、席に臨む毎に、終に座上に着く事なし。可の字は、上にのみ置く文字なれば、切て名なりとも、是にあやからんと思寄りたりといひけるとかや。可之介尾州に至りて、齋藤内藏介は、元親内縁の由緒あれば、內藏介を賴みて、明智日向守に謁し、書簡を差出す。其後信長卿、可之介を召出され、四國干戈の事共御尋あり。委細に申上げければ、信長卿莞爾と笑はせ給ひ、元親は、無鳥島の蝙蝠なりと仰せければ、可之介謹みて、蓬萊宮のかんてんに候とぞ答ひける。當座卽妙の返答使なるかなと、大に御感賞あり。斯くて御暇を下され、御返簡に左文字御太刀栗毛の御馬を、彌三郎にぞ給ひける。

織田信長長宗我部信親の烏帽子親となる

對惟任日向守書狀令披見候。仍阿州面在陣尤に候。彌可被抽忠節事肝要候。

次に字の儀、信遣之候。卽信親可然候。猶惟任可申候也。

十月廿六日　　信長　朱印

長宗我部彌三郎殿

可之介歸參して、是を捧げしかば、元親父子斜ならず悦び給ひ、御禮として、信親より加久見因幡をして、長光の御太刀・金子一枚・大鷹二連進上あり。元親より、中島吉右衞門をぞ遣はされける。さる程に可之介、尾州にての次第、委細に聞召し、宮内少輔、さればこそ予が目金は違はざりけりとて、高知を與へ給ひければ、今こそ誠の可之介にはなりたりけり。

豫州へ出勢の事

元親は、阿州南郡不日に存分に屬しければ、さらば豫州へ討手遣すべしとて、安藝・香美兩郡の勢は、阿州の手當とし、幡多・高岡の人數は、豫州の手當とし、長岡・土佐・吾川の三郡は、時に及びて下知すべしとぞ定められける。天正四年の春、幡多・高岡の軍兵共、伊豫國へ亂れ入り、在々所々に押寄せ〳〵思ふ樣に働き、一ヶ所に廿餘日逗留し、狼藉放火す。近年は國治り民靜にして、軍といふ沙汰なければ、豫州の上

下、騷動斜ならず。武士も是に氣を取られ、城を明けて退くもあり、又は命より名こそ惜けれと、防ぎ戰ふもあり、晝夜の競合に、兩國の勝負區々なりと雖、土佐勢は、日を逐うて強くなり、豫州方は月に隨ひて弱り行く。爰に河野四郎通直は、數十代中伊豫を領して、伊豫の屋形と稱し、家門の繁昌いふ計りなく、驕に長じ、武道を忘れ文道を知らず、明暮酒宴遊興の外は他事なし。されば是を攻傾けん事、最輙き事なれども、河野は安藝國主毛利元就内縁あれば、中國より加勢あらん時は、却て難儀なるべき間、必河野領へは手指しすべからず。國中の城々討從へば、河野も終には降參すべきぞと、元親宣ひけるが、果して後には、幕下に屬しけるとぞ聞えし。

大西覺養降參の事

天正四年の春、元親阿州北郡大西を攻めらるべしとて、笠原中務を召して案内を尋ね給へば、中務畏りて、大西口と申すは、日本一の難所、力業に押入り給ふ事は、努々叶ひ候べからず。先づ豐永の舟渡しを過ぎて、阿州分上名の橋とて、大木一本に剳

を付け、打渡したる橋あり。其所を過ぎて、三里の間、岩の腹に少しの足懸りを切付け、又一人づつ這ひ傳ひ行く棧あり。左うつそ・犬かへり・聖泣かせなど申す所は、鹿猿も身を側てかけり難し。其道より見下せば、靑巖千尋計にして、川浪瀧をなし、見上ぐれば巖石峨々として草木もなく、白雲峯を埋む。三里の間一里計は、馬の通ひ候へども、夫も所によりて、馬の尾を取控へ、綱を付けてずらし落しにする所あり。大西に近くなり候ては、相川の橋とて、深き谷川に橋を渡し、上より此橋へ下る時は、跡しざりにして、橋をば這うて渡るなり。馬を渡す時は、遙々川上へ廻道候へども、それも自由に越す所には候はず。此所は如何なる大軍にても、中々叶ひ候まじと申しければ、元親熟聞き給ひ、扨は力業に叶ふまじと、暫く默然として坐しけるが、良あつて、究竟の事を思ひ出したり、大西覺養が兄に出家あり。先年當國足摺の住侶なりしが、其の由緒にて、元親、覺養に度々使節書簡の好あり。書を遣して賺さばやと宣へば、中務承り、尤餘儀なき御計策にて候。彼覺養は、短才淺智にして、計るに易き人とこそ承り候へ。宜しく御計らひ候はゞ、一定味方に與

すべく候。彼大西は、阿讃豫三ヶ國の街にて候へば、是より諸方へ御馬を向けられば、四州御手に入る事、程あるまじと申しければ、元親喜悅斜ならず。さらば汝使せよと、書簡をぞ遣されける。案の如く覺養は、一旦の思慮もなく、內心の返牒を調へ、舍弟七郞兵衞を人質として、還使に添へていひさし越しける。

菅田隼人降參の事

西伊豫には、大津・白木・多田・同里・城南方山田・熊崎・法華津・板島・岩井・森・御庄・綠城・猿越・新城・岡本・土居・金山・深田・高森・西の川・大森・薄木・竹の森・河瀧・森・黑瀨・甲の森・三瀧・黃幡・猿が瀧・宗川とて、卅一の城あり。何れも大勢籠り居て、互に相救ふと聞えしかば、唯漸々に攻めよとて、河原淵が領分河瀧の森へ、押入り〳〵働きけり。初の程は、打出でて防ぎしが、終に戰ひ屈して、河原淵大膳大夫・同一覺が一類降參しければ、彼幕下河瀧の森・大森・西の川・竹の森・薄木等、皆土佐へ人質をぞ出しける。されども殘る城々は、堅く守りて降らざる所に、大津の城主菅田隼人直之には、攻めざ

る先に降參す。此の菅田は、宇都宮遠江守元綱が家老にて、勇猛の士なりしが、何故に土佐へ降參しけるぞと、事の起りを尋ぬれば、大津の近里八幡の城・鍛冶が城といひて二ヶ城あり。城主は佐久間安房守といひ、常に菅田と中惡く、互に威を立て隙を窺ふ所に、宇都宮は、河野と不慮の意趣ありて、合戰に及びしかば、佐久間、扨は援兵の怖なし、時至りぬと悦び、大津の城に押寄せ、夜晝の境なく、攻むる事急なり。菅田大に勇を振ひ、防ぎ戰ふと雖、素より勢微なれば叶はず。いかゞせんと思ふ所に、土佐勢の向ふを聞き大に悅び、急ぎ降參して加勢を乞ひしかば、究竟の兵二百餘騎、大津の城に籠らす。佐久間、是をば夢にも知らず、菅田が出でざるは、落支度か扨は降參するか。二つの內は出づべからずと、上下油斷して居たりけり。菅田是を聞澄し、三百餘騎を三手に分け、旗をば卷きて擔がせ、弓鐵炮を押隱し、鍛冶が城へぞ向ひける。城中には是を見て、扨は大津より降參すると覺えたりと、騷ぐ景色はなかりけり。城近くなりしかば、旗をさつと差上げ、鬨をどつと作りしかば、城中大きに周章騷ぐ所を、三方より押入り、頓て役所に火をかけゝれば、折節風烈しく、忽

四方に燃上る。敵は城中に充滿たり。佐久間人手に懸らじと、腹搔切つて臥しければ、郎等共も殘らず討死す。八幡には是を聞き、城を明けてぞ落失せける。此由土佐へ注進せしかば、元親感悅ありて、隼人に兩城を給はりけり。

曾根降參の事

同國喜多郡に、曾根・床崎とて兩城あり。相並び、其間程近ければ、互に往來して懇なりけるが、禍は下より起る習にて、兩方の百姓、少しの口論を仕出し、次第に言募り、夫より兩主不和になる。或時は、床崎より曾根へ夜討し、又は曾根より床崎を放火す。麥薙ぎ苅田、樣々狼藉止む時なし。斯りしかば鄕民はいふに及ばず、士共も、退屈してぞ見えにける。中にも曾根は、素より無勢なれば、行末覺束なくや思ひけん、土佐勢を待ち得て降を乞ひ、先手に加はり、床崎へ押寄せけり。床崎は聞ゆる勇者なれば、度々防戰して勇を振ふと雖、小勢なれば、終に討たれけり。卽床崎領を曾根に給はる。

大西陣の事

さる程に元親は、阿州北方を攻めらるべしとて、天正四年の冬、既に岡豐を打立ち給ふ所に、豐永より飛脚到來して、大西覺養、一旦味方に屬し候處に、三好河內守長治催促に仍つて、覺養誓約を變じ、大西口を差塞ぎ、當國の通路を留め候とぞ告げたりける。元親、家老共を召集め、覺養が所存斯の如し。扨七郎兵衞をばいかゞ計らふべきと宣へば、家老共謹んで、七郎兵衞は獄屋に召籠め置かれ、暫く事の樣を御覽じ候はんか。覺養は長治の伯母聟にて候へば、其命背き難く、一旦下知に隨ひ候とも、流石兄弟の事に候へば、爭か見放し候べき。再び御詫言申出づるは必定たるべしと、一同に申しければ、元親つくぐ聞き給ひ、覺養初め味方に屬したると、今又長治に隨ふ所を考へ見るに、深き智慮ある男にあらず。兄弟の愛敬も知るべからず。夫は兎も角もあれ、七郎兵衞は許し置きて見るべし。彼が振廻を見聞くに、勇にして信厚く、且智謀もある者なり。是を許して情を懸けば、必味方すべし。若我が目金違

ひて不義ありとも、何程の事かあるべきとて、七郎兵衞を呼出し、豐永より此の如きの注進なり。覺養が心底是非に及ばず。然れ共御邊に於ては、些も遺恨なし。急ぎ大西に歸り、覺養と共に、長治に忠節あるべしと仰せければ、七郎兵衞承り、謹んで申しけるは、兄覺養變約仕候上は、某に於ては、車裂に逢ひ候とても、恨み奉るべき義に候はず。然るを一命を御助の上に、有難き御諚、生々世々報じ奉るべき道なし。覺養起請文を背くは、士の本意にあらず。親しき兄弟を捨つるは、人倫にあらず。彼といひ是と申し、無道不義の者の兄弟に候へば、人とは思召さるまじく候へども、哀れ此儘召仕はれ候はゞ、一命を捧げ、忠節を盡し候べしと、涙をはら〱と流し、義心其面に顯はれければ、一座の面々、皆袖をぞ濕らしける。其時元親、さあらば大西へ手引せよと仰せければ、七郎兵衞畏りて、大西の事、豫て聞召し及ばれたる難所にて候へば、何萬騎にても、力攻には努々叶ふ所にあらず。但し某常に拵へ置候間、彼地へ人を遣し、諸士を語らひ候はんに、背く者は一人も候まじと申しければ、元親悅び、羽檄を遣せと、文章を好みて書かせられ、七郎兵衞が家人に、士一人相添へ、大

西へぞ遣しける。さる程に覺養は、本より愚蒙の男にて、盃を友として、政務も作法も知らざれば、上下擧つて疎み果てける所に、七郎兵衞が書簡到來しければ、諸人悅ぶ事限なし。急ぎ御馬向けられ候へ、御手引仕るべしと、返牒に、起請文を添へてぞ返しける。元親披見ありて、七郎兵衞を先手として、都合三千餘騎、同五年二月下旬、大西へ馳向ふ。覺養此由を聞きて、是へ寄せ來るは、定めて七郎兵衞が先陣なるべし。案内は知つたりとも、切所を越し來る事は思ひも寄らず。先づ上名の橋へ下部四五人遣し置き、敵寄せ來らば、橋より下へ叩き落せ、大勢は足纒に無益なりと、例の如く大盃を傾け、高鼾に臥し居たり。斯る所に敵、上名の橋、西宇のほけをも、押破り來るといひて騷ぎければ、覺養驚き、我れ馳向ひ、相川の橋より追落さんと、獨言して打出でけるが、敵動搖して押入るを見て、采取りて下知すれども、皆傍に隱れ居て、防がんとする兵一人もなし。覺養今は力なし、讃州麻の城へぞ落行きける。斯くて羽久地の城には、谷忠兵衞を入置き、七郎兵衞は本知を給はり、馬路の土居に入城して、上野と改名す。

嘉例の連歌并近衞殿御夢想の事

長宗我部代々、家の嘉例にて、毎年二月初卯の日、連歌千句の興行あり。然るに今年の春は、大西發向の閙しさに、唯三百韻あり。卷頭の發句は、昔より夢想の句とて、一句を定めて用ひ來れり。第二の發句は元親、第三の後句は親泰に定まりぬ。

卷頭　杉むらや弓の柄かや春みどり　夢想

第二　四方はみな汲手になびく霞哉　元親

第三　行水のあはをによるや玉柳　親泰

宗匠は蜷川新右衞門親長入道道標、其外細川常胡・十市備前入道宗桃・久禮田定祐・小松谷寺公範、是は菊亭大納言秀季卿の男なり。幷に等雲などとて、連歌の上手和歌の達人あり。元親は田舍に生れ、干戈の内に成長、武勇をのみ事とし給へば、鎧取りて打着、太刀脇ばさんで馬を馳せ、下知する事は潔くとも、和歌のやさしき道は、夢にも知り給はじ、今にて思ふに、斯く閙しき中にも、連歌の興行なし給へば、知勇あり

と、時の人諷し合へり。さる程に彼大西は、日本一の難所、一人向つて防ぐ時は、萬夫も通る事難き所なるを、何の仔細もなく攻取り給ふ。此所は阿讃豫の街なれば、彼第二の發句に叶ひ、四州皆汲手に靡く氣色顯れぬと、人々申しけり。さる天正の始、近衛龍山公、當國に御下向あり、暫く御滯留まします所に、御夢想を得給ふ。

杉むらや花や白旗ちとせ山

是元親武運長久の徵なりと、御覽ぜられたりとて、御句をば自筆に遊ばし、元親に給はる。即表具して、毎年千句興行の時、是を掛けて、此御夢想を追加の發句に定め置かれけると聞えし。

雲遍寺物語の事

元親は、阿州大西退治ありて、直に讃州へ打入り給ふ。爰に巨鼇山千手院雲遍寺とて、當國一の高山、隱れなき靈地なり。一見あるべしとて立寄り給へば、住持出でて樣々に饗應し、何の爲に遙々是まで御越境候やと尋ねられければ、宮内少輔、されば

衰亂の時節を得て、當國を平均せん爲、今初めて打入り候と答へ給へば、住持重ねて、貴客は天性濶達の御人と承り及び候と雖、軍慮未だ足らざる所あると、覺束なくこそ候へ。凡敵國に入るには、其地理と、其兵の氣とを知るを第一とすとかや。讃州十一郡と申すは、大内・寒川・三木・山田・香河・阿野・鵜足・那賀・多度・三野・神田是なり。當山より直下せば、國中一瞬に見え候なり。あれ御覽候へとて、一間なる障子を排き、一々指さし敎へて、見え渡りたる大國にて、多勢の城々多く候へば、國中の人數量るべからず。貴國七郡の小勢を以て、此十一郡の大國を打隨へ給はん事、あれなる鑵子の蓋を以て、是なる水桶に覆はんとするに等し。底大にして蓋小なり。御志は濶大なり共、爭か叶ひ給ふべき。急ぎ是より御歸陣候へと申されければ、宮内少輔聞き給ひ、元親が鑵子の蓋は、名人の鑄たる蓋にて、僅三千貫より一二年の程に、土佐一國より阿州迄も覆ひ候。今二三ヶ年の内に、四國の蓋になして、貴僧に御目に懸け候べしと宣へば、住持手を拍つて、扨々唐土天竺にもあるまじき蓋かなと申されければ、元親も興に乘じ、終日物語ありて下山し給ひ、夫より藤目の城に立入り給

ふ。城主齋藤下總守政賴の長男豐後守政吉は、元親の舅なりければ、政賴益饗應し給ひ、斯くて二三日逗留ありて、土佐へ歸國し給ひけるが、いかなる所存にかありけん、美濃國へ人を遣し、齋藤政吉の長子石谷兵部少輔・齋藤内藏助が二男土産右衞門を、土佐へ呼び下し留め置きて、懇に扶助し給ふ。是亡父覺世入道と本山式部少輔、數年鋒楯に及び給ひし例遠からねば、人質の爲にやあらんとぞ人皆申しける。中にも土產右衞門は、長岡郡に住しけるとぞ聞えし。

河野・大津合戰の事

斯る所に豫州より飛脚到來して、河野四郎道直、一萬騎の軍兵を率し、菅田隼人直之が大津の城に押寄せ、四方を圍み、三日三夜息をも繼がず、急に攻干さんと欲す。直之出でて防ぎ戰ふと雖、無勢にして叶はず。城に入り固く守りて、救兵を待つのみに候。急ぎ御加勢を下さるべしとぞ告げたりける。元親驚き、些も猶豫すべからずと、波川玄蕃を大將にて、三千餘騎の軍兵を差向けらる。斯くて河野は、只一息にと、

晝夜を分かず攻むる所に、玄蕃馳着け、関を作りて打つて懸る。寄手すはや後巻のあるはと色めく所を、城中より是を見て、門を排いて打つて出で、揉立てしかば、寄手亂れて引退く。玄蕃引違へて城に入らんとする所を、寄手取て返し、入立てじとぞ戰ひける。土佐勢、既に引色に見えける所に、執行加賀守・津野藤藏人踏留り、軍に臨む程の者が、敵強ければとて、逃ぐるといふ事やある。進め者共と、二人眞先に鎗を入れしかば、諸軍是に力を得て、轡を並べ、爰を最後と戰ふ程に、河野が士大將平岡勘解由左衛門を始め、究竟の兵、其數あまた討たれけり。斯りしかば河野も一旦に攻干し難くや思ひけん、頓て勢を引きて、道後へぞ歸りける。されども又寄せ來る事やあらんずらんと、玄蕃日を經て待ちしかども、再び發向の沙汰なかりければ、本國へ歸りけり。

土佐物語卷第十終

土佐物語巻第十一

三好傳記の事

三好氏略系

阿波國は、三好數代の領國なり。天正の今は、三好河内守長治是を領しき。然るに長宗我部元親、當國に攻入り、楯突く者をば打從へ、降を乞ふは人質を取しめ、城代番人を籠置きしかば、國中是が爲に亂れて、隣郷近村、競合合戰止む時なし。如何なれば長治は、餘所に聞きて居給ふぞと、委しく是を尋ぬれば、長治、奢侈梟惡法に過ぎ、萬人疎みて、内治まらぬ故とぞ聞えし。抑此三好と申すは、元は小笠原氏なり。其先蹤は淸和天皇十三代の後胤小笠原民部少輔長房、信濃國に下山、大穴庄に住す。阿波國三好右馬助政季を討ちて阿州を領し、三好阿波守とぞ申しける。其長子大膳大夫長久は、本領を繼ぎて小笠原と稱し、二男長野彌太郎長政に、父阿州三好領を讓

りて、三好孫次郎と改名す。夫を數代を經て、貞治二年丁未、細川武藏守賴之、武家の管領となり、四國を領し、子孫皆阿州勝瑞に住して、阿波の屋形と稱す。長房八代の孫信濃守義長、初めて賴之の旗下に屬し、義長が孫筑前守長輝、武威を振ふ事甚し。然るに賴之五代の孫細川右京大夫政元の家人香西又二郎・戶倉某、永正四年六月逆心を企て、政元を害し、嵐山に城を構へて楯籠る。政元の養子細川澄元・三好長輝是を聞きて、三千餘騎にて、上京に陣を取りて、同年八月一日に橋を隔て相戰ひ、香西・戶倉を討取りけり。其後長輝薙髮して希雲と稱し、同五年正月、希雲洛陽に亂入して、大內助義興と戰ひしが、希雲終に討負け、三男三好孫四郎長光・五男芥川彥次郎長則、百萬遍の寺に入り、父子共に自害し果てたり。嫡子下總守多秀、又威を振ひしが、勢州山田に於て、國司北畠政鄕が爲に、舍弟賴澄と共に自殺し畢ぬ。希雲が二男三好薩摩守元長入道海雲も、亦威を振ひし。其頃細川澄元と細川高國と權威を爭ひ、合戰に及ぶ事度々なり。享祿四年海雲澄元の子晴元、此時十三歲なるを大將として、高國を討取り、晴元を管領となして、海雲逆威を振ふ事法に過ぎたり。晴元是

を惡み、天文元年壬辰六月廿三日、海雲が弟三好宗三幷木澤長政、是を圍みしかば、海雲叶はず、泉州堺顯本寺にて自殺しぬ。海雲が嫡子筑前守長慶軍を發し、伯父三好宗三を討ち、京都を陷し、芥川にて細川晴元を捕へて押籠め、細川次郎氏綱を管領となし、右京大夫に任ぜしむ。長慶終に氏綱に代りて、畿內近國の權柄を執る。河內國飯盛の城に居て、修理大夫とぞ改めける。海雲が二男豐前守茂賢入道實休、阿波國より大軍を率ゐて押上り、泉州岸和田に城を築き、舍弟攝津守冬康・十川左衞門正一存・三好刑部少輔・三好左馬亮・岩成主稅助・早淵賴母、二千八百餘騎にて籠置き、舍兄長慶が助となして、大和・和泉・紀伊の敵を打隨へて、押領せんとぞ謀りける。其頃紀伊國の守護職畠山紀伊守高政は、管領の權威にも怖れず、況して三好が催促にも應ぜず、暫く天下の安否を窺ひ、紀州土丸・阿瀨川・和歌山等、所々に城を構へて、常に申しけるは、大和・和泉・紀伊三ヶ國は、我父祖懸命の國なり。誰人か私として犯し掠むべき。實休入道、泉州岸和田に城を構へ、軍兵を入置き、高政が領國を窺ふ事こそ安からね。油斷すべきにあらずとて、永祿三年紀州勢二萬餘騎を率し、廣の浦よ

り出でて、岸和田へ押寄する。此義賢入道實休と申すは、阿州坂東郡住吉の神主たりしが、其器傑出して、大きに逆威を振ひけり。賴之九代の孫細川讃岐守持隆是を惡み、四宮與吉兵衛に談じて、誅せん事をぞ計られける。與吉兵衛忽に返忠して、義賢に斯くと告げたりければ、義賢怒りて、潜に三千餘騎の軍兵を率し、天文廿一年壬子八月十九日、勝瑞に押寄する。持隆は思も寄らず、龍音寺に行きて遊び給ふ所を、義賢透さず取圍み、喚き叫んで攻めければ、供に隨ひし士共、今は遁れぬ所なりと、駈出で〳〵一足も退かず、枕を並べて討たれけり。其隙に持隆は見性寺に入り、腹一文字に掻切り給へば、星相右衛門兵衛介錯して、其太刀を取直し、己が胸を後へ突通し、打伏になりて死にければ、蓮地清助其太刀に落重り、貫かれてぞ亡せにける。持隆の死骸をば、丈六寺へ葬りて、德雲院獲麟と號しけり。哀れなりし事共なり。義賢同年剃髮して、以徹實休と號す。時に廿七歲なり。頓て勝瑞の城に移り、持隆の北の方を押へて妻とす。此北の方は、大形殿とて、容顏美麗に御座しければ、偕老同穴の契深く、遂に男子出來給ふ。彥次郎長治と號す。實休寵愛淺からざりしかば、

諸士の偈仰いふ計りなし。持隆の一子も同腹なりければ、共に養はれて漸成長して、掃部頭眞之とぞ申しけり。昔源の義朝の御臺常盤御前沈落の後、平の淸盛入道の寵を得て、三人の君達を、都の内にて育て給ひしに異ならず。行末いかゞ覺束なし。去程に畠山高政、岸和田へ押寄すと聞えしかば、實休下知して、阿波・讃岐・伊豫の軍兵一萬餘騎、加勢に遣し、其身は五畿内の軍勢二萬餘騎引率して、三月四日泉州久米田に着陣す。其夜實休睡みたる夢に、持隆枕神に立ちて、

草枯らす霜又今日の日に消えて因果はこゝに廻りきにけり

と詠み給ふと覺えて夢さめぬ。夙に起きて、舍弟攝津守を呼びて、此事を語られければ、冬康忌はしく思ひて、

因果とははるかくるまの輪の外に廻るも遠きみよし野の原

と詠みてぞ祝ひける。深く心に障りて思へども、偖止むべき事ならねば、翌五日、實休兵を進めて立出でらるゝ所に、流矢來りて眉間に中り、一言に及ばず、馬より逆樣に落ちて亡せ給ふ。時に卅五歲なり。是を聞きける人、殊に因果歷然の理を知らで

も、袖を絞り得ず。

諸將城々を守る事

三好長慶専恣

さる程に三好修理大夫長慶、權を執りて驕甚し。家臣松永彈正忠久秀逆心を起し、潛に鴆毒を與へ、義與を殺し、其弟左京大夫義繼を立て、長慶が家督とぞなしける。此義繼と申すは、實に長慶が弟十川左衛門正一存が子なり。長慶が養ひて二男と稱す。卽義繼天下の執權たり。松永彈正忠久秀・其子右衛門佐久通、倍臣として將軍家に直參し、天下の政事を綺ひ逆威を振ふ。又三好山城守康長入道笑岸・同下野守康吉・同日向守定康等奢侈甚し。必ずしも上を侮るとにはあらねども、朝陽犯さゞれども、殘星光を奪ふ習にて、將軍の威自ら衰へ給ひしかば、義輝公憤り思召し、三好一族を亡さん事を議し給ふ。三好黨此由を傳へ聞きて、一門從類相催し、永祿八年五月十九日、將軍の御所を打圍み攻めしかば、義輝公自ら大きに勇を振ひ、終に生害なされけり。斯くて三好洛中を成敗して、偏に將軍の如し。義輝公の御弟鹿苑寺

の周高を討取り、其御兄奈良一乘院門跡覺慶を討取らんと、議する由聞えしかば、覺慶早く遁れ出で、春日山を經て江州に至り、佐々木修理大夫義秀を憑み給ひ、頓て還俗して義昭と號し、暫く此所に居給ふ所に、佐々木義弼、三好黨に內通して、義昭を殺さんとぞ謀りける。義昭此由聞召し、若狹國に落行き、武田義統を憑みて、三好が黨類を亡さん事を議し給へども、事成らざりしかば、越前國に赴きて、朝倉義景が館に暫く御座し、同十一年七月、專使を織田信長卿へ遣して、三好追討の事を憑み給へば、信長卿一議に及ばず、許諾し給ひけり。是を聞きて三好が黨類相議して、諸方の城をぞ守りける。

三好長治自害の事

其後義昭は、信長卿の武威を借りて、佐々木六角義賢入道承禎を追落し、直に入洛し給ひしかば、征夷將軍に任ぜらる。義昭卿・信長卿諸方に發向し、合戰度々にして、三好左京大夫義繼戰に利を失ひ、天正元年酉十一月十六日、終に自殺す。斯くて三

好が一黨、武威漸々に衰へて、終に信長の幕下にぞ降りける。さる程に三好河內守長治は、阿州勝瑞に在城しけるが、如何なる天魔の勸にやよりけん、不思議の事をのみぞし給ひける。中にも人の唇を返しけるは、先祖代々禪宗なりしに、近年法華宗に歸依して、自ら尊崇するのみならで、近士の者は、皆押へて彼宗になし給ふ。されば時に隨ふ世の習、士はいふに及ばず、國中の萬民、皆己が宗を改めて、法華宗にとなりにける。さる程に法華の寺は、月に隨つて榮え行けば、其餘の諸宗は、日を逐うて衰微せり。是は法滅の時至りぬと、歎かぬ者はなかりけり。是に依りて諸寺の愁訴多かりしかば、さらば宗論をせさせよとて、諸宗の僧を呼集めらる。諸國本寺の碩學活僧來り會して、天正三年既に宗論に及ばんとす。是容易ならぬ珍事なればとて、篠原自遁、樣々長治を諫め、色々諸僧を扱ひ、上下皆又本の宗になりて、諸僧本寺にぞ歸りける。是直事にあらず。三好家凶事の先表なりと、呵かぬ人はなかりし所に、同年五月六月七月、勝瑞の城中に樣々の妖恠ありしかども、夫にも怖れず、長治猶もあらぬ事共をぞし給ひける。爰に細川掃部頭直之は、長治爲には、主君なり舍

兄なり。されども時世に隨ふ習にて、勝瑞の城下に住み給ひしが、長治の擧動目覺しくやありけん、同四年十二月五日の夜、仁木伊賀守・林喜内、其外中間二三人召連れ、福浦出羽守を賴みて、井伊谷へぞ落ちられける。出羽守同意して、仁宇山に要害を構へ楯籠る。大栗右近・服部因幡守・森監物・粟田宇右衞門・中津野左衞門、其外舊好の武士馳加はりて守護しけり、長治此由を聞きて、安からぬ事なりとて、同五年三月多勢を率して馳向ふ。されども仁宇山は、聞ゆる難所なれば、輙く攻詰むる事叶はず、荒田・野口に陣取りて、日を經る所に、一宮長門守成助・伊澤越前守賴俊、常に長治に宿意ありければ、大勢を引率して、後卷をぞしたりける。長治驚き、人數を引きて、今切の城へ引退く。吉井左衞門大夫行康・多田筑前守元治・一宮・伊澤等二千餘騎、細川掃部頭を大將として、今切の城に押寄する。城主篠原玄蕃頭打負け、大岡村郡勘助を憑みて落行きしに、勘助直に心替りし、敵に告げてぞ討たせける。さる程に長治は、助任の川の邊を徘徊して、別宮を渡り給ひけるを、一宮・伊澤是を聞きて、二千餘騎にて圍みしかば、遁るゝ事叶はず、同月廿八日辰の刻、終に自害し果て給ふ。

辭世の歌に、

みよし野の梢の雪と散る花を長き春とや人のいふらん

姫田佐渡守、島隱岐守・原彌助正道・三好式部少輔康俊、殉死をぞ遂げにける。

伊澤亂附一宮成助降參の事

さる程に伊澤越前守賴俊は、常に長治に宿意ありと雖、我身の力には叶はず、便宜を待つ所に、不意に兩虎相鬪ひ、一狐其弊に乘りて本望を遂げしかば、要害の爲に坂西の城を築かんと、二千餘人を引具し、山下の中腹に居て、普請の下知をぞなしにける。矢野駿河守・同備後守・三好越前守・庄野久右衛門是を聞きて、是天の與ふる所なり。長治亡魂の恨を晴させ奉らんと、旗を卷き弓を伏せて、潛に坂西へ押寄せけり。伊澤は思ひも寄らず、床几に腰かけて、普請の樣を見居たる所を、一度に吐と押懸け、追詰め追廻し、當るを幸に、無法無礙に打捨てける程に、伊澤も敢なく討たれけり。三好仁右衛門は、越前守が親友なれば、是を救はんと急ぎ馳行きしかども、早賴俊討

伊澤賴俊討たる

たれぬと聞きて、道より引返し、伊澤が妻女早淵に居けるを伴ひて、妻女の兄一宮長門守にぞ渡しける。一宮も大軍を率して、新居表へ馳せ向ひ、伊澤伯父讃州・瀧宮豊後守五千餘騎にて、大山寺に打出でたり。矢野駿河守・同備後守・三好越後守・森飛驒守・赤澤信濃守・篠原自遁、勝瑞を立ちて、住吉の川切に打臨むと雖、折節大河水出で、渡すべきやうなかりければ、兩陣相引に引きてぞ歸りける。當國の俗に、伊澤亂といふは是なり。同年九月八日の朝、一宮長門守・舍弟主計正、軍兵を率して、八滿・富田を打通り、助任を渡して、高崎表へ出張して、旦の原を南へ打通る所に、淡路の軍兵共、勝瑞に在陣せしが、是を見て、延明の藪端より鐵炮百挺、横合に打懸けたり。成助些も騷がず、鐵炮二百挺を備へ打立てしかば、淡路勢叶はず引退くを、成助遁さじと追懸くる所に、究竟の武者五百餘騎、藪陰に待懸け、同音に鬨を作り、鎗を持つて突いて懸る。長門守馬より下立ち、大音上げて、成助是に控へたり、些も退く者あらば、討つて捨つるぞ。敵に逢うては活るとも、退いては遁るべからず。進め進めと勵ましける程に、退く兵なかりけり。淡路勢も、爰を引いて、何方へか行くべき

と、喚き叫びてぞ戰ひける。中にも安宅市之丞正行、眞先懸けて切つて廻るを、伊豫國の住人日高采女亮友春、鐵炮にて打倒しけるを、箕輪甚右衞門近光、走り寄りて首を取る。淡路勢終に打負け引退くを、追打に首數三百卅三討取りけり。一宮兄弟は勝軍して、恙なく開陣はしけれども、宮城梅雲を始として、憑み切つたる軍兵悉討死して、心細くぞなりにける。斯る所に矢野駿河守を始、三好方の勇士共、勝瑞に馳集り、城々牒し合せ、近日既に一宮へ攻寄せんと議する由、告げ知らするものあり。又土佐國長宗我部は、當國南部を打從へ、又北部をも押破り、亂れ入ると聞えしかば、狩場の雉子の、犬鷹に攻められて、矢先を恐るゝに異ならず。一旦の害を遁れて、時節を待たばやと思惟して、同六年の春、香宗我部親泰に便りて降を乞ひ、元親の幕下にぞ屬しける。

大西上野計略の事

扨も大西七郎兵衞は、上野と改名し、馬居の土居に還住して、常に申しけるは、我れ宮

内少輔の厚恩を蒙る事、山よりも高く海よりも深し。大西の案內して、勝利を得たりと雖、諸人與したる故なれば、我一人の功にあらず。唯如何にも一手柄して、忠節を備へばやと、先づ近里なれば、大西の下郡足代の城をぞ窺ひける。城主三好備前守は、常に小鷹を嗜みて、山野に日を送りければ、家臣鹽田主水是を患ひ、長宗我部元親、當國南郡を打隨へ、又北をも心懸け、大西の切所を押破り、卽要害に構へ候。御油斷あるべきに候はずと、詞を盡し諫めけれども、備前守、其身の男に高慢して、何程の事のあるべきと、更に承引せず、唯明暮鷹狩遊宴に身をぞ委ねける。將驕る則ば士惰る。是敗を取るの基なるを、知らぬ事こそ淺ましけれ。或時備前守、泊り鷹野に立越えたるを上野聞きて、手勢二百五十騎、夕闇の紛れに、城際へ忍び寄り、城戶口にして、鬨を吐と作りければ、城中大きに驚き騷ぎ、我先にくと、蜘の子を散らすが如く逃げける程に、鎧・腹卷・太刀・長刀・物具等を捨てたる事、足の踏所もなかりけり。斯りしかば、遁るゝ者は稀にして、討たるゝ者は數を知らず。鹽田主水是を見て、さもしき人々の有樣かな。主恩を蒙り妻子を扶持し、身の安樂を極めしは、

斯る時の爲ぞかし。恩を知らぬは鬼畜木石なり。よし人は、兎もあれ角もあれ、我は詞を違へじと、大肌拔になりて戰ひけるが、討たれてやありけん、落ちてや失せけん、生死を知らずなりにけり。寄手終に城を乘取り、勝鬨をぞ上げにける。備前守是を聞きて、戸渡る舟の、楫を絶えたる心地して、呆れ果て居たりしが、斯くても叶はぬ事なれば、豫て一族を催し、會稽の恥を雪がんと、都の方へ落行きけるとぞ聞えし。此由土佐へ注進しければ、元親、其忠義を深く感じ、卽足代の城を與へ、隣村近郷、手柄次第に切取るべしとぞ許されける。其後上野樣々の計策をなして、北伊豫の大名を語らひける程に、川の江の城主妻鳥采女、高遠家の城主石川備中守通清・金子備後守元宅、其他馬立・新前川・曾我部等、皆土佐へ降參す。頓て妻鳥が老父助兵衞、石川が一子刑部、後に傳兵衞といふ。金子が長子專太郎、後に彌右衞門といふ。是等を始として、人質皆岡豐へぞ參りける。斯樣に上野が忠義を盡しけるに付けても、慈悲と堪忍は人の大本なりと、昔より言傳へしはさる事ぞかし。元親も覺養がも不義を怒り、上野を殺害あらば、阿州北方手に入らざるのみならず、伊豫・讃岐への

三好備前守敗走

手配もなり難かるべきに、斯く弓矢の果報とる事、下坂の車、順風の船の如くなるは、偏に上野を助け置く、情ありし故ぞかし。されば堪忍は家を興し、情は人の爲ならず。元親の智慧のほど、稱歎せぬはなかりけり。

重清落城附三好山城守降參の事

斯くて元親は、阿州重清を攻めんとて、天正六年の春、大西の下郡へ發向ある。城主重清豐後守城を出で、川を隔てゝ相戰ふ所に、大西上野先陣と名乘りて、馬一騎に駈出し、川へさつと乘入りしかば、是を見て久武内藏助・吉田左馬允・同左衞門佐・長曾我部掃部介・奥宮藏人・安岡左京・大黒與七兵衞・千代岡藏人太郎・松田新右衞門・今井左馬介・森彈正左衞門・津崎太郎左衞門・中切左京兵衞・依光藏之進・瀬戸對馬守、水煙を立てゝぞ渡しける。元親采振上げ、續けや〳〵と下知し給へば、先陣後陣一同に打入り〳〵、向ひの岸に駈上る。重清勢、矢先を揃へ鐵炮を雙べて、散々に射かけ打かけ防げども、土佐勢更に事ともせず、一度に吐と突懸る。豐後守爰を最後と、火を

散らして切て廻れども、猛勢に駈立てられ、終に打負け、城へ入らんと引返せば、土佐勢犇と付きて、追討に打つて行く程に、城中へ入り得ずして、下郡指してぞ落行きける。

元親重清城を陥る

元親、逃ぐるをば追ふべからず、城を乗取れと下知し給へば、逸雄の若者共、我先にと押入り、在合ふもの撫切にして、難なく城を乗取り、勝鬨をぞ擧げにける。元親手を叩いて、心地よし氣味よし。いざ此競に三好山城守を攻めよとて、岩倉の城へ押寄する。

三好山城守降る

山城守は、三好・美馬兩郡の大將にて、多勢といひ、素より勇敢の人なれば、今度の軍は、定めて手痛からんずらんと、諸卒倦んで思ひける所に、いかなる所存にかありけん、降を乞ひて、一子を人質に出され、家老大島丹波供しけるが、我一子をも、共に人質にぞ渡しける。さる程に桑名彌次兵衛を大將として、小性組三千餘騎、岩倉の城へ、加勢にぞ籠置かれける。

小松島合戰の事

元親は頓て小松島に押寄せらる。吉成出雲守城を出で、田林・白岩の間にて、大きに

防ぎ戰ひけり。されども敵は大勢にて、入替り〱攻めしかば、吉成終に打負け、城中へ引退くを、寄手透さず追懸くれば、返合せ戰ふもあり逃ぐるもあり、前後不覺にぞ亂れける。桑名將監は、一人の敵を目に蒐け追懸けゝるが、敵逃れ兼ね、堀の中へ飛入りけるを、將監續いて飛入りければ、敵透さず打つ太刀に、將監左の腕を、半計り切られ乍ら取て押へ、首掻切つて上りけるが、馬に放れ、側に寄り、太刀の柄に腕を靠せて息繼ぎ居たり。吉田右近十五歲、逃ぐる敵に追縋うて、城の門際にて、能き首取つて歸りけるが、將監を見て、急ぎ馬より飛んで下り、將監を抱き上げて我馬に乘せ、將監が取りたる首を、鞍の四緒手に括り、附馬の口を取り退く所を、城中より是を見て、大勢門を開き、鎗提げ〱追懸る。右近返合せ、敵を追拂ひ引取れば、又追來るを、取つて返して切拂ひ、引返せば追ひ來る。五六度迄揉合ひ、旣に危く見えける所に、元親遙に御覽じて、あれ討たすな續けや〱と、身を揉んで下知し給へば、逸雄の若者共、一度に吐と突懸り、土煙を立てゝ突合ひしが、兩方相引にして、其日の軍は止みにけり。其隙に、右近は難なく將監を連れてぞ歸りける。翌日城中よ

り福長藤内方へ使を立て、昨日の手負、堀の中にての働き、幷彼手負を引取られ候武者振、天晴無雙の勇士、一騎當千と謂つべしと、諸軍擧つて感稱致し候。逆もの事に兩人の御姓名承り度候と申しける間、手負は桑名將監、助けたるは吉田右近十五歲と書付けてぞ遣しける。あはれ武門の譽やと、羨まざるはなかりけり。

今市合戰幷紀州湊雜賀降參の事

富岡の城主新開遠江入道道善は、東條關兵衞と所緣の由緒ありて、互に隔なく言交しけるが、關兵衞土佐へ降參したりければ、道善此由を聞きて腹を立て、大勢を引具し、東條が領分桑野へ押入り、麥を薙ぎ植田を返し、亂妨放火樣々狼藉止む時なし。東條も出でて防ぎ戰ふと雖、終には退屈して、岡豊へ加勢を乞ひしかば、中內兵庫を大將として、究竟の士を、桑野の城へぞ籠められける。道善是をば夢にも知らず、又例の如く押寄する。關兵衞今市口へ出向ひ、暫し相戰ひ、弱々と引退きければ、道善勝に乘つて、遁さじと追懸くるを、土佐の住人中內兵庫・岡上房之丞・森田善左衞門・

元親の威四國に振ふ

宇賀孫右衛門、眞先に進み、大勢喚いて駈合ひ、火を散らして戰ふ所を、關兵衛も取つて返し、十文字に駈破り、巴の字に打通りける程に、道善終に打負け、引返し逃行くを、追討に討つて、勝鬨をぞ上げにける。さる程に道善は、憑み切つたる郎等卅六人討たれ、其外軍兵殘り少なに討ちなされ、勢や弱りけん、己が領知に入り、城を守りて、再び桑野へ働く事なかりけり。香宗我部親泰此由聞きて、扱を入れしかば、道善も敵し難くや思ひけん、人質を出して、土佐へ降參をぞしたりける。四國は斯の如く、大半元親の掌握に落ちけるを聞きて、其威にや恐れけん、紀州湊雜賀の者共一同に連判起請文を書きて、土佐へ降參し、人質二人三人、代り〳〵在岡豐をぞしたりける。

一宮成助・新開道善最後の事

一宮長門守成助は、一旦元親に降參したりしが、熟世間の體を考ふるに、河内守長治討たれて後は、三好黨に頭を出す者もなし。五畿内に、三好が一黨多しと雖、諸方の

一宮成助討たる

怱劇に、當國下向の事は思ひも寄らず。然れば國中に怖るべき者もなきに、元親などが下手になりて年月を送らんは、活甲斐もなき事共なりと、同年の夏の末反逆を企て、偸に親開道善・夷山の城主何某を始、便宜の輩をぞ語らひける。唯二人していふ事だにも、天知る地知る我知るといへり。是程諸方へ觸廻し、大勢を語らはんに、なじかは隱れあるべき。香宗我部安藝守、早く此由を聞きて、岡豐へぞ告げにける。元親怒りて、さらば此方よりもたばかれとて、阿州中郡へ發向と披露し、一宮にて軍評議あるべしと、味方の城々へぞ觸れられける。長門守是を聞きて、愚人夏の虫、飛んで火に入るとは、斯る事にやあらん。元親是へ來る事こそ不運なれ。座敷の程を謀り、何某は兎して組め、誰々は角して討てと、方便の次第を言含め、さらぬ體にて居たりしは、運の極とぞ見えにける。元親城に入り給へば、成助迎に出來るを、大勢中に取籠むる。成助最後も能かりけり。心得たりと、腰の刀をするりと拔き、前後に當り左右を拂ひ、火を散らして切合ひ、終に其所にて討たれける。夷山には是を聞きて、扨は身の上とや思ひけん、行方も知らず落失せけり。元親透さず富岡の城へ

押寄せ、鬨の聲をぞ上げにける。道善もとより豫て期したる事なれば、些も擬議せず、鬨を合せて打出で、敵味方入亂れ、互に一足も退かず、手負死人を乘越え〳〵戰ひけり。吉田右近時に有持惣馬と名乘りて、數多鎗にて突伏せ、あたりを拂つて控へたり。是を見て、鎗取つて打向ひ、人交もせず戰ひ、惣馬を突伏せしが、鎗の柄中より折れにけり。太刀を拔きて首を取らんとする所に、星合九兵衛と名乘り、右近に走懸りて丁と打つを、さしつたりと飛違へ、請けつ流しつ、爰を專途と切合ひしが、九兵衛も亦討たれければ、右近は二つ首を打取りてぞ歸りける。爰に市原安倫とて、背の高さ七尺有餘の法師武者、太刀を以て縱横無礙に切拂ひ、近付く者なければ、なまぬるき軍やと、獨言して立たりけるが、右近が首取つて歸るを見て、遁さじと追懸くる。田中彌平左衛門つと駈寄門せ、いらざる法師の腕立や、參りさうと打つて掛れば、安倫から〳〵と打笑ひ、あたら男を、唯一打にせん事のかはゆやな。念佛申して西に向へと、取つて開いて打つ太刀を、飛違へて引組んだり。安倫もの〳〵しやと上になり下になり、爰を專途と組合ひしが、田中力や增りけん、終に上になり、押へて首を

新開道善討たる

取り、太刀に添へて歸りけるが、彼が首を取る上は、名字をも取らんとて、田中を改め、市原彌平左衞門とぞ名乘りける。專當左衞門太夫・津川彥兵衞・森壹岐守入道・同右近・小松左衞門・廣瀨兵庫助、大きに勇を振ひ、思ひ〱に分捕高名をぞしたりける。新開道善は、憑み切つたる星合・有持討死して、闇夜に澄消えしかば、何方へも立忍ばんと、城を出でて落行く所を、松田新右衞門、追懸けてぞ討取りける。

香河并津野養子の事

香河民部少輔は、西讃岐半國を領して、天霧に在城す。東讃岐は、十河隼人正の領分なれば、互に親昵深く、萬隔意なかりしかば、不慮の小事より事起りて、いつしか兩家中惡くなり、上には別義なき樣なれども、底意は、あはれ時節もあれかしと、互に隙をぞ窺ひける。十河は三好黨にて、阿讃五畿内に、歷々の一族充滿しければ、香河が門葉共、行末いかゞあらんずらんと、危まざるはなかりけり。齋藤下總守此由を聞きて、急ぎ土州へ立越え、元親に謁して、斯樣々々に承り候。香河を語らひ候はゞ、

一定味方に與し候べし。擁へて見候はゞやと申されければ、元親、實にさもあるべし。宜しく謀らはれよと宣へば、同年の秋、大西上野・齋藤下總守連札にて、國分寺の西の坊を使として、民部少輔の舍弟觀音寺が家老香河備前守をぞ遣しける。備前事の由を申しければ、香河兄弟斜ならず悅び、頓て返牒しけるが、我唯一人の女子ありて、名跡相續の男子なし。願くは宮內少輔殿の御息の內を申し請け、家領を讓り奉り度候。此旨宜しく賴入候とぞ申されける。元親悅び、許諾あり。二男五郎次郎親知を、香河の家嫡に約し給ふ。斯くて人質として、香河山城・河田七郎兵衞・同彌太郎・三野菊右衞門とて四人の家老、二番代りにして、岡豐へ參勤したりける。斯る折柄高岡部津野の領主津野彌太郎勝興、岡豐へ人を參らせて申しけるは、勝興既に老衰に及び候へども、不幸にして一子なし。願くは御息御一所申請け、家督に備へ奉り度候とぞ申しける。宮內少輔宣ひけるは、萬物皆時ありといへり。元親今年二人の男子を、兩家の家督に定むる事、求めずして幸福自然に來る。是當家興隆の時至る事眼正なしと、悅び給ふは限なし。卽三男の七歲になるを、淺野へ遣し給ひけり。

後に孫次郎親忠といひしは此人なり。勝興は、須崎の城を讓りて、姫野城に隱居せしが、程なく病付きて、同年十一月廿一日に亡せにけり。法名瑞臻とぞ號しける。去程に香河民部少輔、翌七年の春、岡豐へ出仕ある。進物には、長光の太刀一腰・二字國俊の刀一腰・綿五百把・紬百端・白苧五十端宛・紅五十斤・黑の馬一疋なり。中島與市兵衞是を披露す。此外御子息女中方へも、種々の捧物あり。香河は元來貴族といひ、殊更六郡餘の大將なればとて、重く饗應し、樣々善盡し美盡され、五日逗留にて歸られけり。國分表に茶屋を立て、送り坂迎なり。同年の冬五郎次郎、香河へぞ引越されける。

財田討死并羽床降參の事

同じき春の末、元親讃州へ出馬あり。財田城を攻めらる。素より要害堅固ならぬ小城なれば、なじかは土佐勢猶豫すべき。唯一揉にと攻詰むる。城主左兵衞、血氣に勇む勇士なれば、些も擬議せず打つて出で、東西に驅り南北に馳せて、七横八縱に打

破り、大勢を追散らし、城に入らんとする所を、横山源兵衛、願ふ所と駈出し、まさなうも敵に後を見せ給ふものかな。返し給へと詞を懸けゝれば、返すに難き事かと、馬引返す所を、持つて開いて打ちければ、左兵衛が腰の番を切られて、眞逆樣に落つる所を、頓て首を討取り歸らんとするを、左兵衛が扈從に森菊之丞、主君の敵遁さじと、疊かけて打つ太刀を、横山受損じ、右の腕を打落され、怯む所を首打落し、主の首に取添へ、閑々とぞ落行きける。横山が一子源三郎十八歳、遙に隔てゝ居たりけるを、味方の士呼懸けて、御邊の父を討取り、あれへ退くはと指さして敎へければ、源三郎兎角の事もなく、馬一騣に駈出し、親の敵遁すまじ。返せ戻せと呼ばはれども、菊之丞聞かぬ體にて、二町計り落行くを、程なく追詰め、何所へか遁すべきと、丁と打つを、ひらりと飛拔け、やさしく見ゆる若者やと、受けつ流しつ切合ひしが、横山遂に打課せ、主從の首に、親の首を取添へてぞ歸りける。類稀なる事共なり。源三郎、後に又源兵衛とぞ改めける。斯くて元親は、財田にて軍評議ありて、大西上野・中內藤左衛門を先手として、豫州勢六頭、羽床へ差向けらる。城主右衛門兵衛は、西

讃岐にて名を得たる勇者なれば、一里計城を出で、互に鬨の聲を上げ、矢一つ二つ射違ふる程こそあれ、皆拔連れて入亂れ、卯の刻の始より、午の刻の終まで、十ヶ度の戰に、敵も味方も互に屈したる所に、元親の旗本勢、一同に吐と喚いて、横合に懸りければ、羽床打負け、城中へ逃籠るを、先陣後陣一つになり、十重廿重に取卷き、餘さじとぞ揉んだりける。右衞門兵衞叶はじとや思ひけん、人を出して降を乞ひ、嫡子彌四郎を人質にぞ出しける。此羽床と申すは、景行天皇第二の王子、日本武尊廿一代の御末、中納言家成卿の男、羽床藤太夫章隆より、今右衞門兵衞迄は、十九代とぞ聞えし。此競に、新名をも攻めらるべきと聞えしかば、新名先達て降參す。新名後に心替しければ、卽誅せられ、城は入交り、藏人に預けらる。財田の城は、中内藤左衞門預り、其子源兵衞組與力共に入城す。長尾は西讃岐にて、肝要の所なればとて、新城を築きて、國吉甚左衞門に、究竟の士百人勝りて、與力に附けてぞ籠められける。

津島合戰の事

豫州津島の領主津島宗雲は、一年一條入道殿に憑まれ、同國法華津播摩守と共に、土州幡多郡に發向して、法華津は栗本に要害を構へ、宗雲は奥屋内篠田宗圓が城に楯籠りしが、栗本の城攻落されて、法華津は本國へ逃歸り、味方悉く敵に屬すと聞えしかば、宗雲・宗圓諸共に津島へ歸り、城を守りて猶降參せざりければ、元親、河原淵一覺・沖長門守に下知して、津島の城を攻めらる。要害堅固にして、輙く落つべき氣色ならねば、先づ向城を取りけり。河原淵は津島の北大宮堺、沖は南東の方に城を構へ、合戰度々なりと雖、城中堅く守りて、弱る氣色はなかりけり。爰に土佐國の住人廣田伊賀守は、宗圓と常に心安く言交しければ、樣々にたばかり、城中に入り、宗圓を討取りて歸りけり。是内通の者ありて、伊賀守を引入れたりといふ沙汰ありければ、彼を疑ひ是を怪みて、互に心を置合へり。三軍の敗も狐疑より生ずる理なれば、宗雲終に打負け、自害して果てぬ。家臣鴨原右馬左衛門・同助兵衛・御手洗掃部は、大きに勇を振うて討死す。久禮勘十郎は遁れ出で、後に土州幡多郡鵜野江村へ立越え、十兵衛と改名して居たりけるとぞ聞えし。

波川合戰の事

過ぎし頃一條家滅亡の後は、元親の下知として、幡多郡の城々、或は預け又は番の士を籠め置かれけり。中にも山路の城は、波川玄蕃預りてぞ居たりける。玄蕃は元親の妹聟なれば、人皆重く饗應しけり。されば滿つる者は溢れ易く、高き者は危しと、古人の詞、誠なるかな。玄蕃いつしか心侈り、酒宴博奕婬亂を事とし、鷹狩鹿狩に日を暮らし、諸士に對して無禮を盡し、郷民を虐げ、萬づ雅意に任せて行へば、上下爪彈をしてぞ疎みける。元親、此由聞き給ひ、大きに怒りて、山路の城を取上げ、餘人にぞ預けらる。玄蕃は本領波川に歸り、世上の面目を失ひ、人口を塞ぐに所なければ、人來れども對面せず、居城波川・奧谷・葛城の嶺に、籠居して居たりけるが、己が不義をば顧ず、我れ誤なくして、山路の城を取上げらるゝ事、生涯の恥辱是に過ぎず。察するに讒者の所爲と覺えたり。然るに實否の糺明もなく、罪を我に歸せらるゝこそ遺恨なれ。所詮元親に思ひ知らせんと、潛に謀叛を企て、忍び〳〵に、四州の城々へ、

廻文をぞ遣しける。されども元親の威にや怖れけん、與する者一人もなかりしに、一條左中將內政朝臣、如何なる所存にかありけん、一味同心の判形をし給ひけり。天魔の勸とぞ覺えたり。されども功に立つべきにあらねば、時節を待たんと思へども、諸方へ觸廻したる事なれば、終には隱れあるべからず。今は遁れぬ所なりと、玄蕃五法院に行き、入道出家して三衣を肩に掛け、一鉢を手に提げて、阿波國へぞ落行きける。是は海部の城主香宗我部親泰を賴み、一命を助かり、高野の山へ入らん爲なり。此由早く元親へ告げ知らする者ありければ、頓て海部へ內通ありて、詰腹を切らせらる。玄蕃が弟次郎兵衞・五郎太夫は、元親の馬廻にありけるを、兄弟とても、必ず一等にはあらず、赦免すべしとぞ宣ひける。兩人承り、誠に有難き御諚にて候へども、兄を死刑に行はれ候上は、何の面目ありて、浮世に存命候べき。急ぎ討手を下され候へ。恐ながら箭一つ奉り、切腹致し候べしと、手勢を引戾し、白晝に岡豐を立ちて、波川へぞ歸りける。若者共是を見て、上意をも憚らず、人もなげなる行跡、尤奇怪の至りなり。追懸け討取らんと進みければ、元親聞き給ひ、いや〳〵彼等が

所存、誠に不便なり。其儘聞き、本意を遂げさせよ。あたら者共を失はん事の惜しさよとぞ宣ひける。玄蕃、男子四人あり、長男は彌次郎、二男虎王、三男千味とぞ申しける。是は元親の甥なり。外にそばめの子一人、彼是共に、鎌田如きの城に籠りけるが、いかゞ思ひけん、城を出で、鎌田の土居にぞ楯籠る。此所、東は大河滔々として、南は巖石峨々たり。西は古落坂とて、要害堅固の地形なり。されども此北には、强に險阻をも賴みとせず、日頃扶持せし家人共には、皆暇を取らせ、最後を極めてぞ居たりける。年月慣れし主從、今を限りに別れ行く、心の內こそ哀なれ。其中に磯右衛門といふ嵐子あり。彌次郎が前に畏りて申しけるは、此月頃日頃妻子を扶持し、身の安樂を極め候御恩の程、いかに下郎なればとて、爭か忘れ奉るべき。今爰を遁れたればとて、千年萬年經べき身にも候はず。又何國へ參り候とも、譜代の主君の御最後を、見放したる無道人とて、人每に指をさゝれ、生きては何の顏か候はん。恐れある事にて候へども、哀れ御名字を許され參らせ、御鎧一領下し給り、華々しく討死して、冥途黃泉の御供仕り度候と、謹んでぞ申しける。彌次郎聞きて、汝が詞、

感歎するに餘りあり。然れども此度は、我々とても働くべき覺悟にあらず。討手向はゞ立雙び、尋常に腹を切らんと思ふなり。汝は何方へも立忍び、我々が後世を弔うて得させよ。最後の供には增さるべしと、涙と共に申しければ、磯右衛門は、口惜しき事を仰せ候ものかな。男の詞は倫言の如し。一度出して返す事候はず。但此者、御用にも立つまじきものと思召し、此仰を承り候か。此上は力に及び候はず、御前にて自害仕り、御先へ參り候はんと、旣に刀に手をかけゝれば、彌次郎押止め、誤つたり磯右衛門、汝が所存に任すべしとて、黑糸の鎧甲に太刀を添へて遣し、波川の名字をぞ許しける。磯右衛門首を地につけ、今生の思出、來世の訴是に過ぎずと、悅ぶ事限りなし。さる程に城中には、敵寄せぬ先に、最後の名殘を惜まんと、老若一所に打交り、一日一夜酒宴して、踊り謳ひて遊びける、心の內こそ無慙なれ。斯くて岡豐勢に、近鄕の武士馳加りて、雲霞の如く城の四方を取廻し、揉みに揉んでぞ攻めにける。爰に栃內丹後入道阿運とて、波川が叔父あり。昔は玄蕃が扶助を得て居たりけるが、年老い子もなければ、法體して豫州へ立越え、或山陰に阿彌陀佛申してぞ暮

しける。此頃所用の事ありて、土佐の城山へ來り、此事を聞くと等しく、波川へ馳行く所に、敵早波川の江尻を經て、鎌田の切通まで打圍みて、土居に入るべき樣なかりければ、阿運、寄手の陣に行き、大將の前に畏りて申しけるは、是は日下の者にて候。老いぼれて、明日をも知らぬ身に、一子を持ちてけり。親しき者に語らはれ、城に籠り候へば、偏に盲者の杖を失ひたる心地致候ぞや。彼者は我乍ら、心も普通に剛なる者にて候。いかにもして誘引き出し、味方に參らせ、城の案内をもせさせ、一旦の死をも助け度候と、淚と共に申しければ、大將是を聞きて、翁が心底理なり。さあらば汝城へ行き、いかにも賺して誘引き出せよと、圍を解きてぞ入れにける。阿運悅び、頓て土居に入りければ、彌次郎驚き、此軍儀の事なるに、何方より告知らせ候や。又寄手の圍をば、何として入られ候ぞと問ひければ、阿運右の次第を委細に語り、我若し豫州にありて、此軍に逃れなば、生涯の恨盡くべからず。不思議に參り逢ひ、一所にて討死し、冥途までも伴ひ奉らん事、三世の御緣、盡きざる所なりとぞ申しける。彌次郎悅び、卯の花威の鎧太刀長刀を出しければ、阿運が鎧は是に候とて、上の衣を

脱ぎたるを見れば、經帷子をぞ着たりける。太刀取りて帯び、長刀を提げ、陣頭に駈出で大音聲にて、是は最前大將軍の御恩蒙り、城に入りたる禪門なり。昔は栜内丹後とて、波川が家臣なるが、去年暇を乞ひ、近年は伊豫の內に住居仕る所に、不思議に此軍に參り合ひ候事、生前の悅、死後の思出是に過ぎず。我誠には子は持たず。主君と一所に討死せんが爲に、大將軍を欺き候なり。禪門が皺首取りて、妄語の罪を果し給へ。すは參り候と、大長刀を打振りて、大勢に割つて、西より東、北より南、蜘手・かくなは・十文字・蜻蛉返り・水車、八方亂して切つたりける。手元に進む兵、生死は知らず、七八十人ぞ薙伏せける。老武者の悲さは、次第に息切れ腕弱り、終に其所にて討たれけり。磯右衞門も劣らじと、前後に當り左右を拂ひ、追詰め追廻し、河原面へ駈出で、我身を見れば、痛手薄手の嫌なく、寸のあき所はなかりけり。今は是迄と、小高き所に駈上り、大音上げ、是は波川磯右衞門なり。剛なる者の腹切りやうを見て、各武運盡きて、腹切らんずる時の、手本にせよと突立ち上り、鎧脱ぎ捨て、腹十文字に切破り、自ら首を搔落し、立竦んでぞ死んだりける。次郎兵衞鎗提げ、糟

毛なる馬に打駆り、古落に支へたる敵中へ馳入り、四十代の邊を捲り立て〳〵、縱橫無盡に突いて廻る。舍弟五郎太夫・寺內源助・深瀨浪之助・勝加瀨治部・同右京・橫田疇之助・橫山岩右衞門などいふ究竟の者共、何を期すべき命ぞやと、一度に吐と打て出で、照りに照りたる夏の日に、敵味方入亂れ、討つ討たれつ組んづ組まれつ、太刀長刀の閃く光は石火の如く、流るゝ汗、瀧の如し。血は滌の河をなし、紅は楯を流す。

波川玄蕃討死

皆一足も退かず、枕を雙べ討死す。玄蕃がそばめの子十八歲なりけるを、彌次郎呼びて、汝死しても益なし。隨分遁れて、我々が後世を弔へと、再往理を盡し諫めければ、泣々大古落を經て、蓼原に差懸かり、夫より伊豫の方へ落行きけるが、後には又當國に歸り、町田助左衞門と名乘りて、吾川郡伊野村に住しけるとかや。虎王は十歲計なるが、塀を乘越え來る敵一人鎗つけ、河原を傳うて落ちけるが、大內の彌三の瀨を渡るとて、深みに入りて溺れ死にけるを、大內の里人死骸を取上げ葬りけり。彌次郎は矢倉の上に、軍の樣を見物し、味方殘らず討死しければ、今は思ふ事なしと、廣庭に大幕を打廻し、大桶に水を汲み溜めさせ門排き、思ふ儘に敵を誘引き入れ、爰

に追詰めては丁と切り、彼に追廻しては礑と伐る。太刀なまれば、桶の水にて押洗ひ、押洗ひては戰ひ、戰ひては押洗ひ、大勢を追拂ひ、幕の内へ走り入り、腹掻切つて亡せにけり。天正八年五月廿八日、波川一族絶え果てぬ。千味は幼ければ、母抱きて成山へ落行きけるが、幾程もなく早世す。母は尼になり、慶壽陽甫と號し、元親より、百石の知行を與へ置かれける。玄蕃が遺骨をば、波川の地下人共、阿州より迎へ取りて、本願寺の山に葬り、標を立て日をば書いて、每年七月廿八日に、玄蕃施餓鬼とて、鄕民共手向をなして祭る事、今に絶えずとぞ聞えし。此時討たるゝ者共の死骸を築込みたる墓、其數を知らず。されば此所を塚畠と號けたり。雨夜に彼亡魂、幻の如く人の目に見え、大勢戰ふ聲聞ゆる事、珍らしからず。中にも磯右衞門が死骸をば、自害したる所に埋めけるに、其邊を馬上にて行く者をば、忽に蹴落し、或は牛馬を繫ぎて、其所を汚す者あれば、祟をなす間、諸人怖るゝ事斜ならず。本願寺の僧衆、巖上の山へ改葬して祭りければ、磯右衞門が亡靈、靜まりけるこそ不思議なれ。

土佐物語卷第十一終

土佐物語卷第十二

藤目の城兩度合戰の事

讃州十川の城主十河隼人正存保は、三好豐前守義賢入道實休が末にて、河內守長治同腹の弟なり。實休の舍弟左衞門正存、十河を領して、十河讃岐守と號す。其性質剛毅勇猛にして、形粧尋常ならず。家中の上下、耳の後まで髮をぬき額に作り、男だてをしたりければ、世に鬼十河とぞ申しける。一存實子なく、甥孫六を養ひて家を繼がしめ、十河隼人正と號す。其後一存、一子を產みければ、三好修理大夫長慶取りて養育す。左京大夫義繼是なり。存保、一族家臣を集めて申されけるには、近年長宗我部宮內少輔が爲に、阿州味方の屬城を犯し奪はるゝ事、無念といふも餘あり。當國藤目の城は、宮內少輔が一族なれば、先是を攻取り、其勢に乘りて國中を打從へ

んと、阿波・讃岐の勢をぞ催しける。此事隠れあらざれば、齋藤下總守政賴是を聞きて、飛脚を馳せて、岡豐へぞ告げたりける。元親、さらば加勢せよとて、桑名太郎左衞門・濱田善右衞門を兩頭として、小性組をぞ遣しける。隼人正是を聞きて、勢の重ならぬ先に、急に押詰め攻めよとて、天正八年の夏、雲霞の如く取卷き、夜晝の境なく、揉みに揉んで攻めにける。城主下總守政賴は、土佐より加勢うけ、初度の軍を仕損じては生涯の瑕瑾なりと、手の者共に下知をなせば、桑名・濱田は、又我々加勢として來りて、言甲斐なく城を破られては、一期の恥辱なりと、互に味方を勵まし、我劣らじと先を爭ひ打つて出で、駈入り駈拔け、此に顯れ彼に隱れ、馬手に廻り弓手に通り、離合聚散して、手を碎き戰へば、寄手數多討たれて、引退く事度々に及べども、流石寄手は大勢にて、入替り〳〵攻めける程に、城中の兵共、心は猛く思へども、其身金鐵ならねば、遂に打負け、城を明けてぞ落ちにける。斯りし程に、藤目の早馬頻に打ちて、事既に難儀に及ぶ由、岡豐へ告げければ、元親大きに驚き給ひ、重ねて合力せん。遲滯しては叶ふまじ、心懸次第に續けや〳〵と身悶して、近習の士僅に引具し、

取る物も取敢ず打ち給へば、追々に馳せ加はり、其勢五千餘騎、我先にと急げども、藤目への道筋、山重なりて道險しく、峯より嶺を傳ひ、谷より岨へ傳ひ行く程に、急ぐとすれど捗取らず、漸々として讃岐堺に至る所に、藤目の落人追々に馳來り、城既に沒落して、大將を始、皆々大西へ落行きたりと、軍の次第を申しければ、宮内少輔聞き給ひ、誰々は如何にと尋ねられしかば、恙なく立退き候。元親、先づ目出たし。重ねて評定して、城を取返すべきぞと、夫より歸陣し給ひけり。其後家臣を召して、此度藤目の後詰遲なはり、城を取られしこそ安からね。是を其儘閣く程ならば、敵に氣を呑まるゝ耳にあらず、國中の諸士、味方に與せんと思ふ者も、心變ずべし。不日に押詰め撫切にして城を取返し、諸方の見懲にせばやとて、四方の城々へ觸廻し、同年の冬、大軍を引率して、藤目の城へ押寄せ、矢懸り近き松茸尾の山へ取上り、軍の樣を見給ひけり。味方の軍勢城際へ押寄せ鬨を作り、鐵炮をつるべ矢を射入れければ、城中にも同じく鬨を合せ、つるべ返し射返しけるが、時分をや謀りけん、追手の門を排き、鎗先を揃へ、一度に吐と突いて出で、敵味方入亂れ、東西に馳通り南北に

駈破り、喚き叫んで攻戰ふ。兩方に討たるゝ者其數を知らず。寄手大に捲り立てられ、足床を亂し、混退きに退きければ、元親血眼になりて、黑く見ゆる者共かなと、山より眞下りに、逸足を出して駈給へば、味方是に氣を勵まし、一度に喚いて突懸る。城兵已に突立てられ、引色に見えけるを、寄手犇と付きて、押入らんとする所を、城中より百騎計駈出で、鐵炮を伏せて、雨霰の如く打懸けゝれば、寄手些し猶豫する隙に、城兵難なく引取りけり。元親熟防戰の形勢を見給ひ、此の城の體、中々容易く落つべからず。棲樓を擧げ仕寄を附け、丈夫に取詰め、日を逐うて攻干すべきと、夫々に下知し給ふ。桑名八郎左衞門・濱田善右衞門、組の面々を呼集め、各は何とか思ひ給ふ。我々此城の加勢として籠りたる甲斐もなく、敵に攻取られける事、偏に恥辱とは思ひ給はぬか。さあれば此度の戰に、人並の働して、世上の人口防ぎ難し。緩緩と丈夫に取詰めらるべき御觸なれども、いざ我等は御下知を背き、無代に押入り城を乘取り、先度の恥を雪ぐべしと、思ふは如何にと申しければ、誰々も、斯くこそ申し度候ひつれ。いざさせ給へと、一同に勇み懸けて申しければ、兩人悦び、若し城

を取得ずんば、枕を並べ討死して、泉下に武名を止めんと、矢竹心の一筋に、引きは返さじものをと、未の刻の牛より曳々聲を上げ、大手の城戸に押寄せ、鹿垣逆茂木引破り、喚き叫んで攻入りける。元親是を御覽じて、小性組の若者共、先度の恥辱を雪がん爲、無代に押入ると覺えたり。あれ討たすな、續け者共と、眞先に驅出で給へば、なじかは一人も擬議すべき。我劣らじと進みけり。先手是に彌機を得て、ひた〳〵と塀際へ附けて、旗指物なんど投込み〳〵、面も振らず込入りけり。城兵も爰を破られじと、追込めば追出し、追出せば追込み、打ちつ討たれつ、太刀の鍔音、鐵炮の音、矢叫びの聲天地を動かし、射違ふる火矢は、日中の如し。小性組の面々他の勢を交へず、三の門を打破り、切れども突けども事ともせず、手負死人を乘越え〳〵込入りけり。濱田善右衞門は馬を射させ、陸立になりて、向ふ者の眞向、牛首、左右の籠手、當るを幸に討つて廻りけるが、其身に矢玉の當る事其數を知らず。終に其所にて討死す。十市備後守が一子細川彌四郎十八歲・光留權之介、大に勇を振ひ、鐵炮に打たれて亡せにけり。此等を始として、究竟の士廿八人討死す。元親二の丸まで乘入り、

城は早取りたるぞ。爰を採めや者共と、駈出で〳〵下知し給へば、總軍一同に甲の丸に押入り、城中殘らず撫切にして、其夜の明方に、終に城を乘取りけり。元親躍上り躍上り、扨も氣味よき事かなとぞ宣ひける。頓て城を修補して、下總守を返し入れ、大西より償を請じて、此度討死の輩を、懇に弔ひ給ひけり。

北の川討死の事

同年の夏、伊豫國北の川左衞門太夫は、訴訟の事ありて、家臣永山伯耆、岡豐へ來り、事の詮議ある所に、波川玄蕃が謀叛露顯して、行方知らず落失せたりと、上下騷動斜ならず。北の川は、波川が壻なれば、是も內通して、同意なりといふ沙汰のみなりければ、彼訴訟の詮議は閣き、波川が行方、北の川が反逆の實否如何にと、とり〴〵さま〴〵評しける。伯耆是を聞きて、左衞門太夫は、玄蕃殿と父子の親みに候へば、諸人語らひ、虛說をなすと覺え候。全く野心なき由、樣々に陳じけれども、證據確ならねば、誰取上ぐる人もなし。伯耆、斯る所に長居しては惡かりなんと、取る物をも

取敢ず、國元指して立歸り、事の由を申しければ、左衞門太夫大に驚き、一紙の起請文を書きて、野心なき旨を陳じければ、宮内少輔是に不審を散じ、扨は虚說疑なし。哀れ人の口程、善惡なきものはなしとぞ宣ひける。斯くて波川一族退治あり、北の川は不思議の難を遁れける所に、日下の里人、一つの文箱を岡豐へ持出でてぞ捧げける。見れば波川謀叛の時、一條内政朝臣、同意の判形し給ひし廻文と、北の川左衞門太夫が、波川玄蕃に内通の牒狀となり。道にて拾ひ候とぞ申しける。いかにしてか落散りけん。併北の川が起請の罪とぞ見えし。元親披見ありて、是懷中の眞虫、腹心の病なり。若し緩々の沙汰を致さば、後日の災、量るべからずとて、久武内藏助五千餘騎、桑名太郎左衞門三千餘騎、幡多郡の人數六千餘騎、同十二月中旬土佐を立ちて、北の川へ押寄する。北の川は、三瀧・黃幡・猿が瀧・宗川・甲の森とて、五つの要害を構へたり。猿が瀧は北の川父子が居城、三瀧は北の川備前、黃幡は黃幡源太夫、宗川は宗川出雲、甲の森は永山伯耆在城す。是等は北の川が家老なり。寄手一萬四千餘騎に、伊豫・讃岐の勢馳加はりて、雲霞の如くなれば、手を分けてぞ押寄せける。中

にも猿が瀧へは、桑名太郎左衞門・依岡左京向ひけり。左衞門太夫城を出で、雄氣天を突き、黑煙を立てゝ、爰を專途と戰ふと雖、寄手は目に餘る大勢なりければ、切れども突けども事ともせず、新手を入替へ〳〵、頃刻に變化して揉立つれば、北の川終に打負け、城中へ引取りけるが、始終叶はじとや思ひけん、人を出して、我頭を剃り、城を渡し候べし。御寬宥仰ぎ奉るとぞ申されける。太郎左衞門、委細承り候。是より返答申すべしとて、使をば返しけり。其後桑名、諸將を呼寄せて、此事いかゞあるべき。たとへ降參すと雖、必ず許容すべからず。是非打果すべしと、豫て堅く仰を蒙り候。扨如何計らひ給ふと申しければ、久武内藏助、先づ同心の返答して城を請取り、油斷をせさせ、四方の相圖を極め、一度に攻入り、打取るべしといひければ、一座此議然るべしとぞ同じける。頓て太郎左衞門、城へ人を入れて、御降參の趣、諸陣へ申達し候へば、皆々異議なく承引せしめ候。早速城を渡され候へ。其旨岡豐へ注進して、本領安堵せさせ候べしといひ遣しければ、左衞門太夫誠ぞと心得、頓て法體して城を出で、太郎左衞門・左京に對面色代して、本丸を太郎左衞門に渡し、其身は

二の丸へぞ移りける。左京は若し左衞門太夫が逐電する事やあらんとて、山下をぞ守りける。岡豊の返牒を待つと披露して、日を經し間に、諸方の相圖手配を極めけり。猿が瀧の城より手初して煙を揚げ、諸方一度に攻干す約束なり。斯る所に氣早の若者悇へ兼ね、翌正月七日の早旦、三瀧城に狼煙を上げたり。北の川が長子石見守是を見て、本丸へ馳上り、太郎左衞門に向つて、あれ御覽候へ。三瀧の城に怪しき火の手見え候。如何樣御ぬき手やらんといひて詰懸くるを、桑名拔打に、石見が眞向唯一刀に切割りたり。左衞門太夫是を聞きて、こは出拔かれぬと、二の丸より投明松を投入れ〳〵、本丸を燒立つる。依岡左京是を見て、續け者共と眞前に進めば、山下の總軍一同に鬨を作りて押上る。光富權之助十九歲、一番乘と名乘りて駈入りけり。是は讃州藤目にて討死したる權之助が長子なり。立石右京生年十六歲と名乘りて、駈廻る所を、敵二人鎗を持て突いて懸る。右京些も怯まず、飛上り飛違へ、手を碎き戰へども、大の男二人、隙透間なく突懸り、旣に危く見えし所に、左京が郎等駈來り、二人の敵を追退け、主を助けて退く所を、二人の敵又取つて返し、郎等に

突懸る。心得たりと鎗取直し戰ひしが、廿一ヶ所手を負ひ、切岸に突附けられ、今は斯うと見ゆる所に、立石返し來りて、二人の敵を討取り、郎等を肩に掛けてぞ退きにける。郎等は深手なれば、頓て死にけり。一度は主人を助け、一度は郎等を介けし、君臣の道こそ優しけれ。斯くて北の川が賴み切たる一族家臣皆討たれければ、笠を出して矢止を乞ひ、心靜に酒宴して、大長刀を打かけ廣庭に立出で、誓願寺の曲を諷ひ、元親の御名代の旁に見參せん。參りさうと打つて懸る。右京心得たりと、鎗取りて打向ひ、互に手利の上手なれば、暫し勝負は見えざりしが、北の川終に討たれけり。是を見て郎等共、何の爲に命をば惜むべきと、一足も退かず、皆一所にて討死す。寄手の方にも、手負死人其數を知らず。右京が弟左馬丞・新藤・大津・野藤藏人・同民部、群に抽んで勇を振ひ、分取高名しける中に、民部は討死したりけり。殘る城々をも、相圖の如く同時に攻めしかば、永山伯耆・北の川備前・黃幡源太夫・宗川出雲、思ひ思ひに戰ひ、或は自害し又は討死して、泉下に名をば止めける。さる程に三瀧・甲の森は、長宗我部四郎兵衞に預けて、猿瀧・宗川・黃幡の代官を申付けられけり。

黑瀨城攻の事

北の川の寄手の勢、三日人馬息を休めて、西園寺左衞門太夫公廣が居城黑瀨へぞ向ひける。曾根相模守五百餘騎、西の川近江守四百餘騎、當國の住人なれば、案内の爲先陣して、松葉の町へ押入りければ、城兵町口に出向ひて、互に鬨の聲を擧げ、兩方拔連れて入亂れ、切つ切られつ防ぎ戰ひしが、寄手是非なく押入り、頓て在家に火を掛けたり。折節風烈しく吹き、炎四方に飛散りて、黑煙天を掠めけり。而も其日は日蝕にて、方角慥ならず、黑瀨の勢は、城中心元なしと、町を捨てゝ引取りけるを、追縋うて押寄せ、揉立て〳〵喚き叫んで攻めける所に、暫くして空晴れたり。見れば先手は味方を放れ、城際に押詰め、後陣は遙後に控へたり。軍兵共、こは深入したりとて、呆れたる計なり。曾根・西の川些も騷がず、備を亂さず、段々に引取れとて、曾根は先を下知すれば、西の川後殿をぞしたりける。城中より是を見て、大勢出で慕ひ來る。西の川は、火威の鎧に黑母衣を掛け、黃瓦毛の馬に騎りて、靜々と退く所を、黑

糸の鎧着たる武者二騎駈來りて、母衣を二刀切りければ、西の川引返し、一人を切つて落し、一人を引取り、些も働かせず、鞍の前輪に押付け、首搔切つて差上げたり。此勢に辟易して、敵引返しければ、難なく味方へ引取る所に、比本善四郎十四歳、いかにしてか味方を放れ、疲れてやありけん、とある谷川にて水を飲みける所に、敵三人來りて、敵か味方かと問ふ。味方ぞと答へて、西を見知れりと、さらぬ體にて手水を使ひければ、味方とや思ひけん、打連れて行く所を飛懸り、後なる武者を切倒せば、二人肝を消し、後をも見ずして逃げにけり。鷹は巢の內より、鳥を贄るの勢あり。善四郎弱年の智謀勇氣、老武士の子なりと、褒めぬ人はなかりけり。

羽林逝去の事

去る天正二年、一條入道殿沈落の時、家臣ども相議して、御子息左中將內政朝臣の後見を、元親に憑みける所に、加久見等が反逆に仍りて、中村の御住居覺束なしとて、大津の城に移し、中村の城をば、吉良左京進に預け置き、中將殿御壯盛に及びて、中

村へ返し入れ奉るべしと、岡豊より扶持し參らせて冊きけり。元親の息女を御簾中になして、一男一女出來給ひて、元親寵愛淺らざりしかば、羽林をも御いとほしみ深く、あはれ將の器にならせ給ひかしと、明暮願はれける所に、波川玄蕃が謀叛に與し給ふ。偏に天魔波旬、彼心底に依託しけるとぞ覺えたり。されば佛は衆生を思へども、衆生は佛を思はずとかや。中將殿常に仰せけるは、內政本領には放れぬ。一日の扶助を請けて、年月を送るなれば、偏に乞丐人に等し。禮儀も作法も入る身にあらずとて、立居振舞衣紋に至るまで、唯異相を好み、大太刀長刀を橫へ、肱を張り口を歪め、目を瞋し聲を高くし、無禮不義の溢者共を召集め、劒術・輕事・力業・鹿狩・鷹狩・川逍遙・酒宴婬亂を事として、文道政事禮儀の沙汰は、思ひ絕えたる事共なり。御父入道殿、非道不義の行跡故、追出の恥に及び給へば、いかばかり歎かしく、御心に懸るべき事なるに、其氣色露もなく、御父に猶超過し給へば、宮內少輔深く是を歎きて、時々諫言を進むれ共、曾て承引ましまさず、されども元親爲には、厚恩の主君なり壻なり。二人の孫ある事なれば、家門長久を願ふなりとて、色々にさまを替へ、樣

様に手を代へて諌言をなしければ、あらむづかしの賢人かなと、大きに疎み給ふ程に、波川が謀叛を究竟の事と喜び、頓て同心し給ひけり。されども波川一族、同時に皆亡びしかば、誰知る人もなかりけるが、隱れたるより顯るゝはなく、内政朝臣こそ、波川が謀叛に與し給ひしといふ沙汰のみなりけれども、其支證も慥ならねば、元親空知らずして打過ぎ給ふ所に、波川が廻文出來り、内政の判形鮮なれば、いふ計りなき事共なり。宮内少輔呆れ果て、此上は一所の住居叶ふまじとて、御臺所若君姫君を、迎に人をぞ遣はされける。痛はしや人々は、思ひ寄り給ふべき事ならねば、急ぎ參りて御引出物を給はらんと、二人の御子いらて給へば、御臺所取る物も取敢ず、御輿に召されて出で給ふ。是を限りの別とは、知召さぬぞ哀れなる。其後宮内少輔、中島與市兵衞を使として、大津の御所へ申されけるは、去年波川玄蕃反逆の時、御同心の由、告知らする者候ひしか共、爭でさは坐しますべき。定めて告ぐる者の僻事ならんと、疑ふ事もなく候所、不慮に玄蕃が廻文出來り、御判形分明に候。抑元親に於て、御遺恨あるべき仔細覺悟せしめず。御家滅亡の事は、元親が所爲に候はず。

入道殿不義の御行跡に仍りて、老臣共牒し合せたる始末は、御存知の前に候へば、今更事新しく述ぶるに及ばず。其節幡多表へ敗亂に及ぶに付、當地へ迎へ參らせ、安座をさせ奉る事、併元親が功なり。然るに首を刎ねらるべき御結構は何事に候や。總て不義非法の御行、御父に猶超過し給ふ故、兼々諫言を獻ずと雖、曾て御承引なく、偏執の御志甚しく、行末頼もしう候はず。所領分國の御堪忍は叶ひ候べからず。何方へも御越ありて、御心の儘に行跡し給ふべし。兎角の御返事は承るに及ばずと申捨て、與市兵衛は歸りけり。中將殿此由を聞召し大に驚き、胸塞がり、十方に暮れて御座しけるが、さるにても我等、如何なる業因にや、二代追出の恥に及ぶらん。現在の果を見て、過言未來を知るといふなれば、元の世の酬まで、思ひやられて淺ましやと、掻口說き立て給ふ。扨あるべきにあらざれば、既に御所を出で給ふが、園の傍に、世に稀なる紫藤あり。羽林殊に御寵愛ありて、いつも花の頃は、朝に詠め、夕の色にめで給ひければ、御名殘を惜み給ひ、一首の歌を短冊に書きて、藤の枝にぞ掛けられける。

一條内政死去

植ゑ置きし庭の藤が枝心あらばこの春ばかり咲くなにほふな

草木心なけれども、主の別れをや惜みけん、此春は、唯冬枯の梢の如く、一蘂の房もなかりけるこそ不思議なれ。梅は飛び櫻は枯れし古の、心盡しの神詠、今更思ひ合されたり。去程に内政朝臣は、大津より御船に召され、伊豫國法華津といふ所に、送り捨てられ給ひけり。暫は微なる體にて御座しけるが、程なく病付きて、果敢なくならせ給ふ。天叟院守有とで諡りける。哀れなりし事共なり。於呼古き諺に、不善の子、不義の臣出來る時は、其家必亡ぶといへり。誠なるかな康政・内政、前代の法に違ひて非道を行ひ、臣下も亦不義にして、雅意を行ひ給ふ。是一條家滅亡の時至りぬと知られたり。元親常に、哀れ中將殿、現世安民の器御座せよかし。昔に返して國司に仰ぎ參らせんとのみ宣へども、領知をも與へず、常の要用も御心に叶はねば、糖飴を以て小兒の泣を止るに等しとて、曾て信用し給はず、明暮是を怒り給ひ、謀叛にも與し給ふなり。理には似たれども、今は扶助の親なり舅なり。陰に居て枝を折り、恩を讎にて報ぜんとす。運の末とはいひながら、うたてかりける事共なり。又

元親も、怒り給ふはさる事なれども、父子夫婦一所に押籠め置き給ふとも、さまでの事もあるまじきに、舊恩をも顧みず、引分け送り捨てられたるは、情なうこそ聞えけれ。非義を惡みて非義をなす、因果は車の輪の如し。元親が行末も亦如何あらんと、いはぬ者はなかりけり。文明十年敎房公當國へ御下向より、天正九年の今年に至り、春秋百有五年にして、土佐一條家斷絕す。

土佐一條斷絕

博陸侯詠歌の事

扨も彼一條前關白敎房公は、應仁の古、帝都を浮れ出で漂泊し給ひ、戸渡る船の楫を絕えたる有樣なりしに、不思議に土佐國幡多中村に移らせ給へば、是は此生死煩惱の苦海を放れ、御法の船に法を得て、彼岸に至りし心地して、古鄕の事をも思召出されず、行末かけて御家門長久、御子孫繁昌の爲に、南無春日大明神と、大文字一行の下に三行三字に

土佐の海南の岸にかけて思へいづくはあれどきたの藤なみ

前博陸侯と自筆に書きて掛置き給へば、房家・房冬・房基、是を御神體と稱して、朝々拜し給ふ。されば神の御惠にやよりけん、田舍の御住居ながら、此の世をば我世とぞ思ふ望月の、かけたる事もなしと思召しけるに、滿つる者は溢れ易く、富家には禍多し。康政いつしか邪慢の心逞しく、冥の照覽をも憚らず、思ふ樣に振舞ひ給ひ、「心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん」。斯るは下愚の至りなりとて、此掛物をば、近習の士にぞ給はりける。父祖代々日拜ありし事なれば、春日大明神も、などか乘り居させ給はざらんを、凡下の手に渡り、麁屋の床に掛置き、茶の會酒宴の慰となしけることぞ淺ましき。誠や雖〻行〻千日〻注連〻不〻到〻邪見家〻と、彼明神の御託宣、爭か僞り給ふべき。斯る放逸邪見をば、神や見放し給ひけん、二代追出の患に逢ひ給ふ。いふ計なき事共なり。内政の御子をば、久禮田の城に移し、御元服ありて右衞門佐親政と號し、久禮田定祐をして守護せさせ、久禮田の御所と稱しけるが、幾程なく長宗我部滅亡して、立寄る影なくなりしかば、京都へ上り、一生を終られけるとぞ聞えし。

御庄降参附多田城落去の事

土佐國の軍兵共、毎年伊豫國の在々所々に、押入り〳〵攻めしかば、或は降參し、又は城を明けて退くも多かりけり。其中に御庄越前守は、本城・里城・緑城・猿越・新城とて、五ヶ城を構へて、多勢の人なれば、土佐勢何程の事のあるべき。唯幾度も追拂へと下知して、大様なる有樣なりしが、日々夜々、合戰止む時なかりければ、上下退屈してぞ見えにける。十市備後守、此由を聞澄し、軍兵を率し、或夜の紛れに猿越へ押寄せ、鬨を吐とぞ作りける。城中には、晝夜の軍に屈したる事なれば、防ぐ兵一人もなく、散々に落行きければ、暫時に城を乘取りけり。此猿越は、十市が居城、吉奈より道法五里、長宗我部右衞門太夫が居城宿毛よりは三里なり。右衞門太夫是を聞きて、我程近く居て、十市に越されけるこそ無念なれ。一城を攻取り人々を防ぐべしと、緑の城へ取懸る。城兵共、猿越を手もなく取られしは、士卒臆したる所なり。味方の恥辱是に過ぎず。今爰を破られて、再び人に笑はるゝなと、互に勇め勇められ、

駈出で〳〵戰ひけり。寄手は又味方に先を越されたるを、口惜しと思込んだる事なれば、なじかは些も猶豫ふべき。敵も味方も入亂れ、命を塵芥に比して、手負死人を乘越え〳〵攻戰ひ、互に勇氣を勵すと雖、寄手終に打勝ち、難なく城を乘取りけり。新城には是を聞きて、叶はじとや思ひけん、城を明けてぞ退きにける。其後右衞門太夫、諸將を招き寄せて評しけるは、此勢を拔かさず、越前守を攻干すべし。但急に取詰むるならば、却て味方多く損すべし。附城を構へ、某に預け給へ。日を經て攻取るべしと申しければ、各其議に同じ、越前守が城より十五町を隔て、附城をぞ構へける。主人は城を取卷き鐵炮をつるべ矢を射入れ、喚き叫んで防ぎ戰ひ、郎從下部は附城の堀を掘り塀をかけ柵を附けけり。城中には、猿越・綠城・新城の落人一所に集りて、多勢なれば、普請の人數を追拂はんと、駈出で〳〵戰ひけり。寄手の大將、斯樣の時の手柄は、敵をば討たず共、唯要害の普請を速に出來しぬるが本意なるぞと、隙透間もなく下知しければ、敵を防ぐ者は防矢を射、普請の者は、夜を日に繼ぎてぞ急ぎける。日數十九日に附城成就して。塀矢倉掛廻し、長屋に至る迄、殘る所な

くいよやかに見えしかば、敵も興をさましけり。卽右衞門太夫を入置きて、諸將は頓て其所を打立ちけり。高岡勢六千餘騎・幡多勢六組六千餘騎・豫州四組四千餘騎、宇和の奥南方の城へぞ押寄せける。城主多田藏人は、聞ゆる勇者なれば、城を出でて防ぎ戰ひ、敵を討取る事數を知らず、追靡くる事數ヶ度なれども、寄手は大軍にて、新手を入替へ攻めにけり。仁井孫四郞・柳瀨太兵衞・谷刑部左衞門・同彌左衞門・川添隼人助・森玄蕃助、群に抽んで高名す。城兵終に打負け一命を乞ひしかば、皆扶けて萩の森へぞ送りける。山田・熊崎是を聞きて、叶はじとや思ひけん、人質を出して降參す。さる程に長宗我部右衞門太夫は、附城に籠り居て、天正九年二月半より、夜晝の境なく、鬨の聲鐵炮の音鳴止む隙なく、一年がほど攻戰ふ。城中の兵は、諸方の通路を止められ、籠の內の鳥、網代の魚の如くにて、洩出づべき方もなかりければ、大將越前守も力盡きて、翌十年正月上旬降參を乞ひて、幕下にぞ降りける。

久武內藏介討死の事

天正九年四月下旬、宮内少輔、久武内藏介親直を召して仰せけるは、東伊豫は存分に任すと雖、西伊豫は未だ屬せぬ輩多し。國家草創の功は、武略と智望との二つにありといへり。汝二つながら兼備はれり。仍つて豫州の總軍代に補するなり。急ぎ馳向ひ謀を廻らし、國中平均の功を致すべし。萬事汝が心に任せて、必元親に問談する事なかれと宣へば、久武頭を地に附け、こは有難き御諚に候。家の面目身の譽れ、何か是にしく事候はん。此上は一命を抛ち、無二の忠勤を抽んで奉るべしとて、既に打立たんとしけるが、又畏りて申しけるは、凡戰場に臨む者の、豈歸國を存候べけんや。親直此度討死仕り候とも、弟にて候彥七に、跡式をなし下され候まじ。彼は行末、御家の障にはなり候とも、御用に立つ者には候はずと、謹んで申し罷立ちける志こそ殊勝なれ。程經て思ひ合する事共多かりければ、彼親直は、愚なる人にてはなかりけりと、後の人深く感じけるなり。斯くて久武內藏介手勢に、幡多郡の人數を加へ、其勢七千餘騎にて豫州へ發向す。宇和郡美間の鄕に着陣して、軍評定あり。竹內虎之助進み出で、我此所の案內能く存候。土居・金山・岡本・須田、高森五ヶ城の

間、其道或は一里、又は一里半計にて、互に相救ふ事、常に蛇の首尾を合するが如くなれば、輙くは攻取り難し。爰に一つの方便の候。岡本の城の後に續きたる大山、廻れば三日の行程なり。味方是より後へ廻るべきとは、敵思寄り候べからず。我々忍び入り、城に火をかけ候べし。其煙を見て、總軍馳合せ給へ。此城さへ乘取り候はゞ、殘る城々は、さのみ手間は入るべからず。大勢は却て惡かるべし。究竟の者七八十人選び、其案内仕り、本丸へ忍び入るべしと申しければ、内藏介悦び、竹内虎之助・同彌藤治を始、究竟の士四十人・中間四十人勝り立て、腰に干飯を附け、熊手・薙鎌・指繩等を取持ち、山中にぞ分入りける。鹿兎の通ひ道、蔦蘿を便にして、木の根を傳ひ岩を越え、谷を淩ぎ川を渡りて、難なく城に忍び入り、本丸に火をかけ、鬨の聲を揚げければ、城中の兵驚きて、上を下へぞ返しける。久武内藏助は、忍の者共如何あらんと、氣を呑み居たる所に、五月廿五日の早旦に、城に火の手見えければ、すはや忍び得たるは、續け者共と眞先に駈出せば、諸軍一同に鬨を作り、深田・高森の城の間の細道を、一二騎駈にぞ寄せたりける。岡本の城主土居義淸は、折節高森の城に居たり

しが、岡本の火の手を見て、敵の所爲か手過かと怪しみ乍ら、崖の所に土佐勢の馳來るを見て、人數を隱し鐵炮を伏せ、鳴を靜めて待懸けたり。寄手斯くとは思ひも寄らず、城より十町計り此方の小坂にて馬を乘捨て、息をも繼がず、我先にと進む所を、土居が勢一度に鐵炮を打ちけるに、久武内藏介・佐竹太郎兵衞・山内外記を始、究竟の士、其數あまた討たれて、殘る土佐勢、散々になりて逃げにけり。義淸は、逃ぐる敵には目もかけず、城中心元なしとて駈入りけり。忍びの者共、本丸をば燒落しけれども、味方の勢は繼がず、敵は次第に重なりしかば、大略討たれて、活殘りたる者共も、皆深手を負うて、這々逃れ出でにけり。

竹内彌藤治妻女自害の事

さる程に豫州へ討手の大將三人を始、土佐勢殘らず討たれたる由、岡豐へ聞えければ、其一族親友、歎き悲しむ事限りなし。中にも哀れなりしは、竹内彌藤治が妻女なり。是は同名虎之助が娘なりしが、此度夫も父も討たれぬと聞きて、大きに歎きて

口說きけるは、我れ母上には、僅に七歲にて後れ參らせ、天とも地とも賴みたる父、二世とかねたる夫共に放れて、今は何を便りに存命へ、何を憑みに暮らすべき。多生劫を經るとも、夢なくては再び相見ん事なし。臥して思ひ、立ちて歎かんよりは、同じ道に行き、一蓮に生れんと思ふ事共書認め、其奧に

待て暫し先立ちぬとも死出の旅嶮しき路を共に越えなん

と書き、十八歲を一期として、守刀を咽笛に突立て、朝の露と消えにけり。哀れとも中々に、いふ計りなき事共なり。斯る所に虎之助も彌藤治も、深手は負ひけれ共、死せずして岡豐へ歸り來りけり。彌藤治は、妻女が書置きたる文を繰返して、いよ〳〵讀みては歎きけるが、旣に自害をせんとす。若黨押止め、虎之助にぞ知らせける。虎之助淚を抑へて諫めけるは、御身が心底理至極なり。去乍ら娘のみか御身さへ、空しくならんとは、我をば何となれと思ふぞや。歎きに歎きを重ねさせ給はん事こそ悲しけれ。我年老い子もなし。御身は甥なり壻なり。是非共思止まり、某が跡をも繼ぎ、老の心をも助けよかしと、泣々詞を盡して口說きければ、彌藤治理に伏し

て留まり、後に家を繼ぎて、竹内玄蕃とぞ申しける。虎之助は隱居して、佐川の城番頭にてぞ居たりける。久武内藏助が跡をば、弟彦七親信に給はりて、内藏助と改めければ、時の人、後内藏助とぞ申しける。

岩倉合戰の事

三好家臣矢野駿河守は、同僚共を呼集めて申しけるは、近年味方の城々を、長宗我部に犯されて、人口に落つる所に、三好山城守は、美馬・三好兩郡の旗本として、一族の中にも棟梁たる身の、宮内少輔が幕下に降り、手を束ね首を傾くる事、當家の不覺何事か是に過ぎん。然るに去年藤目の城を取返されて、萬人の嘲を得ぬ。是を其儘閣くならば、愈世の物笑ひとなりて、人に指をさゝれんことこそ口惜けれ。いざ各岩倉を攻取り、味方の遺恨を散じ、他の人口を防ぐべしといひければ、一座是に氣を擧げ、實にもと同じて、阿讚兩國の勢を催し、都合六千餘騎、天正九年十二月廿六日、山城守が居城岩倉の近邊在々所々に、押入り〳〵放火して、岩倉の城へ押寄せたり。此

岩倉と申すは、北は高山峨々と聳え、南は大河滔々として底深し。城中には敵を引寄せ打て出で、河へ追落さん。まばら駈すべからずと、靜り返つて待懸けたり。寄手是をば夢にも知らず、城中無勢なる故に、出合はざると心得て、城下の町に火をかけ、川上の方へ喚き叫んで押通る。其勢半計り遣過し、眞中程と見ゆる時、煙下より駈出で、鐵炮を雙べ矢先を揃へて、打立ち射伏せける程に、寄手人馬、共に將棊倒しをする如く、一同に打倒され、後陣引返し逃げければ、先手は敵に隔てられ、皆川へ飛入り飛入り、沈むもあり流るゝもあり、疵も附かず死するもの、其數を知らず。城兵は勝鬨を作りかけ〳〵、馬の息の續く限り、追詰め〳〵攻めける程に、阿佐紀伊守が與力加藤主水は、矢野駿河守を討取りけり。一説には美馬藏人が討ちたりとも申すなり。駿河守が嫡子太郎次郎・三好越後守は、鐵炮に當りて倒れけり。美馬助七生年十八歳、森飛騨守が首を取る。一説には、土佐の住人山本勝右衞門討取るともいふ。川村左馬助をば、片山孫市討取り、秋月何某をば、大島丹波討取りたり。其外戸井新右衞門・鴨島六之進・久次米與右衞門・川島兵衞進・麻植志摩守・内原菊太夫・飯尾久左

衞門等を初め、名を得たる勇士五十餘輩討たれ、雜兵も殘些なになりて、這々逃げて返りける。此時元親は、當國羽久地に在陣し給ひけるに、此より注進ありしかば。宮内少輔大きに悅び、三好山城守へは使者を遣して感賞せられ、其外の者共には、感狀を給はりけり。

土佐物語卷第十二終

土佐物語　卷第十三

三好笑岸齋阿州下向の事

長宗我部宮內少輔元親は、尩弱の家より起りて干戈を動し、四國を併呑して猛威を振ふ由、都鄙擧つて沙汰し合へり。信長此由を聞召され、彼興隆の志あり、不ㇾ截ㇾ兩葉ㇾ用ㇾ斧柯ㇾといふ。不日に征罰すべしとて、天正十年四月下旬、御子息三七殿を四國の守護に補せられ、大軍を率し、泉州岸和田に着陣あり、旣に艤して渡海せんとし給ふ所に、六月三日の夜、京都より飛脚到來し、惟任日向守反逆を企て、昨二日信長公・信忠卿、御生害を遂げられ候とぞ告げたりける。信孝を始め諸軍勢、大浪に揖を取られし如く、今度都を出づる時は、四國守護の、初めて入部の御供なれば、馬・鞍・太刀・刀、爰を晴と出立ち下りける。あな可笑し、長宗我部が鳥なき島の蝙蝠にて、田

三好笑岸齋阿波を攻む

舍者と侮り、上見ぬ鷲と誇るとも、都の武士に向つては、日陰の霜の如くならん。哀れ如何なる事にても、長宗我部四五日も怺へよかし。鬼神の樣にいはるゝ家臣共を、一々に討取り恩賞に預らんと、敵見ぬ先の武邊、扨誠にがさつは臆病の花とかや。都の變を聞きければ、足手も痿えたる心地して、色を失ひ上下騷駭す。さるは理とはいひ乍ら、淺ましき有樣なり。爰に三好山城入道笑岸齋は、河内國に居て、元親阿州を犯し奪ふを聞き、獨り胸を焦す所に、三七殿、四國の守護に備はり給へば、あはれ事の出來けれと、先手を望み、五月上旬阿州へ下り、船より上ると等しく、一宮・夷山へ押寄せ、暫時に兩城を攻取り人數を籠置き、其身は勝瑞に在城して、當國は數代舊領の地なれば、笑岸が向ふと聞けば、攻めずとも降るべし。太刀も刀も入るべからずと笑を含み、信孝の御下向を、今や〳〵と待つ所に、河内より羽檄を飛して、京都の變を告げしかば、笑岸大に仰天し、此事敵へ聞えなば、逆寄にせんは必定なり。取籠められては、臍を噬むとも益あるまじ。遲滯すべきにあらずと、取る物も取敢ず、河内を指して上られける。長宗我部彌三郎此由を聞き、急ぎ父の前に出で、斯樣

斯樣に承り候。哀れ此事疾く聞きて候はゞ、衰亂の弊に乘りて、笑岸を討取り申すべきものを。手に入りたる敵を洩らし無念に候。其上一宮・夷山を取られ、其儘閣き候事本意にあらず。信親馳向ひ、兩城を取返し、勝瑞を攻取り候べしと申しければ、宮内少輔。申す所は理なれども。元親今不正の時氣に侵され、身心少し快からず、暫く療養を加へ、來る秋に至りて發向せしめ、阿州悉く平均すべし。此度の出勢は、無益なりと宣ひける。彌三郎畏り候と答へ、立ち給ひしが、いやいや是は此頃の御病氣に、御心も緩まり、緩々の御沙汰と覺ゆるなり。敵に城を取られて閣く時は、彼に氣を呑まるゝのみならず、味方の心變ずべし。先んずる時は人を制す、急ぎ軍勢を差越せと、老臣共に申しける。迴の人數少々召具し、阿波の海部に着陣ありて、後勢を待ち給ふ。宮内少輔此由を聞き給ひ、近澤越後を召して、氣色を損じ宣ひけるは、汝も能く聞け、今度彌三郎が所存、若氣とはいひ乍ら、麁忽の儀、越度を取る基なり。今一宮・夷山を輙く取返さんと思ふは、武略に似て武略にあらず、智謀に似て智謀にあらず。察するに是當家の計略、自然に時の運と理に叶ひ、每度勝利を得るに習ひ、

是を常として心驕り、敵を怖るゝに足らずと思ふ者なり。心驕る時は必惰あり、楚の采義が詞に、戰に勝つて將驕り卒惰る時は、必破るといへり。凡戰場に赴く者は、幾度も唯今日初陣と心得、前功を思はざるを肝要とす。是夷山・一宮を取られたるを、深く恥辱と思ひ憤ふるは小志なり。大將の器量にあらず。古語に圖二大事一者不レ矜二細行一といふ。總て國家草創を宗とする身に於て、事にも足らぬ枝葉に眼を付け、大事の根を忘るゝ時は、本意を遂げざるのみにあらず、必ず身を失ひ名を汚す。其例少からず。建武に義貞が、尊氏を閣き、尾張守高信を攻めて、身を亡しゝは、最本意なき事にあらずや。是に笑岸齋、都の變を聞きて手を失ひ、阿州を捨てゝ、本國へ歸ると雖、元親推量するに、十河隼人正、近日讃州より勝瑞へ移るべきぞ。見よ〳〵我案は違ふまじ。彼隼人正は、隱れなき血氣の勇者なり。殊更兩勢なれば、侮り惡き相手なり。唯思慮なく是と戰はんは、偏に羊を引いて、虎の口に向ふものなり。此言葉を能く得心あるべし。猶私の見を立て、此度命を背く程ならば、天神地祇も照覽あれ。再び對面叶はじ。此旨彌三郎に能く申聞かすべしと、大きに怒つて仰せ

ければ、越後畏りて罷出でけるが、遲滯しては惡しかりなんと、宿所へも歸らず、無部へ參り、此由を申しければ、信親も親泰も、案に相違の事かな。此上は力及ばず、第一怒る則ば其氣逆ふ。醫家の說なりといひ、御病氣御保養の障にもなるべきなれば、旁以て不孝なり。汝は急ぎ歸り、御諚一々畏り奉候と御請を申せと、越後をば先達て返し遣し、城々の要害等を下知して、後より歸陣し給ひけり。

一宮神託の事

案の如く十河隼人正存保、同年八月初、讃州十河より阿州勝瑞の城に移りて、三好隼人正とぞ申しける。さる程に長宗我部元親、阿州へ發向あるべしとて、豫て諸方へ觸れられしかば、軍勢岡豐に馳集る事夥し。されども存保は、聞ゆる勇士といひ、軍調練の家臣數多相雙び、而も一門の歷々、五畿内に充滿たれば、合力の兵馳加はりて、勢は雲霞の如くにして、手痛き合戰あらんずらんと、向はぬ先に諸軍勢、固唾を飮みて氣を詰め、勇む氣色はなかりけり。元親は豫て日を定め、旣に岡豐を打立ち給ふ。

一宮高賀茂の社へ參り、大明神を拜し祈誓を凝らし御坐し、少し眠り給ふと見えしが、あつといひてつい立ち、神前に近付き畏り、首を地に付け給ひけり。家臣共驚き見居たる所に、暫ありて本の座に立歸り、涙を流し、扨も有難き事にあらずや、急ぎ奉幣を捧げ、神樂を奏し奉れとぞ仰せける。家老を初め近仕の輩、こは何事を宣ふぞと呆れたる風情にて、互に目と目を見合せ、いらへ申す者もなかりければ、元親顏色替り、何と旁は、唯今の奇瑞を拜し乍ら、忝しとも思はぬは、如何なる故ぞと尋ね給へば、何れも、いや何事も拜し奉らず候へば、御諚の趣、如何なる仔細とも承り得ず候と申しける。宮内少輔手を握りて、唯今の御神體を拜せざるか、御詞をも承らぬか、元親一人に拜まれさせ給ふ事の不思議さよ。今度の合戰、事故なく速に四國退治する擁護の力を加へ給へと、祈念を凝らしける所に、社壇の御戸自ら開け、衣冠正しき御粧にて立出でさせ給ひ、妙耳氣高き御聲にて、汝父祖の志を繼ぎ、箕裘を業として家を興さんとす。其孝心感ず。仍て影身を放れず、弓矢の力を添へ守るなり。此度阿州の軍は、物の數にあらず、一戰に勝利を得て、四國悉く手裏に入る事、今明

年の間を過ぎず。構へて疑ふべからずと神敕ありて、卽社壇に入らせ給ふなり。是程目のあたりなるを、汝等は見も聞きもせぬ事の不思議さよと宣へば、諸軍勢承り、是は希代の珍事、扨は神慮に叶ひ給ふ大將なり。今に四國の主になり給ふべしと、始の心を引替へ、早打立たんと、勇み進む事限なし。元親悅の餘りに、卯花威の鎧一領・金作の太刀一振、寶殿に納められければ、家老の面々を始、諸士以下相順ふ輩、我も我もと弓矢太刀を獻じける間、社壇に充滿て、塚の如くに積上げたり。

中富川合戰の事

斯くて元親一宮を立ちて、直に阿州へぞ向はれける。其勢都合二萬三千餘騎、天正十八年八月廿六日、一宮・夷山に押の勢を置き、兩城の間を押通り、黑田の原へ打出でたり。三好隼人正存保是を聞きて、五千餘騎を率し、勝興寺表に本陣を堅め、三好備前守二千餘騎先陣として、中富に出向ふ。敵川を越し來らば、其半途を討つべしと、川より六町計引退き、鍏衾を作りて待懸けたり。其勢、暴水漲り來りて、平地忽に江

河となり、太山崩れて海を埋むとも、頭を廻すべきとは見えざりけり。寄手先陣香宗我部安藝守親泰、馬駈出し、中富川へ乘入れば、諸勢一同に、水煙を立てゝ渡しけり。三好備前守二千餘騎、馬を一面に立雙べ、眞蒐に駈合せ、互に鬨の聲を上げ入亂れ、火を散らして戰ひける。土佐勢大に捲り立てられ、混退に退きしかば、親泰怒りて、懸れ〳〵と駈出で下知せらるゝを、大將と見濟し、武者二騎是非なく打て懸る。親泰心得たりと鎗取りて、二騎の敵を、弓手妻手へ突伏せたり。矢野伯耆は、其日奉行なりしが、是を見て願ふ所と、鎗を持つて突いて懸れば、親泰も鎗取直し戰ひけり。伯耆、親泰の膝の口を突く所を、事ともせず、伯耆を馬より下へ突落し、郎等下司彥之丞走寄りて首を取る。時に總軍一同に、吐と喚いて懸りければ、親泰、ずは討たれぬと見る所に、吉田左衞門佐・同孫介兄弟、馬の轡を並べ、競懸る敵の中へ、些も擬議せず駈入り、四方八面切つて廻る。其勢に、大勢四方へ散りければ、兄弟一所に打寄り息を繼ぐ所に、又大勢一度に打て懸る。兄弟左右に別れ、駈破つては裏へ通り、取て返しては喚いて駈入り、千變萬化に手を碎けば、大勢又開き靡く所に、渡邊龜太夫

と名乘り、孫介に打つて懸る。互に手利の達者なれば、暫し勝負は見えざりしが、孫介運や盡きたりけん、龜太夫に討たれけり。龜太夫も、八ヶ所深手負ひけれども死せず。左衞門佐は大勢を追散らし、立歸りて見れども、孫介は見えず。郎等に孫介はと問へば、討たれ給ひ候やらん、御馬計駈廻り候と答へける。左衞門佐涙を流し、討たれたるか生捕られたるか、同じ兄弟といひ乍ら、片時離るゝ事もなく、戰場に臨みても、懸る時も一所に懸け、引く時も一所に引き、互に安否を問はれしに、彼が生死をも知らず、扨あるべきや。所詮一所にならんと、又大勢の中へ駈入り、八方亂し切つて廻り、裏へ拔けて見れども、孫介が行方はなし。弓手を見れば四五十騎、眞丸に備へたる所あり。若此中に生捕られてありもやすると、一文字に駈入りて見れども、孫介は見えず、扨は討たれたるらん。今は是迄なりと、鞍笠に立上り、大音聲上げ、土佐國の住人吉田左衞門佐孝俊と申す者なり。我と思はん旁には、出合ひ給へと呼ばはり、馬を東頭に立てゝ控へたり。時に山田陸太夫と名乘り出でて切結ぶ。陸太夫は十七ヶ所手負ひけれども、深手ならねば事ともせず、左衞門佐は數多の敵と

戰ひ腕弱り、終に山田に討たれけり。黒岩掃部種直は、敵と鎗付け首を取り、立上らんとする所を、敵の郎等馳來り、後より掃部が諸膝を切つて落し、俯伏になる所を、押へて首を落し、主の首に取添へ立退く所を、中内李右衞門是を見て、掃部が子玄蕃に、斯くと知らせければ、玄蕃聞きも敢ず一文字に馳出し、親の敵遁さじと、詞を懸け追懸る。敵振返り見て、やさしやと、二つの首を投捨て、稻妻の如く飛懸るを、玄蕃開いて打ちければ、左の肩先より、右の乳の下迄打込み、倒るゝ所を首打取り、二の首に親の首を取添へて歸りける。元親は先手に軍始めたるを見て、旗の手を進め給へば、二萬餘騎、一度に川へ打入り渡す程に、さしもに廣き大河なれども、大勢に堰留められ、逆水岸に餘り、流れ十方に別れ、本の淵瀨は中々に、陸地を行くが如くなり。二萬餘騎の兵共、一騎も殘らず、向の岸に馳上る。先手是に機を得て、先陣後陣一同に、鬨を作りて進みければ、三好隼人正も、相懸りに懸りて、互に數千挺の弓鐵炮を放懸け、鬨の聲矢叫の聲、山川に響き渡りて夥し。敵味方入亂れ、手負死人を顧みず、兩虎二龍の鬪にて、いつ果つるとも見えざりけり。去れども三好は小勢な

十河存保敗走

れば、終に懸負け、色めき立ちて見えければ、元親大音上げ、旻を揉めや者共と、士卒の氣を勵し、隙透間なく下知し給へば、さしもの三好も强勢を碎かれて、散々になりて敗走す。其中に矢野伯耆入道・其子備後守・同又六郞、大勢の中へ駈入りて、切死にこそ死にゝけれ。此又六郞と申すは、土佐國安藝の領主備後守國虎が一子、千壽丸といひしが、去天文の頃、國虎歿落の時、千壽丸を呼び、汝は阿州に落行き、矢野の一族を憑みて時節を待ち、父が讎を報ずべしといひしかば、諫に任せ、兩國へ立越えしに、矢野は一女ありて男子なければ、養子壻にして家嫡となしければ、養父と一所に討死し、泉下に恩を報じける、志こそ哀なれ。前澤入道宗傳・同庇之丞、其外究竟の勇士三百八十騎、敵に總角を見せじと、一足も退かず、枕を雙べて討死したり。其外雜兵四百六十三人討たれければ、土佐方にも津野刑部を始、名ある士彼是二百七十六騎・雜兵三百八十四人討たれたり。存保は多くの士を討たせ、何の面目ありて、何所へか落行くべき。討死せんと、旣に駈出でんとし給ふ所を、東村備後、馬の前に駈塞り、こは何事に候や、軍の勝負は、時の運に依る事に候へば、先づ旻を引かせ給ひ、

重ねて御本意を遂げらるべう候と、詞を盡し諫めければ、存保理に服し、馬引返し給へば、土佐勢犇と附きて、餘さじと揉んだりける。義を知り恥を思ふ輩、返合せ返合せ防ぎ戰ふ。爰に誰とは知らず、黑糸の鎧着て、三間柄の鎗を持ち諸軍に引下り、敵近付けば、突退け〱落行く武者あり。吉田勝五郞是を見て、天晴敵やと駈寄せ、由々しく見え給ふものかな、引返し勝負あれ。某は吉田勝五郞と申す者なりと、詞を懸くれども、聞かぬ由にて行きけるを、何國へか逃さんと打つて懸る。小賢しき小冠者めと、鎗取直し突いて懸る。勝五郞二尺三寸の太刀を持ちて戰ひしが、つゝと入りて引組みたり。敵は大男なれば、取つて引寄せ捻り付けんとする所を、勝五郞腰の指添を拔き、弓手の脇より、馬手の乳の下へ刺通す。大男も、大事の手なれば弱る所を、取つて押へて首を取る。臼杵源兵衞も返合せ戰ふを、井上喜介討取りたり。此喜介といふは、土州長岡郡大津の住人、强力の大男なり。折しも重き病を請けて臥し居たりしが、今度阿州の軍には、大小上下老若共、心懸次第に馳向ふべしとの御觸にて、殘なく打立つ所に、我れ斯る重病に冐さるゝは、愈士冥加盡き果てたりと、

獨り怒りけるが、厩に走入りて馬引出し打乘り、既に出でんとする所を、一門親友馳集り、是は物に狂ふか、此病惱にて、遠路爭か叶ふべき。軍は此度に限るべからず。平に無益と制しければ、喜介、病に臥して徒に死せんより、敵に逢うてこそ死したけれ。爰を放せと引切り、諸鐙を合せて驅出づるが、馬にては捗取らじと、道にて馬を乘捨て、續けや者共と、飛ぶが如くに急ぎける。彥五郎といふ下部一人、鎗を擔げて續きたり。昨日の晩景に、土佐の大津を立ちて、土佐道六十里を、今朝阿州中富に着き、川中にて敵と組みて首を取る。又臼杵をも打取りぬ。安並三左衞門は大勢と戰ひ、高名を極め、深手數多負ひければ、元親醫師を添へて、足代の城へぞ遣しける。佐竹左兵衞・津川彥太郎・奧宮掃部・專當左衞門太夫、群に抽で思々に分捕す。斯くて三好存保、難なく勝瑞の城へ引取り給へば、家臣森新之丞近光、城下の在家に火を掛け、一宇も殘さず燒拂ひ、靜まり返つて待懸けたり。元親時を移さず押寄せ、城をひたひたと取卷き、鐵炮一挺に二放宛の定にて、申の下刻より亥の刻の終り迄、數千挺の鐵炮を打立て、天地を動かし、百千の雷の、一度に落掛るとぞ覺えたる。捷樓を組み

仕寄を付け、篝を燒き、其役々は、其所を守りければ、其外は陣屋に入りて休みける。爰に吉田左衞門佐が一子右近康俊十九歳、孫助が長子勝五郎政重十五歳、親伯父の討たれたるをば夢にも知らず、今日の軍物語して居たる所に、左衞門佐・孫助が郎等共、追々に來りて、兩人討死の由を告げたりける。右近・勝五郎大きに驚き、淚に暮れて居たりしが、良ありて右近、其敵の名は何といひつるぞ。山田陸太夫・渡邊龜太夫と名乘り候と答ひける所に、勝五郎兎角の詞なく、太刀を取りて立出づる。右近、勝五郎が袖を控へて、御身は何所へ行くぞと問ひければ、勝五郎、親伯父の敵を、其儘閣くといふ事やある。城中へ馳入り、本望を達せんと、振切つて出でんとす。右近、申さるゝ所理なり。去ながら心を靜めて聞き給へ。夫武士の戰場に臨みて討死するは覺悟の前、歎は不覺の至り。此度は年十五以上六十以下の士、大小上下父子兄弟心懸次第、殘らず打立つべしとの御觸にて、我々父子共向ふなり。されば左衞門佐殿、孫介殿を呼びて宣ふは、三好存保、隱れなき勇者といひ、歷々の一族、阿讃五畿内に充満たれば、定めて勢は、雲霞の如くなるべし。凡戰場に出づる者、生きて歸ら

んと思ふ事はなけれども、就中此度は、討死と思ひ定むるなり。御邊と康俊は先手なれども、右近・勝五郞をば、旗本に差置くべし。父子一所にありては、事に臨みて懸けまじき所をも懸け、引くまじき所をも引き、犬死をもし、又は不覺をも取るものなり。兎角一所には叶ふまじと、思ふはいかにと仰せければ、孫介殿、尤餘儀なき御謀に候と、御身と康俊をば、旗本に置かれ候ぞや。今更思ひ當りて難有く候。あの大勢の中へ、唯一人行向ひ、何程の事をか仕出さん、況敵の居所をも知らず、怒に犬死して、父祖の名迄穢し給はん事こそ悲しけれと、詞を盡し理を責めて申しければ、勝五郞兎角の詞なく、差俯向いて靜まりける、志こそ哀なれ。右近は後に吉田孫左衞門とて、武勇の名を顯し、元親肱股の臣となり、勝五郞は後に又左衞門・市左衞門とも名を改め、武篇高名數多く、首より上に廿一ヶ所の疵を蒙り、周身の疵は、算ふるに遑あらず。自身敵の首を取る百十五、朝鮮國にて、軍將朴好仁を生捕り、猛虎を討ちしは此者なり。

勝瑞の城歿落附三好鳥指の事

中富川の合戰破れしかば、勝瑞へ落行くもあり、坂西の城へ逃籠るもあり、右往左往に亂れけり。比江山掃部介は、逃ぐるを追うて坂西の城へ押寄せ、臆病神の醒めぬ先に、唯一揉に揉破れと、息をも繼がず、堀崖ともいはず攻入る程に、二三の丸を押破り、本丸堀一重に打なし、旣に切崩さんとする所に、元親より使者來りて、勝瑞さへ攻落すに於ては、瑞城は弓矢を勞せずとも、獨り退散すべし。小信に拘り大義を失ふ事、智者のせざる所なり。早其所を打捨て、勝瑞へ參るべしと申しければ、掃部承り候と、坂西の城を閣き、討取る所の首少々取持たせ、勝瑞へぞ行きにける。斯る所に紀州湊雜賀の者共二千餘人、寄手の陣へ馳加はる。是は豫て旗本に屬して、每年二八三人土佐へ參勤せしに依るなり。然るに中富の合戰に逢はず、本意なく思ふ所に、城未だ落ちざりしかば、悅び勇みて、親泰の手にぞ加はりける。斯くて總軍城を取卷き、持楯・搔楯・龜の甲、突寄せ〳〵、夜晝の境なく弓を入れ鐵炮をつるべ、喚き叫

んで攻めにけり。別役左衞門佐・難波權之助・佐竹信濃守・同上野・加江太郎兵衞・鶴津丹波守・大高坂長門守・淺野藤藏など、諸人に勝りて射入りたる。此者共は隱れなき强弓の精兵なり。中にも鶴津丹波守、或時大船に敵數百人取乘せ、鶴津の沖へ寄せ來る。丹波守、居城の上の山より、例の大弓を持ちて、八町計沖の船の腹を、橫樣に射拔きければ、潮入りて忽に沈み、船中の者一人も殘らず死したり。昔の八郎爲朝に異ならず。是よりして時の人、今爲朝と申しけり。大高坂長門守は、大高坂の城より、小高坂の城內へ內通の事ありて、遠矢を射けるに、折節小高坂の士共、城に並居て、膳に向ひ食事しけるに、一人の飯腕に射當てたり。兩城の間十餘町あり、此外の輩、皆相も劣らぬ精兵なり。斯る所に九月五日、空搔曇り小雨降出で、日暮に及び暴風强く、甚雨車軸を流し、六日には洪水夥しく堤防沈み、四方の川一つに流れ合ひ、平地忽ち海になり、漲り落つる事瀧の如し。在々所々の民屋、流るゝ事其數を知らず。寄手の軍兵共、神社佛閣民家森林に取上り、大息繼ぎてぞ居たりけり。されども寄手の捿樓山の如く組上げしかば、攻むるをば緩めず、爰を專とぞ守りける。元

親は城の乾の方龍音寺といふ禪寺の棟に矢倉を立てさせ、諸軍に下知し給ふと雖、船なければ通路絶えたる所に、岩右衛門仝八とて、水練達者の下部あり、彼二人を泳せて、諸方へ下知をなし給ふ。諸陣に火を燒く事叶はず、既に飢に及ぶを、本陣は地高く水入らざれば、飯を炊がせ、筏を組みて上に積み、二人の水練に漕がせ、二日に一度宛三日が間、諸陣へ賦り給ひけり。志の淺深は、物の多少によらぬ事なれば、物薄うして情厚し。誠なるかな軍兵共、良禽相レ木而栖、賢臣擇レ主而佐といふに、我等求めずして、斯る主君に仕へて、一命を捧ぐる事、只自然の幸處なりとぞ喜びける。牟屋の領主森志摩守は、城中へ志ありといへども、寄手の陣堅くして、通ずべき樣なかりければ、斯る時節を悦び、小船四五艘に兵糧玉藥を積み、梯原三五義長を使とし、城中へ入らんとす。棲樓より是を見て、雨の如く鐵炮を打懸けゝれば、手負死人數多く、船中の上下肝を消し、漸く城の裏の門外に下し置き、後をも見ずして漕ぎ戻す。八日の午時より雨止み水漸々に落ちて、九日の暮方には、本の平地にぞなりにける。軍兵共喜ぶ事限なく、兵糧心の儘に認め、城を圍む事蟻の如く、入代り〳〵晝夜の境

なく、十三日ぞ揃みにける。城中には入替る勢もなく、上下戰ひ屈しければ、存保今は詮方なく、東條關兵衞方へ使を立て、味方既に勢盡き候程に、城を明け讃州へ立退くべし。道筋を申請け給はるべしと申されける。即委細申入れしかば、元親家臣を召して、此事如何あるべしと宣へば、何れも是程に手に入りたる敵を洩らし給ひ候はゞ、虎を養うて患を殘すものにて候べし。此度速に討取り給ふべしと、一同に申しける。元親默然として御坐しけるが、良ありて、旁が申す所、一理なきに非ずと雖、倩事を案ずるに、此人小勢と雖、輙く討たるゝ敵にあらず。況や討死と思ひ極るをや。たとひ討取るとも、多くの士を失ふべし。凡そ阿州・讃州手に入れば、此人も必ず降參あるべし。只所望に任せよと使を返し、黑田の原へ一里計陣をくつろげ給へば、九月廿一日の夜、隼人正存保は、東讃岐へ落ちられければ、篠原自遁は、木津の城を明けて、淡州へ立退き、夷山・一宮・坂西の城も、皆明けて落行きける。其外の城々浦々里々迄降參し、國中殘らず平均す。頓て勝瑞の城を破却して、木津の城は東條關兵衞、渭山の城は吉田孫左衞門康俊、一宮の城は江村孫左衞門親俊、夷山の城は北村

十河存保再び敗走

間齋、脇の城は長宗我部右兵衞親武、海部・戸茂の城は田中市之助政吉を籠置かる、富岡の城は、香宗我部安藝守親泰預かり、番子をして守りしかば、阿波・土佐の兩國は、唯一家の思をなし、商賣往來の弊なく、年貢運送の煩なく、貴賤上下安堵せり。

或時阿波の商人、土佐甲浦に來りて遊びけるが、過ぎし軍物語を仕出し、河波の者いひけるは、土佐勢勝瑞へ押寄せたる時、俄に大雨降り洪水出で、忽ち梢を浸し民屋多く流れたり。土佐勢迷惑し、桑木原森林の梢或は民家に上りたる所に、森志摩殿、城中へ兵糧玉藥を船に積みて入れられければ、城中の士、其船に取乘り行きて、木の上屋の上の者共を、突落し射落す事其數を知らず、寄手怺へ兼ね、扱を入れ和談して、互に引き給ふといふ。土佐の者聞きて、梢屋の上に居る者を突くならば、鼠を殺すより易かるべし。下々は殺されたるか知らず、名ある士は、一人も殺されたるといふはなし。攻口の棲樓數限りなき事なるに、皆見物して居たるか。それ程自由に土佐勢を突殺し射殺して、何とて讃岐へは逃げ去るぞといへば、阿波の者、それは扱が入りたる故なり。土佐の者、然らば何とて阿州をば取られ給ふぞと、大聲になりて諍ひ

けれぱ、傍よりいふやう、無用の軍詮議をば止めて、唯酒飮みて慰み給へと、大笑になつて、互にさしつさゝれつ飮醉ひけり。其頃鳥差舞といふ事時花りけるが、河波の商人扇を取り、立上りて舞ひけるは、勝瑞の合戰に、大水が出て來て、土佐の士は木の上に上れば、三好殿の士は、小舟に乘りて素鎗を持ちて、中てさいて取りたりと諷ひければ、土佐の商人も立上り、拍子を踏みて、三好殿の鳥差は下手と見えて、土佐の士を刺すとはせしが、終に刺し得ず、讃岐の方へ逃げられしと諷ひ、大笑して互に醉うて止みぬ。夫より三好鳥差と號けて、上下酒盛の肴となりぬ。或時元親、酒宴ありけるに、若士三好鳥差を諷ひければ、元親も笑壺に入り給ひ、千秋樂を唱へて、皆私宅に歸しけり。翌日宮内少輔家臣を召して仰せけるは、三好鳥差、此已後禁制すべし。其仔細は、軍は武士の役義、勝負は時の運に寄るなり。勝利ありとて自讃するは、士の本意にあらず。負けたりとても、さのみ恥辱といふべからず。されば存保、輙く軍に負くべき器量にあらずと雖、無勢と時の運薄き故なり。負けても降を乞はれざるなり。今上下鳥差を謠ひて、三好を笑ふ事、畢竟元親が家中、武義の吟

味薄く、士の風俗惡き故なり。若し三好方へ聞えなば、元親を編すべし。最武士の恥辱なり。重ねて三好鳥差をいふものあらば、磔に掛くべし。其旨堅く申付けよと宣ひければ、何れも御理至極、畏りて候と、頓て諸方へ觸れにけり。其後存保此由を聞き給ひ、感ぜられけるとぞ聞えし。

三好山城守心替并人質の事

岩倉の城主三好山城守は、去天正六年の頃土佐へ降參ありて、無二の氣色に見えけるが、俄に誓約を變改して、謀叛の色を立てしかば、元親勝瑞を立ちて、岩倉へ押寄せ、揉みに揉んで攻めたりける。城中にも、爰を專途と戰へ共、多勢に無勢叶はず、或は討たれ又は落失せ、殘り些になりければ、力及ばず、山城守下郡指して落行く。夫より河内國へ立越えけるとぞ聞えし。卽城をば此江山掃部助親興に給はりける。抑三好山城守は、一子幷家臣大島丹波が男子を人質として、岡豐に差置きしかば、二心疑なく、元親他に異にして、一族の思をなし、互に心底を殘さず事を談じ、親睦深

かりしが、今如何なる故に人質を捨て、敵の色を立てられしぞと、其故を尋ね聞けば、山城守が父笑岸齋、今度織田三七殿の先手として、當國に下られし時、山城守に對面して申されけるは、汝宮内少輔が幕下に屬する事、一旦の害を遁れんが爲、理には似たれども、言甲斐なき所存、先祖の名を下し、子孫の面も汚す、生前死後の瑕瑾なり。況三七殿御下向の上は、元親が一族從類、爭か安穩なるべき。汝再び恥辱に及ばん事こそ口惜けれ。急ぎ人質を捨て、味方に屬すべし。二人の子供不便なりと雖、義に臨みて力なしと、一度は怒り一度は諫められしかば、陳ずるに詞なうして、畏り候と答へて座を立ち、大島丹波を呼びて、斯樣々々の次第なり。父の命に隨ふ時は、二人の人質生害に及ばん。又二人を助けんとすれば、父の意に違ふ。進退爰に極りたるは如何にと、大息繼いで申されければ、丹波承り、兎角の返答にも及ばず、差俯いて居たりけるが、暫ありて申しけるは、退いて愚案廻らし候に、御父の命に違ひ給ふは不孝の至り、冥の照覽勿體なし。其上三七殿を敵に請け給ひ候ては、勝利を得られん事、千に一つも候べからず。然れば若殿一所に御座候共、逃れ給ふ道なし。又

御父の仰に任せられ候時は、若殿の御生害は勿論なり。兎にも角にも、今を限りの因果にこそ坐しますらめ。過去の業因は、如何なる權者の上にても、遁れずとこそ見えて候へ。所詮天理に任せ、又命に御隨ひあらば、神明の加護、などかなくては候べき。某も一子を捨てん事、不便には候へ共、主君の御供にて相果て候上は、戰場に於て討死仕りたりと存極め候と、いひも果てず涙にぞ咽びける。山城守此上は力なしと、只其儀に定め給ふ、心底の程ぞ哀れなれ。斯くて山城守は忽心替し、居城岩倉に楯籠り、土佐勢遲しと待つ所に、信長公弑逆の變に依りて、三七殿泉州より歸京あり、笑岸齋も勝瑞を立ちて、歸り上られければ、山城守は、天にも附かず地にも寄せず、只中有の衆生とぞ見えし。され共再び降を乞ふべきにもあらねば、今は一圖に思ひ定めてぞ居られける。土佐の士是を聞きて、約束を變改するさへあるに、人質を捨つる事、偏に鬼畜に同じ。惡さも憎し、二人の子供を、楯の面に引張り、山城守・大島丹波が顏前にて、突殺して見せんと、口々にぞ申しける。元親是を聞き給ひ、敵不義をなせばとて、此方よりも不義をなして、恥辱を與へんは、武士の本意にあらず。

緣に引かれ義に依つて、敵となり味方となるは、武士の道なり。我素より宿意あるにあらずと雖、衰亂の世の習にて、人の物を、我が有にせんとて起す軍なり。熟思惟するに、山城守が一子を捨てゝ、心替りするは、定めて義の重き所、止む事を得ざる故なるべし。今度笑岸齋下國して、程なく山城守變約あるは、笑岸が諫にて、父命否み難く、丹波も主命背き難く、兩人悲淚を押へて人質を捨てたる事疑なし。身を抓みて人の痛さを知るといふ。哀なる事ならずや。又二人の子供、最後を極めてあらん、心の內如何計とか思ふ。不便の事なり。よし〳〵人は兎も角も、我は怨を恩にて報せんと、淚ぐみて宣ひしが、岩倉城殁落の後、土佐へ人を遣し、衣服・太刀・刀・扇子に至る迄懇に沙汰して、二人の子供へ引出物にし、船を飾り水主を選び、船中の料、形の如く認め、士二人相添へて、河內國へ送られける、情の程ぞ有難き。痛しや山城守は、岩倉をば攻落され、辛き命を助かり、河內國に居給ふが、流石恩愛の道、忘れんとすれども忘られず、一子は岡豐にて、如何なる目にか逢ひぬらん。今や最後の時節ならんと、案じ續け給ふ所に、二人の子供歸り來れば、笑岸も山城守も、死したる人

の、再び蘇生の心地にて、悦び給ふ事限なし。二人の子供、岡豊にての懇情、船中にての饗應、委しく語りければ、笑岸餘りの事に涙を流し、土佐の方へ向ひ手を合せ、斯る仁者に、敵せし事こそ愚なれ。此厚恩、七生迄も忘るべからずと申されける。頓て土佐へ使者を立て、厚く禮謝をなし給ふ。其後宮内少輔、太閤秀吉公へ降參あり、上京の時、笑岸父子公義を取持ち、厚く饗應なされしかば、秀吉公・秀次公の御懇志に預り給ふ。元親家臣の諫に任せ、二人の子供に恥辱を與へ、殺害し給はゞ、軍の習とはいひ乍ら。笑岸父子、如何計り遺恨に思はるべきに、陰德あれば陽報あり、情は人の爲ならずとは、斯樣の事をや申すべき。

十河城攻の事

長宗我部元親、阿州悉く平均ありて、讃州へ入り給ふと聞えしかば、香河民部少輔・同舍弟觀音寺・長尾の城主國吉三郎兵衞・新名の城主入受藏人・寶田の城主中內源兵衞・羽久地の城主谷忠兵衞・大西の城主大西上野、豫州勢には妻鳥采女・金子備後

元親十河城を圍む

守・石川刑部・馬立・新別川・曾我部等、都合其勢一萬餘騎、迎として國境へ出向ふ。元親は十月中旬岩倉を立ちて、曾江越を經て、讃岐國へ押入り、阿波・讃岐・伊豫の勢を合せて三萬餘騎、虎丸の城へ押寄する。城主安富玄蕃是を見て、我小勢にて、此大軍と戰ふ事、洪水を手にて防ぐに異ならず。迚も叶はぬもの故に、なまじひなる軍して、人の物笑にならんよりはとて、攻めざる先に、城を明けてぞ落行きける。頓て此城を解捨て、直に三好隼人正存保が籠りし十河へ押寄せ、卽時に町を打破り、其日の暮方より、城へ矢入あり、鬨の聲鐵炮の音、震動する計なり。存保は剛に逸れども、過ぎし中富の合戰に、賴み切つたる家の子郎等悉く討たれ、氣疲れ勢盡きぬれば、戰ふにも及ばず、靜まり返つて居たりける。寄手城の前後を揉破り、塀一重になし、裸城にして其儘閣き、平木に附城を構へ、伊豫・讃岐の勢を番手に附置き、東讃岐の在々、牟禮・高松・やくり・矢島の浦々迄、一宇も殘さず放火して、元親矢島へ渡り、寺の院主に對面ありて、古源平の軍など聞き給ふ。兎角すれば冬になり、雪深くして士卒も手龜れ、兵糧の運送もなり難かるべしとて、岡豊へ歸陣し給ひけり。

引田合戰幷十河城落つる事

天正も十一年になり、春立ち長閑にもなりぬれば、元親人數を進めて、讃岐國へ打入り給ふ。斯る所に仙石權兵衛秀久は、秀吉公より、讃岐國拜領の御朱印を給はりて、美々しく粧へ當國へ下りけるが、元親の發向を聞きて、地方へ人をも卸さず、物色をも見せず、爰彼處の島陰に船を寄せ、靜まり返つて事の樣を窺ひけるが、時分をや計りけん、引田の湊へ船を入れ、人數を打上げたり。香河民部・國吉三郎兵衛・大西上野是を見て、勢を進めて押懸り、互に鐵炮を打ち弓を射懸け、喚き叫んで攻戰ふ。元親は、引田近邊の麥を薙ぎ苗代を返させ、虎丸の麓に陣を居ゑ、軍あるべしとは思も寄らず御坐しける所に、東に當りて鐵炮の音頻なれば、桑名太郎左衛門・中島與市兵衛に、見て參れと宣ひ、駈出でんとする所に、先手大きに亂れ、敵競懸つて追ひ來る。元親の旗本も足を亂し、疎になりて色めく所に、桑名太郎左衛門・中島與市兵衛・前田平兵衛・稻吉新藏人・辻新介・大西上野眞先に進み、鎗を入れて込返す。元親旗本の備

仙石秀久敗績

を調へ、靜々と押懸り、敵味方入亂れて戰ひしが、仙石終に打負け、散々になりけるを、土佐勢追懸け追詰め討取り、思ひ〳〵に分捕高名す。仙石覺左衞門は、中島與市兵衞と鎗を合せけるが、味方敗北しければ、其所を引いてぞ退いたりける。仙石權兵衞は、手勢殘り少に討ちなされ、船に乘らんと、湊の方へ落行く所を、中島與市兵衞、大將と見濟し、船津まで追詰め、鎗付けんとする所に、大勢馳せ來り、與市兵衞を中に取込め鎗玉にして、首をば戶田介六討取りけり。森本義太夫・小林隼人には、弓手に當り妻手に翔りて、爰を先途と戰へども、續く味方なければ、船に乘りて退いたりける。爰に六七騎落行く武者あり。土佐勢是を見て、我も〳〵と追懸る。中にも黑岩治部左衞門、逸足を出して眞先に駈出で、遁すまじと呼ばはれば、武者一騎急ぎ馬より下り鎗を伏せ、道に蹲んで待ち居たり。治部左衞門怪しく思ふ所に、彼武者申すやう、是は志渡式部が家臣何某と申す者にて候。式部未だ幼少に候へ共、此戰場に罷向ひ候所に、斯く敗軍に及び候ひぬ。然るに老父大病を請け、必死の床に臥して、露命唯今をも知り候はず。式部討たれて候はゞ、武士の習とは申し乍ら、さこそ

悲み候べし。哀れ一命を助け給はゞ、今一度老父に對面致させ度候。若所望叶ふまじきに於ては、某が首を召され候へと、しほ〳〵として申しければ、黑岩も流石に覺えて、神妙にも申されたる者かな。實に痛はしき事なり。急ぎ立退き給べし。是は黑岩治部左衞門と申す者なり。味方をば防ぎ候べし。御心易かれと申しければ、彼武者喜び、手を合せて落行きける。斯る所に大勢追懸け來るを、黑岩道に駈塞り、此者をば某が討取りたり、近付くべからずと申しければ、追手の者共、是は如何なる仔細ぞと、呆れて一度に立留る。時に治部左衞門、斯樣々々の次第なり。士は互の事、遁し給へと申しければ、黑岩殿の情、鬼の目にも涙なりと、吐と笑ひてぞ歸りける。其後志渡が方より、黑岩に使を越して、厚く禮謝し、存命の間は、互に書音を通じけるとぞ聞えし。斯くて元親・信親は、引田の湊の上の山に打上り、勝鬨を擧げ、卽其所に陣を居ゑ、敷皮にて夜を明し給ふ。翌朝敵を見れば、引田の古城へ人數を擧げ、引田の町を圍みてぞ居たりける。大西上野に、急ぎ町屋を燒拂へと宣へば、畏りて行く所に、町の此方に大きなる入江あり。折節潮充ちて深かりしかば、淺みの方へ勢

を廻しけるを、元親見給ひ、眞直に渡してこそと怒り給へば、蓮池左京進親實馬駈出し、入口の深みを一文字に打渡り、町屋に火をぞ掛けたりける。上野も遲ればせに渡して、一宇も殘らず燒拂ふ。斯る所に桑名太郎左衞門が郎等、前田の戰場より、仙石が幟を取來り、さらば敵に見せて笑はんとて、江島太左衞門取持ち、引田の本城近く馬駈寄せ、幟を差上げ、今朝戰場に於て、此幟を拾ひ來れり。主あらば、返し參らせ候べし。是へ出合ひ給へと、大音にて申しけれども、一言返答申す者もなく、鐵炮を打懸けしか共、太郎左衞門には當らず、馬を靜に乘りて歸りける。左京進・上野は、古城の敵を追拂はんと、曳々聲を出して攻上れば、敵戰はんともせず、皆一同に崩れ落ち、船に取乘り、散々に押して逃げにけり。權兵衞は、御朱印頂戴したる甲斐もなく、讃岐國を追出され、這々都へ逃上る、面目なくぞ見えにける。元親勢拔かさず、十河の城へ押寄せ、旣に攻めんとする所に、城主隼人正存保より、比江山掃部介が陣へ使を立て、城を明けて立退き候べし。濱の手へ退き、仰承り候へと申越されける。比江山此趣を申しければ、元親此城には、阿讃兩國の溢者共集りて、動もすれば邊境

を侵し、様々狼藉をなす。此次に惡黨共、一々に打果すべし。赦免は思も寄らずと返答あり。隼人正重ねて申越されけるは、去年より附城の軍勢に、諸方の通路を留められ、兵糧盡果て忽飢に及ぶ。助命の爲に下郎共乞食狼藉致候。全く總心にあらず。此度御宥免に於ては、元親に對し、再び敵對致すべからず。是猶御疑あらば、起請文を書き進ずべしと、詞を卑くして詫び給へば、宮内少輔聞き給ひ、存保は臆して詫ぶる人にあらず。士卒の命を助けんと、衆の爲に身を忘れ、恥辱を忍び、詞を卑くして降を乞はるゝ事、兎角詞に述べ難し。義あるは大將たる身の本意なり。我又是を感ぜずんばあるべからず。以後は兎もあれ、此人の本意を達すべしとて、陣を解きて、矢島の浦へぞ送りける。存保を始め軍兵共、四州には忍ぶべき陰もなければ、皆備前の地へ渡りける、偖こそ讃州、殘る所なく治まりけれ。

高森城軍の事

さる程に阿讃兩國幷北伊豫は、事故なく元親の存分に屬しければども、西伊豫隨はず、

栖突く輩多かりしかば、豫て手當の幡多・高岡の軍兵共、押入り〳〵擧動ひけり。諸將美間の鄕に集り、軍評定ある所に、高森の城より、六人の士連判にて、寄手の方へ內通しけるは、城に火をかけ候べし。煙を相圖に攻入り給へ。我々共裏切すべしとぞ言遣しける。寄手の兵大きに悅び、高森より廿町計隔てたる美宗といふ山に上り、相圖の煙を待ちにける。善惡共に天眼あり、回忠の事一人聞出し、頓て城主に是を告げければ、彼六人を犇々と搦捕り、嚴しく拷問せしかば、合圖の方便詳に白狀す。卽六人の首を刎ね、城の後に萱を積上げ火をかけたり。寄手是を見、すはや城中に合圖の煙を擧げたるはと、深田の城を跡になし、雲に聳えたる高森の山道を、總軍一同に、息をも繼がず攻上り、切岸堺近く押寄せて、鬨の聲を擧げけれども、城中靜まり返つて敵を引付け、彼六人の首を投出し、此者共を憑にて、骨を折られたる土佐衆へ、御禮に是を遣し候と、一度に吐と笑ひける。寄手大きに呆れて、引かんとすれば敵城道を遮り、進んで戰はんとすれども、城堅固にして攻入る事も叶はず、心ならずぞ支へたる。此時殘る城々より、一度に切つて出でたりせば、寄手一人も遁るまじ

きを、如何なる思惟にやありけん、寄手の運や强かりけん、一人も出でざりけり。物に馴れたる大將共、少しも騷がず、いかにも備を亂さず、靜に後陣より繰引に引けやと、次第々々に引取りける。一番に桑名彌次兵衞三千餘騎、二番に光富權之助八百餘騎、小山を越えてぞ引きにける。三番に宿毛右衞門太夫一千五百餘騎、坂の麓を引取る處に、五ヶ所の城より、五千計一度に吐と打つて出で、殿十市備後に突懸る。備後踏止りて、爰を專途と戰ひしが、終に打負け、軍兵亂れて先手の中へ逃入りしかば、宿毛が勢も共に亂れて崩るゝ所に、豐永式部・立石右京・横山忠兵衞・間磯之進・廣田久太夫・野村孫右衞門・森本右近、切通しの細道にて、返合せて支へたり。宿毛是を見て取て返し、潔し若殿、原右衞門太夫是に控へたり。進めや人々と詞を懸けゝれば、七人の若者共愈是に力を得、勢かけて待懸けたり。城兵は、逃ぐる敵に追縋うて、備を亂して追懸くる。中にも源田太郎兵衞は、眞先に進んで來る所を、立石右京、鐵炮を以て眞只中を打ちければ、馬より下にどうと落つる。跡勢是に辟易して猶豫ふ所を、得たり賢しと、一度に吐と突懸れば、一戰にも及ばず、城中へ引取りける。

斯くて軍の次第、岡豐へ注進ありければ、元親感じ給ひ、宿毛を始め七人の輩へ、感狀をぞ出されける。立石右京は今年十七歲、敵の大將を討取る事、第一の高名なりとて、溝口內藏丞を使として、馭替の馬一疋、鞍置いてぞ給はりける。

美間合戰附中伊豫・西伊豫降參の事

其後軍僉儀ありて、桑名藤七預りの小性組一手、本山將監・福留隼人を奉行とす。幡多勢五組・阿波・讃岐・伊豫の勢、合せて三萬八千餘騎、天正十一年八月下旬、豫州河原淵へ着陣し、軍兵の手分して、美間の鄕の城々へぞ向ひける。深田の城をば食攻にせよとて、城の廻二里に大柵を振り、其外に壕塹を突き、所々に井樓を揚げ、柵の外に陣屋を構へ、混軍を止め、碁雙六茶會をなし、中國より商人を呼寄せ、賣買の棚を飾らせ、幾年も經べき有樣なり。其中にも番手の者は、井樓に上りて晝夜を守り、詰り詰りに篝を燒き、隙透間もなかりければ、城中の兵共、諸方の通路音信は、思ひ絕えたる事共にて、中々慰む方もなく、今は勇氣も撓み果て、此儘にて日を經るならば、

唯徒に飢ゑ死なん。さらば又打つて出でんとすれ共叶はず、恰も魚の釜中に遊ぶ如く、危き事旦夕にありと、古人の詞、今正に當れり。所詮降を乞ひ、一命を扶からばやと上下歎きければ、城主力及ばず、且は不便なりとて、自ら面縛して罪を謝し、降參せしかば、疑ふべきにあらずとて、本領を給はりける。土居の城へは、小性の面々馳向ふ。城中の兵共、山下へ取出で、西谷口をぞ防がる。寄手の若侍十三人、鎗先を揃へて突懸り、土煙を立て相戰ふ。城兵大きに卷り立てられ、足床を亂して引退くを、若士追懸くる所に、城兵取つて返し、午刻の終より申の半迄、兩方互に引退かず、爰を專途と戰ひけり。桑名藤七是を見て、若殿原が血氣に誇りて、無法の軍を好むは曲事なり。急ぎ呼返せと、吉松治部左衞門を遣せども、皆若者共なれば、誰先に引かんといふ者なし。二番に岩松七左衞門を遣せども引返さず。三番に白川與兵衞・島田可右衞門を遣しける。兩人駈向ひて、早日暮に及びぬ。急ぎ引取り候へと押立ち押立ち引く所に、敵是を見て、大勢突いて出でしかば、又一同に返し合せ戰ひけり。其中に中島彥五郎、鎗先にて首を取る。城兵打負け城に入れば、寄手は味方へ引取

りけり。高森の城へは幡多勢五組、手當にて押寄する。城主中野式部、廿町計山下に打出で、互に鬨の聲を擧げ、矢合する程こそあれ、入亂れ戰ふ所に、寄手の中より、國澤越中と名乘り、老武者唯一騎、鎗取りて敵の眞中へ乘入り、卷り立て突いて廻り、敵を山上へ追上げたり。是を見て朋勢鬨を作りて押懸り、山下殘らず放火し、一度にさつと引取りける。桑名彌次兵衛、越中に向ひ、老人の無用の骨を折られたりと申しければ、國澤年老い、脛は弱り候へども、心は昔の越中にて候間、馬さへこたへば、天晴若殿原にも劣るべからずといひてぞ笑ひける。其後兩方互に氣を勵し相戰ふと雖、寄手は目に餘る大勢なれば、討たるれども減せず、負くれども遠引せず、荒手を入替へ攻懸る。城中には入替る勢もなく、次第に兵糧矢玉も盡きぬれば、斯くては叶はじとて、城主中野式部、深田掃部に便りて降參す。深田・高森・土居・岡本・金山は、其間程近く、四肢の如く十指の如く、一も缺けてはなるべからずと、互に隔なく扶け合ひしに、今深田・高森は敵に屬しければ、土居・岡本・金山、偏に便を失ひて、心細くぞなりにける。此城々は、皆西園寺左衛門太夫が旗本なり、如何なる故にや

ありけん、是程十死一生に及ぶと雖、加勢もなく、後巻の方便もなく、一向音信なかりければ、土居・岡本・金山野心を起し、牒じ合せ人質を出し、元親へ降參して、城も領地も、本の如くに安堵す。爰に河野四郎通直は、誰も手指す者はなけれ共、四方の城城或は攻落され又は明退き降參して、河野も次第に押挾めらるゝ心地しければ、家臣共、斯くては當家も、如何あらんずらん。所詮弱みなき先に降を乞ひ給はゞ、四國に雙なき大家にて候間、元親も自餘の城主には準ずべからず。一家同門の思をなし給ふべし。急ぎ書簡を遣され、然るべく候と諫めければ、元より通直懦弱にして、武道拙き人なれば、兎も角も能き様に計らへと申されける。臣下共喜び、土佐へ羽檄を飛ばして降を乞ひ、家老平岡人質として、岡豊にぞ相詰めける。河野斯りし上は、東伊豫・中伊豫は悉く治めけれども、西伊豫の輩のみ隨はざりければ、四州の勢を催し、城々を攻干し、男女を撫切せんと、流言四方に充滿て(みちく)、諸人恐怖する事斜ならず。寄手は次第に猛なり、城々は月を追うて嗤嚟す。兎に角敵對せん事叶ふまじ。其上元親、孰の城をも攻め取らん。されば縱令加勢を乞ひたり共、援兵はなるべからず、

一所懸命の領地さへ相違なくば、早く降參して、安堵せんには如かじと、城々詫ぶる由聞えしかば、元親一々相違あるまじき書劵をぞ出されける。さる程に西園寺・白木・板島・岩井・森を始め、西伊豫の輩皆降參せしかば、當國一統に治まりけり。其中に得居・成島は、僅の小島なれば、攻取りても益なし。攻めずとも降參せんと、打捨て置かれけるは、家運の强き所なり。

須本へ計策の事

香宗我部安藝守親泰は、如何にもして他國を討取り、忠功に備へんと、四方をぞ窺ひける。淡州に菅何某とて、勇智兼備の士あり。彼を味方に引入れ、野口備前守が居城當國須本の城を攻取るべしと案じ濟し、羽檄を飛ばして、事の由を談じける。菅一議にも及ばず同意して、急ぎ人數を差越し給へ。須本の案内仕るべしとぞ申しける。親泰喜び、究竟の兵を勝り立て、淡州へ差遣す。菅何某手を合せ、須本の城へ押寄せたり。城には思ひも寄らず、これは〳〵と驚き騷ぎ、防ぐ兵一人もなく、我れ

先にと逃行きしかば、卽時に城を乘捕り、悅びの鬨ども擧げにけり。此の由阿波へ注進しければ、親泰大きに悅び、追々人數を差向け、其の身も渡海せんと、勢を揃へ舟用意して、旣に打立たんとしけれども、折節風烈しく浪荒るゝこと、日を經て止まず。名におふ鳴渡の渡なれば、渡るべきやうなかりけり。親泰身悶すれども叶はず、數日を經るほどに、肥前守當國の勢を催し、須本の城へ押寄せ、揉みに揉んで攻めたりける。素より案内は知つたり、前後より攻入りければ、城中には續く味方はなし、終に城を取返され、菅何某、辛き命を遁れて阿州へ渡り、親泰の與力にぞ居たりける。

三州へ加勢催しの事

天正十二年の秋、紀州雜賀より、阿州海部の城主香宗我部安藝守親泰へ、人を越して申しけるは、羽柴筑前守殿、當春より北畠中將殿・德川宰相殿と鋒楯に及び、筑前守殿東國へ發向あり、戰陣度々の由其聞え候。待つ所の時節に候間、攝州大坂近邊を

攻取り候べし。急ぎ四國の勢を差上せらるべしとぞ申しける。親泰飛脚を馳せて、土佐へ此由告げられしかば、元親悅び、我故ありて、家康と親み深し。三州へ加勢して、秀吉を引包み討取るべしと、紀州へは福留甚兵衞を遣し、三州へは渡邊和泉・江島太左衞門を飛脚に仕立て、井伊兵部少輔へぞ遣しける。其頃戰陣度々なりしが、扱取結びありて、和談大略調ふ所に、彼兩使到着して、兵部少輔へ委細申しければ、此一左右、今十日以前に申來るに於ては、東西より差競ひ、上方勢を中に取込め攻むるものならば、一戰の勝負なるべきものを、殘念なりと申されける。此由披露ありければ、家康卿御感ありて、御書を成し給ふ。後に彼軍の次第を尋ね聞けば、尾州北畠中將信雄公と、羽柴筑前守殿と不和の儀起り、旣に合戰に及び、尾州より三州へ加勢を乞ひ給へば、宰相中將家康卿許諾なされ、同三月十三日淸洲に至り、信雄卿に會し、犬山・羽黑に於て御合戰あり、小牧山に陣城を構へ、其外所々に要害を設け、互に御對陣、羽柴殿は十六萬餘騎にて、樂田に陣し給ふ。爰に紀州根來・雜賀の法師等是を聞きて、幸の隙を得たりと悅び、俄に兵を起し、大坂へ打出でんと二手に別れ、

一手は船にて境表へ働き、一手は岸和田へぞ押寄せける。羽柴殿兇徒の押として、中村式部少輔を、岸和田の城に差置かれ、黒田吉兵衞長政・蜂須賀小六家政・赤松下野守・明石左近・生駒雅樂頭・黒田兵庫を添番として、遣し置かれける程に、此人も出向ひて大きに戰ひしかば、兇徒等忽討負け、散々になりて引退き、堅く守りて出でざりけり。其後湊・雜賀の者共、打寄り評しけるは、近年は我々、長宗我部の旗下に屬せし事なれば、四國勢を催し、當國勢と一つになり、攻上るものならば、不覺の負はすまじきものを、法師達の血氣に引かれ、麁忽の軍したる事こそ越度なれ。秀吉東國の軍、月を越えて今に止まずと聞ゆ。其弊に乘りて、重ねて大軍を催し攻上るならば、勝たずといふ事あるべからずと、九月半、鈴木何某を阿州へ下して、此趣をぞ牒しける。然る所に德川宰相卿、長久手原にて、三好孫七郎殿と御合戰、上方勢大きに敗北す。其外加賀井・竹が鼻・蟹江等の城軍、所々の戰陣度々なりし所に、足立淸左衞門和睦の扱取結び、十月廿日、信雄卿と羽柴殿、矢田河原に於て御對面ありて和議調ひ、互に兩方開陣なされしかば、德川宰相家康卿も、三州へ軍を引入れさせ給ふ。

扨こそ四國の援兵も、いつしか沙汰なく止みにけり。

土佐物語巻第十三終

土佐物語卷第十四

秀吉公四國御退治手配附元親出陣の事

土佐國長宗我部宮内少輔元親、四國悉く打靡け、大きに逆威を振ふと聞えしかば、秀吉公急ぎ退治すべしと、御舍弟羽柴美濃守殿を大將とし、畿内の兵三萬餘騎、天正十三年四月廿四日、紀の路より兵船を揃へ、淡路の須本へ押渡る。一方は三好孫七郎殿を大將にして、近江・丹波の軍勢三萬餘騎、同日同時に、攝州尼崎より、淡路の岩屋に押出す。備前・美作より羽柴秀家、播州より蜂須賀父子・黑田官兵衞、讃州矢島へ押渡り、牟禮・高松に陣を取る。中國より毛利輝元・小早川隆景・吉川元春三萬餘騎、伊豫の新間に着陣す。是に依つて諸方より、岡豐へ注進、櫛の齒を引くが如し。事既に大事に及びぬと、四國の騷動斜ならず。武士東西に馳違ひ、男女南北に逃迷ふ。元

豐臣秀吉
長宗我部
元親對軍

親四州の城々へ下知をなし、其身は阿州羽久地を本陣に定めらる。此所は阿讃豫の街にて、四方へ手遣の便能きに依りてなり。既に岡豐を打立ち給ふが、家の安否此時なりと、先瑞應寺に詣で、亡父の廟前に跪き、元親不肖に候へ共、父祖の箕裘を繼ぎ、弓箭を取りて、四州を手に握る事、天道の冥慮に叶ひ、武門の譽何事か是に如かん。然るに此度天下の勢を受くる事、武士の本望にては候へ共、又家の安否、此時に極り候ひぬ。凡戰場に出づる者、豈歸國を思ひ候はんや。依つて御暇乞に參りて候なりと、鞠躬興拜し、夫より方丈に入り、長老に對面して、一句の偈を請け給ふ。長老云、閫外安危策已成。元親云、弋不射宿。長老擧扇云、汝矢試射看。元親云、矢既盡。長老云、十方用吹毛之劍。元親拜禮して席を立ち、直に阿州に赴き、羽久地に在陣し給ひけり。さる程に上方勢、讃州へ向ふと聞えければ、長宗我部右兵衞親武が居城同國植田の城は手詰なれば、敵先づ是を攻めんずらんと、細川源左衞門を大將として、小性組百人・平士二百人籠置き、其身は後卷の用意して、敵の樣をぞ窺ひける。此植田と申すは、後は深山、大手は深き谷にて、要害最堅固なり。上方勢押寄せ、

鬨の聲を上げ、些し矢入しけるが、地形をや計りけん、又計策やありけん、谷口へも近寄らず、近邊の民屋を放火して引取りける。小性の面々是を見て、門を排き打つて出で、細川源左衞門・前田平右衞門眞先に進み、喚き叫んで追懸けゝれども、寄手は合戰すべき氣色もなく、其日矢島へ引取りけり。されども日を替へて、又もや寄せんずらんと、城中にも羽久地にも、相圖を極めて待つ所に、上方勢爰をば閣き、阿州木の城へ向ふ由聞えければ、此程の支度相違せり。

金子陣の事

さる程に毛利安藝守輝元、三萬餘騎を引率し、豫州新間に着き、金子の城を攻傾けんと議す。此由聞えしかば、金子備後守元宅、諸士を集めて申されけるは、秀吉諸國に下知して、軍勢を差向けらるゝ上は、我々運を開かん事、千萬に一もあるべからず。されぱとて元親に誓ひし約を變じて、今又降を乞はんは道にあらず。天下の勢を請けて討死せんは、尤武士の面目なり。勇は先祖の面を起し、義は戰死の尸を淸むる

ぞ。命を限に戰ひて、死を善道に守るべし。但妻子捨て難き事なれば、落さんと思ふ旁は、急ぎ何方へも立退かれよ。露程も恨はなきぞと申されしかば、家老三島源藏進み出で、こは口惜き事を承り候ものかな。君、臣下を蓄へ、恩を厚うし禮を尊び給ふは、國家を保ち亂を靜めん爲にて候はずや。斯る時節に心を變じ、不忠を存じ候はゞ、豈人といはんや。敵は縱令百萬騎もあれ、命を限り勝つも負くるも時の運、城を枕と思ひ定むるより外は候はず。各如何にと居長高になりて申しければ、家老黑川左門を始、一座皆此儀に同じ、潔し三島殿、此中に誰ありて、義より命を重んじ、恥を求めて名を失はんといふ者や候べきと、皆一同に詞を放つて、討死を一篇に思設けてぞ居たりける。斯る所に岡豐勢二百餘騎、元親の下知として合力に馳加はる。軍兵愈勇をなし、寄する敵を待懸けたり。程なく中國勢、追手搦手一同に鬨を作りて押寄せ、鐵炮をつるべ矢を放し、喚き叫んでぞ攻めたりける。城中にも鐵炮をつるべ返し矢を射返し、劣らじと防ぎけり、素より討死と、思ひ定めし事なれば、一足も退かず戰ふ程に、悉討死して、今は大將元宅・三島・黑川

金子元宅戰死

以下十三騎になりて、城の內へ引きけるが、深手薄手五ヶ所七ヶ所蒙らぬはなかりけり。元宅申されけるは、又敵陣に駈入り、討死と思へども、今は進退心に任せねば、雜人原の手に懸らん事も口惜し。軍も思ふ程はしつ、今は思ひ殘す事もなし。さらば自害せんと押肌脫ぎ、腹一文字に掻切り、俯伏になり給へば、殘る者共思ひ〳〵に自害し、其名計りを殘しける。

木津城軍の事

さる程に羽柴美濃守秀長は、淡路の福良より船を出し、阿波の土佐泊に着岸あり。羽柴八郎・伊藤掃部・小寺淸兵衞・中村孫平次・一柳市介・赤松次郎・蜂須賀・黑田・明石・筒井、尾藤・戶田、此人々を始め、木津の城へ押寄する。其間僅に卅町を隔てたれども、入海ありて、左右なく渡すべきやうなしと見る所に、大勢に節所なく、總軍一度に打入り、眞一文字に渡しけり。木津の城主東條關兵衞、川端に出向ひて防ぎけれども、寄手は是を事共せず、向の岸に打上り、同時に鬨を作りて押寄すれば、四郎兵衞叶は

木津城陷る

ず、城中に引いて入り、固く守りて出合はず。爰に東條紀伊守は、秀長に隨ひて、木津の寄手の人數なりしが、關兵衞は甥なれば、味方へ返忠をせさせて一命を扶け、恩賞に預らせばやと思ひ、城中へ人を入れて、潛に申させけるは、當時天下に對して敵せんは、偏に石を抱きて淵に入る者なり。抑御邊は、長宗我部譜代の家臣にもあらず、時の權に押され、綠に結ぼられたるといふ計なり。急ぎ味方に屬し忠節をなし、家を起し後榮を願ふべしとぞいはせける。關兵衞如何計の勇者なりしか、此詞に氣を碎かれ、實にもと思ひ、如何にも仰に隨ひ奉るべし。御取成にて御許容あらば、近日土佐へ御手遣に、忠勤を抽んづべしとて使を返しける。斯る企ありとは、人思ひ寄るべき事ならねども、此使の往來を、人の怪む事やあらん、味方の疑を散ぜんと思案し、其夜しも、俄に雨降り風烈しかりければ、是天の扶なりと、夜半計に城を明け、土佐を指してぞ落行きける。諸軍勢共、是は何といふ事ぞ。籠城したる甲斐もなく、一働もせず。何の面目ありて、土佐へは立越え給ふらん。斯る不覺人と知らず、附隨ひけるこそ越度なれと、爪彈をしてぞ呵きける。素より隱す事なれども、惡事千

里を走りて、宮内少輔羽久地にて、此事を早聞き給ひ、家老の面々を集めて宣ひけるは、東條關兵衞は、叔父東條紀伊守と內通し、隱謀ある由告知らする者あり。彼は阿州の地士なれども、元親、久武內藏助が娘を養子にして嫁せしめ、木津の城を預け置きぬ。此度は當家安否の境なれば、無二の忠功を勵ますべき所に、大軍に打負けたりと雖、其働も見えず、又木津の城を落されなば、一の宮に籠るべきに、さもなく、又海部の城にも足を留めず、大要の弓を、所の落着をも見屆けず、土佐の國迄遙か逃行く事、彼れ左程腰を拔かす者にてはなし。一として不審晴れず。察するに寄手案內の爲に先立ちて、土佐へ行くものなり。是腹心の病なり。捨置くべきにあらず。急ぎ誅すべしと、子息信親へ飛脚を遣して、事の由を告げ給へば、浦戶の城にて、詰腹を切らせらる。關兵衞が弟唯右衞門は、元親の旗本にありしを、羽久地にて誅しけり。淺猿しや關兵衞、天命の歸する所とはいひ乍ら、元親は主君なり舅なるに、唯一時の人欲に、義と親とを忘却して、數代の武遍も徒に、其身を失ふのみならず、永く宗廟を絕ちて、先祖の名を汚しけるこそ果敢なけれ。爰に香宗我部安藝守親泰は、

香宗我部親泰逃竄

海部の城に居て、滑山の城主吉田孫左衞門康俊が許へ人を遣し、敵は猛勢なれば、味方の小勢を、諸方へ分けて宜しからず。一所にて軍議を談ずべし。早く此方へ參られよといひ遣しけるが、木津の城早攻落されぬと聞えければ、迚も叶はじとや思はれけん、土佐國へぞ落ちられける。孫左衞門、斯る事とは思ひも寄らず、滑山の城を明けて手勢を引具し、海部へ行きて見れば、人一人もなし。扨は親泰聞逃せられたりと大きに怒りて、城中を立廻り見れば、能く周章てられたりと覺えて、鎧太刀刀旗なんぞ捨てゝあり、孫左衞門是を下部に取持たせ、手の者を打連れ、直に土佐へぞ歸りける。斯くて羽久地の城主谷忠兵衞を一の宮へ遣し、江村孫左衞門親俊に力を合せ、羽久地へは、中內善介を籠置かれけり。

一の宮城攻の事

木津の城落去せしかば、岩倉へは三好孫七郎秀次、一の宮へは羽柴美濃守秀長向ひ給ふ。仙石權兵衞・高山右近・前野庄右衞門・中川藤兵衞・蜂須賀彥右衞門・黑田官兵

衞・赤松次郎を始め都合七萬餘騎、一の宮へ押寄せ、四方の攻日を定めて取卷き、仕寄を付けて、弓鐵炮を打入れ〳〵、七萬餘騎が一同に鬨を上げしかば、太山崩れて、海に入るとぞ覺えける。城中も負けじとつるべ返し〳〵、鬨の聲を合せける。寄手に是を競ひては、大海の一滴にも當らぬ小勢なれ共、本人江村孫左衞門・谷忠兵衞少も怯まず、大音上げ、軍は勢の多少に據らず。後れを取り名を汚すな。引くな進めと諸士を勵し駈廻る。寄手は仕寄を附寄せ〳〵攻め近付く。黑田官兵衞馬乘出し、仕寄の下知をせらるゝ所を、城中より横山隼人是を見て、塀を越し飛んで出で、官兵衞の胸板を一鎗突きたり。其時大勢取込み討たんと犇く所を、難なく駈拔け、天晴速強き黑田殿やと、高らかに歎きて、城の內へ引取りけり。寄手蜂の如く集り、晝夜十九日攻むれども、城中弱る氣色なし。軍の次第、日々注進ありしかば、秀吉公聞召し、それ程の小城一つに、日を經るやうやある。左程拙くしては、四國を攻傾けん事は難かるべし。自身御馬向けられんと、既に軍勢を觸れられける。秀長此由聞き給ひ、急ぎ尾藤甚右衞門を都へ差上せ、御進發を差止めよと、一通の書简を差上げらる。

謹而致言上候。抑四國征伐之事被仰付、則渡海仕畢。阿波讃岐江賦人數、不移時日、敵城或在々所々任存分之條、天下之面目何事如之哉。然殘黨未散之間、急度御動座可有之由承、奉察秀長弓矢之力不足故也。御進發之儀併御威光薄乎。日限雖相延候可遂本意事在掌握。庶希御動座被止、秀長勵忠勤者、於戰場一世之大慶不過之。此旨宜預御披露候。誠恐誠惶謹言。

七月三日　　秀長

細井中務丞殿

甚左衛門是を差上げ、四國は近日平均あるべき由申上ぐれば、四州御動座を止められ、北國へ御出馬にぞ極められける。斯くて一の宮の寄手共、荒手を入替へ攻めにける。城中には替る勢もなし。今一兩日を限りとぞ見えにける。斯る所に秀長、諸陣の矢留をせさせて、城中へ使を遣し、彌左衛門・忠兵衛兩人の內、一人來り候へ。和議を談ずべし。全く僞にあらずとぞ仰入れられける。兩人聞きて、こは不思議なる使かな。併呼ぶに行かぬものならば、臆したるといはれん。所詮忠兵衛は敵陣に

行きて、仔細を聞くべし。若僞りて取籠めんとせば、太刀の目釘を限に切死せん。孫左衞門は城を守らんと、僉議一途に相極め、忠兵衞は究竟の兵五十人召連れ、是を最後と、思ひ定めて立出づる。孫左衞門は、番所々々に下知を加へ、堅く守りて居たりけり。斯くて忠兵衞、秀長の陣に入りければ、美濃守是へと請じ給ふ。忠兵衞些も臆せず、御前近く參り、一禮し畏る。其時秀長、此程旁の武勇、日本無雙といふべし。內々土佐の士は、武道を常に琢かるゝとは聞及びたり。元親近年の內に、四國を平治せられしは理なり。夫に付御邊を使として、元親へ和議を談ぜばやと思ふはいかにと仰せければ、忠兵衞承り、誠に忝き御諚に候。さり乍ら餘の儀に候はゞ、爭か仰を背き奉るべく候。此度の御使は、御免なされ候へと、謹んで申しければ、美濃守、いやいや御邊が一存ならば、元親の心底如何にと、憚る所もあるべし。秀長が憑む上は、何事かあらん。且は御邊も思慮あるべし。一宮・岩倉を始、城々如何計り强くとも、天下の勢追々向ふ上は、運を開かるゝ事は、千にして一もあり難し。又連々本國近く攻詰めて後の扱は、存分にはあるべからず。唯岩倉・一宮殁落せざる先に降參

あらば、且は强みなり、且は天下に對し、忠節にもなるべし。是非共秀長が指圖に任せられ候樣に、能々申さるべし。縱令元親同意なくとも、秀長が使の上は、幾度も推返し申され候へと、懇に仰せければ、忠兵衞畏りて、此上は再辭するは恐ありと、御請申罷立ち城に歸り、孫左衞門に申しければ、元親同意あるべきとは覺えねども、又閣くべきにあらず。急ぎ參られよと申しければ、忠兵衞は、羽久地へぞ參りける。去る間敵味方矢留にて、寄手は陣所に入り、城兵は彼所に集り、此程の辛苦をぞ晴しける。

元親降參の事

さる程に谷忠兵衞は、急ぎ羽久地へ參り、元親に見えて、羽柴美濃守秀長御扱の赴、委細に申上げければ、案の如く宮內少輔氣色を損じ、大に怒り宣ひけるは、凡籠城する者は、叶はざる期に臨みては、腹を切るが本意なり。汝今秀長にたらされ、城を捨て遙々來りて、大要の場を外す事、未練の第一なり。譜代の士を勝りて、定番に遣し

置くは、斯樣の時の爲にてこそあれ。其甲斐もなきは、頭たる者の臆する故なり。いかなれば金子備後守は、元親が譜代の家臣にあらずと雖、一度約せし詞を違へず、毛利輝元に攻干されても、降を乞はず腹を切る。是をば汝聞かざりけるか。是をこそ武士の本意とはすれ。縱令岩倉・一宮を攻落さるゝとも、海部へ引請け一合戰すべし。後詰の爲に、國許の人數一萬八千餘騎、三郎大將にて野根・甲浦に着陣して、海部よりの一左右を待つべしと、豫て下知をなし置きたり。其上にも打負け、野根山限りになりたり共、本國安堵のみは、豈ならざらんや。西國にて、名を知られたる元親が、一戰もせず闇々無事せん事、尸の上の恥辱なり。夫程の不覺者とは思はず、城を預けたるこそ越度なれ。急ぎ一宮へ歸りて腹を切れと、荒らかに宣ひければ、忠兵衞兎角に及ばず退出したり。されども忠兵衞は、勇敢口才の者なれば、些も屈せず、家老の面々に向つて申しけるは、秀長の御扱の旨趣、委細に申上ぐる所に、以の外の御機嫌にて、斯樣々々の仰にて候。今一應押返し申上度存候へ共、御怒りに向ひて諍ひ奉らんは、偏に燃火に薪を加ふるの恐れ候へば、先退出致候。扨各は如

何思召候ぞ。宮内少輔殿の御諚甚理なきにあらず。又秀長の仰も至極なり。畢竟元親公には、一戰にも及ばず、無事し給はん事を口惜く思召すなり。然れ共秀長仰の如く、天下の勢を引受けては、勝利を得給はん事は、千にして一もあるべからず。然るに彼方より御扱ある は、當家武勇の譽、隱れなきが致す所なり。されば只何事なく、其旨に任せられ無事あらば、寛大の御志とは申すべし。誰か褊し申すべき。其上一宮・岩倉弱らざるに、彼方よりの扱なれば、物强き事勿論なり。一戰に及びて本國へ押詰められ、降を乞ひ給はんは、力盡きて是非に及ばぬ所なれば、年來の武功は、只敵のせさする高名なり。相手に因つて手は立たず抔、世上の物笑にて、數度の譽も無になるべしと、我等は存じ候なり。各の御思慮、如何候やと申しければ、一座此理に服し、尤餘義なく覺え候。此上は我々共一所に罷出で、此旨を申上ぐべしとて、元親の前に畏り、所存の通を述べければ、元親熟聞き給ひ、暫默然として御坐しけるが、大將の譽は、士卒の功に依る。元親如何程思ふといふとも、旁が夫程腰を拔かす上は、力及ばぬ事なり。此上は如何樣にも、汝等が所存に任すべしと、大音になり

て宣ひければ、何れも兎角の詞なく退出して、一所に打寄り評しけるは、我々共、腰を拔かすとの仰なれば、詮議評定は無益なり。唯一篇に打死と極め給へと申しければ、いや／＼我々が所存に任せと仰あるは、各存分の通、秀長の仰に隨ふべし。君子に二言なし。御詞をいかへ給はじといふもあれば、傍よりも申樣、各仰せらるゝは理には候へ共、御立腹の一言は、さして取るべきにあらず。大賢君子も、怒る時は理を非と見ゆと承れ。互に斯樣に詮議して詞を盡すも、主君の御爲なれば、幾度も道理に任せ、諫め申すが本意なり。若し怒り給ふ時、臣又怒りて是に對せば、只猛犬の行合ふに等し。退いて幾度も諫むるは臣の道なりと申しければ、一座又此議に同じける。斯くて諫め諍ふ事三日三夜なり。元親宣ひけるは、此間旁詞を盡し理を極めて諫むと雖、我れ怒の餘り承引せず。却て雜言に及ぶ所に、旁其義を顧み、押返し諫むる事、元親が爲を眞實大切にして、身を忘れたる所なり。尤感悅するに堪へたり。然る上は兎も角も、旁が意見に任せん。さり乍ら我れ思ふ仔細あれば、判形をば出すまじ。汝等宜しく計らひ、返牒すべしと宣へば、家臣共頭を地に付け、斜ならず喜

長宗我部元親和を乞ふ

び、卽連書を認め、忠兵衛に渡しければ、忠兵衛も喜び勇み、一宮へぞ歸りける。去程に一宮には、忠兵衛扱の使として、羽久地へ立越えければ、敵も味方も安堵して思ふ所に、忠兵衛日を經て歸りければ、扨は元親、承引なきと覺えたり。又如何なる合戰にかならんずらんと、固唾を呑みて居たる所に、忠兵衛歸り來りて、同意の一札を捧げければ、上下悅ぶ事限なし。忠兵衛、羽久地にての次第を委細申上げければ、秀長聞召し、元親年來の武功、聞及ぶ所を以て推量するに、相違なしとぞ宣ひける。其後京都へ注進ありければ、御朱印到來す。其詞云、

徒在國令惱亂四國黎民、剩於殿下致競望之旨依叡聞、某罷向可令討伐蒙勅宣、一卒指向阿讃兩國。所々於城槨楯籠者、卽時踏落到住國可責伏之刻、降參之旨趣致言上候條、土佐一國宛行畢。名字御寛宥被成。如此被仰出事、頗叶天道之冥慮者歟。自今以後無二心可抽忠節者也。

天正十三年七月十二日　秀吉

長宗我部宮内少輔どのへ

元親是を拜見あり、人質として三男津野孫次郎親忠に、江村孫左衞門親俊・比江山掃部介親興を添へて、京都へぞ上せける。

四國分與附鶴・雀の事

斯りし程に、四國を諸將に宛行はる。土佐國は長宗我部宮内少輔、阿波國は蜂須賀彥右衞門家政、内一萬石赤松次郎則房、讚岐國は仙石權兵衞秀久、内二萬石三好隼人正存保、伊豫國卅五萬石小早川左衞門督隆景、二萬三千石安國寺惠瓊、一萬四千石來島右衞門康親、三千石得居助兵衞拜領す。中にも蜂須賀家政は、今年廿八歲なり。元より智謀勇猛の英將なれば、此度四國の先陣として、高名に備へんと思ひ、淡州の住人を呼びて、阿州への案内しつべき者やあると尋ね給へば、彼者申樣、當國須本の片邊に、森志摩守村春と申すこそ、武勇專一の人にて候へ。急ぎ召寄せられ、御先手せさせられ候べし。彼は八幡太郎義家が六男森六郎義隆の末孫にて候。平治元年十二月廿七日、左馬頭源義朝、六波羅の合戰に討負け敗軍の時、比叡山の此方龍華

越に於て、横川法師五百餘騎にて攻寄せ合戰に及ぶ。源氏は僅に卅餘騎、殊更落武者の事なれば忽ち討負け、中宮大夫進朝長は痛手負ひ、陸奥六郎義隆は討たれ給ひて、義朝は美濃國へ落ち給ふ。義隆の子息森冠者賴隆は、關東に下りて、常陸國に隱蟄し、世の轉變を待ち給ふ所に、治承四年の八月、賴朝義兵の合戰に討負け、房州へ廢落せらる。此時賴隆出向ひ、賴朝に對面し給ひしかども、賴朝不仁にして、一門に親み給ふ御志なかりければ、是を恨みて西國に赴き、淡路の冠者を憑み、淡州に住み給ふ。是に因りて元曆の義兵にも與せず御坐しける所に、能登守平敎經、淡路の冠者を攻亡し給ふ程に、賴隆便を失ひ、阿州土佐伯の城に退き、賊船を企て、數代彼所に居住せり。子孫牟屋に移りて、今志摩守村春まで、代々隱なき勇功の武士にて候ひしが、近年元親の爲に歿落して、當國へ來り、潛なる體にて時節を待ちて居給ひ候と、委しく申上げければ、家政悅び、使を遣して賴み給へば、村春一議にも及ばず領掌し、阿州の案內せしかば、家政諸將に拔んで先陣し給ひける。其恩賞に當國をぞ給はりける。彥右衞門、後に阿波守と改め、法體して蓬庵とぞ申しける。又小早川

隆景は、豫州金子・石川の兩城を攻亡したる御恩賞に、當國を給はりけり。其後數度の軍忠に依りて、筑前國幷肥前國基肆・養父郡を加へて給はりければ、隆景御斷を遂げ、伊豫國を差上げらる。依つて此國を配分して、七萬石池田孫次郎忠政、後に伊豫守に改む。七萬石戸田三郎四郎氏繁、眞崎六萬七千石加藤左馬助嘉明にぞ給はりける。是皆多年武勇勤劳の功、忽に顯れて、家を興し譽をぞ施しける。何れも入部の禮、上下美々しく出立ちしかば、見物の貴賤目を驚かす。近年長宗我部に附屬せし阿讃豫の城持・領主・小身の輩迄、一人も殘らず悉く所領を歿收し追放せしが、中にも河野四郎通直は、人皇七代孝靈天皇の御子彥狹鳴尊、此國を封ぜられ、伊豫親王と號す。されば連綿として斷絕なく、星霜を積む事幾千ぞや。伊豫の屋形と稱して、武勇の名天下に遍く、數代武門の棟梁たりしが、今の道直は、文に拙く武に疎く、遂に元親に屬して、永く社稷を失ひ宗廟を絕ちて寄る方なく、毛利輝元を賴み、藝州沼田の庄竹原といふ所に忍び居て、終に病死をせられける。伊豫親王より六十餘代にして、河野の家斷絕す。其外賴朝公の御時、守護に補せられ、又は足利將軍家、或は管

領職より所領を給はり、子々孫々に至る迄、全く相違あるべからずと、自筆の御判も徒になり、己が樣々成行きける。其中に、三好・得居・來島は、御恩賞を下されければ、是を嫉む者にやありけん、二三人寄合ひ評しけるは、三好殿に勸賞あるは、數度の力戰ありて、負けても終に土佐へ降參し給はず。武士の譽なればさもあるべし。得居・來島は、一度も敵に出合はず、何の功に御恩賞あるぞといへば、一人進み出で、されば物には一德あり。得居・來島は小身なる一德にて、此度の御感にも預かりしなり。此人大名ならば、元親の爲め攻干さるゝか降參するか、二つの內は免かれじ。彼兩家は小島にて、數にも足らねば、國中平均せば、自ら隨はん事いふに及ばずと、打捨て置かれぬ。兩家も亦武士なれば、敵寄せ來らば、其時の事よと齒を喰しばり悏へ居たる所に、不意に四國御退治あり、元親へ降參したる輩をば、皆所帶を召放され、牢浪の身となり、中に得居・來島のみ戰功もなきに、反つて御感に預るは、小身の德にあらずや。凡高き物は崩れ安く、滿つる物は溢れ易し。されば古歌にも「誰も見よ滿つれば頓てかく月のいさよふ空や人の世の中」と詠みしも理なり。鶴は大なるが

故に、身を愼みて人を恐れ、雀は形小ければ、人近付きても怖るゝ心なし。是小身の一德なりといへば、傍よりいふやう、併各は、小身の雀を願ひ給へ。我は何とぞ鶴になりて、身を愼み用心したしと願ふなりといへば、先の男、實は我も同意なりとて、倶に笑ひて去りぬ。

元親上京の事

斯くて宮内少輔元親は、急ぎ上京して、秀吉公へ恩惠を謝せん。但大勢を召されんは如何なりとて、日頃覺を取りたる兵五十餘人相具し、同年十月廿日、浦戶より船を出し、程なく泉州境に着岸あり。問丸宍喰屋四郎右衞門船津に出向ひ、旅宿へ案內す。豫ては今井宗久が方を、宿と定めらるゝ所に、折節宗久上京して居合はざりければ、正法寺に寄宿せらる。翌日羽柴美濃守秀長より、藤堂與右衞門を使として、船中恙なく、早速の着岸を祝し給ふ。注進の爲、與右衞門は先達て歸京す。元親は同日供の行列引繕ひ、京都に赴き給ふ。與右衞門は又祐乘坊と同道にて、牧方迄迎と

して參らる。八幡にて、旦那上の坊坂迎に饗應し、桂にて與右衞門、珍美奇肴を盡し持成しける。金井宗久父子桂へ迎に來りて、此度堺に於て、御宿仕らざる事を申來り、寺の南門に至り給へば、常に音信せし京都住居の面々、數輩出でて坂迎す。京に着きて、宗久が家を宿とし給ひ、翌日美濃守同道にて出仕せらる。進物には、國行の御太刀一腰・御馬代黄金千枚・色糸五百斤・沈のほた二つ・熊皮十枚なり。御禮畢りて、元親が二男五郎次郎御目見致す。是れ人質津野孫次郎代として、罷越すに依つてなり。御饗應を下され、御座敷能あり、供の士共も見物仰付けられて伺公す。翌日元親御暇を下され、備前兼光二尺五寸の御太刀一腰・金子百枚・持馬一匹・梨地蒔繪の鞍鐙・厚房の鞦かけて拜領す。此馬は後に内記黑と號けて、元親祕藏せられしとなり。

秀吉・元親會見

此時八幡山御城の繩張御見分の爲、秀吉公御越境なさるゝに付きて、早く元親に御暇仰出されけるとぞ聞えし。八郎次郎は、郡山へ立越えければ、孫次郎は、代りて京都へ出來る。元親對面ありて、此上は片時も早く歸國せんと、伏見より父子船に乘り、悅の聲を帆に上げて漕出で、依岡與兵衞一艘の早船に浪を分け、飛ぶが如くに土

州へ到り、大守御歸國の由を觸れしかば、貴賤安堵の思ひをなし、皆々御迎に出で、恙なき御歸帆を賀し奉る。

元親大坂出仕附任官の事

斯くて其年も暮れて、天正十四年になりにけり。秀吉公は大坂の御城に移り御座しければ、元親年頭の出仕あるべしとて、本山將監・比江山掃部介・桑名太郎左衞門を具し、岡豐を立ちて、城下布師田より船に乘り、攝州天滿に至り、今井宗久所を宿として、羽柴美濃守殿へ使を遣し、案內を申し、翌日登城し、御太刀馬代を獻じて拜謁せらる。御規式畢りて、御前近く召され、遠路海上を凌ぎ早速の出仕、悅び思召候由、御懇の仰あり。卽御相伴にて御料理を下さる。七五三の饗應、金銀を鏤め、善盡し美盡されたり。列座は羽柴美濃守・長宗我部宮內少輔・堀左衞門督・佐々內藏助入道なり。元親三人の家臣も、御目見仰付けられ、御料理を下されけり。其後黃金の間にて、御茶の會あり。畢りて天守を見せらるべしとて、先立ち給へば、元親御跡に屈從

して擧上れば、九層高く聳え、天に近く雁門を立て、咸陽宮も、是程にこそありけめ。御給仕には、年の頃十七八廿計の女房、華美を盡して立廻る。秀吉公、伊達染の羽織持來れと仰あれば、侍女御前に持參したるを取上げ給ひ、是秀吉が物好なりとて、御手づから宮內少輔に下されたり。元親謹んで頂戴して、御次の間へ退き、着して罷出で、御禮申上げければ、能く似合ひたりと笑はせ給ふ。斯くて天守を下りて、一間なる所へ宮內少輔を召して、大職冠の寶物、世に珍奇の物なれば、今日の引出物に給はるとて、柄鞘金襴にて包みたる太刀刀五腰を下されける。三人の家臣にも、天守を見せさせられ、寶物の刀一腰づつ頂戴したり。秀吉公此序に上京して、洛中洛外見物あれと仰せければ、有難き御諚なりと、御請申し退出し、京都に上り、秀次公へ年始御禮申上げ、洛陽の名所舊跡一見ありて、又大阪に至りて登城し給へば、國許へ御暇下され、人質五郎次郎をも返し遣すなり。伴ひ下國すべしと仰せければ、誠に有難き御志、廣大の御恩惠なりとぞ悅ばれける。頓て郡山へ人を遣し、五郎次郎を伴ひ、同船にて下られける。家中の士共岡豐に登城して、御父子御下國を賀し申しけ

る。宮内少輔宣ひけるは、京都・大坂に於て、結構の御會釋、殊更五郎次郎を返し下さるゝ事、恩惠謝するに詞なし。身に於ての安堵是に過ぎず。然れ共近年の怱劇に、家中軍功の者共に、郡縣をも與へ、妻子を心易く扶助せさせんと思ふ所に、元親さへ一國の主となれば心底に任せず。生前の報謝こそならずとも、切て戰死の跡を弔ひ、修羅の苦を扶けばやと思ふなり。近日諸宗本寺に於て、一宗の僧を集め、二夜三日の法事をなすべしと宣ひければ、上下こは有難き御諚、申すも愚なりとて退出し、日限を定め供養あり、元親も國分寺へ參詣ありしかば、武恩に浴する程の者はいふに及ばず、野人村老に至る迄群集して、國主の恩澤を仰ぐ事、嬰兒の母を慕ふが如し。是を例として、毎年怠慢すべからずとぞ定め給ひける。扨翌年の春、長宗我部宮內少輔又上京ありて、從四位侍從に任ぜらる。此外官位を進めらるゝ大名多かりけり。其故は去年七月、豐臣秀吉公、關白に上らせ給ひ、今年御禮の參內御座し、供奉の諸大名、皆敍位任官あり。

大佛材木并吉良・久武不和の事

去程に秀吉公は、聚樂に御座して、現世の榮耀、極め給はずといふ事なかりければ、後生善所の御祈の爲にや、洛陽東山佛光寺に、大佛殿を御建立あるべしと、五奉行前田德善院・玄以法印・淺野彈正少弼・增田右衞門尉・石田治部少輔・長束大藏大輔に仰付けられ、奈良の大佛師宗貞法印・同弟宗印法眼・大佛棟梁の大工等を召上せらる。材木取るべき國々、第一土佐、第二九州、第三信州・木曾・紀州・熊野にぞ極りける。奉行廿人・大工廿人を國々へ遣され、大奉行は德善院一人に定めらる。四國・九國の人數は、土佐の山中へ入りて材木を出し、淀・鳥羽へ着船すべし。伊勢・尾張・美濃三ヶ國の人數は、木曾山の材木を出し、勢州桑名より船に積み、大坂に至りて、德善院一人に定めらる。四國・九國□□ける。去程に土佐國の杣人共、山々へぞ分入りける。元親は、是れ大切の公事なれば、疎にては叶ふまじと、子息彌三郎を伴ひ、安藝郡奈半利の奥なる願寺山へぞ入り給ひて、自身下知せられしかば、家老以下の士共、東西

の山々へ手を分けて、入りける中にも、久武内藏助親信、高岡郡の奧山へ入りて、數千本の材木を、贄殿川へ出させ、とのゐの笠を着て杖を突き、川中の材木に乘りて、人數を使ひてぞ居たりける。斯る所に吉良左京進親實は、殺生の爲にやありけん、供をも具せず、唯一人弓を持ちて、川端へ出でけるが、內藏助を見て、親實爰へ出でたるを、見ぬ事はあるまじきに、知らぬ體にて笠をも脫がず、下知するこそ奇怪なれ。いで物見せんと、根矢取りて番ひしが、如何思ひけん其箭を緩め、ふくら磁頭を以て、內藏助が笠の上を、箆打にぞ射たりける。されども內藏助は、さらぬ體にて居たる所に、又初の根矢を打番ふ。土居肥前は、內藏助が傍近く居たりけるが、是を見て、いかに久武殿、あれに左京進殿御入り候が、御存知なきかと申しければ、其時內藏助笠を脫ぎ、家人を呼びて左京進へ遣し、大勢の中に候へば、御出を存ぜず、無禮の體に候。親信それへ參りて申度候へ共、是にて申付けず候へば、叶はざる事候間、御免候へと申遣しければ、左京進是にて怒り些し止みて、和ぎたる返事をぞしたりける。內藏助は西表の軍代にて、與力かけて、四萬石の進退なれば、自ら威勢も强く、驕も

ありしなり。左京進は、僅七千石の領主なれども、元親の甥なり聟なりければ、人重く經應しけり。左京進素性强氣にして、諛り諂ふ事を深く嫌ひ、絕えて堪忍なき人なれば、內藏助が驕奢を、常に側目にかけて居られたるに依りてなり。內藏助是を深く憤り、樣々讒を構へ、終に失ひけるとぞ聞えし。

土佐物語卷第十四終

土佐物語 巻第十五

長宗我部父子西國發向并軍評定の事

島津修理大夫義久とて、大隅・薩摩・日向三ヶ國を領して、大きに逆威を振へり。近年は又動もすれば、豐後國を犯し奪はんとす。當國の太守大友左兵衛督義統、屢防ぎ戰ひ、雌雄互に替ると雖、大友始終叶ひ難くや思ひけん、天正十四年十一月、京都へ飛脚を馳せて、加勢をぞ乞ひける。秀吉公聞召し、仙石權兵衛秀久・長宗我部彌三郎信親を召して、汝等早く豐後に馳下りて、大友と力を合せ、島津を退治すべし。明日伏見を立ち、本國に三日逗留して打立つべし。構へて敵を侮るべからず、疎駈すべからず。諸方牒じ合せて、合戰越度なく凱旋すべしと仰ありしかば、兩人畏りて、翌日伏見を打立ちけり。斯くて彌三郎本國に歸り、父元親に、事の由を申され

長宗我部元親親信親島津義久と戰ふ

ければ、宮内少輔若輩の身にて、大敵の討手に選み出さるゝ事、誠に武門の面目、生涯の大慶なり。但義久は、隱れなき武勇の强者なり。仙石は軍慮未練にして、取しめたる智慮なき男なり。今度の軍、心元なし。元親伴ひ行きて後見せんと、十一月廿三日、土佐國をぞ立たれける。去程に島津修理大夫義久は、同月一萬餘騎を引率し、豐後國利光村鶴が城を取圍み、三日三夜攻むれども、城主利光越前守鑑敎入道宗匡、固く守りて落ちざりけり。斯る所に十二月四日、仙石・長宗我部豐後に至り、先づ上の原に新城をぞ構へけり。島津是を聞きて、鶴が城を引拂ひ、戸次川を越えて岡山に陣を取る。同八日仙石・長宗我部二萬餘騎、大分郡戸次の庄山崎に打つて出で、大友義統一萬餘騎、利光村に出張す。權兵衞諸將を招きて申されけるは、敵川を要害に取りて支へたり。此川九州一の大河にて、頗る難所なり。然りと雖大勢に切所なし。何ぞ怖るゝに足らん。いざや諸軍一同に渡して、一戰に勝負を決すべしと申されければ、元親聞き給ひ、此川を渡さん事、以の外の大事なり。敵川端を引退きて備へたるは、堤の陰に伏兵ある事疑なし。川の半途にして、鐵炮を打立つるも

のならば、先陣は一人も、生きて歸る者あるべからず。一陣破れて、殘黨全からずといへり。殊更島津は大敵といひ強敵といひ、最侮り難し。暫く川を隔てゝ對陣し、敵の虚實を計りて、方便あるべしと宣へば、權兵衞、いや〳〵敵地に臨むもの、大河嶮岨なるは覺悟の前、恐るゝは不覺なり。又伏兵があらんとて、提陰山陰を怖れては、軍する事あるべからず。軍をせずして、敵の落つべき謂なし。兎角川を越さんとぞ申されける。三好隼人正存保進み出で、仙石殿の仰其理あり。古より川を隔てたる軍に、渡したるものは勝ち、渡されたる方負けぬる事、其例些からず。迚も合戰に臨む身なれば、延々ならんは言甲斐なし。早く川を渡されなば、人を制するの利といひ、上方の聞えといひ、旁以て潔し。只急ぎ御渡し、然るべしとぞ申しける。此三好も仙石も、先年阿州・讃州にて、元親と合戰して、毎度手痛く當られけるを、腹黑に思ひ込みて、元親の金言を否みけるとぞ、後には聞えし。時に信親、權兵衞に向ひて、何と仙石殿は、都にて出陣の時、敵を侮るべからず、疎駈すべからず、諸方牒じ合せて、越度なきやうにすべしと、再三仰せられしをば忘れ給ふか。衆議一同

して、御出勢然るべしと、しどけなげに申されければ、仙石冷笑ひ、夫軍は、時の宜に隨ふなれば、御掟を用ふる事あり、背く事あり。一概なるは軍法にあらず。若輩未練の御事なれば、斯樣の所、未だ覺悟し給ふまじ。所詮御邊は御掟を守り、後陣に在りて、秀久が軍するを見物し給へと、詞を放つて申しければ、彌三郎、仰の如く、信親若輩未練に候間、御邊敗軍の時、後陣に在りて殿を勤め、御目に懸け申さん。急ぎ打立ち給へとて、各陣に歸られしは、苦々しくぞ見えたりける。天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に加かずとこそいふに、斯く諸將一和せざる事なれば、此軍捗々しからじと、思はぬ人はなかりけり。痛はしや彌三郎、家老以下の面々を呼集め、信親、明日は討死と思ひ定むるなり。其故は、今日軍評定ある所に、權兵衞所存に依りて、明日川を越えて、戰ふに治定せり。熟地の利を考ふるに、此方より川を渡す事、民に望む狐の如し。偏に自滅に同じ。都にて秀吉公、諸方牒じ合せ、越度なきやうにと、委細に御下知なれども、仙石御法を用ひず、雅意を立つるに付、宮内少輔殿金言を盡すと雖、三好隼人正、先年の宿意を含みけるか、顏さかにして用

ひず。兩人理不盡に、川を渡すに極むる上は、我々も共に渡さずんば、武士道立たず。渡す時は、敵の謀に落されて死地に入るなり。縱令爰を遁れたりとも、信親初めて軍將を承り乍ら、御掟を背きて、而も不覺の敗軍して、何の面目ありて、再び都へ出仕すべき。然れば死すべき時節到來なり。但愚蒙の犯人に組して、不覺の名を取る事、無念限りなしと雖、死生命あり、明日を限りの定業なるべし。旁も其意をなすべしと宣へば、士共承り、御掟最勇々しく覺え奉り候。我々共が一命は、素より捧げ置候へば、今更事新しく申上ぐるに及ばず、一地に尸を晒し、名譽を後世に止め候はんと、潔くぞ申しける。羊の歩み隙の駒、此夜の明くるを限りと思ひ定めける、心の内こそ哀れなれ。

戸次川合戰附信親討死の事

さる程に仙石權兵衞・三好隼人正は、良藥口に苦く、金言耳に逆ひて、長宗我部父子が諫言顏は、畢竟心臆して詞を飾るものなり。憎さも惡し、愈肝を消させんとて、翌

くれば十二月十二日、まだ東雲も明けざるに、田宮何某を銃兵として、本陣を打立ちけり。大友も長宗我部も、同じく人數を押出す。先陣既に戸次川に打入り、白浪を蹴立てゝ渡しける所に、島津が伏兵千餘人、堤の上に駈出で、鐵炮を以て狙ひ澄して打つ程に、田宮何某・三好隼人正を始として、先魁の兵一人も殘らず、人馬共に打倒され、朱になりてぞ漂ひける。後陣の味方是を見て、馬引返さんと色めく所を、島津が先手伊集院右衛門太夫三千餘騎、得たりや賢しと、川中の瀬を渡しければ、島津中務大輔家久八千餘騎、續いて川へぞ乘入れける。さしもの大河、人馬に水堰かれて、河下の歩行武者は、臍の上をも濕らさずして、安々と向の岸に駈上り、會釋もなく突いて入り、縱横自在に打つて廻る。騷ぎ立ちたる上方勢、踏止らんとする者一人もなく、上の原へと落行きけるを、島津、餘すな漏すなと、短兵急に追懸けしかば、上の原へも入り得ずして、仙石は豐前國小倉の城へ逃籠り、大友は妙見龍王の城へぞ駈入りける。元親・信親は、遙に隔てゝ控へ給ふが、先陣の敗北を聞きて、さればこそ仕なしたれ。敵唯今味方を追うて來るべし。鐵炮を伏せ、十間より外ならば、

玉たうなに打つべからず。若駭きて、遠く放捨ちなば曲事たるべし。一人にても馬武者を打倒したるを、高名にすべしと堅く言渡し、些も動せず控へける所に、新納武藏守五千餘騎、驀地膊に打つて懸る。鎗先の合ふ程に近付きければ、鐵炮を一度に放し立つる。先に進んだる兵、將棊倒しに打倒され、しどろになりて見ゆる所を、元親・信親馬駈出し、十文字に割つて通り、巴の字に追廻し、東西に馳違へ、南北に打破り、捫立て〳〵攻めしかば、新納武藏守が兵二百餘騎討たれ、散々になりて引退く。されども武藏守、元來強勇猛氣にして、物を怺へぬ人なれば、扨も見苦しき負をしつるものかな。爰を引いて、何の爲に命をば惜むらん。唯切死に死ねや者共と、眞先に進んで、取て返して切結ぶ。勝誇りたる土佐勢、何かは些も擬議すべき。一人も餘さじと、喚き叫んで戰へば、武藏守兵又若干討たれ、已に負色に見えし所に、島津軍兵、雲霞の如く馳來り、新納が勢と一つになり、長宗我部を取卷き、八方よりぞ攻めたりける。元親・信親ちつとも怯まず、爰に顯れ彼に隱れ、千變萬化に手を碎き、大勢を追靡け打取りしかども、大軍に駈隔てられ、鷄冠木右京亮・竹田忠右衞門・久

延右京兵衞・中野市助・濱口與三左衞門・藤澤帶刀・池田惣三郎・今西藤太・池田助兵衞・濱田彌三・横田甚太郎・圓明院・極樂寺・觀音寺・常足庵陣僧を始、味方悉く討死して、元親、今は主從廿一騎になりにけり。信親の行方も知れざれば、元親、運命是迄なり。討死せんと馬より下り立ち、太刀を拔いて進み給へば、馬に放れて行方なし。十市新右衞門是を見て、急ぎ馬より飛んで下り、こは口惜き御野風かな。はや是に召されよと、我馬引いて參らする所に、元親の乘馬内記黑、何處ともなく駈來る。十市大きに喜び、家運盡きざる徵なりと、卽取りて馭せ參らせ、上の原へぞ落行きける。馬附隨ふ輩には、光富權之助・桑名彌次兵衞・中島與市兵衞・江村孫左衞門・吉田孫左衞門・同又左衞門・桑名將監・黑岩治部左衞門・谷忠兵衞・池太郎兵衞・八木三郎右衞門、馬の前後を守護しけり。爰に安並玄蕃は、敵三騎が中に駈入り、二騎を切つて落し、一騎は馬上より組んで落ちて、首をば取りけれども、深手を負ひて身も合期せず、敵の死骸に腰をかけ、味方に離れて息繼ぎ居たり。桑名彌次兵衞遙に是を見て、諸鐙を合せて駈寄せ、馬より飛下り、玄蕃を引立て、我馬に打乘せ、追懸る敵を追拂ひ追

拂ひ、元親にぞ追付きける。去程に信親は、味方皆打負けて散々になり、元親の死生も知れざれば、今は是迄と、只一途に思ひ定め、上下心を一致にして、龍粧に備を配り、靜まり返つて待懸けたり。勇氣最盛なる新納が勢、長宗我部が僅に控へたるを見て、なじかは些も休ふべき、三手に別れ、閑々と打つて懸る。信親七百餘騎、三手に颯と分れて馳合ひ、汗馬東西に馳違ひ、旌旗南北に開き分れ、追つ返しつ、卷つ卷られつ、互に命を惜しまず、七八度迄捫合ひたるに、新納が五千餘騎、殘り些に討たるれば、長宗我部が勢も、大半疵を蒙りて、朱になりてぞ控へたる。伊勢兵部丞一千餘騎、戰ひ屈したる長宗我部が勢を、弊に乘つて討たんとて、横合に駈向ふ。信親は素より思切つたる事なれば、相懸に懸りて、弓手に側め馬手に背け、打つては馳通り、突いては押拂ひ、四武の衝陣堅きを摧き、捫違へ入亂れ、喚き叫んで戰ひけり。敵味方の討たるゝ者數を知らず。互に龍虎の諍なれば、此軍いつ果つべきとも見えざりけり。武藏守は鎗取りて、猪の怒れる如く、大きに猛つて突いて廻る。細川源左衛門是を見て、願ふ所と、鎗提げてぞ向ひける。武藏守物々しやと、人交も

長宗我部信親戰死

せず戰ひしが、新納、左の腕をしたゝかに突かれて、既に危く見えし所に、郎等二人駈來り、武藏守を押隔てゝ戰ふを、伊勢兵部丞馬駈寄せ、源左衞門を鎗付けしかば、若黨頓て首を取る。信親は、餘りに手繁く駈立て〳〵戰ふ程に、乘り給へる馬の三頭、平頭三太刀斬られて、犬居にどうと臥したりけり。敵是を大將とや見知りけん、駈寄せ〳〵打取らんと、進み近付く。信親四尺三寸の大長刀を提げ、大勢の中へ割つて入り、籠手・薙手・開手・十文字、八方亂してぞ切つたりける。究竟の兵廿四五騎薙ぎ居ゑけれぱ、長刀の柄中より折れたりけり。郎等二人得たり賢しと、兩方より透間なく飛懸り、持つて開いて打つ太刀を、信親さしつたりと飛違へ、二人共に同じ枕に蹴倒し、太刀を拔いて、胴切つて捨てけり。新納是を見て、一騎合の勝負は叶ふまじ。惣軍一度に懸れと下知すれば、蟻の如く集り蜂の如く行合ひ、彌が上に重なりて、前後左右より押取り卷き、穗前を揃へて突く鎗を、ひらりと飛越え、持つて開いては丁と切り、飛違へてははたと切る。されども其身鐵石にあらざれば、精力疲れ、鈴木內膳にぞ討たれ給ふ。信親行年廿二、惜まぬ者はなかりけり。吉良播磨守・

本山將監・石谷兵部少輔、何の爲に惜しむべき命ぞやと、眞先に敵の中へ駈入り、枕を並べて討死す。是等を始として、桑名太郎左衞門・蒲原彌吉郎・千頭太郎太夫・關惣八郎・野中佐左衞門・林田八郎次郎・窪內庄右衞門・中島七郎兵衞・森右太夫・國澤左馬進・福留民部・澤野七郎・中內又兵衞・四松小三郎・庄塚源兵衞・板原又助・石本宗十郎・角田孫十郎・澤田太郎左衞門・中島次郎兵衞・永野次郎兵衞・五百藏左馬進・同六之進・永野新之丞・有瀨彥右衞門・福留甚次郎・山崎宗兵衞・池孫十郎・谷彥十郎・杉本市介・宮崎淸右衞門・豐永次郎兵衞・池宗四郎・一圓次郎左衞門・山中刑部大夫・濱田仁兵衞・久萬傳之丞・片岡三郎左衞門・岩目地右衞門・三宮右衞門尉・同新右衞門・片岡左衞門太夫・山崎勘解由・明神六之助・正木源右衞門・延澤孫三郎・久武彥右衞門・同市介・北川左馬助・中島又四郎・奧宮藏人・福留助左衞門・北川長介・大坪彥五郎・久武左之助・室津右衞門・淨僧慶通・上村玄蕃佐・十市市之丞・橫山喜介・市原彌平左衞門・上村藏人・十萬與介・入交左馬丞・山本磯之丞・入交勘兵衞・同右衞門・中左衞門・平等寺七郎兵衞・近淸外記・末延次郎兵衞・北谷彌十郎・山崎玄蕃丞・入交右京兵衞・中五郎右衞門・入交六郎太郎・

村上與七兵衞・福萬七兵衞・市原彌左衞門・池彌八郎・大日寺先達・千屋左兵衞・別役三郎左衞門・長谷川忠之丞・高井五郎太夫・島村太郎兵衞・岡上善右衞門・大峯寺彌市郎・廣井六郎兵衞・西村吉太夫・岡崎太郎右衞門・前田源十郎・萩野左馬助・岩川忠兵衞・古屋與七郎・國澤孫介・黑代與三郎・龜岡傳兵衞・中島左馬丞・福留惣十郎・鍋島新之丞・上村太郎兵衞・北代藤內・横山修理・近澤嘉兵衞・野中右近・野中市正・梶佐古源左衞門・西尾佐衞門・佐森式部丞・森半太夫・南川主水・相川修理・森岡久右衞門・永瀬逢殿介・瀬戸兵衞助・平石左馬丞・蒲原右京進・瀧本左馬進・吉良權之進・杮內善太郎・同三郎左衞門・小野左衞門進・同助左衞門・福留隼人・細川次郎太郎・依光越中・三宮六兵衞・片山孫左衞門・入交藏人・池內次郎左衞門・久甫內藏人・同新兵衞・池內左衞門丞・同又之丞・同七郎左衞門・森田左馬介・岡本善助・富家彌九郎・池內彌八郎・鷄冠木彌太郎・野口庄兵衞・權藤新右衞門・門屋三介・永崎市介・竹島治兵衞・池左近右衞門・坂本七郎右衞門・伊丹市兵衞・矢野式部・岡崎新兵衞・波越龜太夫・稻毛右京進・椙本六兵衞・同孫右衞門・吉松左衞門丞・同彥五郎・同主馬助・楠瀬隼人・田部右京進・津野右衞門助・山崎傳兵衞・津

野藤藏・依岡右京進・岡宗越前守・增田修理・本結彈正・飛鳥井何某・奥突兵衞・則勘解由・森近藤吉郎・秋森九兵衞・尾崎吉右衞門・濱田左衞門・吉村三介・本山掃部・岡崎某・黑原某・吉本助兵衞・前田源兵衞・門田某・西川某・久萬左衞門・大高坂新介・矢野藤三郎・森近六太夫・入交源右衞門・吉良市正・吉松太夫左衞門・久萬助九郎・川島次郎兵衞・中山兵部・友成關右衞門・馬場主馬介・坂本七郎・立石織部・國澤源兵衞・森岡藤介・鍋島五郎太夫・國澤又右衞門・前田菊右衞門・島井七郎右衞門・久萬新七郎・濱田源十郎・野口甚太郎・岡宗右衞門進・入交左兵衞・平田縫殿太夫・西尾彌四郎・岡本平太夫・森忠右衞門・下村彌八郎・楠瀨與右衞門・十市新之丞・五百藏彌十郎・淺野十兵衞・同彌四郎・一圓松熊・借屋熊千代・田所某・松崎新藏・大石左兵衞・奥彌藤次・上倉某・吉次某・吉松筑前・入江權介・國澤右近、此外精兵都合七百餘人、我先にと駈出で〳〵、一騎も殘らず皆切死にこそ死にけれ。味方の討死、二千七百廿七人とぞ聞えし。

信親死骸葬る事

去程に元親は、打殘されたる兵廿一騎を率ゐて、上の原の城へ引取られしが、此勢にては、城を持悇へんやうなしとて、其夜沖の濱といふ船津へぞ退き給ふ。高崎の城下を過ぐる所に、近邊の盜者千餘人、落人の通るぞ。物具剝げと呼びて、行先を塞ぎ、弓鐵炮を揃へて待懸けたり。元親馬を控へて宣ひけるは、今人馬共に疲れ、矢玉は皆盡きぬ。敵は若干の大勢なり。迚も叶はぬ物故に、言甲斐なき奴原が手に懸らんより、爽に腹切らんと、馬より下りんとし給ふを、桑名彌次兵衞押止め、是こそ口惜き御諚に候へ。鄕人原大勢なればとて、何程の事か候べき。一々追拂ひ申すべしと、馬を驅寄せ、大音上げ、長宗我部宮內少輔豫州の方へ通る所に、道を塞ぐは何者ぞ。急ぎ開けと呼ばはりたり。時に一揆の張本と思しくて、眞黑に鎧ひたるが、大長刀を搔込み、何條誰にてもあらばあれ、武具を脫ぎて渡さずんば、全く爰をば通さじと、長刀取込み打つて懸る。桑名馬よりひらりと飛下り、刀を廻して戰ふと見えしが、つつと入りて眞逆に蹴倒し、首宙に打落す。是を見て大の男、遁すまじと大斧を持ち打つて懸る。中島與市兵衞十六歲、是をば重房請取るなりと驅出づ

るを、優しの小冠者の振舞やと、持て開いて打つ所を、飛違へ斧を踏落す。こは無念と、太刀を拔かんとする所を、弓手の肩先より、馬手の乳の下まで切付けたり。殘る兵一同に、いで奴原か欲しがる物具を取らせんと、吐と喚いて懸りしかば、慾心熾盛の一揆共、蜘の子を散らすが如く、跡をも見ずして逃げたりけり。元親見給ひ、彌次兵衞が手柄は、今更珍しからず。與市兵衞弱年の擧動、天晴父與市兵衞にも劣るまじと、坐に稱美して、駒を早め給ふ所に、味方の軍兵追々に馳來り、信親討死の由を告げしかば、さしも剛なる元親も、東西暮れたる心地して、行先も覺えねども、駒に任せて船津に着き、それより伊豫國日振の島へぞ落ちられける。哀れなるかな元親は、忘れんとすれども忘られず、惠日寺谷忠兵衞を、新納武藏守の方へ遣し、今度豐州戸次合戰の御擧動、古今に獨歩して、感賞するに餘りあり。夫に付愚息彌三郎戰死を遂げ畢ぬ。且は武士の本意、且は天下の御用に立ち、誠に一家の鼻目是に過ぎず。依て彼死骸を申請度候とぞ申されける　新納是を聞きて涙を流し、我れ先年不思議の緣にて、宮內少輔殿と交會す。其後對面せずと雖、書音を通じて

好深し。然るに去る十二日の合戰に、御子息彌三郎殿に出會ひ一戰に及び、手勢大略討取らると雖、聊武運に叶ひ味方打勝ち、彌三郎殿御戰死を遂げらるゝの段、軍の習とは申し乍ら、近頃本意なき事に候。早速是より御死骸を送り進ずべき所に、手前の怱劇に忘却せしめ、延引に及ぶ事、頗る舊友の好を忘るゝに似たり。最心外是に過ぎず。夫武士の戰場に於て、討死は素より期する所にては候へども、恩愛不朽の道、宮内少輔殿の御心底察入候。彌三郎殿此度の御擧動、其名譽人口にあり、是を以て御心を慰せらるべしと、懇に言含め、兩使に人を添へ、軍場へ案内せさせ、信親の死骸をぞ尋出しける。忠兵衞申しけるは、御死骸を其儘具して參れと仰なれども、唯是にて煙となし奉らんとて、惠日寺を導師にて火葬し、骸骨を取りて歸りければ、武藏守、彼還使に使者を添へて、信親の甲冑太刀をぞ贈られける。元親は、二目とも見ず、淚に咽び給ひければ、近習の輩、急ぎ側へ取除けてとりどり是を見るに、太刀は鍔元より切先まで、寸のあき所なく切込ありて、太刀の形にあらず。甲冑は矢玉・太刀・鎗の跡、算ふるに遑なし。袖も草摺も續きたる所はなかりけり。實にも夥しき

擧動なりしと、諸人驚感するも理なりと、各涙を流しける。 斯くて忠兵衞を使として、彼骸骨を高野へ上せ、奥の院に納め、天甫常舜と謚し、往生院谷藤の坊を宿坊として追善あり、常舜居士の石塔を立て、其前に大將分十一人の石塔、三行に立並べ、惣軍兵の爲には、大卒都姿を立てらる。 其文に曰、

豐後國大分郡戸次庄戰死之甲首七百餘人同靈等、正覺頓證菩提一偈云、功名永留武門中、按レ劔雄夫勢在レ空、能動二山川一流二汁血一、朧天十二一陣風、于レ時天正十四丙戌年十二月十二日、施主秦元親建焉。

其後土佐國吾川郡浦戸に一宇の大伽藍を建立して、天甫寺と號し、常舜居士の御影、幷忠死を遂げし面々の姓名を過去帳に記し、供物香華を備へ、朝暮の勤行懈怠なく、佛法繁昌の靈地となる。

信親在世物語の事

去程に信親討たれ給ふ由、土佐の國へ聞えしかば、闇夜に燈消え、小兒の母に後れた

る如く、貴賤上下、歎き悲しむ事限なし。抑彼信親は、如何なる人にて御座せば、是程には惜むならんと、其在世を尋ね聞けば、今年僅に廿二歳、背の高さ六尺一寸、色白く柔和にして、詞寡く禮讓ありて嚴ならず、戯談すれども猥ならず、諸士を愛し給へば、國人自ら恐れ敬ひ馴れ懐く事、父母の思をなしければ、元親、子乍らも恥かしきとぞ宣ひける。此人いぶせき田舍に生長し給へば、萬無骨にして、賤しくあらんずらんと思ふに、詞遣ひ・衣紋・立居行跡に至る迄、優にやさしくぞ御座しける。是を如何にと尋ぬれば、當國は一條殿數代御座して、國中の上下拜趨して、禮儀を見習ひける故にやあらんと、いふ人もありけれ共、是は一向元親の功なりとぞ聞えし。其故は、元親常に宣ひけるは、司馬温公勸學歌、養子不教父之過、訓導不嚴師之惰、父教師嚴兩無外、學問無成子之罪といへり。又詩に云、君子民之父母。吾領内の諸人は、大となく小となく皆我子なり。敎へずんばあるべからずとて、御子息を始、家中の士の子供を集め、師を定めて藝能を習はせらる。先づ手習の師には、吸江庵の眞藏主・恩藏主、在岡豊して指南す。謠は藤田が弟子宗印、京より下り、知行給はりて

居住す。鼓は勝部勘兵衛、泉州堺より呼下りて知行給はる。笛は小野菊之丞在京して、玄笛に傳授して印可を取る。太鼓は頭我惣右衛門父子、京より下り、知行を給はりて住居す。鞠は飛鳥井曾衣御下向、御住國ありて指引なり。碁は太平捨牛・森勝介在京して、本國坊先の碁なり。諸禮は桑名太郎左衛門・中島與市兵衛在洛して、小笠原家に入りて相傳す。馬は產方休少、鑓薙刀は太平市郎右衛門とて、眞道流の師なり。又甲藤市之介とて、素鑓の名人、京都より呼下さる。太刀は須藤流の師あり。又伊藤武右衛門とて、精參流の上手なり。弓は大藏才八、岡豐の城中七夕が尾といふ丸に弓場を構へて、毎暮に的あり。鐵炮は近澤越後指南す。毎月朔日に鐵炮揃をして、目當を打たせらる。元親人に語り給ふは、總じて我家中に、鐵炮の者とて格別にはなし。士たるもの、戰場へ鐵炮を持たせざるは一人もなし。士百人出づれば鐵炮百挺、千人出づれば千挺あり。合戰に勝利を得る事、三度に二度は鐵炮にて打崩し、鑓の柄の取れぬ事多し。是に依つて鐵炮を專要とする所に、下針をも打つ程の上手共、其數を知らず。士大將物頭等も、皆鐵炮のものなりと宣ふなり。和歌は小松谷

寺覺樱を師とし、連歌は蜷川新右衞門入道道標を宗匠とす。元親常に和歌を好みて是を學び、會をなして樂み給ひければ、上の好む所、下必隨ふ習ひにて、大月代の剃下天窓に茶筌髮、短き袴に長刀差し、肱を張り目を怒らし、訛聲なる男にも、無骨の中に優しき事などありて、賢しき事共多かりけり。惣じて諸藝の達人は、上下を分ず選び擧げ、又は他國より聘招し給へば、武藝はいふに及ばず、圍碁能書を始め、諸藝に名を得る輩は、其數限りはなかりけり。されば信親、斯る優美の內に成長し給へば、萬美しかりしも理なり。されども信親は、武道の外は雜事なりとて、强ひて小事に精しからず。只其身の器用に任せ、なるをばなるとし、ならぬをばならぬとして、常に軍書を講じて武義を論じ、劍術輕業を嗜み給ふ。中に就いても手勢七百餘人、一騎も殘らず討死したる事、例稀なる事共なり。

長宗我部五郎次郎御朱印頂戴の事

さる程に豐後の軍、仙石權兵衞が無法故、寄手大きに打負け、十河・田宮を始め、軍兵

共敢なく討たれ、仙石・大友は豐前の國へ逃行き、彌三郎は討死し、宮内少輔生死知れざる由、追々都へ聞えしかば、秀吉公大きに怒りて仰せけるは、權兵衞は元來强氣無法の者なれば、敵を侮るべからず、踈駈すべからず、衆議一同の上進退すべしと、再三堅く軍議を示す所に、其儀を用ひず、宮内少輔が諫を聞かず、雅意に任する事、上を蔑如し、同僚を輕慢す。曲言の專一なり。察するに彼、其先宮内少輔に手痛く當られし事を、深く心意に狹み、今度公儀を借りて讐を返し、元親に恥辱を與へんとして、却て己に及ぶものなり。武士の本意にあらず。彌三郎、同列の罪遁れざる所を知りて、潔く討死す。不便といふに餘りあり。吾彼が不快を知らず、相將に列する事、甚以て越度なり。今更悔ゆるに益なし。元親若し討死せば、土佐國の一揆共其弊に乘りて、狼藉する事あるべし。且は忠死の跡なればとて、國政の事を仰付けられ、増田右衞門尉・藤堂與右衞門を上使として、土佐國へ差下し、元親の二男五郎次郎親和に、御朱印をぞ下されける。

豐州府内合戰、仙石權兵衞任二强氣一、元親武功不二眞用一、軍兵敗北之刻、信親掛向打果

候由、憐惜不レ淺思召候。宮内少輔一左右爲レ被二聞召一度兩人差下、縱父子相果候共、其國之事其方宛行畢。猶藤堂與右衞門・增田右衞門尉可レ令二宣舌一者也。

十二月十九日　秀吉

長宗我部五郎どのへ

此五郎次郎は、其先讚州香河民部養子にして、香河五郎次郎と申しけるが、四國御退治の時、香河も御改易ありしかば、土佐へ歸り、小野といふ所に、微にて住居しける。一年人質として、淺野孫次郎代りに上京して、御目見をもしたりければ、秀吉公も御存知にて、御朱印を成下されしなり。去程に元親は、豫州日振へ立退き、桑名將監を使として、軍の次第京都へ注進して、來春臼杵へ立越え、秀吉公の御出馬を待つべしとて、卽ち日振に滯留ある、心の內こそ哀なれ。斯くて憂かりし年も暮れて、明る春になりしかば、秀吉公西國へ御動座の御先手として、大和大納言秀長卿豫州へ御下向あり、元親へ御朱印を渡さる。

今度仙石權兵衞尉於二彼表一失レ利候段曲言に候。卒爾働不レ可レ仕、能々可二示合一由、重

重申聞候處、如此の儀無是非候。彌三郎討死、尤忠節無比類候。然者元親無異議曰杵抱付可入城由宗滴言上候。誠丈夫の覺悟不堪感候。當春早々出馬、島津事速可討罰候。其間之儀彌休庵令相談、堅固之行專候。猶秀長可申也。

三月三日　　秀吉

長宗我部宮内少輔殿

斯くて仙石權兵衞は御改易あり、讃岐國を尾藤甚右衞門拜領しけるが、秀吉公九州御出馬の時、聊不義あり。其の科に依りて讃州を召上げられ、生駒讃岐守正俊に下されけるが、子息壹岐守高俊に至りて領國を召放さる。易は變易を常とするといへり。

秀吉公九州御退治の事

關白秀吉公は、九州御退治あるべしとて、畿内五ヶ國、北陸道の内五ヶ國、近江・美濃・尾張・伊賀・伊勢・南海道六ヶ國、中國十六ヶ國、以上卅七ヶ國、其勢廿萬餘騎、天正十五

秀吉九州へ發向

年二月朔日より、先勢打立ち、同下旬後陣渡海せしかば、秀吉公、三月朔日洛陽を立ち給ふ。津々浦々御順見ありて、同廿六日、筑紫の地に御着陣、門司の關にて、軍評定ありて、諸方へ手分あり、要害に楯籠る者をば攻亡し、降を乞ふをば赦して安堵させ、城を明退くものあれば、番を入置き給ふ。其威、洪水瀧をなし、暴風枯木を碎くが如く、向ふ所隨順せずといふ事なく。攻むる所、相傾けずといふ事なかりければ、島津修理大夫義久敵し難く、剃髮染衣となりて、陣下に降參せしかば、御宥免ありて、本領安堵す。斯くて殿下は、遠國の果々まで、些も殘さず退治せんと思ふは小志なり、殘る城々を始め、縱ひ一揆の大將任俠の僧坊たりとも、赦免せしむべき由仰出され、所々に高札を建てられしかば、國々野の末山の端まで、皆萬歲を唱へて、喜ぶ事限なし。五月下旬に至りて、九州悉く御平均、六月朔日より、有功の輩に御恩賜あり、九州の御仕置仰付けられ、七月十四日大坂へ還御なされけり。

島津義久降伏

專式坊法印誅伐の事

土佐國安藝郡和食村に、僧俗主従六七人蟄居するものあり。何所より來り、如何なる者といふ事を知る人なかりしが、誰れいふともなく、紀州根來の大將、專式坊法印なりと言觸らしければ、近邊の者共は、法印の御坊とて、深く尊崇しけるとや。斯る所に關白殿、諸國へ御教書をなされ、專式坊が在所を尋ね捜し、不日に討手出すべしと、嚴密の御下知あり。元親安藝郡の軍代吉田孫左衞門幷山川五郎左衞門・黒岩治部左衞門を、岡豊へ召されて宣ひけるは、所々の御教書到來す。彼法印當國和食に隱れ居る由、豫て聞及ぶと雖、窮鳥懷に入る時は、獵師だも殺さずといへり。法印根來反逆の張本たりと雖、流石に出家といひ、微の體にて隱れ居る事なれば、何程の事あるべきと、空知らずして打過ぎぬ。然るに斯の如く下知の上は力及ばず、旁急ぎ和食へ立越え、隨分たばかりて討取るべし。構へて敵を侮りて、不覺を取る事なかれと、委細に示し給ひけり。三人畏りて、退き評定しけるは、彼等は武勇の者と聞く、一所に置きては惡かるべし。又討洩らす事もあるべし。たばかり討てと仰の上は、法印の弟平十郎をば、礒傳ひに手結浦へ遣し、歸る所を討つべし。我々は

法印を訪ひ、座敷の折を見合せ、初太刀は治部左衛門、二番は五郎左衛門、三番は彌左衛門と定め、其外の者共は、其時宜に依つて計ふべしと、先づ若士を遣し、平十郎を誘ひ、手結の汀へぞ出でにける。安藝和食の住人共、如何して聞きたりけん。專式坊の討手に、吉田・山川・黑岩向ふと聞き、我々共近邊にあり乍ら、知らぬ由にて出合はぬ者ならば、且は恥辱なり、且は後難遁れ難しと、未明より專式坊が家を取廻し、我れ討取らんと、勢懸けてぞ居たりける。吉田・山川・黑岩和食に至り、此由を見て大きに驚き、たばかり討てと御諚ありしに、偖も是非なき事共かなと、近々に駈寄せ、大音聲にて、下知なきに推參するは何者ぞ。奇怪なり。一人も殘らず皆々早く立退くべしと怒りければ、何れも其所を立退きけるが、事の樣を見んとや思ひん、遠卷してぞ居たりける。黑岩此上は、謀計に及ばずとて、鎗取りて內に入り、大音上げて、法印の御坊幷附き給ふ輩、一々討取り申すべき由、關白殿の御下知に依りて元親の仰を蒙り、吉田孫左衛門・山川五郎左衛門・黑岩治部左衛門罷向つて候。迚も叶はぬもの故に、急ぎ御腹召され候へと呼ばはりけれども、人音もなし。治部左衛門

怒りて、足音荒らかにして、奥へ入る所に、専式坊薙刀提げ立向ひ、莞爾と笑ひ、治部左衞門參るといひて、長刀水車に廻し、火花を散らして戰ひけるが、法印運や盡きたりけん、突伏せられけり。地藏院とて、大力の法師是を見て、こは無念なりと、大太刀拔いて治部左衞門に打つて懸る。黒岩、左の手にて法印を突止め、右の手にて太刀を拔き、下つて裾を拂ひければ、地藏院が左の高股切つて落す。黒岩も手負ひしかども、薄手なれば事ともせず、二人首をぞ取つたりける。座敷は狹し、戶はたてつ。法印の郎等三人、黒岩を目蒐け、切つて入らんとすれども叶はず。吉田・山川も、また續いて入る事も叶はねば、黒岩を討たせじと三人を防ぎ戰ひ、二人をば討取りけり。今一人は、岩佐六郎左衞門とて、大力の早業、廣庭に飛んで出で、小篠一村ありけるを小楯に取りて、太刀拔き側め居たりけり。詰懸けたりし若者共、是こそ望む所よと、七八人打て懸る。六郎左衞門、先に進む二人を同じ枕に切倒し、血刀打振り飛ぶが如くに驅出で、和食・土居の城にぞ籠りける。在合ふ若者遁さじと、我も〳〵と追懸る。六郎左衞門、城戶の脇に平伏して、眞先に進む兵の、諸膝ずんと薙ぎ居ゑ

たり。跡に續く大勢、些し猶豫して見えける所を、切岸を小楯に取りて、石垣を引外し、續打に打つ程に、卅八人落花の如くなりにけり。此勢に辟易して、遠矢に射てや取る、燒打にやすると、まち〳〵に詮議して、近付く者はなかりける。爰に和食惣右衞門は、吉田又左衞門に所用の事ありて、馬の上の城に行く事を談じて居たりしが、此由を聞くと等しく、兩人相共に逸足を出して、土居の城に馳着き、惣右衞門は追手の門より押入り、又左衞門は、搦手よりぞ駈入りける。岩佐六郎左衞門は、一方打破りて、落行かんとや思ひけん、搦手の門へ、猪の如く大きに唸つて駈來るが、又左衞門と、出合頭にはたと逢ふ。六郎左衞門只一打ちにと打つ所を、又左衞門さしつたりと飛違へ、打てば外し、薙げば開き、互に手利の達者なれば、暫く勝負見えざりしが、六郎左衞門は、今朝よりの戰に疲れてやありけん、終に吉田に討たれけり。さる程に平十郎は、若殿原に誘はれ、手結の汀に立出で、海上を遠見して餘念なき所に、此方便をや聞きたりけん、若士平十郎が後へ寄るかと見れば、御諚ぞといふ詞と共に、拔打にぞ切つたりける。平十郎心得たりと、飛違へ拔合はせ、二打三打打

つとぞ見えしが、彼男二つになりてぞ失せにける。殘る者共、思ひ寄らざる事なれば、上を下へと周章つる所を、平十郎當るを幸に、前後左右を切つて廻れば、蜘の子を散らすが如く逃げにけり。法印と一所にならんと、磯傳ひに和食の方へ行く所を、別役左衞門とて、强弓の矢繼早、よつぴいてひやうと放つ、無慙や平十郎が胴中をかけず射通し、後より前へ七八寸計り射出したり。さしもの勇者と雖、大事の手なれば、うんと計を最後にて、岩の上に倒れけるを、頓て首を打落す。其外の者共も、爰彼所にて討たれにけり。法印の甥地末又右衞門は、法印の勘當を得て、他所へ立退きて居合さず、不思議の命を扶かり、後には種崎浦に隱れ居て、病死しけるとぞ聞えし。

城替の事

宮内少輔元親、如何なる思惟にかありけん、數代住馴れし岡豊の城を改めて、大高坂へ移さるべしとて、天正十二年の頃より、其催ありしかども、世の忩劇に押移り

元親居城を大高坂山に移す

て、暫は沙汰もなかりしが、同十五年には事極りて、大高坂山に城を築き、國澤に町家を立て、翌十六年の冬、城移りありければ、士はいふに及ばず、商家民屋を毀ち、資財雜具を持運べば、岡豐は忽に、冬野が原と寂び返り、國澤は暫時に花の都をなせり。此大高坂と申すは、高坂村に山あり、西は小高坂山、東は大高坂といひ、大高坂より東を國澤と號す。源の順が和名集に、土左郡土左高坂と書きたり。其土佐とは、此國澤の事とかや。東西南北は皆大河なれば、四方に堤を築き、南の川には、潮江山麓より、城の南犬の場へ、二百間餘の大橋を架け、其外四方に渡船を置かれければ、往還の猶此要用のさゝはりなかりけり。されども此地境內狹く、民家を立つる壘地なければ、淵を埋め川を潰し、地形を築きて、廣くせばやと宣へども、四方皆大河にて、而も北に洞島の淵・鱸岩、東に太布が淵・龍が淵・知寄などいふ底もなき淵なれば、輙く埋草も及ぶ所にあらず。其上奧山より流れ出づる水強く、堤崩れ、町屋へ洪水入る事度々なりしかば、貴賤上下、こは如何にせんとぞ悲しみける。元親も、岡豐は皆毀ちて引越しぬ。未だ安座せず。唯中有の旅に迷ふ心地ぞし給ひける。爰

に久禮田左兵衛とて、優しき男あり。年月住みし故郷の空、懐しくや思ひけん、小船に棹し、國澤を東へ、一宮・田部・島・布師田を經て、岡豐に至りて見れば、昔の形もなく、我が往來みし邊は、何處ならんと疑ふ計なれば、王質が仙家より歸り來りて、七世の孫に逢ひけんも、斯くやと思ふ計にて、坐ろに涙も止まらず。先づ常通寺に入りて、常通居士の御影を拜し、夫より八幡宮に參り、通夜して居たりければ、神主谷左近立出で、互に昔を語り、月面白かりければ、終夜酒飲み、石清川の月を見渡して、左兵衛、

石清川清き流れにすむ月の影は昔にかはらざりけり

故郷は皆替り果てたるに、唯石清川の清き流れと月の影のみ、昔に替らずと、神の御惠みの常なるに準へて、昔を偲びたる詞の末こそ優しけれ。去程に士を始、人民安座せざる由聞き給ひ、又浦戸へ移らるべきに極り、翌十七年より城普請あり、同十九年に、浦戸の城へぞ移られける。年月住みし岡豐より國澤へ移り、二年のたつやたたずして、又浦戸へ移り給へば、こはそも何事ぞやと、上下驚く計なりしが、月を重

居城を更に浦戸に移す

ね日を積みて、住めば都になりにけり。

秦泉寺父子最後の事

秦泉寺大和守は、元親創業の初より幕下に屬し、無二の忠臣なりしが、其子掃部も、勇氣父に劣らず、數度の高名を顯はしけり。其勇功に誇り、諸士を直下に見なし、雅意に任せてぞ行動（おこな）ひける。上を學ぶ下なれば、近習の士はいふに及ばず、掃部が領内の百姓迄も、無禮不義をぞ盡しける。天正十六年の秋、秦泉寺の百姓と一宮の鄕人と、際目の論を仕出し、互に雜言肱卷りして張合ひ、後には鎌鍬棒ちぎり木にて、打合ひ突合ひける程に、兩方に手負出來て、一宮の百姓二人突殺され、殘る者共、這這逃げてぞ歸りけり。神職共驚き、寄合評議して、掃部に使を遣し、百姓共諍論致し、御領分の百姓共、此方の百姓二人打殺し候。御領内御吟味あり、相手の者斬罪仰付けられ候か、さなくば其者搦めて、此方へ下され候へと申遣しければ、掃部聞きて、惣じて恥なき下部共のいさかひは、力次第なり。負けたるは言甲斐なしといふ

者なり。下郎のいさかひを、領主の知るべき謂なし。又神職達の取持たるべき仔細もなし。使の段心得難しとぞ申しける。神職共腹を立て、扨は我々を欺くにこそ。さらば力次第にすべしと、近邊の郷民を催し、既に秦泉寺に押寄せんとす。掃部、こは心得ぬ神職共が肱立かな。哀れ寄せ來れかし。一人も生けては歸すまじ。其弊に乘りて、一宮を打取るべしと、齒嚙をなして待懸けたり。此由元親聞き給ひ、急ぎ一宮一人を遣し、私の遺恨にて我意を立て、干戈を動す事不義の至り、神意を背くにあらずや。意趣あらば詳に訴へて、裁許を願はるべしと申遣されければ、神職共は靜まりけり。掃部へも人を遣し、喧嘩の相手、隱し置く事不屆なり。急ぎ搦めて出すべしと、急度言遣しければ、掃部冷笑ひ、郷民のいさかひを、我れ知るべき謂なし。不屆と思はるれば、其者を其方より召捕られ候へと、荒らかにぞ申しける。使歸りて、事の由を申しければ、元親大きに怒り給ひ、掃部我に向つて楯を突く、天晴自業自得果を招く者なり。瀬に任せて搦取り、世間の見懲にせんと、三百餘騎の兵を差向けらる。堂の奈路の遠見の者、軍勢寄せ來るを見て、城中へ告げければども、素よ

り期したる事なれば、些も騷がず、靜まり反つてぞ居たりける。此堂の奈路と申すは、往昔秦泉寺とて大伽藍ありしが、兵火の爲に燒失せ、其後は再興もなく、其寺地計り殘りたるを、堂の奈路と申すなり。城の東の山上にて、東西五六里の間は、曇なく見え渡る所なれば、常に用心の爲に、遠見の者を置かるゝなり。寄手の大將中島大和、只一摑にと、喚き叫んでぞ攻めたりける。掃部は素よりしたゝかなる者なれば、究竟の兵を前後に備へ、暮雲の雨を帶びて、山野を埋むる如く、眞黑になりて驅出で、命を塵芥に比して、面も振らず戰ふ程に、寄手一卷りに驅散らされ、立足もなく敗北す。城兵備を亂して追懸くるを、掃部下知して、長追なせそと士卒を纏め、閑閑と城の內へぞ入りにける。中島大和初度の軍を仕損じ、勢を二つに分け、一手は城の大手に向ひ、一手は山の手よりぞ押寄せたり。掃部是を見て、堂の奈路へ、鐵炮二三十挺出し置き、山の手を防がせ、其身は城に在りて、軍兵をぞ下知しける。大手の寄手、門押破らんと摑立つれば、城中にも、爰を專途と防ぎ戰ふ。山の手の寄手共、鬨を作りて押懸くるを、堂の奈路の兵共、鐵炮を一度に放し懸けしかば、寄手若

干討たれて、進み兼ねて見えける所に、國澤將監、此方よりも鐵炮をつるべかけ、其勢に攻上れと下知すれば、百五十挺の鐵炮を打立て押上り、城を目の下に見下し、雨の如くぞ打入れける。掃部、心は猛く勇めども、前後の敵を防ぎ兼ね、軍兵共殘り些になりければ、一先づ何地へも落行かんとや思ひけん、三谷の方へ行く所を、津の島の北の山際にて、濱田善右衞門追懸け、まさなうも敵に後を見せ給ふものかな。返し給へと詞を掛けゝれば、掃部、返すに難き事かとて、馬引返す所を、善右衞門、素鎗を以て高股を突きけるを、掃部事ともせず、太刀拔いて打合ひしが、さしもの掃部も、痛手負ひければ、終に濱田にぞ討たれける。掃部の子豐後も、大きに勇を振ひ、一足も退かず、潔く討死す。爰に池の領主池市正賴定は、元親の妹聟なるが、如何なる宿意かありけん、秦泉寺に內通して與したりけり。掃部誅伏の後も、暫くは誰知る人もなかりしが、隱謀終に顯はれ、文祿二年十一月十九日、仁井田に於て、舍弟四郎左衞門、共に詰腹を切らせらる。

不義の輩誅罰の事

去程に元親は、秦泉寺を亡し、惡を懲し善を勸め給へども、狩繁ければ鹿生ず。絕えぬは不義の輩なり。爰に萩野織部・横山伊賀・鷄冠木次郎左衞門とて、何れも劣らぬ勇者にて、數度の武功隱れなし。されども梟惡不義の聞えあれば、急ぎ誅すべしと、久萬兵庫が組の士二人、其外改田修理・上田吉左衞門・依光淸兵衞を討手に定めらる。中にも萩野織部は、韮生の鄕萩野の領主なり。元は山田治部少輔が恩顧なりし。山田滅亡の後は、元親に仕へてぞ居たりける。久萬兵庫が組の小性二人を、討手に向けられけるが、若し討洩らす事もやあらんとて、助太刀に、又同じ組の小性二人をぞ添へられける。久萬兵庫は、我組の士、若し仕損じやせんと心許なく、四人の跡を慕ひて、見え隱れにぞ立越えける。織部豫て覺悟やありけん、父子晝夜放る事なく、用心してぞ居たりける。先づ兩人何となく行向ひ物語して、油斷の所を討つべしと、相圖しけれども、父子一所に並び、刀を膝の下に敷いて、眼を四方に配

り、中々たばかるべきやうなかりければ、二人きと目配せして、御諚ぞといふより早く、太刀を拔いて飛懸る。父子心得たりと拔合ひ、暫く切合ひけるが、二人の討手、共に討たれてぞ倒れける。助太刀の二人、遁さじと駈入り戰ひしが、是等も深手負ひ、旣に危く見えしかば、兵庫怺へ兼ね、太刀を拔き渡り合ひ、織部が子源藏を討取りければ、織部、こは無念と駈寄るを、左の鬢より、肩へ懸けて切下げたり。織部倒れ様に兵庫が高股を、半過ぎてぞ切つたりける。兵庫は萩野父子が首を取りて歸りしが、其身も深手負ひければ、一兩日程經て終に死にけり。横山伊賀は久禮田の領主なり。我身の科、遁れぬ所を知りて、討手や來らんと待懸けたり。改田修理、討手として久禮田に行向ひ、築地の外より大音にて、是は蚊居田修理なり。我常に御邊と入魂たる故に、討手を承り參りたり。尋常に切腹し給へ。介錯すべしと呼ばはれば、横山是を聞きて立出で、某が討手に、雜兵など來りなば、只自害せんと思ひしかども、御邊參られたるこそ本意なれ。最後の思出に、一勝負して、冥途の土産に致さん。參りさうと鎗提げ打向ふ所を、伊賀が二男、父を押隔て飛んで懸るを、修理鎗を

以て眞向を打つて打居ゑたり。嫡男續いて懸りしを、兩足をかけて打倒す。伊賀是を見て、こは仕損じたりと駈寄り、暫し勝負見えざりしが、横山運の極にや、眉間を突かれて倒れたり。修理は三人の首を取り、元親の實檢に備へしかば、大きに感賞ありて、差添の太刀をぞ給はりける。鷄冠木次郎左衞門は、弘岡に住し、常に牛馬を殺し、犬の四足を切つてまろばし、猿を捕へ、生き乍ら面の皮をはぎ、下人些の科あれば、胴中を括りて、木の上へ吊上げ、或は逆に川へ入れては引上げ、入れては引上げさいなみ、斯る惡行數限りなく、是を晝夜の樂とす。元親是を聞き給ひ、鷄冠木は我一族なり。若緩々の沙汰に及ばゝ、依怙贔屓の譏ありて、國政の妨なり。上田吉左衞門・依光淸兵衞行向ひ、討つて捨てよとぞ下知せられける。兩人弘岡に行き、次郎左衞門に對面して、不義の振舞を聞召し、元親御立腹の由を述べんとすれば、次郎左衞門聞きも敢ず、心得ぬ事かな。我領內にて自由に働くをば、誰ありて咎むべき。扨は旁は、某が討手に來りたるかといふ。吉左衞門仔細にや及ぶと、刀を拔いて飛懸る。次郎左衞門心得たりと、拔合せんとする所を、淸兵衞駈寄り、終に難なく討留

めけり。此鷄冠木と申すは、中御門治部卿の舍弟鷄冠木大膳大夫が孫なり。大膳大夫は、一條房基公の伯父なれば、當國に下りてぞ住しける。大膳大夫子七人あり。嫡子善太夫。二男市太夫。三男右京。四は女子、吉良左京進親貞が妻。第五女子、北代對馬守が妻。第六女子、吉田左衞門佐孝俊が妻。第七女子、故ありて尼になる。中にも三男右京に、六人の子あり。一は入江半三郎妻。第二は室津某妻。第三は中內惣右衞門妻。第四は久武內藏助妻。五男は又右京といふ。六男次郎左衞門、彼暴惡人是なり。大膳大夫子供は、元親には從兄弟とも再從弟とも申すなり。されば元親には、親しき一族なり。又家士共にも所緣の由緒あれば、其罪を忽にすべからずとて、右京科もなかりけれども、同腹の兄なればとて、一所に腹を切らせらる。無慙なりける事共なり。

土佐物語卷第十五終

大正三年五月十二日印刷
大正三年五月十五日發行

國史叢書
土佐物語 一

定價金一圓

不許複製

編者　黒川眞道

發行者　國史研究會

右代表者　小瀧淳
東京市本郷區駒込林町二二四番地

印刷者　橋山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所　友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所　國史研究會
東京市本郷區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番